

根 来 寺 坊 院 跡

——広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1994年3月

和歌山県教育委員会
財団法人 和歌山県文化財センター

根 来 寺 坊 院 跡

——広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——



1994年3月

和歌山県教育委員会
財団法人 和歌山県文化財センター



根来寺山内を南西から望む



根来寺山内を東から望む



丘陵部A地区から蓮花谷を望む(北東から)



丘陵部B地区から蓮花谷を望む(西から)



谷部B地区石垣(南から)



谷部B地区石垣(西から)



谷部A地区SX-13(西から)



谷部B地区SX-16(西から)



SX-13(南から)



SX-13内埋壺(北西から)



SX-13北側昇降部(南から)



中国製磁器



焼締陶器



中国製染付



中国製青磁



美濃・瀬戸陶器



備前焼



鬼瓦



谷部B地区下段包含層出土 金製飾り金具



SX-14内 漆皿出土状況

序

根来寺は、中世、なかでも戦国期の重要な遺跡の一つとして、また、高野山・熊野三山と並ぶ県下の聖地であることは皆様よくご存じのところであり、中世末期、秀吉の根来寺焼き討ちにより大きな打撃を受けたものの、今なお歴史的なたたずまいの中、県民の憩いの場となっており、本県教育委員会もその保存について積極的に取り組んでいるところであります。

さて、県農林水産部が紀ノ川北岸の農業基盤整備事業の一環として着手した広域営農団地農道整備事業、いわゆる大規模農道の建設が根来寺地区に及んだため、本県教育委員会では昭和51年度より事前に発掘調査を実施したところ、古代末から近世にかけてのおびただしい遺構・遺物が検出され、開祖興教大師覚鑁以来の根来寺興隆の実態が明らかになりました。このため、県教育委員会として農道建設及びその他の開発事業から根来寺坊院跡の保存を図るための資料を作成すべく、昭和55年度より10ヶ年にわたる第一期の発掘調査事業を終了し、現在平成2年度より5ヶ年計画で第二期の発掘調査を実施中であります。

これらの発掘調査によりまして、大規模農道計画路線上に所在する円明寺とその周辺は開祖興教大師覚鑁創建寺院として極めて重要な文化財であることが改めて確認されたため、県農林水産部との保存協議の結果、根来寺坊院跡の保護資料が作成できるまで農道建設を中断し、さらに路線の変更により根来寺坊院跡の最も重要部分である円明寺地区を迂回することになり、迂回部分の発掘調査及び出土遺物整理を昭和62年度より実施してきたもので、ここに、発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。つきましては、本報告書が根来寺坊院跡の研究資料として、また、保護資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後に、当該発掘調査に携わられた関係各位のご努力と、ルートの変更や歴史的景観を配慮した工法の採用等のご協力をいただいた県農林水産部関係機関の方々に敬意と感謝の意を表します。

平成6年3月

和歌山県教育委員会

教育長 西川時千代

序

一乗山 根来寺は、平安時代の末期に興教大師覚鑊によって開創され、新義真言宗の総本山として広く知られているところです。

その最盛期である室町時代末には、坊院堂社二千数百、そこに居住した僧侶及び行人一万人近くを数えたといわれる全国的に見ても有数の寺院でありました。

しかし、こうした繁栄を誇った根来寺も天正十三年(1585)、羽柴秀吉による根来攻めにより、大伝法院・大塔及び大師堂などの一部を遺し、その大部分は灰燼に帰し往時を偲ぶすきもありません。

根来寺坊院跡発掘調査の端緒となったのは、はからずも昭和51年度に山内を東西に貫く広域営農団地農道整備事業でありました。その事業実施と歩調を合わせ事前の発掘調査が続けられてきました。

当報告書にまとめました調査は、昭和63年度から平成2年度において発掘調査を実施したものであります。この調査の中でとくに注目されるのは、あたかも城塞を思わせるような石垣及び地下式倉庫群です。これは、今後、中世根来寺を考える上で非常に興味深い資料となると考えられます。末尾ながら当該発掘調査にあたってご指導・ご協力をいただきました根来寺をはじめ和歌山県農林水産部当局・那賀県事務所・岩出町教育委員会及び和歌山県教育委員会当局に厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 仮谷 志良

例 言

- 1 本書は、和歌山県農林水産部が実施する広域営農団地農道整備事業に伴う根来寺坊院跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び出土遺物整理は、和歌山県農林水産部局と和歌山県教育庁文化財部局の双方から委託を受けて実施したものである。

これらの経費は、農林水産部局が負担した広域営農団地農道整備事業費とこれに伴う地元負担に対する文化財保護部局が負担した文化庁の国庫補助事業の2事業を合算したものである。

これらの経費の負担割合は、農林水産部局分が85%、文化財保護部局分が15%である。

- 3 発掘調査は、昭和63年度から平成2年度までの3箇年間にわたり実施し、出土遺物の整理は、平成3年度から5年度までの3箇年間で、いずれも県教育委員会の指導の下に当センターが実施した。
- 4 発掘調査総面積は、6,456㎡でその内訳は下記のとおりである。

	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	計
農 林 水 産 部 局 分	2,600㎡	935㎡	2,002㎡	5,537㎡
文 化 財 部 局 分	490㎡	165㎡	354㎡	1,009㎡
計	3,090㎡	1,100㎡	2,356㎡	6,546㎡

- 5 発掘調査は、昭和63年度の文化財部局分を技師 河内 一浩(現 羽曳野市教育委員会)が、平成元年度から平成2年度までの文化財部局分の調査及び昭和63年度から平成2年度までの農林水産部局分の調査を技師 佐伯 和也が、それぞれ担当した。また、昭和63年度の農林水産部局分の調査に当たっては、窪田 雅秀氏(現・岩出町歴史民俗資料館)の協力を得た。
- 6 出土遺物の整理は、佐伯が担当し、本書の執筆及び編集は、佐伯が担当したが、出土遺物については、その一部を主任 上田 秀夫が執筆した。
- 7 遺物の実測は、主に上垣内真喜子、谷口 敦子、玉井 朱美、村上 敏子が、トレースは、中村 満喜子、藤原 紀美、吉野 勢津子が、遺物写真の撮影は、佐伯がそれぞれ当たった。
- 8 発掘調査において検出した石垣については、北垣 聡一郎氏(兵庫県立兵庫高等学校)並びに安土城郭研究所の方々に、出土遺物については、伊藤 晃(岡山県古代吉備文化財センター)、井上喜久男(愛知県陶磁資料館)、森村 健一(堺市立埋蔵文化財センター)各氏の指導助言を得た。また、石製品の石材については、吉松 敏隆氏(和歌山県教育研修センター)

目 次

序	
例言	
凡例	
調査組織	

第Ⅰ章 調査の経緯	1
-----------	---

第Ⅱ章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5

第Ⅲ章 調査の経過	7
-----------	---

第Ⅳ章 調査の成果	9
第1節 層序	9
(1) 盆地部の層序	9
(2) 丘陵部の層序	9
(3) 谷部の層序	10
第2節 盆地部の遺構と遺物	11
(1) 盆地部A地区の概要	11
盆地部包含層出土の遺物	12
SX-01	16
SX-02	17
SX-03	17
SE-01	19
SE-02 SK-01・02・03	20
SD-01・02 SB-01	20
(2) 盆地部B・C地区の概要	23
SX-04	23
SX-05 SK-20・22	27
SD-07	31
SK-13・21	31
SD-10・12	32
埋桶-01・02	33
SD-18	34

	SX-06	35
	SB-03・04・05・06	37
	SD-15・16・17	37
	SK-27	38
第3節	丘陵部A地区の遺構と遺物	39
	丘陵部A地区の概要	39
	丘陵部A地区包含層出土の遺物	40
	SX-07	42
	SX-08	44
	SX-09	45
	SX-10	46
	SX-11 SK-29	48
	SD-22	50
	SE-03・04	52
	SD-19・20・21 SK-28 SV-04・05	53
第4節	谷部の遺構と遺物	57
(1)	谷部A地区の概要	57
	谷部A地区包含層出土の遺物	59
	SX-12	63
	SX-13	66
	SV-07・08	70
	基壇状遺構 SK-31・32・37・38	73
	谷部A地区の近世の遺構(近世石垣 竹製導水管)	76
	SV-09	76
	SX-14	78
	SX-15	81
	SV-10・11 SD-27	83
	SK-40・41 SD-28 甕ビット	84
	SK-42・43	85
(2)	谷部B地区の概要	86
	谷部B地区包含層出土の遺物	89
	谷部B地区東端部遺構の概略	96
	SB-07	96
	SD-30 SK-45・46・49	99
	SE-05 SV-12 SD-33	101
	玉石敷遺構	102
	SX-16	103

泉識坊推定地(谷部B地区上段)の概要	106
谷部B地区下段の敷地割の状況	108
SV-13	109
SD-34・35	110
SD-36・37 SK-51・52	111
埴列遺構とSJ-01	111
SB-08	115
SB-09 埋塞遺構	117
第2セクションベルト東壁土層堆積状況	120
SD-38①・②・39・40	120
SD-41	121
坊院の排水施設 SK-53・54 SV-16	124
SB-08上包含層出土遺物	126
谷部B地区下段包含層出土遺物	128
第2セクションベルトより西側下段上面遺構の概略	137
SF-01 SD-38③	137
SV-19	139
SD-43	140
SV-20 SK-56・57・58	142
第2セクションベルトより西側下段中面遺構の概略	145
SB-10	146
SE-06	146
第2セクションベルトより西側下段下面遺構の概略	151
第3セクションベルト土層堆積状況	151
SB-11	151
SD-44	153
SV-14・15	155
第5節 丘陵部B地区の遺構と遺物	159
丘陵部B地区の概要	159
丘陵部B地区上段包含層及び遺構の概略	161
丘陵部B地区上段包含層出土の遺物	161
SK-59	164
SE-07	165
SD-46	167
SV-22 SX-17	168
SB-12・13	169
SD-47	170

SD-48・49	172
SK-60・61	173
SK-63・64	173
丘陵部B地区下段包含層及び遺構の概略	175
丘陵部B地区下段包含層出土の遺物	175
SE-08・09及び流し場周辺の状況	180
SE-08・09	181
SE-10・11周辺の状況	182
SE-10	184
SE-11	185
SJ-02	186
SD-50・51・52・53・54	186
SV-23及びSK-76	189
丘陵部B地区下段検出の土坑群	190
SK-68～72・74・75	190
SV-24・25	195
SB-14・15	196
SE-12周辺の遺構検出状況	198
SV-26・27・28	198
SE-12	199
SV-28西掘り下げ焼土出土の遺物	200
丘陵部包含層出土の金属製品	203
丘陵部遺構出土の金属製品	203
谷部包含層出土の金属製品	203
谷部遺構出土の金属製品	204
盆地部A地区遺構出土の石製品	210
盆地部B・C地区遺構出土の石製品	210
丘陵部包含層出土の石製品	210
丘陵部遺構出土の石製品	211
谷部包含層出土の石製品	211
谷部A・B地区遺構出土の石製品	214
谷部A地区出土の石造遺物	221
谷部B地区出土の石造遺物	221
丘陵部B地区出土の石造遺物	221

第V章 まとめ	223
---------	-----

巻頭図版目次

- 1 根来寺山内を南西から望む
- 2 根来寺山内を東から望む
- 3 丘陵部A地区から蓮華谷を望む（北東から）
丘陵部B地区から蓮華谷を望む（西から）
- 4 谷部B地区石垣（南から）
谷部B地区石垣（西から）
- 5 谷部A地区SX-13（西から）
谷部B地区SX-16（西から）
- 6 谷部A地区SX-13（南から）
SX-13埋甕状況（北西から）
SX-13北側昇降部（南から）
- 7 中国製磁器
焼締陶器
- 8 中国製染付
中国製青磁
美濃・瀬戸陶器
- 9 備前焼
鬼瓦
- 10 谷部B地区下段包含層出土 金製飾り金具
SX-14内 漆皿出土状況

挿図目次

挿図 1	広域営農団地農道発掘調査路線図	2
挿図 2	遺跡の範囲	4
挿図 3	一乗山根来寺大傳法院（『紀伊国名所図会より転載』）	5
挿図 4	年度別の調査範囲	8
挿図 5	盆地部A地区の基本的層序	9
挿図 6	丘陵部B地区の基本的層序	9
挿図 7	谷部B地区の基本的層序	10
挿図 8	盆地部A地区遺構全体図	11
挿図 9	盆地部包含層遺物実測図1	14
挿図 10	盆地部包含層遺物実測図2	15
挿図 11	SX-01・02実測図	16
挿図 12	SX-01遺物実測図	17
挿図 13	SX-03実測図	18

挿図 14	S X-03遺物実測図	18
挿図 15	S E-01遺物実測図	19
挿図 16	S E-01実測図	19
挿図 17	S E-02遺物実測図	21
挿図 18	盆地部B・C地区遺構全体図	23
挿図 19	S X-04実測図 (石垣を有する)	24
挿図 20	S X-04発検出状況	25
挿図 21	S X-04遺物実測図	26
挿図 22	S X-05 S K-22実測図	28
挿図 23	S X-05遺物実測図	29
挿図 24	S K-22遺物実測図	30
挿図 25	S D-07遺物実測図	31
挿図 26	S D-07実測図	31
挿図 27	S K-13・21遺物実測図	32
挿図 28	S D-10・12遺物実測図	32
挿図 29	埋桶-01実測図	33
挿図 30	埋桶-02実測図	33
挿図 31	埋桶01・02遺物実測図	33
挿図 32	S D-18遺物実測図	34
挿図 33	S D-18実測図	34
挿図 34	S X-06遺物実測図	35
挿図 35	S X-06実測図	35
挿図 36	S B-03・04・05実測図	36
挿図 37	S K-27実測図	38
挿図 38	S K-27遺物実測図	38
挿図 39	丘陵部A地区遺構全体図	39
挿図 40	丘陵部A地区包含層遺物実測図1	40
挿図 41	丘陵部A地区包含層遺物実測図2	41
挿図 42	S X-07実測図	42
挿図 43	S X-07遺物実測図	43
挿図 44	S X-08実測図	44
挿図 45	S X-08遺物実測図	44
挿図 46	S X-09遺物実測図	45
挿図 47	S X-09実測図	45
挿図 48	S X-10実測図	46
挿図 49	S X-10遺物実測図	46
挿図 50	S X-11 S K-29実測図	47

挿図 51	SX-11 SK-29遺物実測図	48
挿図 52	SD-22実測図	49
挿図 53	SD-22遺物実測図	50
挿図 54	SE-03・04実測図	51
挿図 55	SE-03遺物実測図	52
挿図 56	盆地部C地区と丘陵部A地区を界するSV-04・05	54
挿図 57	谷部A地区と丘陵部A地区を界するSV-07・08	55~56
挿図 58	谷部A地区遺構全体図	58
挿図 59	谷部A地区包含層遺物実測図1	60
挿図 60	谷部A地区包含層遺物実測図2	61
挿図 61	谷部A地区包含層遺物実測図3	62
挿図 62	SX-12実測図	63
挿図 63	SX-12遺物実測図	64
挿図 64	SX-13実測図	65
挿図 65	SX-13遺物実測図1	67
挿図 66	SX-13遺物実測図2	68
挿図 67	SX-13遺物実測図3	69
挿図 68	SD-24実測図	70
挿図 69	SD-24 SV-08裏込め遺物実測図	71
挿図 70	基壇状遺構 SK-31を中心とした図	72
挿図 71	基壇状遺構遺物実測図	73
挿図 72	SK-31・37遺物実測図	75
挿図 73	近世石垣実測図 (SV-08に取り付く石垣)	76
挿図 74	SV-09実測図	77
挿図 75	SX-14実測図	79
挿図 76	SX-14遺物実測図	80
挿図 77	SX-15実測図	81
挿図 78	SX-15遺物実測図	82
挿図 79	SV-10 SD-27遺物実測図	83
挿図 80	SV-10・11実測図	83
挿図 81	谷部A地区最西端部遺構配置図	84
挿図 82	SK-42・43 SD-28遺物実測図	85
挿図 83	根来寺炎上の図 (『紀伊国名所図会』より転載)	86
挿図 84	谷部B地区に既往調査町道桃坂線平面合成図	87~88
挿図 85	谷部B地区上段包含層遺物実測図1	91
挿図 86	谷部B地区上段包含層遺物実測図2	92
挿図 87	谷部B地区上段包含層遺物実測図3	93

挿図 88	谷部B地区上段包含層遺物実測図 4	94
挿図 89	谷部B地区東端部実測図	95
挿図 90	S B-07実測図	96
挿図 91	S V-12 S D-33実測図	97~98
挿図 92	S D-30実測図	99
挿図 93	S K-45・46・49 S D-30遺物実測図	100
挿図 94	S E-05実測図	101
挿図 95	S D-33遺物実測図	101
挿図 96	玉石敷遺構実測図	102
挿図 97	S X-16実測図	103
挿図 98	S X-16遺物実測図	104
挿図 99	S X-16 S G-01実測図	105
挿図 100	谷部B地区下段南側突出調査区遺構配置図	107
挿図 101	第4セクションベルト北面土層図	108
挿図 102	S V-13立面図	109
挿図 103	S V-13裏込め遺物実測図	109
挿図 104	S D-34・35遺物実測図	110
挿図 105	S J-01 埴列遺構実測図	112
挿図 106	S D-36 S K-51・52 埴列遺構 S J-01遺物実測図	114
挿図 107	S B-08実測図	115
挿図 108	S B-09実測図	116
挿図 109	埋甕-01・02出土状況実測図	118
挿図 110	埋甕-03・04出土状況実測図	119
挿図 111	S D-41実測図	121
挿図 112	S D-38に集合する排水施設の図	121
挿図 113	S D-38①・②・41遺物実測図	123
挿図 114	S K-53遺物実測図	125
挿図 115	S B-08上包含層遺物実測図	126
挿図 116	谷部B地区下段包含層遺物実測図 1	130
挿図 117	谷部B地区下段包含層遺物実測図 2	131
挿図 118	谷部B地区下段包含層遺物実測図 3	132
挿図 119	谷部B地区下段包含層遺物実測図 4	133
挿図 120	谷部B地区下段包含層遺物実測図 5	134
挿図 121	第2セクションベルトより西側下段上面遺構配置図	135~136
挿図 122	S F-01実測図	137
挿図 123	S D-38③遺物実測図	138
挿図 124	S V-19実測図	139

挿図 125	S D-43実測図	140
挿図 126	S D-43遺物実測図	140
挿図 127	S V-20実測図	141
挿図 128	S K-56・57・58遺物実測図	142
挿図 129	第2セクションベルトより西側下段中面遺構配置図	143~144
挿図 130	S B-10実測図	145
挿図 131	S E-06実測図	146
挿図 132	S E-06遺物実測図	148
挿図 133	第2セクションベルトより西側下段下面遺構配置図	149~150
挿図 134	第3セクションベルト土層図	151
挿図 135	S B-11実測図	152
挿図 136	S D-44土層図	153
挿図 137	S D-44遺物実測図	154
挿図 138	S V-14・15西面立面図	156
挿図 139	S V-14・15南面立面図	157~158
挿図 140	丘陵部B地区遺構全体図	160
挿図 141	丘陵部B地区上段包含層遺物実測図 1	162
挿図 142	丘陵部B地区上段包含層遺物実測図 2	163
挿図 143	S E-07周辺の遺構平面図	164
挿図 144	S E-07実測図	165
挿図 145	S E-07遺物実測図	166
挿図 146	S D-46遺物実測図	167
挿図 147	S D-46実測図	167
挿図 148	S V-22実測図	168
挿図 149	S X-17遺物実測図	168
挿図 150	S B-13周辺の遺構平面図	169
挿図 151	S B-13実測図	170
挿図 152	S D-47実測図	170
挿図 153	S D-47遺物実測図	171
挿図 154	S D-48遺物実測図	172
挿図 155	S K-64遺物実測図	174
挿図 156	丘陵部B地区下段包含層遺物実測図 1	177
挿図 157	丘陵部B地区下段包含層遺物実測図 2	178
挿図 158	丘陵部B地区下段包含層遺物実測図 3	179
挿図 159	S E-08・09 流し場周辺の遺構平面図	180
挿図 160	S E-08・09実測図	181
挿図 161	S E-08・09遺物実測図	182

挿図 162	SE-10・11周辺の遺構平面図	182
挿図 163	SE-10実測図	183
挿図 164	SE-10遺物実測図	184
挿図 165	SE-11実測図	185
挿図 166	SJ-02実測図	186
挿図 167	SJ-02遺物実測図	186
挿図 168	SD-50・51実測図	187
挿図 169	SD-50・51・52・53・54遺物実測図	188
挿図 170	SV-23 SK-76実測図	189
挿図 171	SK-69・70・72・73・75・76遺物実測図	192
挿図 172	SV-24実測図	193～194
挿図 173	SV-25実測図	195
挿図 174	SB-14・15周辺の遺構平面図	196
挿図 175	SB-14・15実測図	197
挿図 176	SE-12周辺の遺構平面図	198
挿図 177	SE-12実測図	199
挿図 178	SE-12遺物実測図	199
挿図 179	SV-28西掘り下げ焼土遺物実測図 1	201
挿図 180	SV-28西掘り下げ焼土遺物実測図 2	202
挿図 181	丘陵部包含層・遺構出土の金属製品	205
挿図 182	丘陵部遺構出土の金属製品	206
挿図 183	谷部包含層出土の金属製品	207
挿図 184	谷部遺構出土の金属製品	208
挿図 185	調査区全域出土の銭貨拓影	209
挿図 186	盆地部A地区遺構出土の石製品	212
挿図 187	盆地部B地区遺構出土の石製品	213
挿図 188	盆地部B・C地区遺構出土の石製品	214
挿図 189	丘陵部包含層出土の石製品	215
挿図 190	丘陵部遺構出土の石製品 1	216
挿図 191	丘陵部遺構出土の石製品 2	217
挿図 192	谷部包含層出土の石製品 1	218
挿図 193	谷部包含層出土の石製品 2	219
挿図 194	谷部A・B地区遺構出土の石製品	220
挿図 195	谷部A地区出土の石造遺物	221
挿図 196	谷部B地区出土の石造遺物	222

図 版 目 次

1	a		盆地部A地区調査前（西から）
	b		盆地部A地区上面（東から）
2	a		盆地部A地区上面全景（西から）
	b		盆地部A地区下面全景（東から）
3	a		SX-01・02（南から）
	b		SX-03（南から）
4	a		SE-01閉塞状況
	b		SE-01開口状況
5	a		盆地部B地区南半部調査前全景（北から）
	b		盆地部B地区南半部遺構全景（北から）
6	a		SX-04石積みの有る状況
	b		SX-04石積みの無い状況
7	a		SX-05（北から）
	b		SX-05（東から）
8	a		SX-05進入路部土層（北から）
	b		SX-05 SK-22土層（北から）
9	a		SK-22土器出土状況
	b		盆地部B地区南端部（北から）
10	a		SX-05 SK-22周辺（東から）
	b		SD-07（西から）
11	a		SD-07掛石（東から）
	b		SK-13・14周辺（北から）
12	a		埋桶-01・02（北から）
	b		SD-12墓石並びの状況
13	a		盆地部C地区南端（南東から）
	b		SX-06周辺（南から）
14	a		SX-06（南東から）
	b		SD-18（南から）
15	a		盆地部C地区北端（西から）
	b		盆地部C地区北端（南から）
16	a		盆地部と丘陵部を界するSV-04（南から）
	b		SV-03・04・05（南から）
17	a		丘陵部A地区全景（北東から）
	b		SX-07・08・09・11（北東から）
18	a		丘陵部A地区から谷部A・B地区を望む（北東から）

	b	丘陵部A地区から南西方向を望む（北東から）
19	a	S X-07（北から）
	b	S X-07（南西から）
20	a	S X-07土層（北西から）
	b	S X-07進入路部土層（北から）
21	a	S X-11（東から）
	b	S X-11（北から）
22	a	S X-10（北東から）
	b	S X-10進入路部と部屋部壁（南東から）
23	a	S X-09（北西から）
	b	S K-29 S X-11土層（北から）
24	a	S E-03（南東から）
	b	S E-04（東から）
25	a	S D-22有蓋状況（北から）
	b	S D-22開溝（北から）
26	a	S D-22に注ぎ込む丸瓦転用溝（南から）
	b	S D-22墓石転用の状況（東から）
27	a	谷部A地区東端（西から）
	b	S X-12・13（東から）
28	a	S X-12（南から）
	b	S X-12（北から）
29	a	S X-13（南から）
	b	S X-13内埋竈出土状況（北西から）
30	a	S X-13内埋甕うるしによる補修状況（南東上から）
	b	S X-13付属昇降部（南から）
31	a	S X-13南北土層堆積状況（西から）
	b	S X-13北端土掻き込み状況（西から）
32	a	S D-24（北から）
	b	S D-24（南から）
33	a	基壇状遺構周辺（西から）
	b	S V-08南端に取り付く東西方向の近世石垣（南から）
34	a	谷部A地区西端（西から）
	b	S X-14・15（西から）
35	a	S X-14（西から）
	b	S X-14（南から）
36	a	S X-14内出土漆器

b		SX-14内出土漆器
37 a		谷部B地区調査前全景（東から）
b		谷部B地区を丘陵部B地区から望む（西から）
38 a		谷部B地区東端（北から）
b		谷部B地区東端（西から）
39 a		SD-33 SV-12（東から）
b		SV-12裏込め（東から）
40 a		SB-07 SD-30有蓋状況（北から）
b		SD-30開溝状況（北から）
41 a		谷部B地区東端を望む（西から）
b		玉石敷遺構（西から）
42 a		SX-16（南から）
b		盆地部B地区階段部分（西から）
43 a		谷部B地区下段中央部（南西から）
b		SD-37 埴列遺構（南西から）
44 a		埴列遺構（西から）
b		埴列遺構掘形内SJ-01
45 a		谷部B地区昇降路部（北から）
b		SK-51・52（北から）
46 a		SB-09（北から）
b		SB-09 埋甕（西から）
47 a		SF-01（西から）
b		SD-39・40・41（南から）
48 a		SV-19（南西から）
b		SV-20（南西から）
49 a		SB-10周辺（南から）
b		SV-14（南西から）
50 a		谷部B地区最西端上面遺構検出状況（南から）
b		SD-43（西から）
51 a		谷部B地区西端部第3セクションベルト（南西から）
b		SD-44土層堆積状況（西から）
52 a		SV-17 SB-11（北から）
b		谷部B地区最西端下面遺構検出状況（北から）
53 a		SE-06（西から）
b		SE-06（北西から）
54 a		SV-15・17 SD-38①・②（西から）

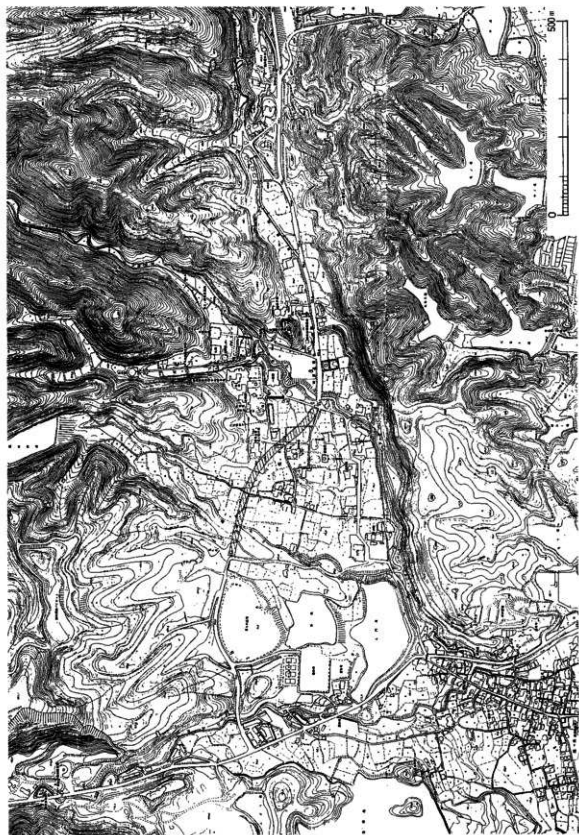
b		S V-15入角部（南西から）
55 a		S V-15（南から）
b		S V-15（西から）
56 a		丘陵部B地区調査前風景（西から）
b		丘陵部B地区頂上周辺調査前風景（北から）
57 a		丘陵部B地区上段遺構全景（南西から）
b		丘陵部B地区上段遺構全景（北から）
58 a		S V-22（西から）
b		S V-23 S K-76（北西から）
59 a		S E-07 S K-59（南東から）
b		S E-07（南から）
60 a		S B-12・13周辺（南東から）
b		S D-48（南から）
61 a		S B-12・13（南東から）
b		丘陵部B地区上段整地状況（南西から）
62 a		丘陵部B地区下段遺構全景（南から）
b		丘陵部B地区下段遺構全景（東から）
63 a		丘陵部B地区下段から上段を望む（南西から）
b		SD-48・50（西から）
64 a		S E-08・09 S D-50・51（東から）
b		S E-08・09 S D-50・53（北から）
65 a		S B-14・15 S V-25（南から）
b		S E-10（西から）
66 a		S V-27・28 S E-12（南西から）
b		S E-12（南西から）
67～96		出土遺物

第Ⅰ章 調査の経緯

根来寺坊院跡の発掘調査の発端となったものは、寺域を東西に貫通する大規模農道整備事業が契機となり、それに際しての発掘調査であった。これは道路建設用地として既にも買収されていた部分について、昭和51年から昭和54年までの4ヵ年に渡り発掘調査を実施した。この様な坊院跡の発掘調査は、昭和50年代初頭において未知の分野であったため、まず立合調査という調査の方法をとった。結果、天正の兵火時(1585)の焼土層を確認し、調査は全面発掘に切り替えられた。初年度についても言えることであるが、以後3年間の調査は予想外の成果を得た。今までは、文献上から根来寺坊院跡は天正十三年の羽柴秀吉の紀州攻めにより、大塔他一・二字の堂舎を残し、灰燼に帰したことは周知の事実であり、これを踏まえて根来寺に関する研究が多方面からなされてきた。発掘調査により、天正十三年の史実をさらに裏付ける資料が提示された。次いで、当然の如く、この4年間の調査の結果をうけて、坊院跡と出土遺物の保護、保存の声が高まっていった。また、学術的に見ても中世寺院として根来寺の重要性が一挙に表面化してきた。そこで、大規模農道整備事業を農林部の協力のもとに一時中断し、中世根来寺の姿を明らかにする目的で、10ヵ年の学術調査が昭和55年度から実施される運びとなった。

根来寺は元より宗教的教学の場でありながら、その反面、僧兵を擁した軍事集団としてよく知られている。この二面性を実証する遺構・遺物が大規模農道関連調査と第1次10ヵ年の学術調査において多々検出あるいは出土している。遺構の遺存状況も良好で、石垣や土堀による塔頭の区画や煙臺遺構、遺物では中国製陶磁器や備前焼を中心として多量に出土している。その中でも、昭和54年度の前山後線上の発掘調査において、その西端の紀ノ川平野を一望できる箇所を櫓と考えられるものと、土塁状の遺構が確認され、また、近世の文献資料ではあるが、寺域の周辺には数ヵ所の山城が点在していたことも判っている。土器以外の出土遺物では、墓石類は言うに及ばず、他に懸仏、泥仏、青銅製仏像、六器、護摩杓等の宗教遺物、また、槍先、鉄砲玉、鞍(甲冑等の留金具)等の武装的遺物が出土した。これにより、日本史上における戦国時代の地方勢力の一端を解く鍵として、以前に比べ、より一層注目される遺跡と化していった。近年、根来寺の発掘資料の蓄積により、画期を大きく3時期に分けることができ、山内における時期的な塔頭の変遷等が解明されつつある。

その後、大規模農道整備事業は、この学術調査による結果を基に遺跡の保全、及び周囲の景観との調和などに関する遺跡の保存について積極的な方針が打ち出され、そのルートを変更することで昭和63年度から3ヵ年計画で広域営農団地農道整備事業に伴う根来寺坊院跡発掘調査として、和歌山県教育委員会の指導のもと(財)和歌山県文化財センターが平成2年度まで実施した。



第1図 広域営農団地農道発掘調査路線図

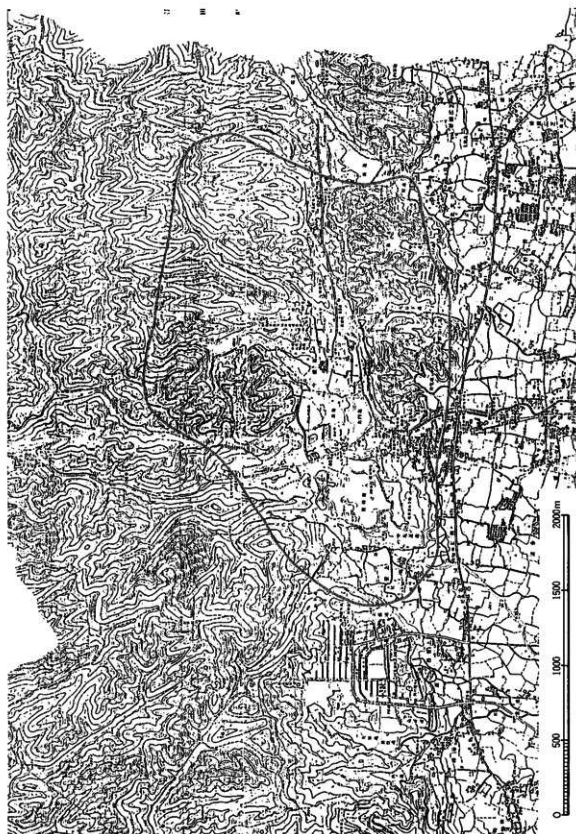
第II章 位置と環境

第1節 地理的環境

根来寺坊院跡は紀ノ川北岸、和泉山脈山麓部の那賀郡岩出町根来に所在する。北は和泉山脈から派生する幾つかの尾根と、南は独立山塊状の通称「前山」と呼ばれている丘陵に挟まれた盆地状の地形をなしている。山内北側、尾根筋間の谷部は北から南に低く、雛壇状の水田となっている。山内での塔頭の立地は地形的に見て、三種類に大別できる。まず第一に盆地である平地部に立地する遺構群、第二に背後の山から伸びる谷筋に立地する遺構群、第三に小高い丘陵に立地する遺構群である。今回の調査もそうであるが、過去の調査においても、点あるいは線といった調査が多く、広く面としての調査例が少ないため、はっきりとしたことは言えないが、大局として次のようにとらえることができる。盆地に立地した殆どの建物は塔頭寺院と考えられ、天正以前から江戸時代(復興期)までの遺構が認められる。谷筋には緩やかな広い谷(蓮華谷)と狭小な谷の二種類がある。広い谷は塔頭寺院と考えられ、天正以前から近世までの遺構が認められ、盆地部と若干の時期差はあっても、建物の様相としては大差ないものと考えられる。狭い谷は広い谷に比べ地理的な制約も伴い建物の間口も狭く、瓦の出土を見ないところから、建物の性格の違いが窺える。^(註2) 丘陵部は高所という条件下にあり、櫓や土塁等の本来の宗教的施設ではなく、軍事的な遺構が今までに検出されている。^(註3) 今回の調査においても、根来寺の経済体に関与するとみられる地下式倉庫群というような特異な遺構が検出された。中心に近い丘陵は、近世の復興時には再建されたことが認められるが、掛け離れた丘陵部については、復興に及ばなかったものと考えられる。根来寺山内(寺域)の西には町屋が展開し、現在もその様相を殆ど変えることなく留めている。この地域は根来寺坊院跡を解明するために最も重要視されている箇所^(註4)で、江戸時代の古絵図にも記載されている如く、和泉の国に通ずる交通の要衝でもある。この山外は過去においても調査例が少なく、また、近年は調査する機会に恵まれていない。

現在、遺跡の範囲として考えられているのは、町屋部分とその周辺を含め、東西 3.5km、南北 2 kmの範囲である。この内寺域と考えられているのは、東は菩提峠から西は和泉へ抜ける根来街道の東西約 2 kmと、和泉山脈南斜面の谷の奥から前山北斜面の南北 2 kmの範囲である。

根来寺はもとより宗教集団と武装集団の二面性を持った寺院であることがよく知られているが、上記の様に立地的な観点から見ても、密教の聖地にふさわしく、また、天然の要塞としての条件をも合わせ持った地勢に恵まれ、日本史上における戦国動乱期の根来寺としての在り方というもの^(註5)を考える上で重要な要因の一つとなっている。



第2図 遺跡の範囲

第2節 歴史的環境

総称根来寺は「新義真言宗総本山一乗山大伝法院根来寺」というのが現在の名称であるが、これに至るまでには紆余曲折はなはだしく、改名に纏わる根来寺の歴史的画期が関与している。

まず、根来寺の歴史を述べる前に、高野山における覚鑊の動行を簡単に説明しなければならない。根来寺の開祖覚鑊上人は、嘉保二年(1095)に肥前国に生まれ、幼い頃より仏道を志し、京都仁和寺成就院寛助大僧上のもとで修行を終え、高野山へ入住したのが永久二年(1114)の上人二十歳のときであった。つまり空海が示寂してから約二百八十年後のことである。上人が高野山に止住し、十数年の歳月が流れ、真然僧正以後久しく途絶えていた伝法会の復興を果たし、真言密教の興隆をより高めていった。大治五年(1130)伝法堂を健立し、鳥羽上皇の庇護のもと、ついに長承元年(1132)に長年の宿願であった大伝法院の完成をみた。この頃より高野山に覚鑊ありという名声を高め、これに付随し、大伝法院方の勢力も増大していった。また、金剛峯寺の末院であるべき大伝法院の座主覚鑊が、金剛峯寺の座主をも兼ねた。このことにより、実質的には高野山全山を掌握したこととなり、従来の金剛峯寺方の不平不満が頂点に達し、これを機に高野山を二分する両寺院の対立が始まった。度々の抗争の結果、保延元年(1140)、覚鑊はじめ大伝法院衆徒は高野山離山を決意し、弘田庄にある大伝法院の末寺でもある豊福寺(現在の根来の地)に止住することになる。この豊福寺山内に康治二年(1143)新義真言宗根来寺開山となる円明寺・神宮寺の建



第3図 一乗山根来寺大伝法院(『紀伊国名所図会』より転載)

立に至った。しかし、この年の十二月十二日にはついに四十九歳の生涯を閉じた。根来の地に在住したのはわずか四年というあまりにも短い期間であったが、この四年間の覚悟の果たした業績は偉大で、以後の根来寺に大きく反映するものである。

上人入滅後、大伝法院衆徒は一度高野山に帰山するが、その後も金剛峯寺方との抗争の絶え間がなく、仁治三年(1242)には大伝法院が金剛峯寺方に焼き討ちをかけられるという事態にまで発展した。正応元年(1288)第十一代大伝法院学頭頼瑠のとき、大伝法院衆徒と大伝法院方の寺籍もすべて根来の地に移すことになり、ここに新たに円明寺を根本道場とし、求学、求道に励み、根来寺隆盛への礎を築くことになるのである。

その後、天正の兵火時までは躍進の一途をたどり、大伝法院堂内仏等の開眼が相次ぎ、明応五年(1496)には大塔の建立に着手し、天文十六年(1547)に完成している。実に五十一年の長きに渡る歳月を要している。また、根来寺の寺僧には学問一筋の学侶に対し、武装集団の行人とがあり、行人の仕事は主に法会を防衛、寺領の管理などの雑事を主にし、ある時は雑兵として合戦にかりだされ、しだいに僧兵化していった。これが後に根来衆と呼ばれる集団である。この武装集団が力をつけていった影には鉄砲の入手ということを忘れてはならない。僧兵集団の旗頭の一人杉ノ坊の実兄津田堅物算長が種子島で技術を修得し、天文十三年(1544)にこれを根来に伝えたと云われている。根来衆の個人々は杉ノ坊某、成真院某などの坊名や院名を付して呼ばれていたと考えられ、これらは根来寺を構成する単位で、それぞれ独立していた寺院でもある。坊院は地方の土豪層との結び付きが深く、その子弟が坊や院に入っていたと考えられている。

上記の根来寺の繁栄を裏付ける有名な資料に、イエズス会宣教師ルイス＝フロイスの著した『日本史』がある。その言を借りれば、—— 都に隣接した諸国(に住む)日本の武將や諸候は、互いに交戦する際、ゲルマン人のようにこれらの僧侶を傭兵として金で傭って戦わせた。彼らは軍事的にはきわめて熟達しており、とりわけ鉄砲と弓矢にかけては、日頃不断の訓練を重ねていた。そして(戦場においては)自分たちに有利な条件を齊す側に(容易に)屈するものであった。

彼らの寺院なり屋敷は、日本の仏僧(の寺院)の中、きわめて清潔で黄金に包まれ絢爛豪華な点において抜群に優れている。——

と、このようなことが記載されている。たとえそれが伝え聞きであろうとも、過去の発掘調査成果からみてすべて出鱈目とは思えない。

ついに運命の時、天正十三年(1585)秀吉の紀州攻めにより、大塔他一・二字の堂舎を残し、全山灰燼に帰した。なお、坊院跡の発掘調査では、この時の焼土層をメルクマールとしている。

その後、江戸時代になると徳川家康により慶長五年(1600)に復興許可が下され、各地に散らばっていた帰山僧により坊舎が再建され始め、天正期の盛時のような繁栄に至らなかったが、紀州藩の助勢も関与し、江戸時代中頃までには再興根来寺としてのその様相を整えていった。

第三章 調査の経過

調査区の概要（第4図）

調査区は広域営農団地農道の新設延長部分である。この延長部は根来寺坊院跡の遺跡内にあるため、全て発掘対象箇所となった。総面積は6,546㎡であった。現状は水田、柑橘畑、竹藪、山林と多種用地に渡っていた。この内、柑橘畑、竹藪、山林については、調査前に和歌山県農林部が補償及び伐採、また発掘調査で生じる排土の為に土置場の確保にもあたり、調査に協力を得た。

第1次年の調査（第4図）

地形的に言えば、盆地部、谷部、丘陵部と変化に富んだ地点を、飛地的に3,090㎡を発掘調査した。この内、農林部分が2,600㎡、国庫補助金分が490㎡であった。

盆地部の調査は昭和63年11月21日から着手し、平成元年3月30日に終了した。現状は水田3枚分にかかり、調査対象地の縄張りを行った。発掘調査は機械に頼らず全て人力で行った。耕作土、床土除去後、遺構面を検出した。土層観察のため、2枚分の水田に2本のセクションベルトを南北方向に設けた。また、遺構は平面プランに確認順に番号を付し、土層図、遺物取上げ、平面図、写真撮影といった一連の作業を行った。素掘りの井戸については、調査区端に掛かり、周囲の地盤が軟弱なため出土遺物のみで、実測を断念した。谷部と丘陵部の調査は昭和63年8月16日より着手し、平成元年3月29日に終了した。まず、調査前の撮影を行い、この両地域については上土をバックホーにより除去した。谷部は水田であり、耕作土、床土を除去した。丘陵部は腐植土下は厚い盛土で覆われて、除去するだけでもかなり日数を要した。後、遺構検出は人力によった。故に、この地区のセクションベルトは上土除去後のものである。谷部のSD-44は高い石垣の下に入り込んでいたため、途中で断念し、その進行方向だけを確認した。丘陵部でも石組井戸3基が途中までで断念している。農林部分だけを二面航空撮影・航空写真測量作業を行った。

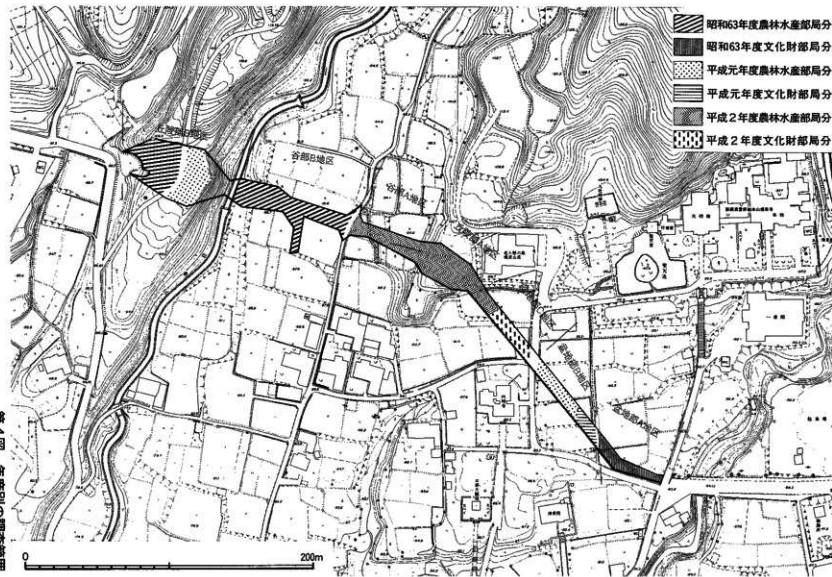
第2次年の調査（第4図）

盆地部と丘陵部であった。調査対象面積1,100㎡で、この内訳は農林部分が935㎡、国庫補助金分が165㎡であった。農林分は平成元年11月13日に着手し、平成2年3月27日に終了した。国庫補助金分は平成元年12月11日に着手し、平成2年23日に終了した。方法は前年度と同様であった。

第3次年の調査（第4図）

盆地部、谷部、丘陵部である。調査対象面積は2,356㎡であった。この内、農林部分が2,002㎡、国庫補助金分が水田、柑橘畑、竹藪であった。農林分は平成2年11月5日から着手し、平成3年3月27日に完了した。国庫補助金分は平成3年2月4日に着手し、平成3年3月27日に完了した。水田の上土除去時は石垣が畦畔となっていたため、バックホーの移動を困難にした。

第4図 年度別の調査範囲

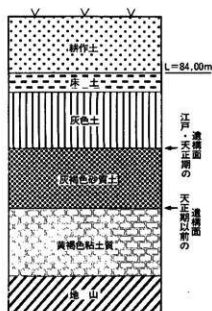


第Ⅳ章 調査の成果

第1節 層 序

盆地部の層序（第5図）

今回調査の盆地部の現況は全て水田であり、場所によっては耕作土と床土を除去後すぐに遺構面が検出できるといふケースが殆どであった。これら盆地部の水田直下の遺構面は江戸期がなく、天正の兵火に係る時期という場合がある。これは谷部や丘陵部では考えられても不思議ではないが、盆地部の中心部に近い場所でもこのようなことが起こっており、江戸期の復興時には堂舎も建てられていたであろうし、それ以後の削平によるものとしか考えられない。根来寺の発掘調査におけるメルクマールの一つとして、よく天正の兵火時の焼土層といわれるが、盆地部に関してはこの焼土層もブライマリーなものとは殆ど残っていないと考えられる。現水田の現状を見てもわかるように雑壇状に北方向に高くなり、おそらく復興時の火事場整理の時には高い所から低い所に掻き落とし整地作業を行ったと考えられる。



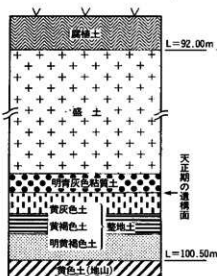
第5図 盆地部A地区の基本的層序

丘陵部の層序（第6図）

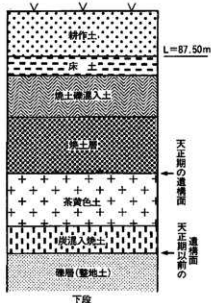
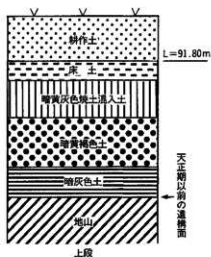
丘陵部は2箇所あり、盆地部に近いA地区と、それより西の、谷を隔てた山内のB地区である。

A地区の現況は柑橘畑となっていた。耕作土除去後すぐ遺構検出面であった。この面は地山であり、結果的にはA地区の層序は後世の削平が著しく、包含層検出には至らなかった。

B地区の現況は雑木林であった。上面は腐植土で覆われ、その直下は4～7m程度の盛土であった。この土の厚さは場所によってバラバラであった。これを除去すると、厚さ約10～15cmの包含層で覆われていた。この土は調査区全面に堆積しているものでなく、南側の低い箇所に堆積してい



第6図 丘陵部B地区の基本的層序



第7図 谷部B地区の基本的層序

た。また、北はすぐ岩盤が露出し、この面が遺構面と成っていた。青色粘質土除去後は遺構面であった。これは厚さ約0.9～1.0m程度の整地土で、基本的に3層に分層できた。上層から黄灰色土、黄褐色土、明黄褐色土であった。この下は黄色土の地山であった。

谷部の層序 (第7図)

谷部は南北に延びる町道桃坂線を挟んで、東がA地区、西をB地区とした。A地区の現況は殆どが水田であった。耕作土、床土除去後が殆ど遺構検出面であった。その中でも小範囲で、近世の整地土と考えられる厚さ5cm程度の焼土混じりの灰褐色土の遺っていた箇所が確認された。

B地区は上段と下段があり、大きな比高差の付く地点であった。現況是水田であった。上段の土層堆積状況(第7図上)は東端寄りの箇所である。耕作土、床土除去後、大きく分けて3層の整地土を検出した。上層から暗黄灰色焼土混入土(近世と16世紀代の遺物が混入)、暗黄褐色土(16世紀代の遺物)、暗黄色土(15・16世紀代)であった。これらの包含層下は灰褐色土の地山で、遺構はこの地山面を検出した。天正の兵火に係る時期の遺構は、わずかに一条の暗渠排水溝だけで、他は全てそれ以前の時期のものであった。兵火時の遺構は、この箇所では近世に大きく削平をうけたものと考えられる。また、下段の状況(第7図下)は最も西の谷の一番深い箇所のものである。ここもまた、水田と柑橘畑であった。耕作土と床土除去後江戸の遺構面を検出した。しかし、遺構密度は非常に希薄であった。それ

より下は、近世に整地されたと思われる焼土混じりの土で覆われていた。この状況は場所によってその度合いが違うが、かなり厚いものであった。そして、これらの土を除去した後は天正期の遺構検出面であった。この検出面もまた、整地土と考えられる茶黄色土と炭混入焼土から成り、天正期以前の火災が認められた。その直下は土混じりの礫層で、この面で天正期以前の遺構を検出した。作業上危険を伴うため、残念ながら旧地形までは確認することができなかった。上述しなかったが、この箇所の北側で岩盤が急激に落ち込む状況が観られることや、西側を南北に谷川が流れていることから、ある程度の旧地形を推し量ることができる。

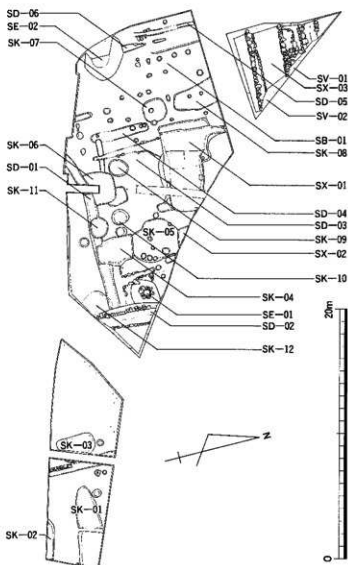
第2節 盆地部の遺構と遺物

(1) 盆地部A地区の概要（第8図、図版2a・b）

調査区は、根来寺開山の地円明寺御影堂の東南約60～100 mに位置する。又、調査区は現水田の3区画の一部である。標高は約84mを測る。遺構面は2面検出し、上面では江戸時代・天正の兵火に係る時期を、下面では天正の兵火に係る時期以前の面を検出した。

江戸時代の検出遺構は、紙面の都合上詳細には述べないが、素掘りの溝、石組の溝、土塀の基礎、土坑、建物の礎石等を検出した。天正の兵火に係る時期の遺構である地下式倉庫3基の内1基は、石垣で築造されたものである。他に石組の井戸、土坑、石組の溝を検出した。また、調査区は道路幅という制約上、坊院の塔頭の一部をかすめたり、敷地の一面を検出したが、その広さ

が不明であるものが殆どである。次に、天正の兵火に係る時期以前の遺構であるが、調査区の東端で瓦器を含む土坑(SK-01)をはじめとする3基の土坑と、西寄りで素掘りの井戸(SE-02)を検出した。調査区全域において1つの坊院の全区画を検出することができず、遺構がその塔頭のどこに相当するのか不明瞭な点が多かった。また、根来寺の発掘調査での検出遺構は、天正の兵火に係る時期のものが大半であるなか、ここは、根来寺の中心地に近いことと、地形的にも盆地部であるという条件も相俟って、復興期すなわち江戸期の遺構と天正の兵火に係る時期以前の遺構も検出できたことが最大の調査成果と言える。また、近年根来寺の山内でよく検出される地下式倉庫をこの狭小な範囲で3基も検出できたことも大きな調査成果の一つである。

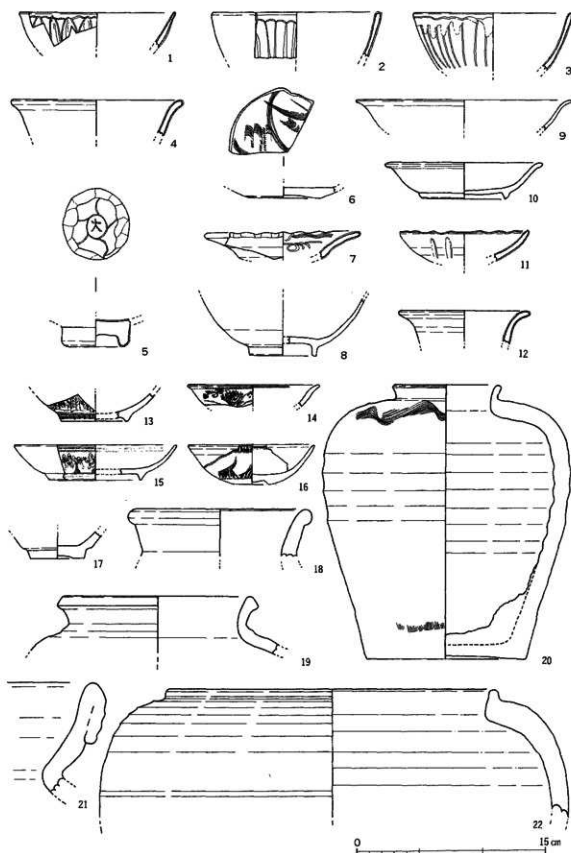


第8図 盆地部A地区遺構全体図

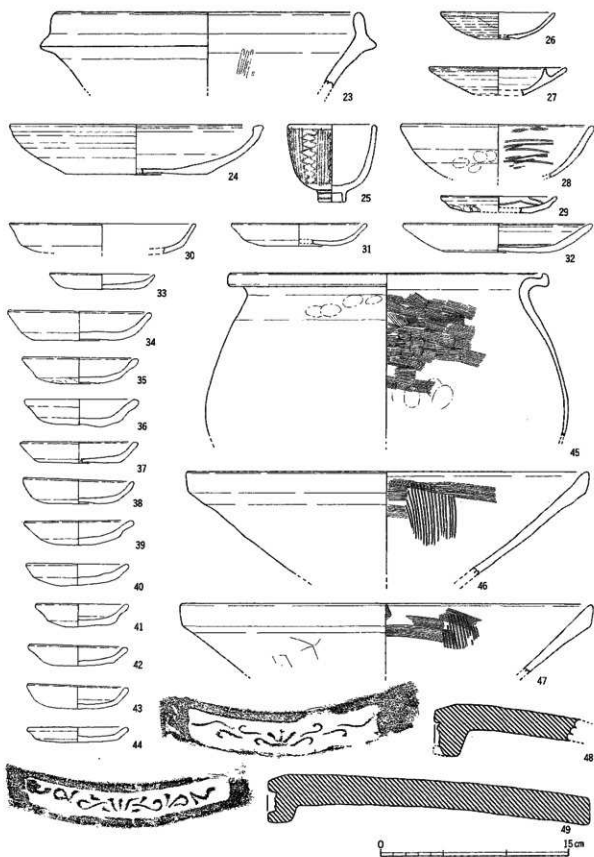
盆地部包含層出土の遺物（第9・10図、図版67）

1～7は青磁である。1～3は竜泉窯系B類の碗。1はB0類で、外面体部に浅い型押ししの蓮弁文をもつ。精良で灰味の少ない胎土に透明度の高い草緑色の釉が厚く掛かる。総釉で、疊付の釉のみをケズリ取るものである。2～3はB4類である。堅くやや粗い灰味の強い胎土に淡く失透した草緑色の釉が薄く掛かる。4は竜泉窯系D類の端反碗である。口縁端部がやや肥厚する。灰味の弱い灰白色の胎土をもち、全体に細かい貫入の入った灰緑色の釉が薄く掛かる。5は口縁が内彎する竜泉窯系E類と思われる碗である。内底に細い寛描きによる、「大」字銘が見られる。外底の釉は高台内面途中まで掛かる。灰白色のやや粗い胎土に淡青緑色の釉が薄く掛かる。6は同安窯系I類の皿である。内底には細く鋭い構描きの劃花文が見られる。堅緻な灰白色の胎土に非常に透明度の高い淡灰緑色の釉が薄く掛かる。外底を露胎で残す。7は稜花皿である。腰折の器形で、口縁端部を寛による抉りで稜花を表現する。内面口縁部には構描きの波状文を施し、内面体部には寛描きの花文状のものが見られる。胎土は堅く灰味が強い。釉は透明度が高く、濃灰緑色を呈す。8～12は白磁である。8は饅頭心型の底部をもつE群の碗である。疊付は水平に近く切り落とし、面取は行われていない。疊付から外底は露胎で、外底には放射状の鉋痕を残す。9・10はE群の端反皿である。9は大形であるが、釉は透明度が低く光沢を欠く。10はやや灰味のある釉が掛かり、疊付の釉は外面から斜めにケズリ取っている。11はE群の菊皿である。口縁端部を寛により菊花状にし、外面体部に丸鑿による縦線を施している。胎土は灰味が強く、透明度の高い光沢のある淡い青味を帯びた釉が厚く掛かる。12はラッパ状に外反する瓶の口縁と思われるものである。外面口縁下に浅い沈線が巡っている。やや青味を帯びた釉が厚く掛かっている。13～16は染付である。13はC群の蓮子碗で、外面体部に蕉葉文が巡り、内底に法螺貝文が見られる。呉須の発色は良好で、釉はやや青味を帯びている。疊付の釉は内外から斜めにケズリ取る。14はB1群の端反皿である。外面体部に牡丹唐草文が描かれる。呉須の発色は鮮やかで釉は光沢がある。15はE群の内彎口縁皿である。外面体部に折枝文を描き、内底に花卉樹石文や山水人物文などを描く。高台外面を外側から斜めに釉ケズリし、疊付端部を軽く水平にケズる。16はC群、萐荷底の皿である。釉はやや灰味を帯び、呉須も灰味の強い発色のものが多い。外面体部に蕉葉文、内底に花卉文が濃筆により粗く描かれている。華南系といわれるタイプで、外底に多量の珪砂が付着している。17は瀬戸美濃窯の天目茶碗である。いわゆる椎茸高台で、体部の立上りは直線的である。露胎部は化粧掛けし、高台外端部を軽く面取している。18は丹波窯の大型の壺である。やや内傾気味の頸部をもち、口縁端部を玉縁状に外方につまみ出した器形である。根来寺で出土する丹波窯の製品は、焼物として流通したのではなく、葉茶などの容器としてもたらされたものと思われる。灰白褐色の堅緻な胎土をもち、内外表面は淡茶褐色を呈す。19～24は備前窯のものである。19は大型壺で、頸部がやや外傾し、口縁端部を玉縁にする。非常に堅緻な暗赤褐色の胎土をもつ。20

は中型壺で短い頸部を持つ。肩部には櫛描きの波状文が巡る。内部には繊維状のものを含む炭化物が残留し、外面体部下半から外底にはタール状のものが付着する。21は大甕の頸部である。外に折り返した幅広の口縁部には浅い波状の段が付く。胎土はやや粗いが堅く、赤褐色を呈す。22は水甕である。既に頸部が退化している。胎土は堅いがやや粗く、暗灰赤褐色を呈す。23は摺鉢である。口縁部が上下両方向に大きく拡張し、外端面は「く」の字形に屈曲している。胎土は暗赤褐色で、堅いがやや粗い。24は水引成型によると思われる鉢である。外面体部には回転ヘラケズリ痕を残し、内外口縁部付近から内面体部にかけて丁寧な横ナデを施している。胎土は灰白色を呈し、堅緻で精良である。25は肥前窯の染付小碗である。外面体部に線線による縦線と波状の文様が巡っている。胎土は灰味強く、呉須も灰青色に発色している。26・27は信楽窯系灰釉の灯明皿である。26は精良な黄灰白色の胎土に透明度の高い灰黄緑色の釉が、口縁部から内面全体に掛かる。27は内面に返りをものつものである。火中しているが、26と同様のものである。28・29は瓦器で、28は在地型とされる碗である。摩耗して調整等は余り明らかではないが、ヨコナデにより口縁部がわずかに肥厚する。外面には暗文は施されない。29は小皿で、28と同様の口縁部を持つ。内面にはヘラ条痕に近い雑な暗文が見られる。30～44は土師皿である。30・31はいわゆる白土器の中皿である。共に摩耗して調整は明確ではない。非常によく水蔵された乳白色の精良な胎土をもつ。在地性の非常に強いもので、时期的にも限定され、根来寺を中心とする狭い地域で出土する。32は畿内各地で出土する白色系土師皿。口縁部が外に大きく開き、胎土は亜白色土化する。33は浅い器形の皿である。器形、調整は瓦器皿29などに類似する。淡黄褐色を呈し、胎土はやや砂気が多い。34～44は在地性の非常に強い土師皿である。16世紀代を通じて天正期まで型式変化しないが、16世紀の早い段階では34などの中皿と小皿のセット関係が認められ、次第に口径9cm前後の小皿に集約される。強いヨコナデにより口縁部が肥厚する。小皿は粘土内盤から口縁部を強くナデながら引き起こし、外底は未調整のままである。中皿は内外底を軽く不定方向にナデしているものが多い。胎土は黄褐色、橙褐色、灰茶褐色のもの、砂気のもの、精良なものなど種々ある。45～47は土師質土器。45は鍋である。体部下半に最大径のある下膨れの器形で、水平近くに外反させた口縁部を端部で上方に摘み上げる。大和型とされるものに類似する。内外口縁から頸部にかけて丁寧にヨコナデし、内面体部上半は刷毛で調整する。外面体部にはヘラケズリを施す。砂粒を多量に含む粗い胎土を特徴とするが、体部の器内は非常に薄い。赤褐色を呈す。46・47はこね鉢である。共に、体部は直線的に広がり、口縁部を三角形に肥厚させる。和泉型に類似する。内外口縁部から内面体部上部をヨコナデした後、内面口縁部に刷毛調整、外面体部に横方向のヘラケズリを施す。内面の刷毛調整の後に刻まれた櫛目は粗く浅い。胎土は微細な砂粒を多く含むが比較的精良で灰褐色を呈す。48・49は唐草文軒平瓦である。唐草は蕨手状に退化し、周縁は低く、両端部が極端に広い。また、瓦当部の縦幅が小さく、頸部も薄い。



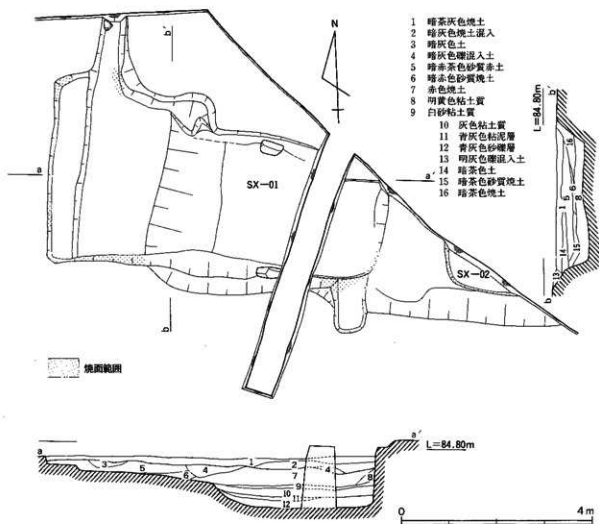
第9図 盆地部包含層遺物実測図1



第10图 盆地部包含層遺物実測2

SX-01 (第11図、図版3a)

調査区の中央区北端で検出した。これは地下式倉庫と思われる遺構で、このような遺構は構造上進入部と部屋部に大別できる。以下、地下式倉庫の記述に当たっては、進入部と部屋部を用いて説明する。形状は長方形を呈し、東西長約 7.2m、南北の最大長約 4.0mを測る。底部は高低差が3段つき、西から東に低くなる。最も深い箇所に残存高は1.28mを測る。また、進入部と思われる箇所が北西隅と南東隅に2箇所設けられている。この進入部はいずれも部屋部に向かうにつれ低くなり、スロープ状の通路となっている。南東隅のものについては幅65~75cm、長さ約1.2mを測り、約15cmの高低差が付く。また、北西隅の進入部は長さ1.2m以上、幅は約55~90cmで深さ35~40cmを測る。つまり、人間一人がかろうじて通ることのできるほどの狭い通路である。この進入部の東側の壁は2段に構築されており、そのまま部屋部北辺の一部まで同様な構築状態が続いていた。この遺構の最も深い部分(部屋部の中央部)で、床板を支えると思われる東柱の礎



第11図 SX-01・02実測図

石を2個検出した。これは北壁と南壁のそれぞれの中央に接していた。堆積土は、純粋な焼土ではないが殆どが焼土混じりの土で埋まっていた。おそらく、江戸時代の復興期に掻き込まれたものであろう。壁面の所々が焼き締まっているのが確認できた。なお、この地下式倉庫は造り替えられたものと考えられる。上述した規模のものは天正の兵火に係る時期のもので、それより以前の時期と考えられるものは3段の最も深い部分であり、平面形は隅丸の長方形を呈した場所である。その規模は東西長約4.90m、南北長約3.40mを測る。南東隅の進入部はこの倉庫に伴うものかも知れない。第11図の土層堆積状況でいえば、10～13層までがこの地下式倉庫を拡大するにあたっての整地層だと考えられる。なお、この整地土層の底から、東柱の残根が建った状態の礎石が検出されている。また、柄杓の一部と考えられる直径10.6cmの曲物も出土した。

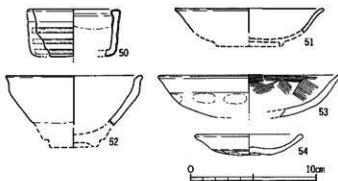
SX-02 (第11図、図版3a)

SX-01の東に1.5m隔てて並び建っていたと思われる。南西隅のコーナー部分を検出したに留まり、残り部分は調査区外である。検出し得た規模は東西長1.6m以上、南北長0.95m以上を測る。残存高は約50cmを測る。検出し得た壁の内側は全て赤く焼き締まっていた。

SX-01出土の遺物(第12図、図版68)

50は青磁の小型算木文香炉である。

51はE群白磁皿。52は瀬戸美濃窯の天目茶碗で、体部は直線的に立ち上がる。53は口縁部が外に開く亜白色土系の土師大皿、54は16世紀代の根来寺に通有の在産土師小皿である。



第12図 SX-01遺物実測図

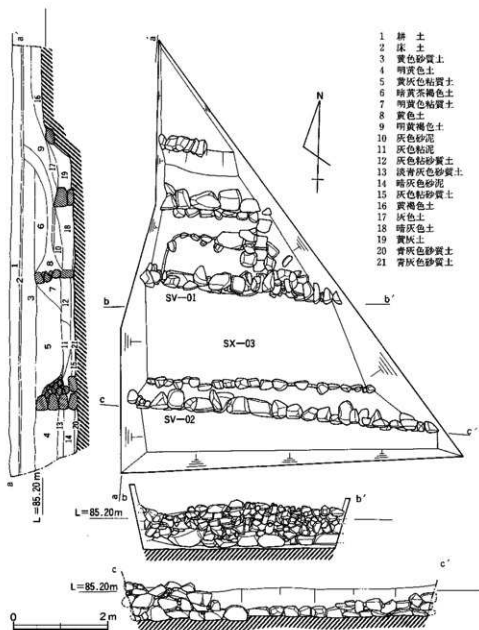
SX-03 (第13図、図版3b)

調査区北西で検出した地下式倉庫である。北は南面に面を持つ石垣(SV-01)と、南はSV-02の内側(北)に構築された石垣とで界されている。規模は、東西長4.5m以上、南北長2.6mを測る。東と西の壁についての構築方法は不明である。深さは、80cmを測る。石垣の面に壁土を塗り込め、さらに壁土を焼いている。これに隣接するSV-02は塔頭の南限を区画する石垣と思われる。この様な石垣で構築された地下式倉庫は後述するSX-16と同様なものと考えられる。

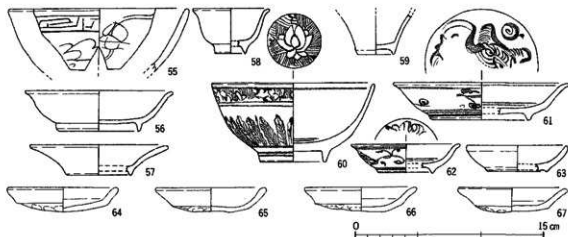
SX-03出土の遺物(第14図、図版68)

55はC2類の青磁碗。外面口縁部に雷文帯が巡り、内外面体部に片切彫の劃花文が見られる。淡灰白色の堅緻な胎土に艶のある草緑色の釉が厚く掛かる。56～59はすべて白磁E群。56は端反皿。57は高台から体部が直接外反して立ち上がる。疊付の釉を内外からケズリ、疊付は三角形を呈す。58は端反杯。外底には「大明年造」の染付銘が見られる。高台内を露胎で残し、疊付外面の釉を丁寧にフキ取った後、染付銘を施し、内底から高台途中まで施釉。59は皿57に対応する器

形の杯。内底全面に珪砂が付着。60～62は染付。60はC群の碗。外面口縁に波濤文帯、体部に蕉葉文を巡らし、内底には蓮華文が見られる。やや鈍重な作りであるが、釉には光沢があり、呉須の発色は鮮やかである。畳付に少量の珪砂が付着。61・62は大小のB1群の皿。外面体部に牡丹唐草文、内底に玉取獅子文を描く。63は瀬戸美濃窯の灰釉皿。体部の立上りが短い。64～67は16世紀代に通有の在地産の土師小皿。



第13図 SX-03実測図



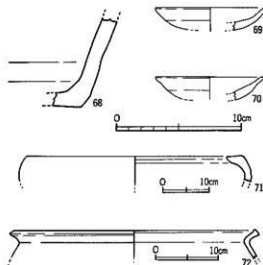
第14図 SX-03遺物実測図

SE-01 (第16図、図版4 a・b)

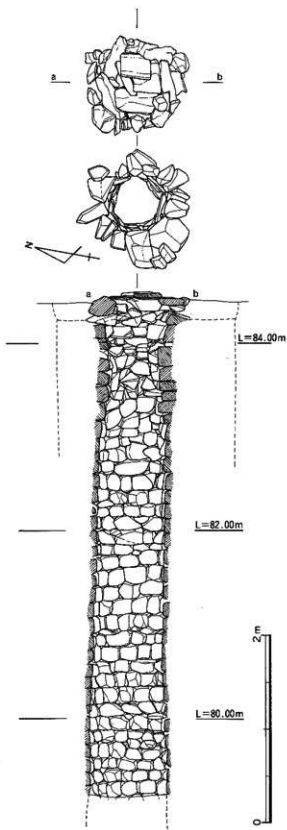
調査区のやや中央で検出した石組の井戸である。平面形は円形を呈し、内径は約65cmを測る。石積みは15~30cm大の和泉砂岩の自然石を丁寧に円筒形に積んでいる。検出時は数枚の片岩の板石で蓋が施され、地鎮祭が行われたものと思われる。それを取り除くと水が溜っていた。検出は危険を伴うため、地表から5.3mまでに留まった。石積みの状況は、上部から約1m地点までは内径50~65cmを測り、そこから下方に向かうにつれてやや袋状を呈する。掘形はほぼ円形で約2.0mを測る。

SE-01出土の遺物(第15図、図版68)

68は常滑窯の甕底部。69・70は16世紀代に通用の在地産の土師小皿である。71は瓦質の火鉢である。口縁部を内側に水平に折り曲げた器形で、精良な灰白色の胎土に微量の雲母を含む。器面は風化して調整等は不明である。内面は体部上半から口縁部のヨコナデ後のへらによる整形痕が残る。72は土師質鍋で、45と同様の胎土である。羽釜の可能性もある。



第15図 SE-01遺物実測図



第16図 SE-01実測図

SE-02 (第8図)

調査区中央からやや西で検出した素掘りの井戸である。近世の石組の溝を除去後検出された。15世紀の遺物が出土している。この井戸の時期は天正の兵火に係る時期より以前と考えられる。掘形の西側の一部は調査区外のため検出できなかった。掘形の形状は方形を呈し、最大長 3.0m 以上を測る。残存高は1.10mを測る。堆積土は上層が灰色土、中層は灰褐色土、下層は厚さ5 cm 程度の木の葉層と厚さ15cm程度の灰色砂質土で埋まっていた。なお、この井戸は掘形から推量して木組であった可能性が考えられる。ただし、縦板組か横板組かは不明である。

SK-01 (第8図)

調査区東端で水田の床土除去後、地山面で検出した。後世の水田化のため削平が著しい。東端が調査区外にかかるため全容は明らかではない。東西長6.6m以上、南北長2.0m以上を測り、残存高は約10~30cmを測る。底面は割合凹凸が著しく平らではない。この土坑から瓦器碗、土師器皿、白土器等の遺物が出土している。このことから、天正の兵火に係る時期より以前の遺構であると考えられる。埋土は灰色の単一層であった。

SK-02 (第8図)

南東隅で検出した。この遺構の殆どは調査区外に掛かり、形状は不明である。東西長 3.0m 以上、南北長 0.6m 以上、残存高は10~20cmを測る。出土遺物、埋土はSK-01と同様である。

SK-03 (第8図)

SK-01の西約2mの箇所検出した。南北を軸とした長丸形の土坑である。規模は南北長 3.0m 以上、東西長約1.70m以上を測る。残存高は25~35cmを測る。他の状況(埋土・出土遺物)はSK-01・02と同様である。

SD-01 (第8図)

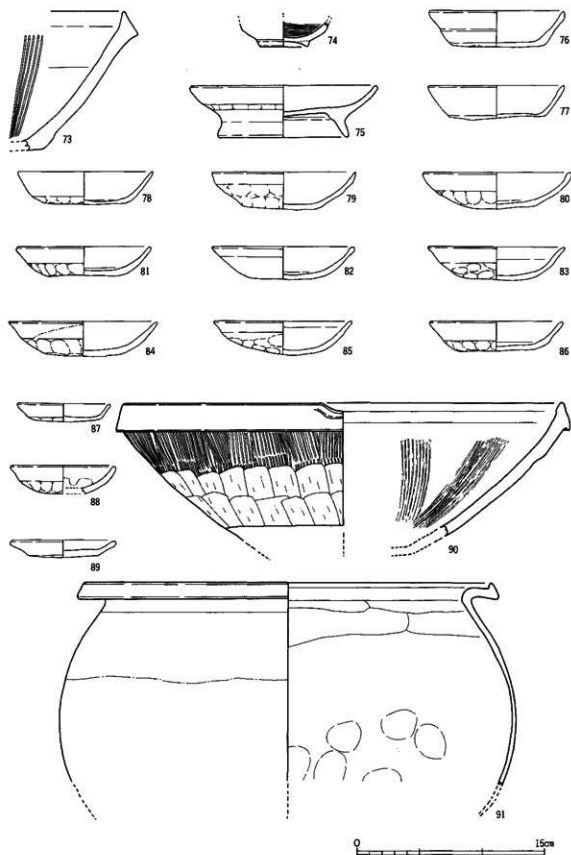
調査区中央区南を東西に延びる素掘りの溝である。規模は東西長13m以上、幅 0.7~1mを測る。西端でやや南へ曲がる兆しがある。東はSD-02により切られている。底の深さから判断して東流していたと考えられる。

SD-02 (第8図)

SD-01とはほぼ直交する石組の溝である。南北長5.0m以上、幅1.2m~1.5mを測り北方向に広がる。掘形は西列側石のみ検出した。掘形までの幅は約1.7~2.0mを測る。この幅の断面の形状は西側で段を持つ逆台形を呈す。深さから判断して南へ流れていたと考えられる。

SB-01 (第8図)

南向きの小さな御堂の様な総柱の建物と考えられる。素掘りである。規模は桁行4間 5.4m(間尺1.35m)、梁行4間 4.2m(間尺1.05m)である。柱穴の掘形は円形で直径30~40cmを測る。残存の深さの平均は約10cmを測る。



第17图 SE-02遺物実測図

SE-02 出土の遺物 (第17図、図版68・69)

73は備前窯の摺鉢である。口縁端面が上下に拡張する。内外口縁部付近を丁寧にヨコナデするが、特に上部はやや摘み上げ気味に内面口縁部と同時にヨコナデを施す。内外面体部のヨコナデは粘土紐の巻上げ痕を残す程度に粗く、外底は未調整のままである。胎土は暗灰褐色で堅いがやや粗く、数mm大の小石をいくつか含んでいる。器表は重焼部分及び内面が暗灰茶褐色、外面口縁部付近が暗赤褐色を呈す。内面の構目は9条1単位である。74は瓦器小皿である。まったく焼かれておらず、黄灰白色を呈し、胎土は砂粒を含んでやや粗い。外面体部から高台内外にヨコナデを施し、内面体部には太い横方向の密な暗文、内底には平行暗文が見られる。75~89は在地産の土師白土器である。一般的には極めて良く水滌され、精良で乳白色に近い胎土を持つが、わずかに砂気を含んだ、通常の白色系と称される土師皿に近い胎土のものも少量認められる。なお、大部分が中皿で、小皿は比較的少ない。高台を持つものもごく少量である。この種の土師皿は昭和56年度に行った根来寺西部地区の発掘調査において、SD16から大量に出土している。相伴遺物は15世紀第1四半世紀頃の遺物を最も新しい要素とする。根来寺を中心とするごく狭い範囲でのみ出土し、生産時期も非常に短いものと考えられる。特別な用途に使用された可能性もあり、根来寺もしくはその周辺で生産されたものと考えられる。根来寺西部地区は、根来寺の西に隣接して展開する町屋地区で、根来塗の工房などの存在が予想される場所である。あるいは、白土器の生産なども西部地区において行われた可能性もある。75はやや砂気を含んだ黄白色の胎土をもつものである。高台をもつ白土器は法量的に大小あるが、大きく高い高台に不似合いな短い体部が付く。内外面体部にヨコナデを施し、外面体部下の高台接合部付近には一部指頭痕を残したままで、特に高台内外を強くヨコナデする。内底は一定方向にナデ、外底は粗く不定方向にナデる。76~84は口径11~12cm、器高3cm前後の中皿で、量的には最も多い。基本的には底径が大きく、体部の立上りが強い器形である。おそらく、内型により成型しているものと思われる。内底に不定方向のナデ、体部内外面に強いヨコナデを施した後、体部を指で持ち、内底と体部の立上りの境界付近にヘラ状工具を2、3周させる。体部のヨコナデは真上に抜き上げているようである。外底は型押えの際の指頭痕を一部に残したまま粗く指ナデしている。87~89などの小皿があるが、一般的な器形は口径7~8cm、器高1.5cm前後の87のタイプと、ヘソ皿を模したタイプである。これらにもやはり胎土に砂気のあるものが少量認められる。調整も中皿と同様である。90は瓦質こね鉢である。上下に拡張した口縁端面に小さい片口が付される。胎土は砂粒を含んで粗く灰白色、器表は黒灰色を呈す。内面体部下から内底の摩耗が著しいが、13条1単位程度と思われる。口縁部内外にヨコナデを施し、内面体部に横方向のハケ調整、外面体部上半を縦方向のハケ、体部下を縦方向のヘラケズリで仕上げる。なお、刷毛目は内面の構目と同じ工具を使っている可能性が大きい。91は土師質の鍋である。45同様の胎土であるが、非常に大型である。

(2) 盆地部B・C地区の概要(第18図)

開祖覚鑑が1140年に高野山より下って止住したと伝えられる豊福寺推定地の南西、また上人の根来寺内での最初の建立寺、現円明寺御影堂の東側と北側(C地区)に隣接した所である。現状は水田地となっていた。調査はこの水田5枚に掛かり、十分な塔頭の寺域を確認するに至らなかった。検出遺構としては、地下式倉庫、土坑、石組溝、素掘り溝、埋め桶、礎石建物、石垣等がある。

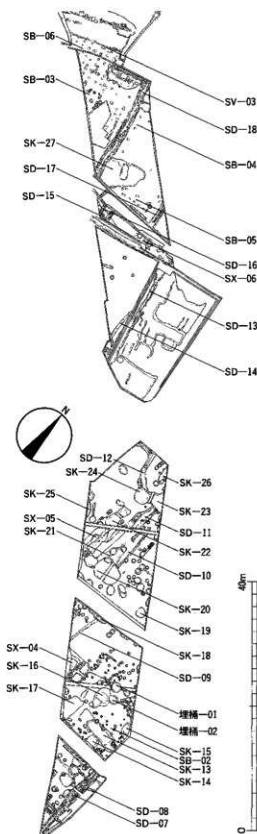
B地区は2面検出した。江戸期の面と天正の兵火に係る時期の遺構は上面で、天正の兵火時より以前の遺構は下面で検出した。旧地形は北から南東に向かって下がっていたと思われる。C地区南側の水田は削平されており、遺構は希薄であった。北側の水田は1段高くなり遺構の遺存も良い。これは、この地に塔頭が建ち始めた頃は南側の水田と同一面であったと考えられる。

B地区の南端は、一部昭和62年度の国庫補助事業と重なり、その当時発掘した状況のまま再度検出した。^(註5)詳細な点は昭和62年度の概報に委ねたい。

SX-04 (第29・30図、図版6a・b)

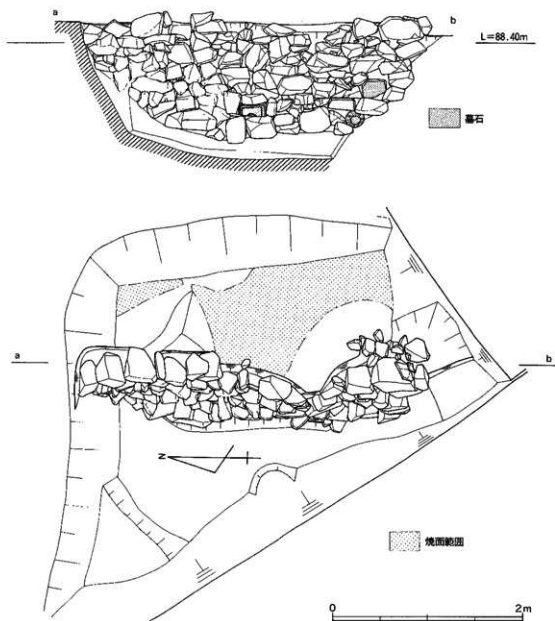
調査区の南寄り検出した。石積みを持つ地下式倉庫である。水田の床土除去後検出した。検出当初は北側部分の石積みと焼土を確認した。その焼土の南側は厚さ5～10cm程度の黄色土で埋められ、この黄色土除去後北側と同一の焼土が検出された。つまり、この遺構のプラン確認はこの焼土によって明らかとされた。埋土である焼土は底までぎっしり詰まっていた。この遺構の西側は調査区外のため、全容は明らかにされていない。

遺構内に石垣が築かれているということは、造り替えを意味していると思われる。石垣は東側に



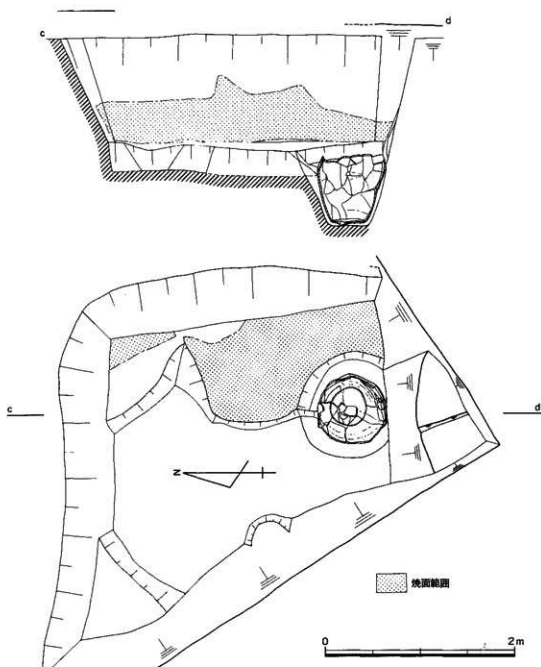
第18図 盆地部B・C地区遺構全体図

築かれ約2m縮小されている。石垣の裏込めはグリ石は無く、全て同様の焼土によって埋められていた。石垣に利用されていた石材は他の遺構同様の泉砂岩で、五輪塔及び宝篋印塔の一部も転用されていた。造り替え時の規模は東西2m以上、南北4m以上を測り、深さは約1.5mである。石垣除去後、この下から備前焼の大甕が据え付けられた状態で検出された。甕の掘形は直径1.1mの円形で、単体で据え付けられている。この他にも調査区外に据え付けられている可能性がある。また、裏込め部の下で赤く焼き締まった床面を検出した。東側の壁の立ち上がりも焼き締ま



第19図 SX-04実測図(石積を有する)

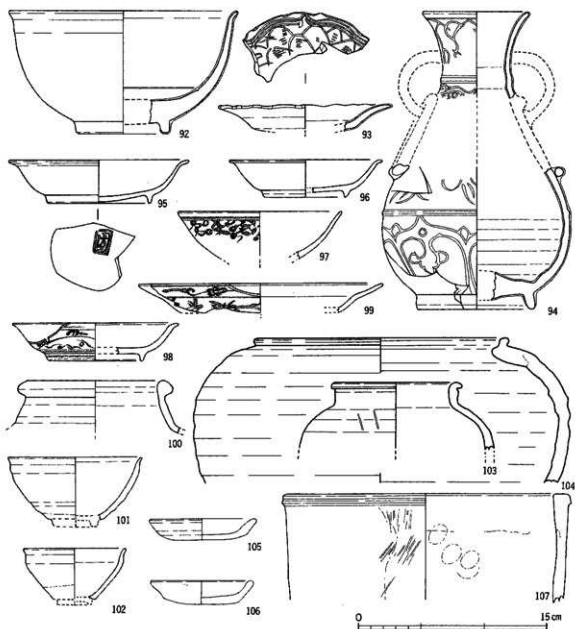
っていた。古い時期の規模は新しい時期のものより東西長2 m大きかったと判断できる。なお、検出できたのは部屋部の一角だけで、これに伴う進入部と礎石は不明である。ここからの出土遺物には江戸期のものは出土していない。天正の兵火に係る時期以前に何らかの理由により小さくしなければならなかったと考えられる。



第20図 SX-04発検出状況

SX-04 出土の遺物 (第21図、図版69)

92~94は青磁である。92は大型の端反鉢で、碗D類に相当。93は稜花皿で、火中する。94は不遊環を持つ双耳壺である。総釉で疊付の釉を三方から丁寧にケズリ取る。95・96は白磁E群の端反皿である。95の外底には「万」の染付銘が見られる。97~99は染付で、97は碗C群、98は皿B1群である。99はF群の鐏皿で、根来寺出土染付の最も新しい要素の一つである。100は褐釉壺である。あまり胴が張らない器形と思われる。101・102は瀬戸美濃窯の褐釉天目茶碗である。101は体部が丸みを帯び、口縁の屈曲も少ない。103は備前窯壺、104は備前窯水屋甕である。104は無頸化が相当進んでいる。105・106は在地産の16世紀に通行の土師皿である。107は土師質火鉢。



第21図 SX-04遺物実測図

SX-05 (第22図、図版7a・b)

灰色味の強い包含層(暗灰色土・暗灰褐色土・黄灰色土)下で検出した。部屋部と進入路とから成る地下式倉庫である。形状は部屋部の東端に進入路が直線的に取り付き、逆「L」字型を呈する。進入路部の長さから考えると、部屋部がかなり小さい感を受けるのである。この遺構の軸は南北である。通路はゆるやかなスロープ状を呈し、通路の入口部分から部屋部の進入口までの高低差は約30cmである。全体の規模は南北長10.4m、東西長約3.10mを測る。この内、部屋部の大きさは南北長3.2m、東西長3.1m、残存高は約40～50cmを測る。部屋部の形状はほぼ正方形である。進入路の規模は長さ7.2m、幅約70～90cmを測り、残存高は30～80cmと大差があり、部屋部に近くなるにつれて削平が著しい。部屋部の埋土は全体に焼土で覆われていた。西側の低い箇所まで底の方に厚さ5～8cmの炭層を確認した。また、この上層には、本来は内壁として機能していたと思われる赤く焼けた粘土塊の層が堆積していた。削平され掻き込まれたものと考えられる。通路部の埋土は北側で3層に分層でき、上層は暗灰色土、中層は焼土層、下層は炭混じりの焼土層とるように部屋部と同様、殆ど焼土で覆われていた。

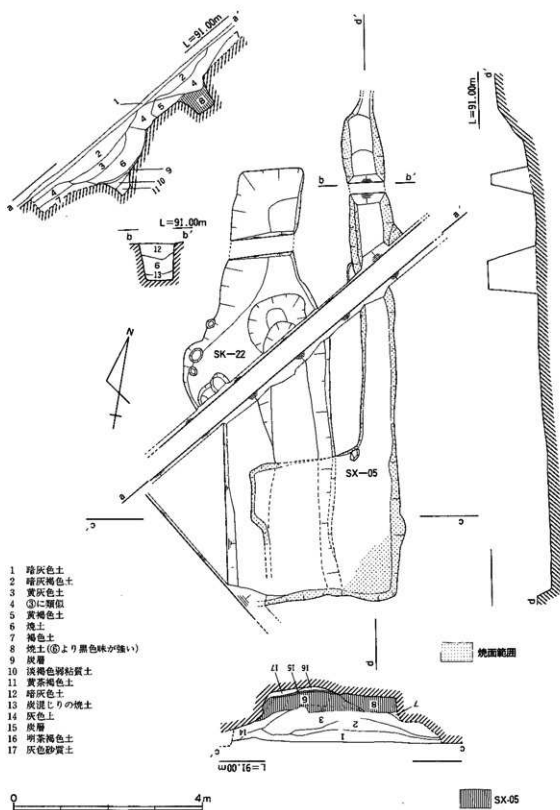
壁は殆ど垂直ぎみに立ち上がっており、進入路部から部屋部までの内壁は見事に赤く焼き締まっていた。この状況は平面形から確認する限り、その赤く焼けている厚さは約0.5～1.0cmを測る。これにはスサとみられるものが入っており、ただの粘土を内壁に塗って焼成したものと思われる。しかし、床面は南東隅のコーナー部分の一部を除いて、焼面範囲は確認していない。この様に、内壁面だけが焼き締まっているということから、意図的に焼かれた可能性が高いと言える。また、この床面には甕を埋めた形跡は無く、礎石も検出できなかった。これとは規模、形状は異なるが、昭和62年度調査のものと進入路部が^(註6)類似している。

SK-22 (第22図、図版8b)

SX-05の西に平行する様に位置する溝状の不整形な土坑である。これもまたSX-05と同様プラン確認に困難した。包含層の灰色土を徐々に下げたが確認することができず、セクションベルトの際を掘り下げ、ようやく断面土層により確認した。その結果、SX-05に切られている事が判明した。出土遺物から、SX-05と若干の時期差が窺える。規模は南北長約9.0m、最大東西幅約3.20m、最小東西幅0.8m、残存高は25～35cmを測る。底は2段に段づく。埋土はレンズ状に堆積し、上層は焼土と炭層、下層は淡褐色粘質土と黄茶褐色弱粘質土である。

SK-20 (第22図)

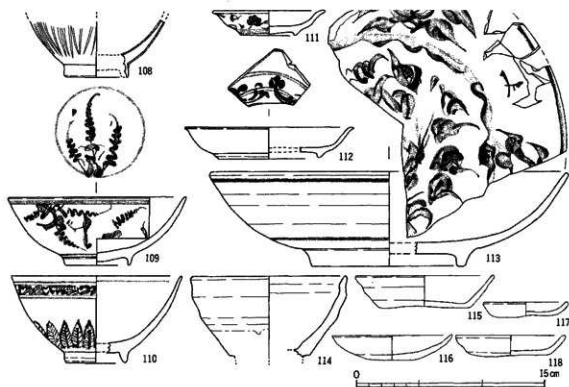
SX-05の上層でこれの東で検出した楕円形の土坑である。長径4.20m、短径3.60mを測る。深さは25～30cmを測る。底面は平らで、壁の立ち上がりは割合緩やかである。埋土は2層に分層でき、上層は黄色土、下層は灰褐色土である。出土遺物は上層の黄色土からが殆どで、中国製染付、青磁、白磁、国産焼締陶器、瓦、唐津焼、その他近世陶器が少量ではあるが出土した。



第22図 SX-05 SK-22実測図

SX-05出土の遺物（第23図、図版69・70）

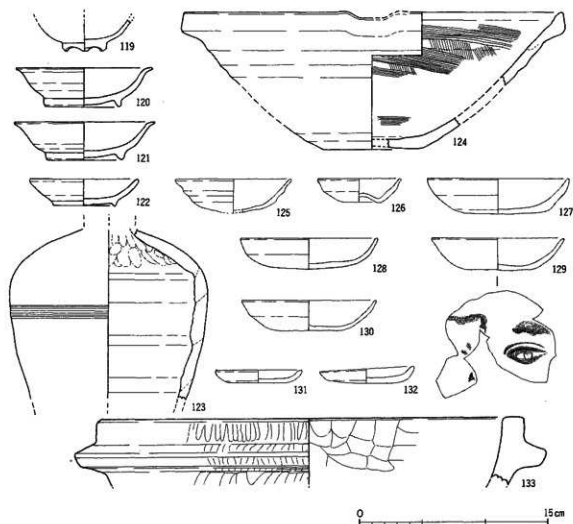
108 は竜泉窯系青磁B4類の碗である。胎土は灰味が強く、釉は暗草緑色に発色している。内底から体部下半に茶筌などによると思われる同心円状の無数の擦痕が認められる。109～113は染付である。109・110はC群の碗で、109は浅い器形のI類、110は深い器形のI類である。109の外面部に花鳥文、内底に梅月文を簡略化したような草花文が見られる。110は60とまったく同じものである。外面に波濤文と蕉葉文、内底には蓮華文が描かれる。火中する。111・112はB1群の皿である。111はやや雑な作りの小型品で、外面体部に牡丹唐草文、内底に羯磨文が描かれる。112は外面無文で内底に花文が描かれ、口縁部に鉄による口紅を塗ったものである。呉須の発色は良好で、疊付の釉ケズリも丁寧である。類例はあまり多くないが、同タイプのものに「弘治年造」の染付銘を持つものが知られている。113は呉須手の盤である。火中したのか、釉はカセ、胎土は陶質で黄白色ないし黄橙色を呈す。内面部及び内底に太い濃筆による牡丹文が描かれている。いわゆる砂高台で、疊付に多量の硅砂状のものが付着する。華南地方の製品と思われるものである。114は瀬戸美濃窯の天目茶碗である。火中によるのか、胎土は黄橙色で、釉はカセた黄緑褐色を呈している。体部の立上りは比較的直線的で、底部が厚い安定した器形と思われる。外面口縁部の屈曲点に稜ができ、内面に面をもつ。露胎部への化粧掛けはされていない。115～118は土師皿である。115～117は白土器で、115・116は中皿、117は小皿。116の器形はこの種のものとしては珍しいタイプである。118は16世紀代の根来寺に通有の在地産小皿である。



第23図 SX-05遺物実測図

SK-22出土の遺物（第24図、図版70）

119～121は白磁である。119はD類の杯。胎土が陶質のタイプで、外面体部下半を露胎で残す。120・121はE群の端反皿であるが、景德鎮窯系と考えられる95などの通常の端反皿とは異なるものである。器肉が厚く、削出し高台で、胎土に灰味がある。畳付に硅砂の付着するものが多い。122・123は瀬戸美濃窯の製品で、122は灰釉皿である。体部の立上りは短く、器高が低い。火中する。123は灰釉瓶である。外面肩下と頸下に葡萄の4条の筋線が巡る。124は東播磨片口である。口縁部の拡張は下方により大きい。砂粒を含むやや粗い胎土は暗灰色を呈す。125～132土師皿である。125は白土器中皿。126は白色系のヘソ皿、127～129は白色系中皿で、微細な砂粒を含むが精良な黄白色の胎土である。体部から口縁部のヨコナデは真上に抜く。129の外底には人面の墨書が見られる。130は褐色系の中皿で、法量的には127～129などと類似する。赤褐色を呈する胎土は微細な雲母粒を少量含む。外底と体部の界が明確で、外面体部下半には明瞭な指頭痕が全周する。131・132は褐色系小皿で、器形、調整等は白土器の小皿と酷似。133は滑石製石鍋。



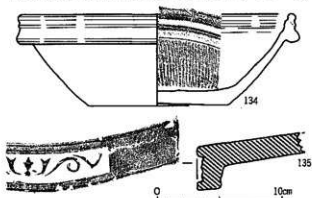
第24図 SK-22遺物実測図

SD-07 (第26図、図版10b)

昭和62年度の調査と重複する石組溝である。北から南へ流れていたものと思われる。底は全面石敷きであったと考えられ、その一部が北側に遺存している。西の側石は土塀の基礎で、一部、両側に面を持つ。東はこの溝に沿った道だと考えられ、この溝の中段に片岩の板石が1枚渡され、この辺りに木戸の様な施設があったものと考えられる。

SD-07出土の遺物(第25図、図版70)

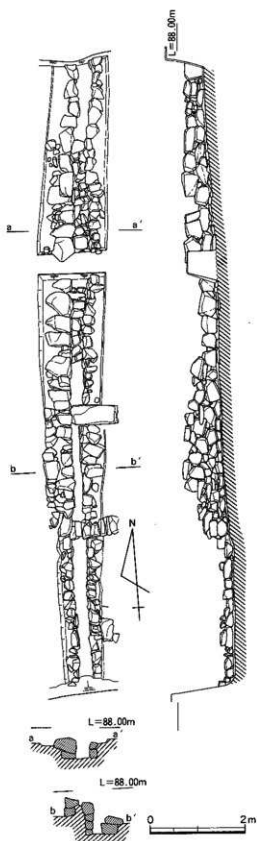
134 は罫産と思われる小型の播鉢である。胎土は砂粒をあまり含まず精良で、レンガ色に近い赤褐色を呈す。外面体部は非常に丁寧にヘラケズリされている。内底には10条1単位の櫛目が放射状に施され、明石産の可能性も残る。135は唐草文の平瓦である。周縁の両側縁部が極端に広くなり、顎部の厚さは平瓦部とほとんど同じになっている。



第25図 SD-07遺物実測図

SK-13・21 (第18図、図版11b)

SK-13は下層面で検出した。東西に軸を持つ土坑で、東端は調査区外のため不明である。形状はほぼ長方形、東西長 6.0m以上、南北長2.20m、残存高は30~45cmを測る。SK-21も下層面で検出した。SX-05に切られ形状は不定形、残存高は約50cmである。埋土は暗灰色弱粘質土の単一層である。13世紀初頭の遺物が纏まって出土した。



第26図 SD-07実測図

SK-13・21出土の遺物（第27図、図版71）

SK13 136~138は瓦器碗。和泉型に近い器形で、136は外面口縁下に雑な2条の沈線を巡らす。外面体部には4分割の意識を持った雑な暗文が施される。137・138はやや砂気が多い胎土。内面の暗文は比較的細く密である。139・140は土師皿。139は体部が直線的に開く器形で、外底に回転糸切痕を残す。胎土は比較的精良で灰青色を呈す。140は16世紀代に通有の在地産小皿。

SK21 141は竜泉窯系青磁碗C2類。内外面に片切彫劃花文、外面口縁部に雷文帯。胎土は精良で灰白色を呈し、草緑色の釉は透明度が高く光沢がある。総釉で外底の釉を輪状にケズる。



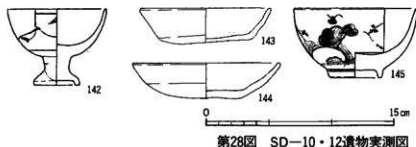
SD-10・12（第18図）

SD-10は石組の溝で、南は灰色の包含層除去後、北は床土除去後検出した。検出長は約11.0m、残存の深さは25~30cmを測る。SD-12は近世の素掘りの溝で、地山掘り込みである。北端は調査区外であり、南端もSK-24に切られ不明である。中央に五輪塔の地輪を6基連ねていた。

SD-10・12出土の遺物（第28図、図版70）

SD10 142は肥前窯の染付仏飯器。外面唐草文。呉須、釉は灰味を帯びる。台脚上端部以下を露胎で残す。143・144は土師皿で、143は白土器の中皿、144は130と同様の褐色系の中皿。

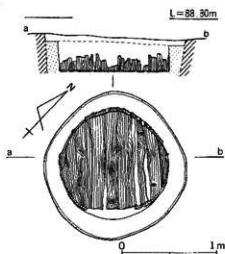
SD12 145は肥前窯の染付碗で、外面体部に雑なタッチの簡便な草花文を描く。外底には極端に略化した「大明年製」の銘が見られる。釉や呉須は灰味を帯びて発色する。総釉で疊付の釉を雑にフキ取る。



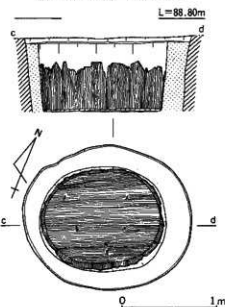
埋桶-01・02 (第29・30図、図版12a)
調査区南よりで南北に2基並立した状態で検出した。その間隔は約55cmを測る。埋桶-01はほぼ円形を呈し、直径1.15mを測る。底板は幅10~15cm、厚さ約2cm程度の板材を10枚並べていた。側板は殆ど朽ちていた。掘形は直径1.50m、残存の深さ約30cmを測る。埋桶-02は楕円形を呈し、長径1.55m、短径1.05mを測る。底板は幅20cm、厚さ2cm程度の板を長径に対し平行に敷いている。側板の遺存の高さは約50cmである。また、当然ながら掘形も楕円形を呈し、長径1.75m、短径1.50mを測り、残存の深さは約80cmを測る。この2基の埋桶の廃棄時期は19世紀である。

埋桶-01・02出土の遺物 (第31図、図版71)

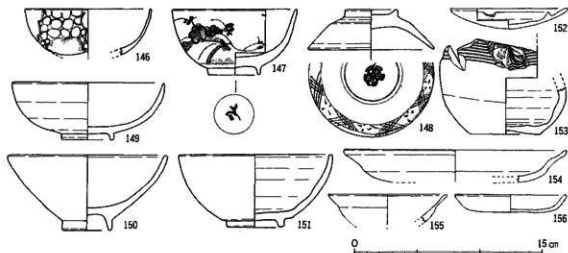
146~148は肥前窯の染付。146・147は椀。148は青磁染付の蓋で、内底にはコンニャク判の五弁花文が見られる。149~151は肥前窯の灰釉碗である。149は京焼写しで、赤と緑を使った上絵付の松竹文を描く。151は灰緑色の釉下に、白濁釉を散らす。152は信楽窯系の灰釉灯明皿である。153は備前窯の徳利である。布袋と思われる型押人物を添付し、体部の三方を凹ます。154~156は土師皿である。154は口縁部の強いヨコナデによる罍皿のような器形の大皿である。内面体部にタールが付着する。155は在地産白土器の中皿である。156は130などと同様の褐色系小皿である。



第29図 埋桶-01実測図



第30図 埋桶-02実測図



第31図 埋桶-01・02遺物実測図

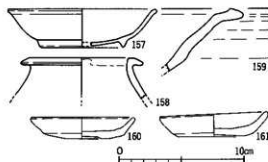
埋桶-01: 146~153, 埋桶-02: 154~156

SD-18 (第33図、図版14b)

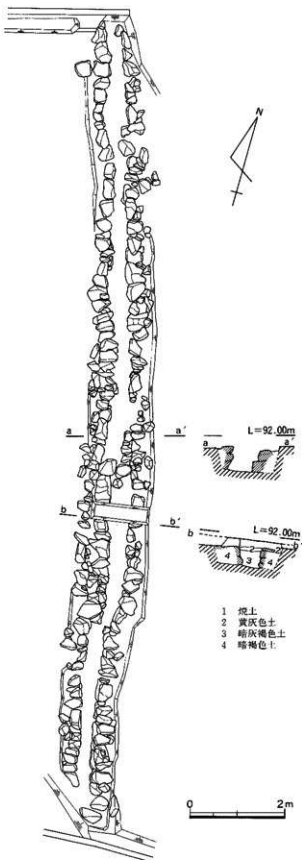
盆地部B地区の北端で、床土直下の焼土層除去後検出した。この焼土層は江戸時代の復興時の整地土だと考えられる。軸をやや西に振り、南北に直線的に延びる石組の溝である。底の深さから判断して、北から南に流れていたものと考えられる。規模は長さ 約17.20m以上、幅は流水部で25~40cm、残存の深さは50cmを測る。また掘形の幅は1.2~1.4mを測る。この溝の中央部で造り替えの痕跡が認められ、西壁の石組が2列になっている箇所があった。この石組の方向から判断して、当初はほぼ直線的であったものが南端部でやや西に振り直されたと考えられる。

SD-18 出土の遺物(第32図、図版71)

157は白磁E群の端反皿である。比較的丁寧な作りで、釉には光沢がある。158は褐釉瓶である。口縁端部を鋭く尖らし、外方に水平に引き出している。口縁端面及び内面口縁直下まで露胎である。胎土は灰白色を呈し、堅緻で精良である。159は瀬戸美濃窯の灰釉盤である。体部はやや直線的に外方に立上り、口縁部を更に外方に屈曲させて水平近くに引き出す。外面体部下半を露胎で残し、三脚が付せられるものと思われる。160・161は16世紀代の根来寺に通有の在地産土師小皿である。



第32図 SD-18遺物実測図



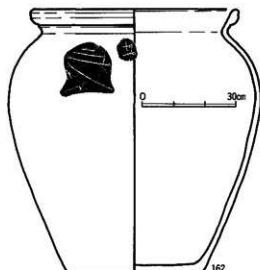
第33図 SD-18実測図

SX-06 (第35図、図版14a)

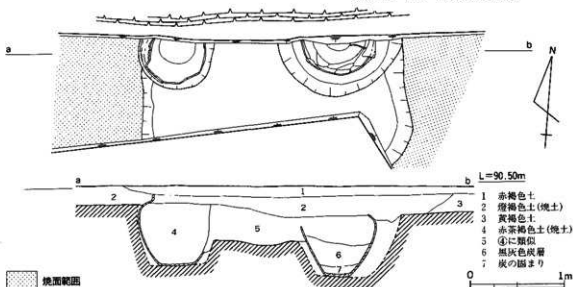
SD-18を検出した水田区画より南へ1段下がる非常に狭小な水田区画で検出した。この検出面と上段の検出面の比高差は約1.30mである。この遺構は備前焼の甕を埋設した地下式倉庫である。上述のごとくこの遺構の北は現有的な水田を区画する近現代の石垣があるため、全容を明らかにすることができなかった。検出できたのは地下式倉庫の部屋部の一部のみにとどまった。また、東と西の壁の立ち上がりは確認できず、おそらく水田化に伴う削平をうけていると思われる。規模は東西長4.20m以上、南北長1.40m以上を測る。中央に甕の埋置施設を検出した。またその両側の床面と思われる箇所が強く焼き締まっていた。甕は肩部まで埋められ、東西に2基平行していた。この掘形は1基の甕に対して一つの掘形を造るのではなく、埋設しようとする範囲を大きく掘りぬき、一度に埋めたと考えられる。埋土は若干の色調、質の違いがあるが、すべて焼土で覆われていた。この遺構については、まだ数基の甕列が検出される可能性も考えられる。

SX-06出土の遺物(第34図、図版71)

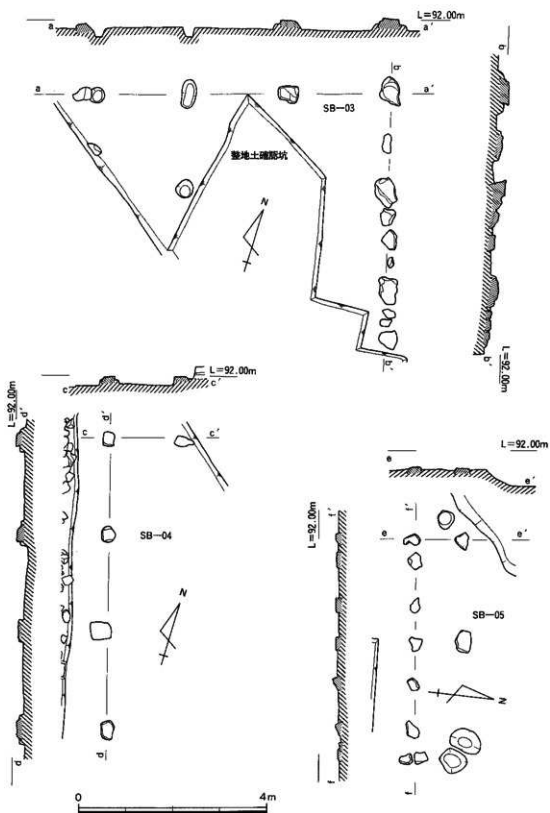
162は備前煎の大甕である。根来寺において埋め甕遺構などに使用され、最も大量に出土するタイプのものである。肩が張った器形で、口縁部が「く」の字状に外方に折れ、口縁外面は凹線状の段が付く。胎土は堅緻で赤褐色を呈す。外面肩部に「三入」と「十一」のへら描の銘がある。



第34図 SX-06遺物実測図



第35図 SX-06実測図



第36图 SB-03・04・05实测图

礎石建物の概要 (第36図)

盆地部の最北端の水田区画で礎石建物4棟を検出した。先述したSD-18の西と東で2棟ずつ検出し、これら建物の軸もSD-18と同じくするため、この溝によってこれらの礎石建物が界されていたと考えられる。しかしながら、これらの建物のいずれも、一端が調査区外のためその全容は明らかでない。

15世紀代の整地土 (第36図)

礎石建物の検出面下は整地土である。SB-03の礎石を検出できなかった所を不整形に抜いた。焼土は検出されず、遺物も天正の兵火に係る時期のものは無く、一時期古い白土器が出土した。

SB-03 (第36図)

東西棟の建物である。梁行はSD-18と平行方向を示す。梁行主軸方向はN-15°-Wである。規模は桁行3間以上(6.3m以上)、梁行2間以上(4.2m以上)を測る。間尺は桁行、梁行とも同長(1間2.1m)である。また、梁行の礎石の間に東柱と考えられ礎石を検出した。

SB-04 (第36図)

SD-12を中心にSB-03と対称的に配置されている建物である。南北棟の建物と考えられる。梁行主軸方向はN-15°-Eである。桁行1間(1.6m以上)、梁行3間以上(6.24m以上)を測る。間尺は桁行1.60m、梁行2.08mを測る。

SB-05 (第36図)

南向きの小さな堂舎の番縁の部分と考えられる。桁行は3間(4.68m)、梁行1間以上(約1.0m以上)の規模を持つ。この建物の想定できる北方向はSK-27によって切られている。西はSD-18により、また東はSD-17により界されている。

SB-06 (第18図)

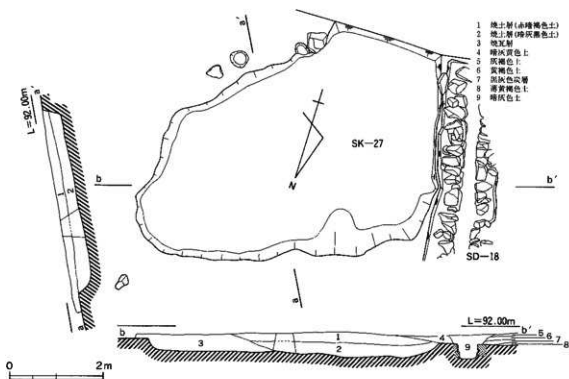
SB-03の北西に隣接する総柱の建物である。梁行主軸方向はN-10°-Wである。桁行4間以上(4.4m以上)、梁行3間以上(5.6m以上)の規模である。

SD-15・16 (第18図)

この2条の溝はSX-06の西方で検出した石組の溝である。SD-15はSX-06と軸を同じくするところから、この地下式倉庫の西側の境界と考えられる。検出総長約2.0mを測り、流水部の幅は10~15cmである。側石も10~20cm大のもので一段のみ残存していた。SD-16はSD-15の西約1.2mの位置に並立し、南流する溝である。この溝の規模もまたSD-15に類似し、小振りである。軸はSD-15に比べやや西に振る。

SD-17 (第18図)

SB-05の東を界する東西に延びる石組の溝である。北から南へ流れていたと思われる。検出長3.5m以上を測る。流水部の幅は約10cmと小さく、側石も10~20cm大の小振りの石である。



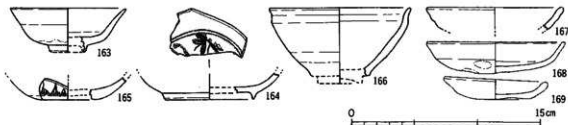
第37図 SK-27実測図

SK-27 (第37図、図版15b)

南西隅でSD-18に切られる不定形の土坑である。規模は最大長6.20m、残存の深さは約30～50cmを測る。埋土は焼土層であるが、東肩から中央部にかけて焼けた瓦が多量に投棄されていた。

SK-27出土の遺物 (第38図、図版72)

163は白磁D群の杯である。腰が折れ、体部がやや外反気味に開く器形である。黄白色の陶質の胎土で、透明度が高く青緑味を帯びる釉が薄く掛かる。体部下半以下を露胎で残す。164・165は染付である。164は口縁の内彎するE群の皿である。外面無文で内底に花卉文を描く。165はC群基筋底の皿である。外面体部に蕉葉文が巡り、内底には捻花文を描く。166・167は瀬戸美濃窯の製品である。166は褐釉天目茶碗である。口縁端部をやや丸くおさめ、体部もわずかに丸み帯びる。露胎の体部下半に化粧は見られず、ヘラケズリ痕を残さない。167は灰釉皿である。口縁が内彎し、体部の立上りが短い。火中したのか、胎土は粗く、灰黒色を呈し、釉は白濁化している。あるいは銅緑釉か。168は在地産白土器の中皿、169は16世紀に通有の在地産小皿である。



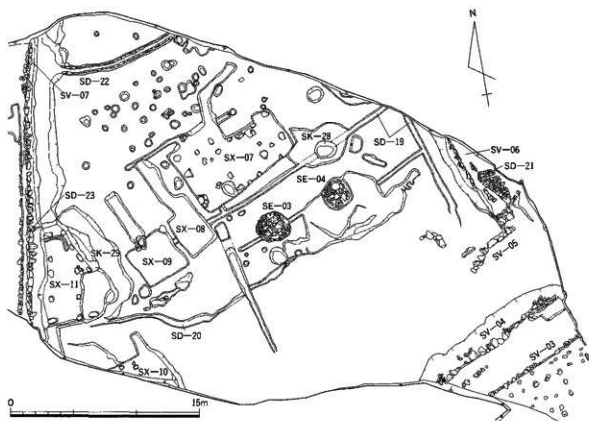
第38図 SK-27遺物実測図

第3節 丘陵部A地区の遺構と遺物

丘陵部A地区の概要（第39図、図版17a）

北の和泉山脈から派生する舌状の小丘陵の南端の平坦な一面である。盆地部との比高差は8～15mを測り、標高は約100mである。この比高差にバラツキがあるのは盆地部の地形（現水田）が階段状に北に高くなっているためである。また、この場所の先端部からは紀ノ川平野が眺望でき、出土遺構から判断しても一乗山根来寺という全体の中で特別な意味合いを持っていた場所であると想定できる。例えば、よく根来寺は武装集団を持っていたと言われていたが、その軍事に関与した倉庫群であった可能性もある。この丘陵地での検出遺構には地下式倉庫、石組の溝、素掘りの溝、石組の井戸、土坑、石垣等がある。この箇所での特筆すべき遺構は、5基纏まって検出された地下式倉庫である。いずれからも甕を設置していたと考えられる掘形を検出できなかった。

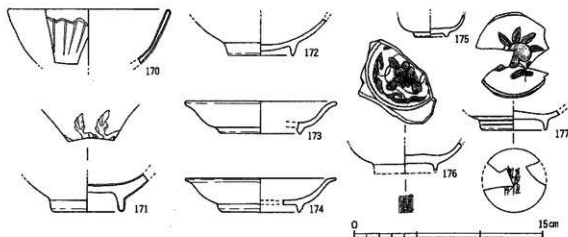
発掘調査の結果、この丘陵部は江戸時代に大きく改変されている。というのは、西側端で検出された地下式倉庫（SX-11）が江戸時代の石垣（SV-07）によって壊されている、ということを確認し得たからである。このことから、この舌状の丘陵部はもう少し西に張り出していたと考えられる。以下、この地区の遺構を一つずつ詳細に記述する。



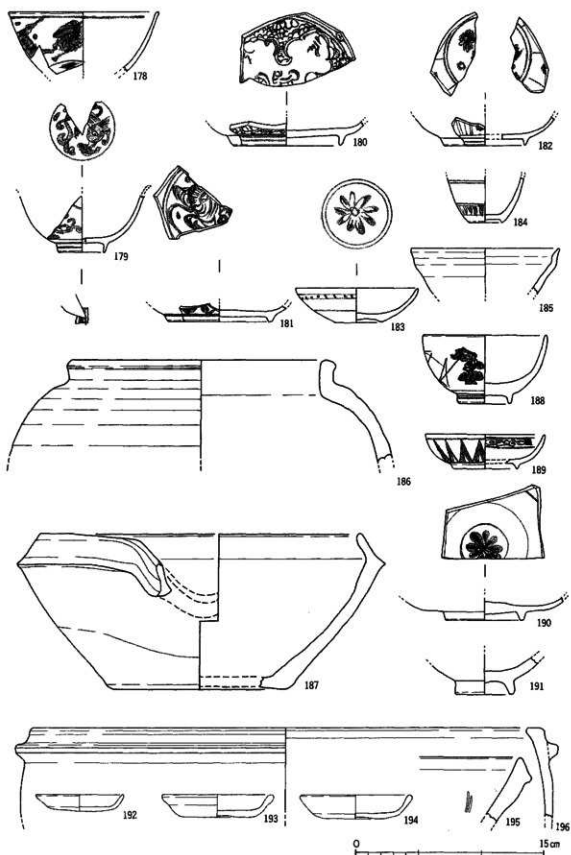
第39図 丘陵部A地区遺構全体図

丘陵部A地区包含層出土の遺物（第40・41図、図版72・73）

170・171は青磁碗である。170は竜泉窯系B4類、171は竜泉窯系E類である。172～175は白磁C群である。172は蓮子碗型の碗、173・174は端反皿、175は口縁の内彎する小杯である。176～184は染付である。176～178はE群の碗で、饅頭心型の底部を持つ。176は内底に牡丹唐草文を描き、外底に「富貴佳器」銘を持つ。177は内底に瑞果文が見られる。外底の染付銘は「長命富貴」であろうか。178は外面体部に飛鳥文と如意雲文を巡らす。179は口縁の外反する碗である。器形的には蓮子碗に近いが、E群の更に次の段階のもので、兵火以前の根来寺の遺物群のうちの最も新しい要素の一つである。外面体部と内底に蛟竜文が描かれ、外底には「富貴佳器」銘が見られる。180・181は皿B1群の端反皿である。180は外面体部を密な渦状唐草文で埋め、内面体部及び内底の渦状唐草にかけたアラベスク風の意内に梵字を配している。181は内底に玉取獅子文を描いている。182はE群の器形を持つ碗であるが、内外面体部の文様は完全に芙蓉手化している。179同様に最も新しい要素の一つといえる。183はC群の皿である。外面口縁部に便化した波濤文帯を巡らし、内底には簡略な花卉文を描く。陶質の胎土を持ち、華南地方の製品と思われるものである。184は外面体部下半に極めて退化した蓮弁文状の文様を巡らせた小杯である。高台は白磁皿E群のうちの59などと同様である。呉須は薄く灰味を帯びて発色する。185は瀬戸美濃窯の褐釉天目茶碗で、口縁の屈曲が強い器形である。186～187は備前窯の製品である。186は水屋甕で、まだ頸部が完全に残っている段階のものである。187は播鉢で、口縁部の上方向への拡張が著しい。188～190は肥前窯の染付である。188はコンニャク判の松と筆描きによる松葉の文様を併用した碗、189は外面に変形した蕉葉文を巡らせた丸皿、190は内底を蛇ノ目に釉ハギした皿である。191は肥前窯の灰釉碗である。192～194は土師皿で、192は白土器小皿、193・194は通有の在地産小皿である。195は瓦質こね鉢である。196は土師質羽釜で、内傾気味に立ち上がった口縁部を内方に水平に引き出し、平坦な上端部に凹線を1条巡らす。外面口縁下の体部の高い位置に断面台形の鐙が巡る。砂粒を多く含む黄褐色のやや粗い胎土で、紀伊型とされる。



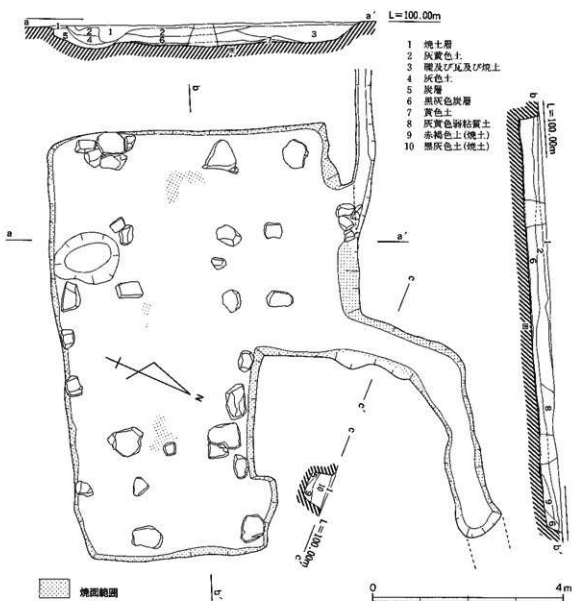
第40図 丘陵部A地区包含層遺物実測図 1



第41圖 丘陵部包含層遺物実測図2

SX-07 (第42図、図版19a・b)

丘陵部A地区のほぼ中央北寄りで畑の耕土除去後検出した地山掘り抜きの地下式倉庫である。これは部屋部と進入部から構成されている。部屋部は概ね長方形を呈し、軸を真北より西に28°振る。規模は東西長 9.0m、南北長3.90m～6.50mを測る。残存の深さは40～48cmを測る。かなり後世に削平をうけているものと思われる。部屋部の広さは約47.5㎡である。部屋部の中に礎石を配するタイプのもので、東柱をうけていたと思われる。この礎石の配列は中央部の東西には礎石が検出されず、この部分が主に何らかの貯蔵空間、あるいは部屋部内での通路ではなかったかと想定される。壁の立ち上がりは南・東・西ではほぼ垂直であるのに対し、北壁はやや外側に傾斜

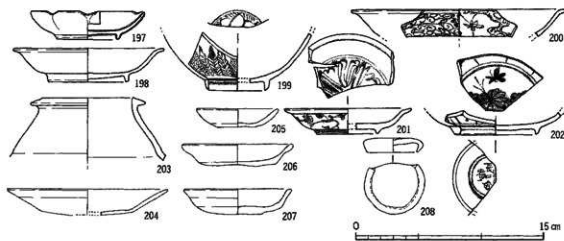


第42図 SX-07実測図

が付く。また部屋部を四周する内壁は全て赤く焼き締まり、その厚さは1~1.5cmを測る。通路部の内壁も同様の状況を呈する。床面も少しの範囲ではあるが数箇所焼けている。埋土は基本的に4層に分層でき、上層から赤褐色の焼土(第一層)、灰黄色土(第二層)、黒灰色炭層(第三層)、黒色炭層(第四層)である。第四層は床面一面に2~3cmの厚さで堆積していた。床面の南端で一ヶ所黒色炭層の溜った楕円形の凹みを検出した。これは甕を据え付けていた可能性も考えられる。進入部は北壁に接続され、規模は5.6m以上、幅80~95cm、残存の深さは約48cmを測る。これも焼土で埋まっていた。「く」の字状に屈曲し、部屋部に進むにつれてスロープ状に傾斜を成していた。

SX-07出土の遺物(第43図、図版73)

197は青磁の輪花皿である。口縁部を5分割する。いわゆる、裏白の類で、裏白の菊皿などと同様に、外底の釉は白磁の釉である。胎土は灰味を帯び、透明度の低い灰緑色の釉が薄く掛かる。畳付の釉ケズリ取りは比較的丁寧である。198は白磁E群の端反皿である。199~202は染付である。199はC群の蓮子碗である。文様構成は60や110などと同様であるが、体部の器内が薄く、高台も鈍重ではない。200・201はB1群の端反皿である。200は180と同様のもの、201は111などと同様の小振りのものである。やや雑な作りで、胎土や呉須は灰味を帯びる。202は口縁の内壁するE群の皿であるが、182同様内外面体部に芙蓉手の文様構成を持つものである。内底の文様も182同様の花卉樹石文で、蛇のような昆虫が飛んでいる。外底には二重圏線内に「長命富貴」銘が見られる。203は黒釉の瓶で、158とまったく同様のものである。火中して釉の表面に細かい気泡が生じている。204~207は土師皿である。204は口縁部が外に大きく開く器形の中皿で、亜白色土化した段階のものである。型押しによると見え、外面体部に細かい縦縞状の皺が認められ、外底には押し潰された粘土細粒が付着する。205は褐色系の小皿である。やや砂気のない胎土で、黄灰褐色を呈す。外面口縁部を内方に押ナデする。206・207は16世紀代通有の在地産小皿である。207は外底にタールが付着している。208は土師質の焼塩壺の蓋と思えるものである。従来より根来寺においては、焼塩壺の蓋と覚しきものは時々出土するが、身の出土は皆無である。



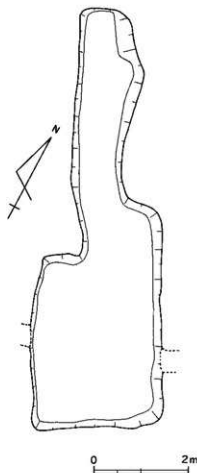
第43図 SX-07遺物実測図

SX-08 (第44図、図版17a)

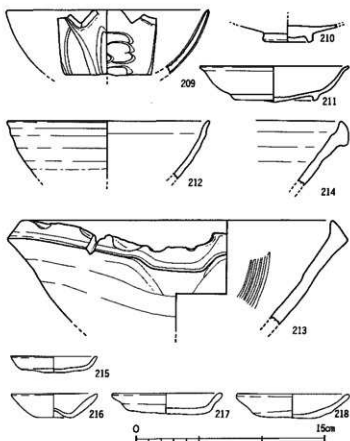
地下式倉庫とは言い難いが、ここでは周囲の状況から判断して地下式倉庫としての扱いをして
おきたい。というのは、SX-07とSX-09に隣接し、これらと同一方向の軸を持ち、南端の位
置もSX-09と同位置を呈する。全体の大きさは南北長8.9m、東西長2.8mを測る。残存の深さは
65~75cmである。形状は逆「L」字状を呈し、進入部は部屋部の片側に付く。埋土は焼土が認め
られず、灰褐色砂質土の単一層である。焼面は南の内壁の一部と床面の数箇所で確認できた。

SX-08出土の遺物 (第45図、図版73)

209は竜泉窯系B2類の碗である。灰白色の胎土に、草緑色で透明度の低い釉が厚く掛かる。
210・211は白磁である。210はD群の皿である。胎土は磁質で、黄灰白色を呈す。211はE群の通
常の端反皿である。212は瀬戸美濃窯の灰釉碗である。口縁端部は丸みを帯びる。灰白色の堅緻
な胎土で、釉は灰緑色を呈す。外面体部下半を露胎で残す。213は備前窯の播鉢である。口縁部
が少し上方に拡張する。胎土は砂粒を多く含んで粗く、暗赤褐色を呈す。外面口縁下に重焼の痕
跡を残す。214は東播系須恵質片口である。口縁部は124より更に肥大化している。215~218は
土師皿である。215は白土器の小皿、216は褐色系ヘソ皿である。
217・218は16世紀代通有の在地産小皿である。



第44図 SX-08実測図



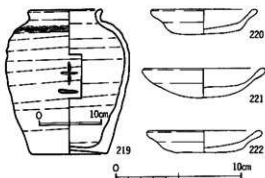
第45図 SX-08遺物実測図

SX-09 (第47図、図版23a)

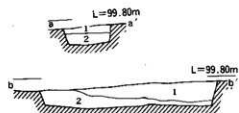
SX-08の西でこれに接するように検出した。この地下式倉庫の形状は羽子板状を呈し、進入路が部屋部の北壁中央部に接続する。部屋部の規模は一辺3.8mの正方形を呈する。残存の深さは約45cmを測る。殆どの壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁はやや緩やかな傾斜を持つ。また床面は凹凸が激しく他の地下式倉庫と様相を異にする。進入路は長さ4.5m、幅1.2mを測る。残存の深さは部屋部と同じであり、やや入口の方が浅くスロープ状を呈する。埋土はSX-08と同様2層に分層することができる。上層は茶褐色砂質土で径1cm程度の砂利が多量に入る。下層は灰褐色砂質土である。この遺構の部屋部と進入路の界で、大きな礎石が進入路を閉塞している様な状態で検出された。これはSX-07内でも検出した礎石と根石の状況や大きさが同様なことから一連のもので、これらの地下式倉庫とは時期の違う礎石建物と考えられる。SX-08と09は埋土が同一で、内壁もあまり焼けておらず南壁の面が揃っているという諸状況により、SX-08と09は一つのものの可能性も考えられる。

SX-09 出土の遺物(第46図、図版74)

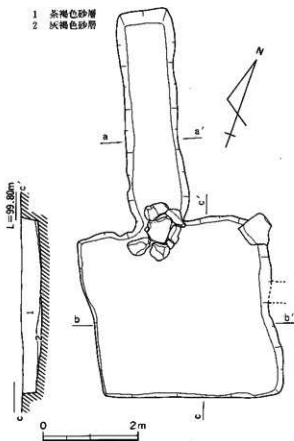
219は備前甕の壺である。口縁部はわずかに外反気味に引上げ、端部で心持ち肥厚する。肩部には襷描きの波状文が巡る。内外口縁部から肩部に掛けてヨコナデし、外面体部は粘土紐巻上痕を残したままである。胎土は砂粒を含んでやや粗い灰褐色で、器表は暗茶褐色を呈す。外面体部中位に篋描きによる162同様の「十一」の陰刻が見られる。220~222は通有の在地産土師小皿である。器形、調整等は同じであるが、胎土は数種類あり、220は黄褐色、221は橙褐色、222は灰褐色を呈す。



第46図 SX-09遺物実測図



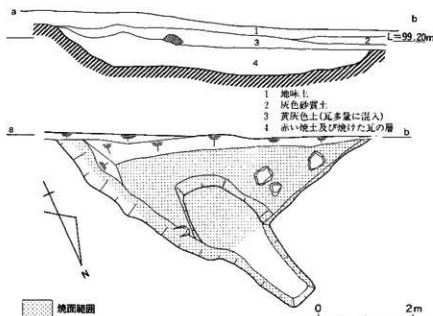
- 1 茶褐色砂層
- 2 灰褐色砂層



第47図 SX-09実測図

SX-10 (第48図、図版22a)

この遺構の南は調査区外のため、進入部と部屋部の一部を検出したに留まった。全体の規模は南北長 6.2m以上、東西長4.08m以上、残存の深さは0.6~1.2mを測る。進入部は緩やかなスロープ状を呈し、長さ約1.65m、幅0.7~1.10mを測る。底は堅く締まり部屋の入口付近まで続く。内壁は進入路の先端を除いて全て赤く焼き締まっている。埋土は単一層で焼土と焼けた瓦が入り混じっていた。床面直上に厚さ1cm程度の炭層を検出した。

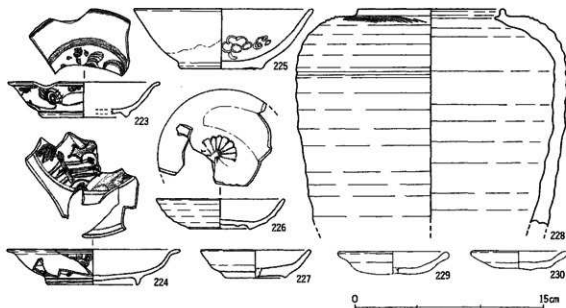


第48図 SX-10実測図

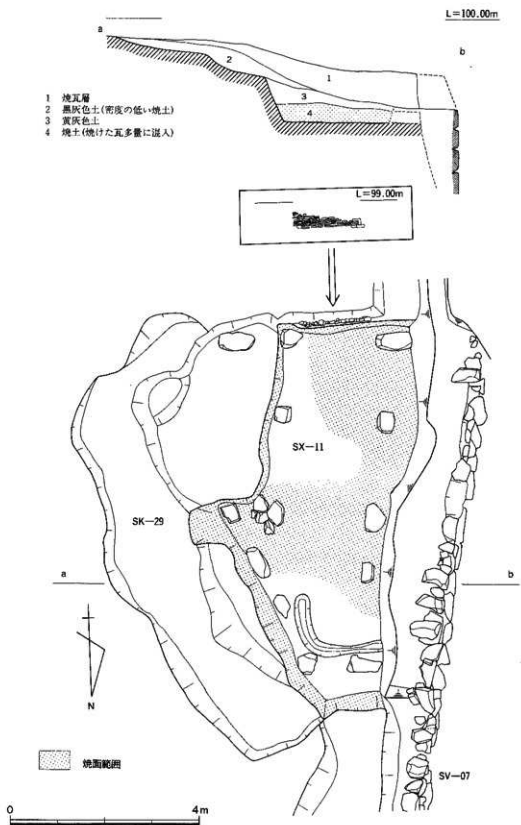
SX-10 出土の遺物 (第49図、図版73・74)

223・224は染付端反皿である。223はB1群で、224はB2群である。225はベトナム製の白磁牡丹文碗である。平高台で体部が直線的に開く。胎土は灰黄色で陶質に近い。釉はかすかに灰緑味を帯び、体部下半以下を露胎で残す。内面体部に型押し牡丹文の浮文が見られる。226~227は瀬戸美濃

窯の灰釉皿である。228は備前窯の水屋甕である。口縁が蓋受状になって無頸化し、全体に小型化した段階のものである。外面体部は粘土紐巻上痕を残す。229・230は通有の土師小皿である。



第49図 SX-10遺物実測図



第50図 SX-11 SK-29実測図

SX-11 (第50図、図版21a・b)

丘陵部A地区の最西端で検出した。西側はSV-07によって壊されている。検出した箇所は部屋の一部だけであり、進入部は不明である。部屋部の規模は南北長約8.30m、東西長3.20m以上を測る。残存の深さは約30～90cmを測る。これの東壁中央部で、一ヶ所突出した箇所が確認されたが、進入口かどうか定かではない。これもまた他の倉庫同様内壁が全て焼け、床面も全面ではないが焼けた範囲を一部確認した。南壁には僅かな段が付き、その上で高さ35cm程度の瓦積みを検出した。これは丸瓦と平瓦を同じ程度の大きさに割って積み上げていた。床面には礎石が内壁に沿うような状況で検出された。おそらく東柱を支えたものだと考えられる。東西は1間以上(間尺約2.1m以上)、南北は3間(西からの間尺1.72m・2.06m・3.16m)とバラツキが認められる。

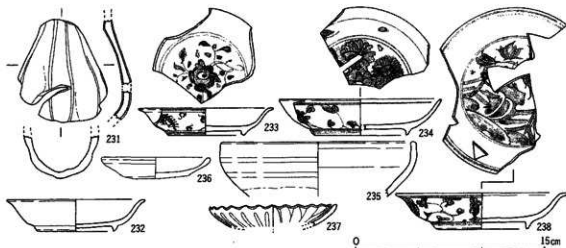
SK-29 (第50図、図版23b)

検出した場所はSX-11の上面で検出した。SK-29の埋土を除去後SX-11を検出した。蜜柑畑の耕土除去後検出された。この遺構もまた西はSV-07により壊されている。形状は不定形を呈する。規模は南北長9.6m、東西長7.2m以上を測る。深さは約55cmを測る。西への緩やかな傾斜を持ち、東肩は2段に段づく。埋土は2層に分層され、上層は焼けた瓦でびっしり覆われており、これは復興時に掻き込まれたものと考えられる。下層は焼土混じりの黄灰色土であった。

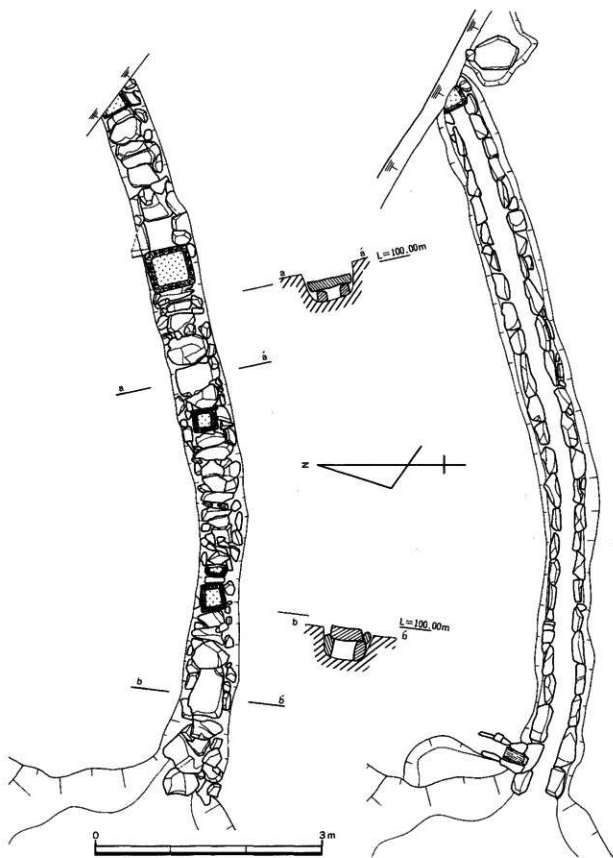
SX-11 SK-29出土の遺物 (第51図、図版74)

SX11 231は青磁の瓜型瓶。型押しで、器内を薄くするため内面体部を削る。胎土は灰味が強く、釉は灰緑色を呈す。232は白磁E群の端反皿。233・234は染付皿。233は内底に牡丹文を描いたB1群の端反皿、234はE群の内臂皿で、外面体部に花卉唐草文、内底に菊花樹石文を描く。235は瀬戸美濃窯白天目釉の鉢。内面から外面中位まで淡黄褐色の釉が掛かる。外面体部は褐釉との二重掛けである。胎土はやや粗く、黄白色を呈す。236は通有の在地産土師小皿である。

SK29 237は白磁E群の菊皿である。238はB2群の端反皿で、内面に楼閣山水文を描く。



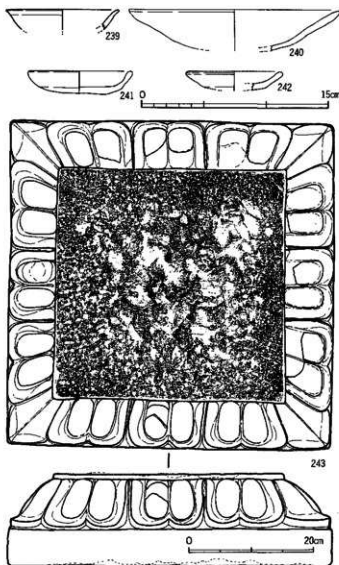
第51図 SX-11 SK-29遺物実測図
SX-11: 231-236, SK-29: 237・238



第52图 SD-22实测图

SD-22 (第52図、図版25b)

丘陵部A地区北西で検出した。東西方向に延びるやや弓形をした石組の暗渠排水溝である。東は調査区外、西はSV-07に壊され全容は不明である。平面図から想定して直線的に西へ延びるのではなく、やや北へ振るものと思われる。また、検出し得た東端と西端の底の比高差は約14cmを測り、西の方が低く、西の一段低くなった谷部A地区の塔頭の敷地の溝に流れ込んでいたものと考えられる。検出長は約9.20m、残存の深さは約35~40cmである。掘形の幅は約55~88cmと大差がある。しかし、割合にこの掘形内に接して、15~25cm大の小振りの砂岩が規則正しく側石として設置されている。掘形内の断面は浅い「U」字形を呈している。なお、底には敷石がない。蓋石の大きさは様々で、幅約12~60cmの石をなるべく平坦面に上に向け設置している。この中には宝篋印塔の台座の石を蓋石として転用したものもあり、検出した数は5個であった。これらの

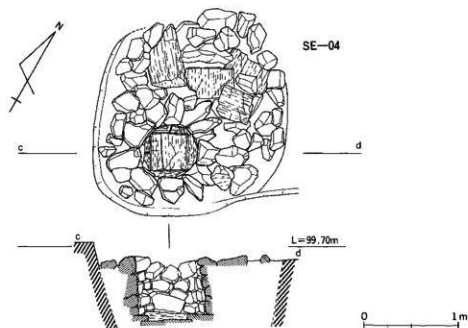
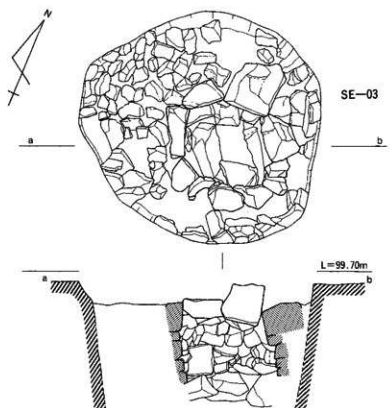


第53図 SD-22遺物実測図

転用の蓋は約2.1m毎に等間隔に埋設されていた。これには何か意味があるのだろうか。またこの溝の西側で、北から流れ込むと考えられる小溝の注ぎ口も検出した。小振りの側石の間に丸瓦を逆にし、注ぎ口と成す簡単な施設である。

SD-22出土の遺物(第53図)

239は白磁E群の端反皿である。胎土は精良で釉には光沢がある。240~242は土師皿である。240は垂白色土化するが、精良な淡褐色の胎土をもつ大皿で、口縁部が外方に大きく開く。口縁部の断面は菱形を呈す。内面体部から外面口縁部直下までヨコナデし、外面体部には指頭痕が残る。241・242は16世紀代に通有の在地産小皿である。243は宝篋印塔の反花座である。和泉砂岩製で、根来寺出土のものでは最大級に属する。複弁の蓮花が各面3単位彫刻されている。



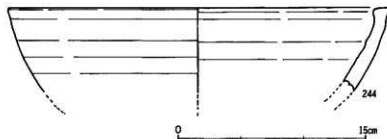
第54図 SE-03・04実測図

SE-03・04 (第54図、図版24a・b)

丘陵部A地区のほぼ中央部で検出した2基の小振りの井戸である。双方とも石積みである。これらの井戸はSX-07の南辺に平行して検出された。井戸間の距離は約3.2mと隣接している。SE-03は内径約85cm、深さ約1.1mを測る。井戸側部分の積石は、やや袋状ではあるが、ほぼ円筒形に積み、最上部には、この井戸に使用している石材の中では割合大きい約45～50cm大の石を積んでいる。これは、井桁との関連性を窺わせるものである。底の水溜の部分もまた上部と同様、地山直上に大きめの石を平行四辺形に4個一段で配している。その深さは約30cmを測る。掘形の形状は楕円形を呈し、直径2.5mを測る。裏込めとして、10～30cm大の込石を周囲に入れている。SE-04の平面形は円形を呈し、内径約60cmを測るが、底部では内径70cmを測り、やや袋状を呈する。深さは70cmである。SE-03よりやや小振りである。側面の積石は10～25cm大の砂岩を4～5段積んで井戸側を成している。また、水溜部と呼称するには浅すぎるが、その深さは約10cmを測る。この部分は全て緑泥片岩の割石で構成されていた。それは、底に2枚の板状の石を敷き、その上に一辺40cmの正方形に板石を組み合わせたものであった。なお、掘形は南北にやや長い隅丸方形を呈し、直径は2.0～2.2mを測る。裏込めとしてSE-03同様込石を詰め込んでおり、北の一部分は4枚の緑泥片岩を不規則に敷き平らな箇所を造っている。これはこの井戸利用のための足場とも考えられる。先に「SX-11」、「SD-22」の項でも述べたように、天正の兵火に係る時期のこの高所(丘陵部)の西限はSV-07により壊され、北限、南限も道路幅の調査という制約状況確認することが出来なかった。しかし、地形から判断すると、2基の井戸の位置はこの高所の地下式倉庫群が建ち並ぶ特別な意味合いを持つ場所の、ほぼ中央に位置すると思われる。なお、この井戸の南東はとりわけ特別な遺構も検出されず、近世の溝(SD-19・20)が検出されたにすぎなかった。故に天正の兵火に係る時期にはこれらの施設(地下式倉庫)に関わる広場的な空間として利用されていたと考えられる。2基の井戸ともに小振りで、なおかつ浅いことから湧水ではなく、飲料水や手洗いのための一種の貯水施設として利用されていたとも考えられる。

SE-03出土の遺物 (第55図)

244は備前窯の鉢である。体部は内彎気味に立上り、口縁部を心持ち内外に引出し、水平な上端面を作る。内外面体部はかすかに粘土紐の巻上げ痕を残し、内外口縁部、口縁端面には丁寧な



第55図 SE-03遺物実測図

ヨコナデを施す。胎土は細かい砂粒を多く含んでやや粗いが堅く、赤褐色を呈す。器表は内面が暗赤褐色、外面が赤褐色で、口縁上端面から内面体部に胡麻状の灰が少量散る。

SD-19 (第39図)

耕作土除去後すぐに検出した。調査区中央部に東西に貫く暗渠排水溝である。この中央には5～10cm大の河原石がぎっしり詰め込まれていた。東側で直角に南に折れ曲がる。また西側では、SX-08・09を切っている。検出総長は約32mを測り、幅は約40cm、深さは20～25cmを測る。遺物は中国製の青磁や中世の国産陶器の破片が数点出土している。しかし、近世の国産陶器の破片も一点出土していることから、江戸期(復興期)の再建に関わる排水施設だと考えられる。

SD-20 (第39図)

やや弓なりに東西に延びる素掘りの溝である。検出長17m、幅25～60cm、深さ約5cmを測る。底の高さから判断して西流していたものと思われる。この溝のニヶ所で側石の痕跡らしき残骸を検出した。もともとは石組溝であったと考えられる。出土遺物は中国製青磁片が一片だけである。

SD-21 (第39図)

この地区の東側を限る石垣(SV-06)に取り付いていたと考えられる石組みの溝である。側石の残存は一段分である。長さは2.0m以上を測り、西から東へ傾斜している。外径は50cmで、この内、流水幅は15～20cmを測る。東は調査区外のためその全容は不明であるが、おそらく、この敷地から東隣りの一段低い敷地の溝に流れ込んでいたものと推察される。西側の流水口はどの時期かは判断出来ないが、川原石1個をもって閉塞していた。出土遺物は皆無であった。

SK-28 (第39図)

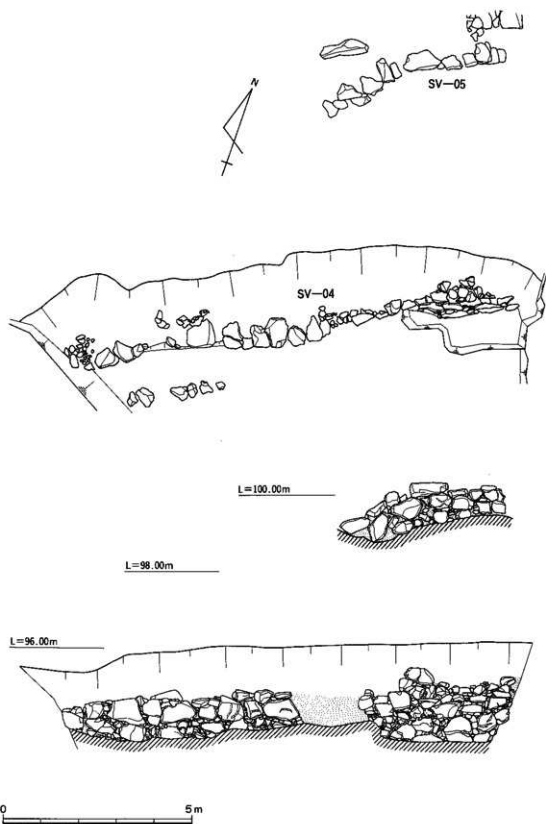
SX-07の東に接して検出された不定形の土坑である。長径約5.3m、短径約3.0mを測る。残存の深さは10～20cmである。中央部に深さ約10cm程度の楕円形の凹みがあった。埋土は瓦片を多量に混入する褐色土で、底の深い箇所は焼土混じりの灰色粘土である。この遺構の重複関係からSX-07より新しく、SD-19よりは古いということが言える。出土した瓦の殆どは焼けており、おそらく江戸期の復興時の火事場整理的な意味合いを持つゴミ穴であると考えられる。

SV-04 (第56図、図版16a)

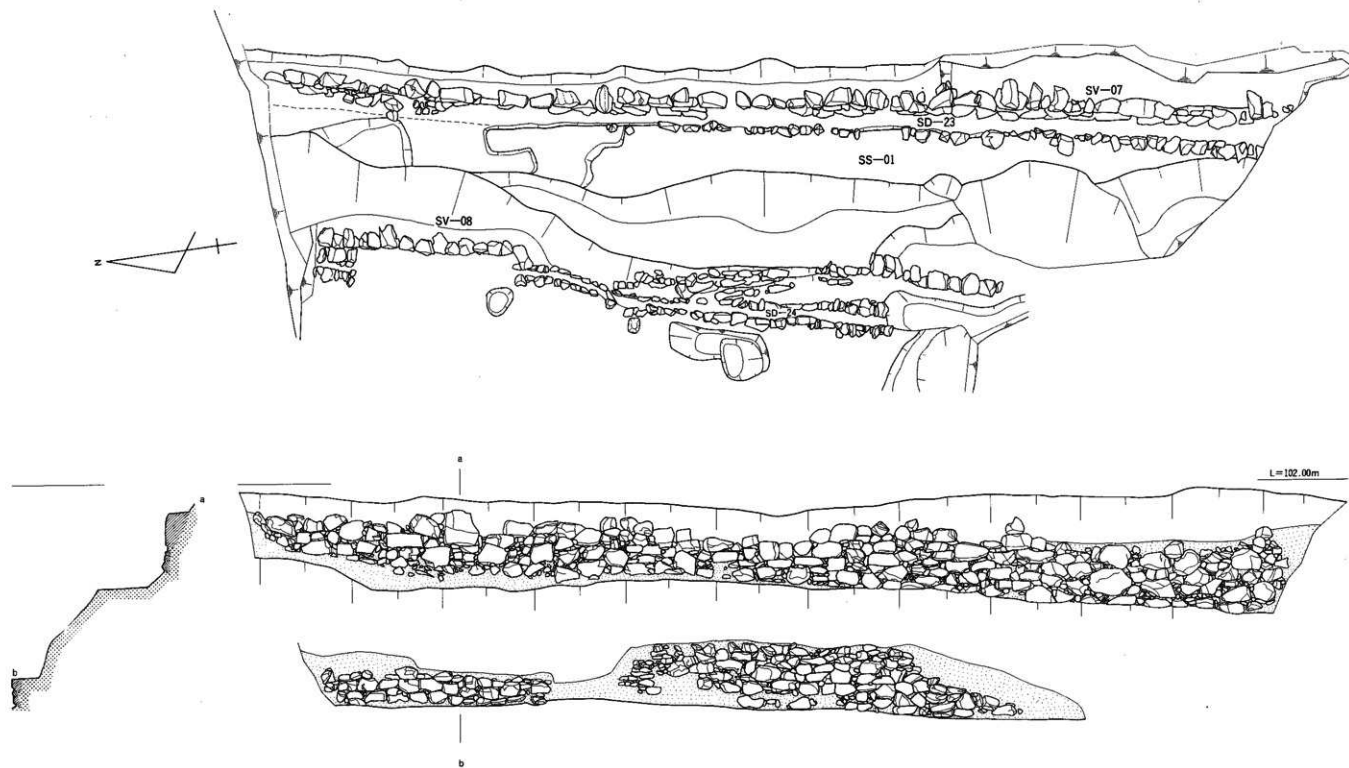
盆地部と丘陵部を区画する東西方向の石垣である。発掘時の状況は斜面となり、竹藪であった。当時の高さは明らかでないが、検出長は12m、遺存高は約1～2mを測る。最も遺りの良い所で4段の石積みであった。これは地山直上に60～80cm大の割合大きな石を置き、この間に10～30cm大の小さな石を詰めている。裏込めは込石と黄色土が混ざり合ったような状態であった。この南側3mの地点でSV-04と同方向のSV-03を検出した。この間は塔頭の道と考えられる。

SV-05 (第56図、16b)

丘陵部A地区の東南隅を区画するコーナー部である。検出長は東西4.5m、遺存が最も良い所では高さ1.10mを測り、4段である。西側半分は石積みが崩れ崩壊す前である。石の間の詰石も殆ど外れている。当初は基底部の石の大きさから推測するに相当堅固なものであったと思われる。



第56図 盆地部C地区と丘陵部A地区を界するSV-04・05



第57図 谷部A地区と丘陵部A地区を界するSV-07・08

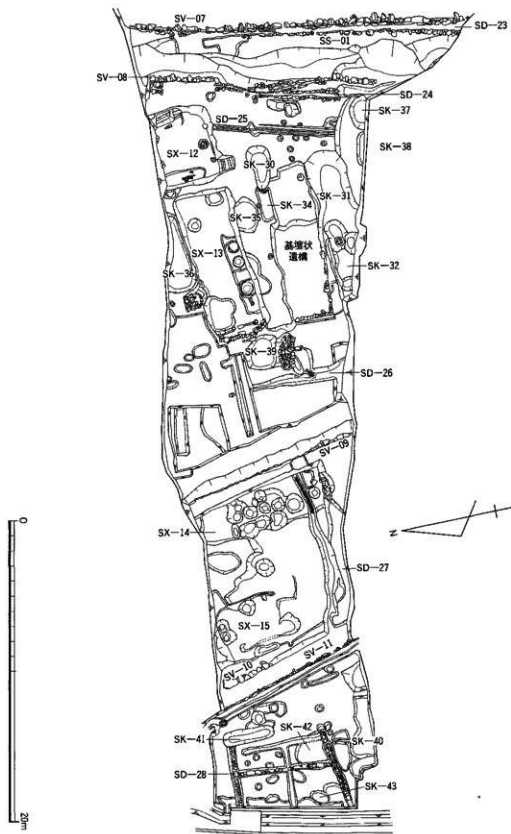
第4節 谷部の遺構と遺物

谷部の調査

谷部のこの地区設定は調査年度が異なることと、秀吉軍が攻め込んで来たと言われている現町道桃板線がこの地区の中央部に位置することも相俟って、調査の便宜上、この道を南北の軸として東と西に地区を分けた。東は丘陵部A地区の西端までを谷部A地区、西は蓮華谷川までを谷部B地区と呼称する。現地形はA地区からB地区へ向かうに従い低くなり、東から西に直線的に下がっている。このA・B両地区ともに発掘調査時の現状は水田あるいは柑橘畑であった。遺構検出は耕作土を重機で除去し、後は人力で掘り進んだ。A地区は後世の削平が著しく、耕作土除去後すぐに遺構面が検出できた箇所が大半であった。また、B地区は谷の最も低い地点であるため、かなりの整地作業を施し、高い石垣を築いていた。遺構の埋土の大部分は焼土あるいは焼土混じりの土で覆われていた。これは、近世に天正の兵火に係る時期の焼土を掻き込み、整地したものと考えられる。その一例として、谷部A地区のSX-15出土の遺物と、B地区のSX-16出土の遺物が接合したことがこれを裏付けている。谷部A・B両地区の遺構の様相としては、A地区から検出したのは丘陵部A地区の地下式倉庫とは若干形態の異なる地下式倉庫であるが、この狭い範囲で4基も検出したことから丘陵部A地区と一連の地下式倉庫群域と考えられるのではないだろうか。またB地区は、谷の深い箇所を埋め、大規模な石垣を築いており、古絵図によると根来寺の坊院の中でも絶大なる勢力を持つ泉蔵坊の推定地に当たると考えられる。この調査で谷部と呼称している地区は、昭和55年度に調査した急峻な谷筋とは異なり根来寺の中心部に近く、瓦の出土量や検出遺構の規模の違いで谷間の坊院の様相を一変するものである。

(1) 谷部A地区の概要(第58図)

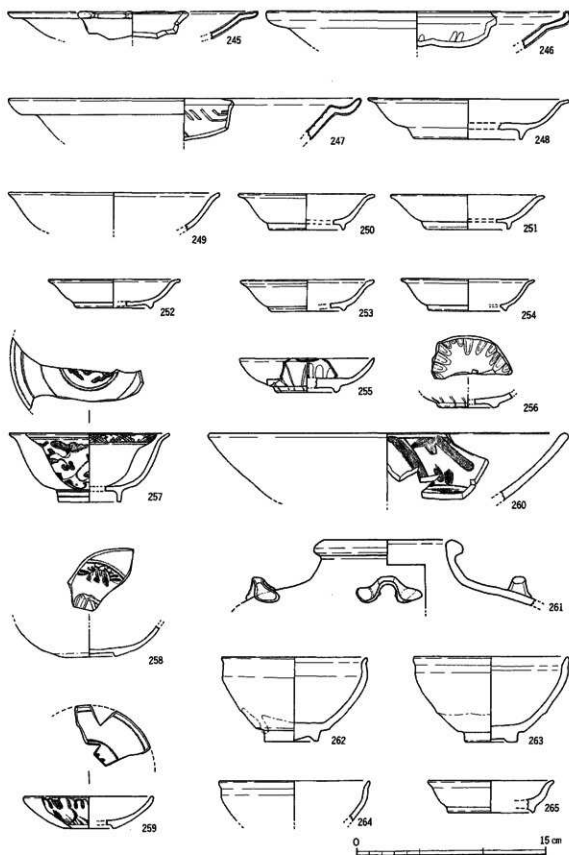
この地区は、近世の根来寺が復興する過程において築かれた石垣で3区画に区切られ、西から東へ向かうにつれ、高くなっている。遺構の説明上、上段、中段、下段と仮称する。この3区画の遺構検出面の標高は約91.40～94.60mを測る範囲内にある。またこの3区画は東西方向で検討する限り、近世には若干西方向に敷地を広げていることが判明した。遺構は近世と天正の兵火に係る時期の2時期を検出した。近世の遺構は全区画に渡り遺構密度が非常に希薄であり、その直下の天正の兵火に係る時期の遺構が殆どであった。しかし、前述の如く、後世の水田化のため削平が著しく、遺構の遺存状況は良いとはいえない。結果、遺構の検出面は水田の耕作土除去後すぐであった。この地区で取り立てて記述すべき遺構は丘陵部A地区と同様、地下式倉庫である。ただ、遺存状況が悪いため、これに伴う上屋構造に関わる遺構の痕跡を確認できなかった。調査範囲が道路幅という制約上、近世の各塔頭の東限、西限は確認できたが、北限、南限については未確認に留まった。また、一部分ではあるが天正の兵火に係る時期の東限(石垣)も確認した。



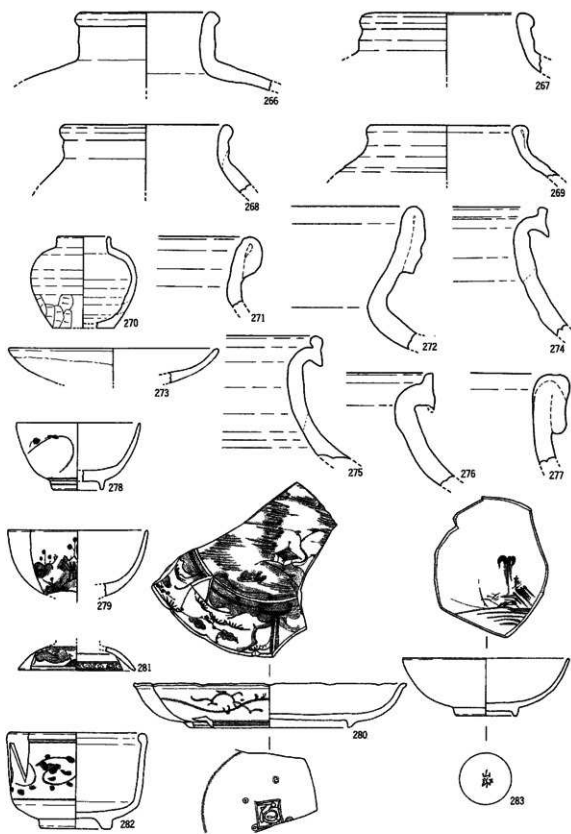
第58図 谷部A地区遺構全体図

谷部A地区包含層出土の遺物（第59～61図、図版74～76）

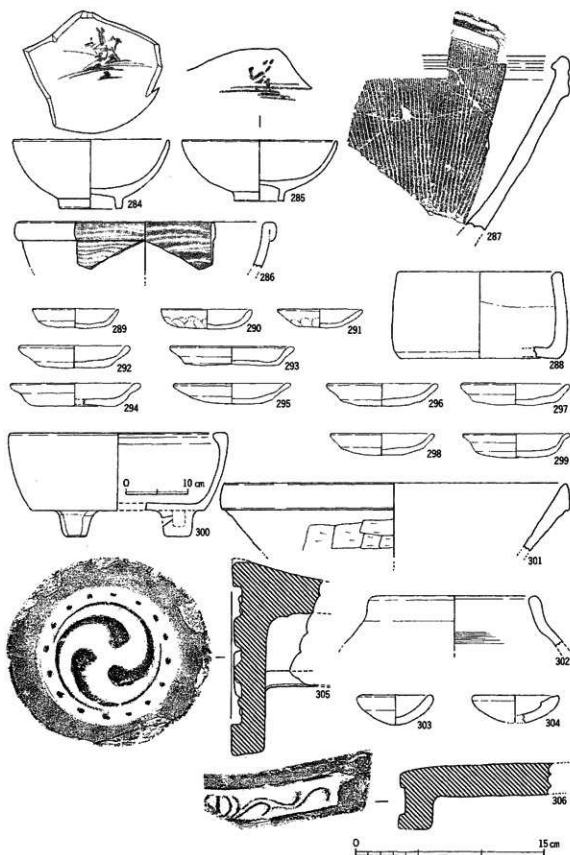
245～247は青磁盤である。245は稜花盤で、口縁部を水平近くまで寝かす。246・247は水平近くまで寝かせた口縁部を端部で上方に引上げた器形である。248～256は白磁皿E群である。248～254は通常の端反皿である。255・256は菊皿で、233などのタイプである。257～260は染付である。257は端反碗であるが、E群の延長線上にある。外面体部に蓮華唐草文を描き、腰部には波濤文が巡る。内面口縁部には四方棒文、底部には唐草文が見られる。258・259はC群の皿である。258は外面無文で、内底に花鳥文を描き、施釉後内底中央部に鉄分の多い土による型押魚形を貼付している。260は呉須手の盤である。華南系と呼ばれるものに属する。261は黒釉四耳壺である。釉を口縁内面まで掛けた後、口縁上端部の釉をフキ取り、内面口縁から肩部に掛けては釉を雑に刷毛塗する。262～265は瀬戸美濃窯の製品である。262～264は褐釉天目茶碗である。262は体部が口縁端部近くまで厚く、底部が厚く安定した器形である。露胎部には化粧掛けする。263は口縁の屈曲が少なく、体部が丸みを帯び、形が整っている。化粧掛けは行われない。264はシャープな口縁端部にやや丸みが出た段階のもの。265は灰釉皿である。口縁が外反し、体部の立上りは長い。266～273は備前窯のものである。266～270は壺である。266・267は玉縁状の口縁をもち、肩が張った器形の大型品で、胎土も堅緻である。268は玉縁状の口縁をもつが撫肩の器形で、269の口縁はもはや玉縁とは言い難い。270は片口になると思われる小壺。271・272は大甕で、272は口縁外面に波状の段が付く。273は盤である。内外面とも丁寧にヨコナデされている。胎土は灰赤褐色を呈し、堅緻である。274～277は常滑窯の甕で、根来寺に搬入された常滑窯甕の最終段階のものである。278～281は肥前窯の染付である。278・279は外面体部に草花文を描いた碗で、278は147と同一タイプ。280は稜花大皿である。外底には角福銘をもち、5か所のハリ押え痕を残す。281は蓋である。外面体部に飛馬文を描く。282は陶胎染付の碗、もしくは香炉である。283～286は肥前窯の陶器である。283～285は灰釉碗である。京焼写しで、283の外底には「山弥下」の陰刻スタンプが見られる。286は刷毛目の灰釉片口である。287は堺産の播鉢と思われるものである。288は産地不明の陶器である。黄褐色でやや軟質の胎土で、内面体部上半から口縁端面に掛けてタールが付着する。289～299は土師皿である。289～291は粘土円盤を肘などで押して成型し、口縁部に強いヨコナデを施したと考えられる褐色系小皿である。黄白褐色の精良な胎土をもつ。292～299は通有の在地産皿で、292・293などの中皿は16世紀前半代の早い時期に消滅する。300～304は瓦質・土師質土器である。300は瓦質火鉢で、301は46などと同様の瓦質こね鉢である。302は土師質壺である。火中して胎土が陶質化する。303・304は埴埴の類である。粗い砂粒を多量に含んだ灰黒色の胎土である。303の内面には1m大に細粒化した金が付着し、304にはガラス質の物質が付着している。305は三巴文の軒丸瓦で、巴は頭部が肥大して丸くなり、尾は短い。306は唐草文の軒平瓦である。唐草は彫りが浅く線状で、周縁端がやや広い。



第59图 谷部A地区包含層遺物実測図1



第60图 谷部A地区包含層遺物実測図2

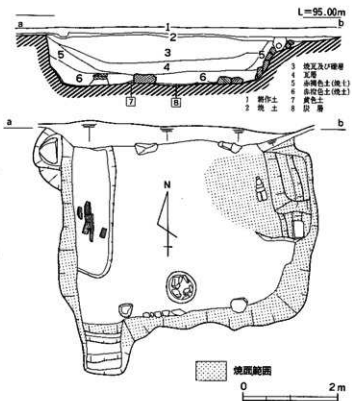


第61图 谷部A地区包含層遺物実測図3

SX-12 (第62図、図版28a・b)

谷部A地区北西隅で検出した地下式倉庫である。この北側は調査区外のため確認できなかった。部屋部の平面形は方形を呈し、正方形か長方形かは定かでない。検出は耕土直下の厚さ8~10cmの焼土層除去後であった。地山掘り抜きのものである。この地下式倉庫は部屋部と階段状の進入部から構成され、方位は殆ど真北であった。部屋部の規模は東西長約5.35m、南北長4.0m以上を測る。残存の深さは約0.8~1.0mを測る。この深さに幅があるのは、床面は水平であるが東側の削平度が西側に比べて著しいためである。この地下式倉庫の検出した範囲内で、出入りのための昇降施設と考えられる所を4箇所確認した。その形状の内訳は階段状の施設が2箇所、1段だけ掘り凹めて段を成している施設が2箇所、それは東壁に2箇所、西壁に1箇所、南壁に1箇所検出した。東壁部の階段は内壁の中に地山を削り出して造られていた。それは、比高差約10~15cm程度の段を2段造り出し、床面には踏石代わりに一石五輪塔を転用したものであった。その段部の幅は約1.0mで、1段分の奥行きは約20cmを測る。また、この階段の西端には既に崩壊はしているものの、側石が置かれていた痕跡が残る。この階段の南側に隣接して、平坦に削り出した部分に長方形の平らな石を据え付けて踏石としていた。次に、西壁の北端には約60cm外へ突出したテラス状の凹みが施され、そこにも東壁同様、平らな石を踏石として使用した箇所が検出された。南壁に設けられた階段状の昇降施設は、3段から成っている。これは幅0.8~1.0mと、東壁のものと同規模である。

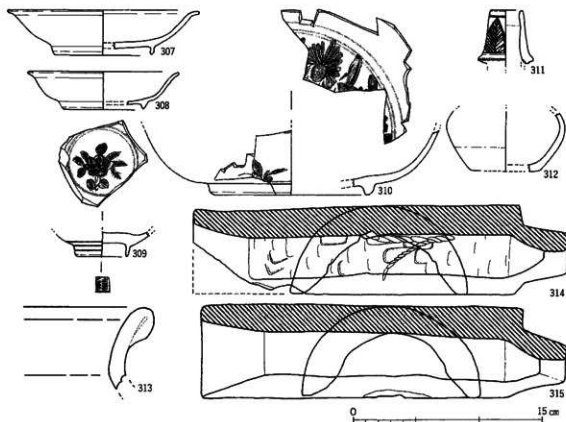
床面には4個の束石を配している。また内壁は0.5~1cm程度の厚さで全て焼き締まっていた。東側では、階段部分から床面の一部にかけて焼けているのが確認できた。また西側の壁に沿って長さ2.8m以上、幅80cm、深さ約15~20cmの掘り込みを検出したが、この倉庫ではなく、これの前身の遺構に伴うものと考えられる。埋土は焼けた瓦と焼土で覆われ、床面直上は厚さ1~3cmの炭層で覆われていた。この様に、丘陵部A地区で検出した地下式倉庫と対比してみると、進入部については様相を異にするが、部屋部については同様である。



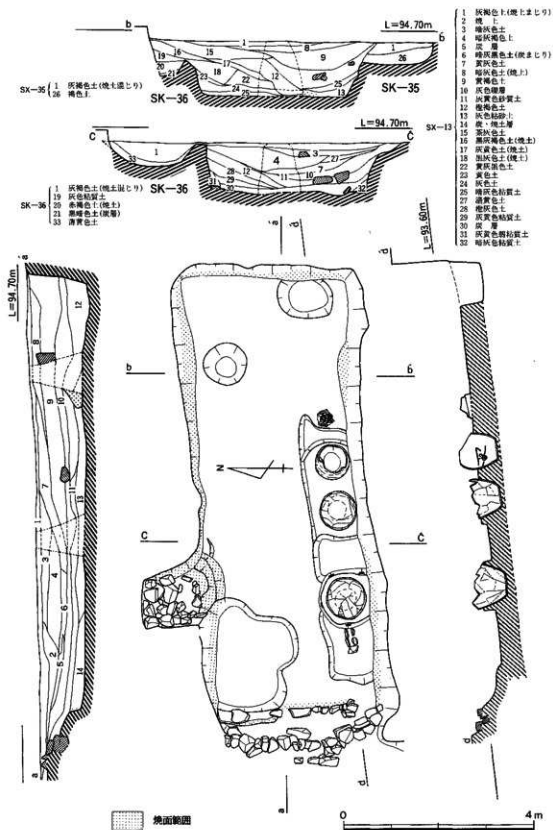
第62図 SX-12実測図

SX-12出土の遺物（第63図、図版76）

307・308 は白磁群の端反皿である。307は口径15cmを超える大型品である。純白に近い精良な胎土をもち、釉は光沢があり、畳付の釉のケズリも丁寧である。308はやや灰味を帯びた胎土で、釉には微細な黒斑が浮かび光沢がない。畳付の釉のケズリは比較的丁寧で、露胎部との境は黄褐色に発色する。309～311は染付である。309はE群の饅頭心型碗である。内底に花卉文を描き、外底には「富貴佳器」銘が見られる。呉須の発色は鮮やかである。310は呉須手の盤である。この種の、華南系といわれるものとしては丁寧な牡丹文が、内底及び外面体部に描かれている。胎土は灰味が強く、呉須も灰青色気味に発色する。畳付の釉のフキ取りは比較的丁寧で、珪砂の付着もあまり多くない。311は扁壺や水注などの頸部と思われるものである。蕉葉文が巡る。胎土は鉄などの微細粒子を含んでわずかに灰味を帯び、蕉葉文の呉須の発色は良好であるが、凸帯上に巡らせた圈線は鉄が浮いて暗褐色に発色する。内面口縁直下以下を露胎で残す。312は瀬戸美濃窯の褐釉茶入で、体部が丸く肩があまり張らない器形である。胎土は砂気が多く、灰黄色を呈す、外面体部下半を露胎で残し、内面全体に施釉される。313は備前窯の大甕で、口縁部がやや扁平になる。胎土は砂粒を含むが堅緻で、器表は暗灰色を呈す。外面頸部に細かい胡麻状の灰を被る。314・315は九瓦。共に側端面、木口面の面取角が深い。314の凹面には布袋吊下げの紐痕を残す。



第63図 SX-12遺物実測図



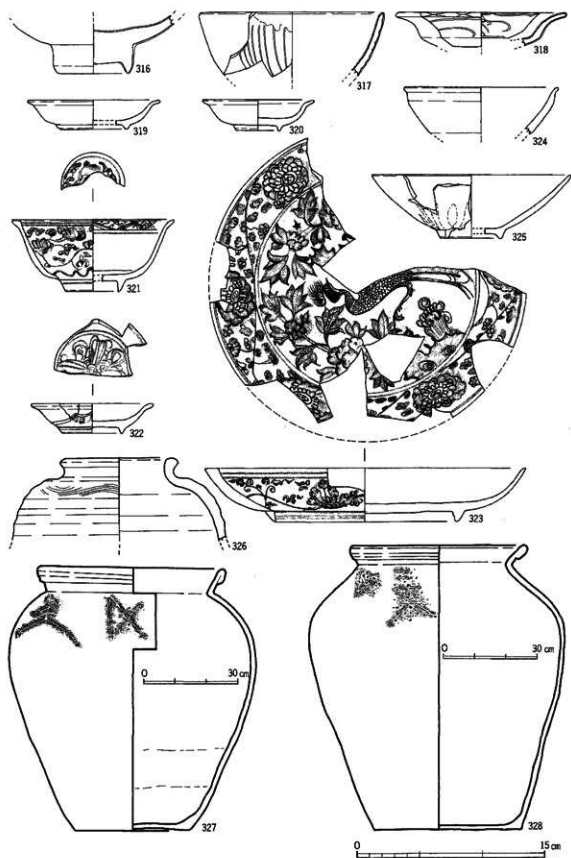
第64図 SX-13実測図

SX-13 (第64図、図版29a)

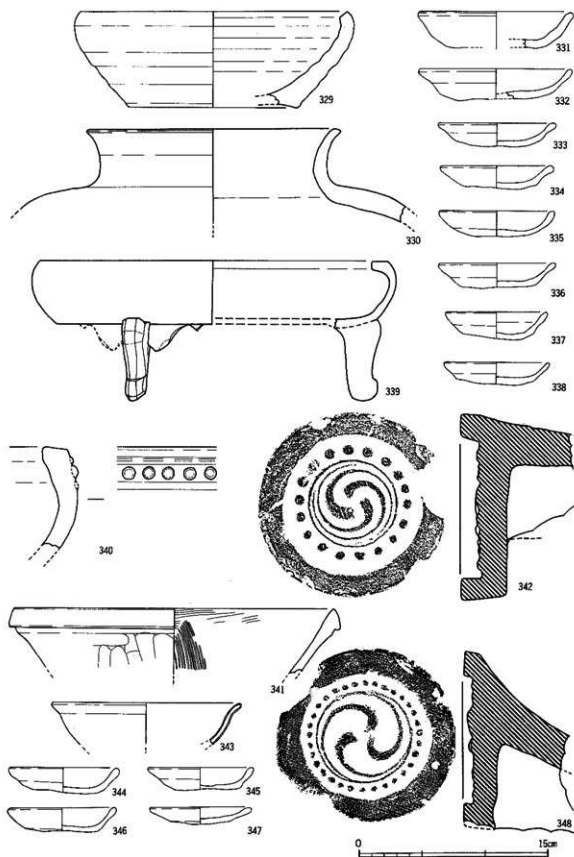
これも地山掘り抜きの地下式倉庫である。平面形は長方形を呈する。規模は東西長約10.30m、南北長約4.0mを測る。残存の深さは最も良好な所で、床面から約1.30mを測る。昇降施設は石組みの階段が北壁と西壁に各一カ所ずつ設けられていた。西側の壁の上部は石列で築かれ、壁の中央やや南寄りの部分で階段の形状を留めていた。また、北壁に取り付く階段はやや側石が崩れはしているものの、はっきりそれと判る形状を保っていた。それは壁から長さ1.20m、幅1.10～1.40m外へ突出する様に地山を掘り込み、そこへ約30cm大の砂岩で3段の石段と側石を築いていた。さらにその下に高さ約30cm、幅約1.2mの表面が赤く焼き締まった土饅頭を半載した様な踏み台を設けている。また、部屋内には南壁に沿って備前焼の大甕が3個据え付けられていた。これらの甕はいずれも口縁部が欠損していた。この据付け方法は南壁に沿って東西に布掘を施し、そこに甕を設置し、間に土を入れて固定するといったものである。床面の中央部は通路と思われ、幅80cm程度で東西に堅く締まっている。床面中央に上部の板材を支える支柱が検出された。支柱はほぞ穴により十字に組まれている。壁は直立ぎみに立ち上がり、その表面に厚さ1～2cmの粘土あるいは漆喰を塗込め、その後意図的に赤く焼いたと思われる痕跡を、壁の低部で検出した。この地下式倉庫は1979年の大規模農道関連の発掘調査で検出した遺構と非常に酷似している。^(註8)

SX-13 出土の遺物 (第65～67図、図版76～78)

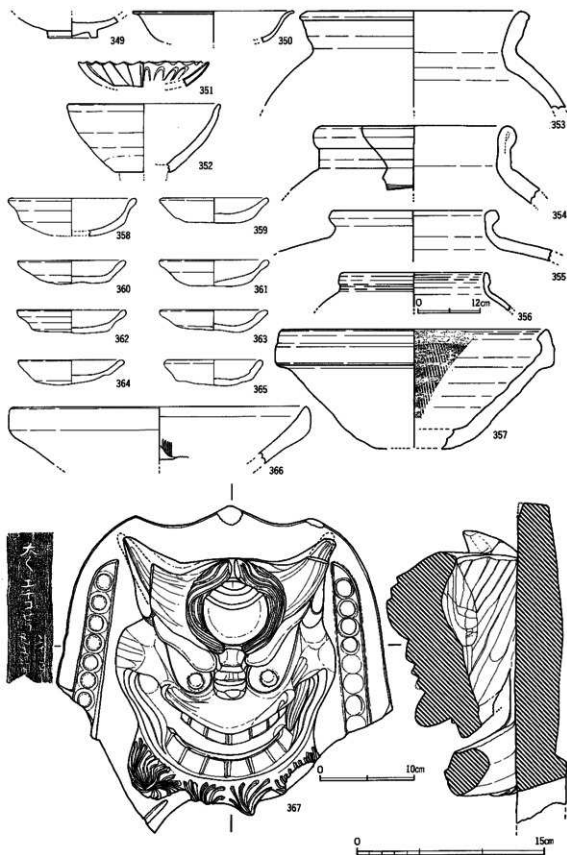
上層 316～318は青磁である。316は人形手の大型碗、317は竜泉窯系碗B4類、318は稜花瓶皿。319・320は白磁E群の端反皿である。320の外底には「十」字の捺痕が認められる。321～323は染付で、321は257と同一タイプの碗。322は皿B1群。323は孔雀牡丹文の盤で、呉須はやや灰味おぼれて発色する。324・325は瀬戸美濃窯のもので、325は灰釉碗。326～329は備前窯の製品である。大甕 327には「三石入」、328には「三入」の篋描銘がある。330は丹波窯の大型甕である。葉茶の容器として搬入されたと考えられる。331～338は土師皿である。331・332は在地産の中皿、他は16世紀代に通有の在地産小皿。339～341は瓦質土器で、339は火舎、340は火鉢、341はこね鉢である。342は軒丸瓦。周縁が高く、巴の尾部も長い、珠文は18個で、やや大きい。中層 343は竜泉窯系青磁D類の端反碗である。344～347は通有の在地産小皿である。348は鳥食である。三巴文で、周縁は低いが、巴の尾部は圈線に付く。珠文は32個で、小さく密である。下層 349～351は白磁である。349はD群の杯、350・351はE群の皿である。352は黒釉天目茶碗である。灰白色の非常に堅緻で精良な胎土である。釉の二重掛けにより口縁部は茶褐色に発色する。353～357は備前窯の製品で、353～355は大型甕、356は大甕、357は播鉢である。357は縦の櫛目と交差する斜めの櫛目が入る天正直前の時期のものである。358～365は通有の在地産土師皿である。358は中皿、359～365は小皿。366は瓦質こね鉢で、341などと同様のものである。367は鬼瓦である。側面に「大く(工) エチコせう(越後庄)□□」の篋描きの銘が見られる。



第65图 SX-13遺物実測図 1



第66図 SX-13遺物実測図2

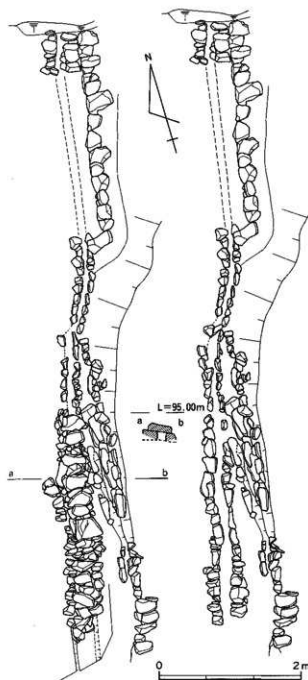


第67図 SX-13遺物実測図3

SV-07・08 (第57・68図)

SV-07は先に「SX-11」の項で述べた。SX-11を壊していることから近世の割石積の石垣と考えられ、丘陵部A地区西側を限っている。石材は砂岩であった。東西の長さは約24mを測り、石垣の最も遺存の良い所で5段分の石積みが確認された。高さは約1.50mを測る。この石垣は50~100cm 大の石を横積みしていた。詰石は5~15cm大の同石材のチップで、面を成す石間に隙

間の無い位に施されていた。裏込めの石は5~10cm大の砂岩の割石と焼土が混ざっていた。この石垣の西面を利用して、内径約30cm、深さ30cmの排水溝(SD-23)を造っている。もちろんこの溝も近世の遺構で、塔頭の敷地を巡るものと考えられる。SV-08はSV-07の西側下方3.5~3.8mに築かれている。南北長約1.5m以上、当時の高さは判らないが遺存の良好な箇所では6段分約1.40mを測る。裏込めは黄色土で石は確認されなかった。この石垣(SV-08)はSV-07の前身と考えられ、おそらく天正の兵火に係る時期の丘陵部と谷部を界する石垣であると推定される。すなわち、SX-11はこの石垣(SV-08)の手前まで存在していたと考えられる。殆ど崩壊しているSV-08に取り付くのが石組の溝(SD-24)である。10~20cm大の小振りの石で1~2段の側石を造り、40cm大の石で蓋をしていた。側石は北は2段横、南は1段で北から南へ流れていたと考えられる。流水幅は8~15cmを測り、北から南に向かうにつれ、狭くなっている。またSD-23の西でこれに沿う様に道路と考えられるフラットな面を検出した。かなり西側が崩壊されているものの、幅1.4m以上はあった。塔頭間を往来する道であると考えられる。

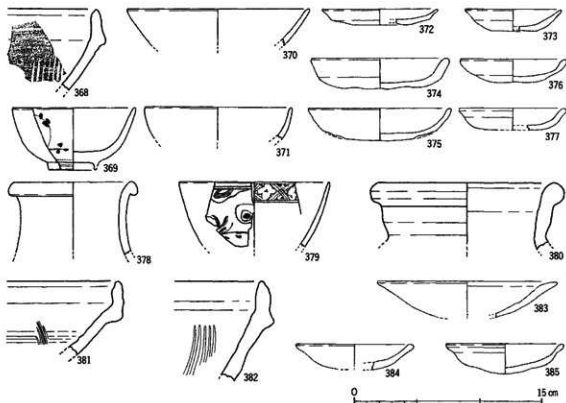


第68図 SD-24実測図

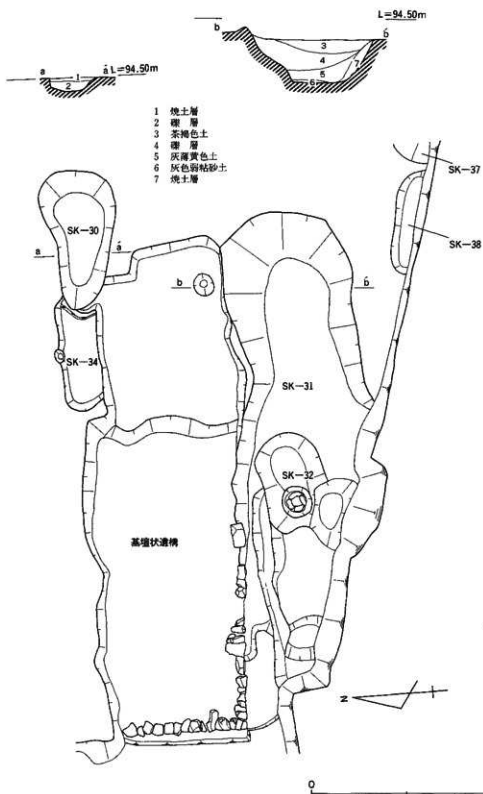
SD-24 SV-08裏込め出土の遺物 (第69図、図版78)

SD24 368 は備前窯の播鉢で、口縁部が上方に大きく拡張する。唇目は太く浅い。胎土は砂粒を含むが堅く、淡灰褐色を呈す。369は肥前窯の染付である。278などと同様の草花文を描く。呉須は灰味を帯びて発色する。畳付の露胎部全体に薄く珪砂が付着する。370・371は肥前窯の灰釉碗である。370は光沢がある桃褐色の釉の掛かる150などのタイプ、371は283などと同様の京焼写しである。黄白色の粗い胎土に艶のある釉が掛かり、細かい貫入が走る。372～377は土師皿である。372・373は白土器の小皿で、374・375は在地産中皿、376・377は通有の小皿である。

SV08 378 は白磁四耳壺で、出土は稀である。胎土は堅緻で精良であるが、灰味を帯びる。釉は透明度が高く光沢があり、灰味が強く発色する。379は染付で、饅頭心型の底部をもつE群の碗である。外面体部に簡単な草花文を描き、内面口縁部に四方棒文を巡らす。胎土は精良で、呉須の発色も鮮やかである。380～382は備前窯のものである。380は玉縁状の口縁を持つ大型壺である。胎土は多量の砂粒を含んで粗く、暗灰白色を呈す。外面に多量の灰を被る。381・382は播鉢である。381は上方に大きく拡張した口縁の外面に、凹線による波状の段が付く。胎土は砂粒が少なく精良で堅緻、暗灰白色を呈す。器表は赤褐色で、外面口縁直下に重焼の痕跡を残す。382は368と同程度の口縁の拡張を示す。胎土は砂粒を多く含んで粗く、器表共、暗灰色を呈す。383～385は土師皿で、383は亜白土色化した白色系大皿、384・385は通有の在地産小皿である。



第69図 SD-24 SV-08裏込め出土遺物
SD-24 : 368～377, SV-08 : 378～385



第70図 基壇状遺構 SK-31を中心とした図

基壇状遺構 (第70図、図版33a)

SX-13の南側で検出した。形状は長方形を呈し、規模は東西長5.0m、南北長2.3mを測る。これは地山を掘り込み、東、西、南に石積みを施し基壇状の側石を成していた。石積みの遺存高は30~55cmを測る。北面は石積みではなく地山を面とする。石積みの上部は、面が揃わず凹凸が著しい状況から削平されたことが窺える。コーナー部分は算木積みを施し、基壇内の盛土には版築した様子はなく、灰褐色土に砂岩片が混んでいた。上部は削平され遺構の性格は判らないが、西面がSX-13の西壁とほぼ直線上に並ぶことから、何らかの因果関係があるものと思われる。この遺構の東側で、北の面である地山の掘り込みを共有する凹みを検出した。それは底が平らで東西長4.0m、南北長2.8mの長方形を呈する。この遺構と一連のものかは不明である。なお、この遺構からの出土遺物(第71図)として掲載しているものは、基壇内の盛土直上の遺物である。

SK-31・32 (第70図)

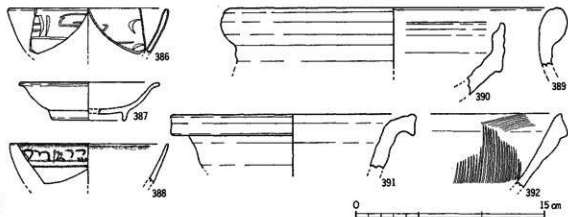
基壇状遺構の南に接して検出した細長い土坑である。この土坑の南西は調査区外のため不明である。東西長9.80m以上、南北長2.80m以上を測る。底には5箇所の凹みが検出され、この内3箇所の凹みをSK-32として処理した。SK-31内の残存の深さは0.9~1.25mを測る。埋土は茶褐色土、礫、焼土混じりの灰褐色土が大半であったが、南側に純粋な焼土が流れ込む様に入っていた。また、底には厚さ約5cmの灰色の弱粘質土が堆積していた。SK-32はSK-31の底で検出した一連の土坑である。長径約2.0m、短径約1.70mの楕円形の土坑の底に直径約65cm、深さ10cmの円形坑を検出した。この中には4個の石を方形に組んでいた。埋土は焼土であった。

SK-37 (第58図)

楕円形のスリ鉢状をした近世の土坑である。南側は調査区外のため全容は不明である。東西長約2.2m、南北長1.1m以上、残存の深さは約40cmを測る。伊万里、唐津等の遺物が多数出土した。

SK-38 (第70図)

SK-37の西に隣接する。東西長2.2m、南北長0.4m以上、残存の深さは約10cmである。出土遺物は数片で全て中世の遺物であるが、SK-37との位置的な関係上、同時期の可能性もある。



第71図 基壇状遺構遺物実測図

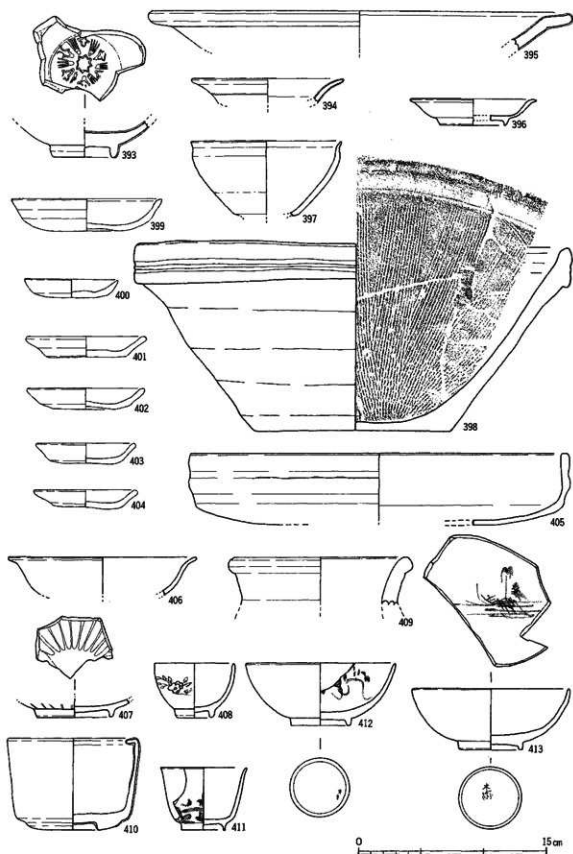
基壇状遺構出土の遺物 (第71図、図版78)

386は竜泉窯系青磁碗C2類である。口縁の内彎する器形で、外面口縁部に篋描雷文帯が巡り、内面体部にも篋描きの劃花文が見られる。灰白色の精良な胎土に、透明度の低い草緑色の釉が厚く掛かる。387は白磁E群の端反皿である。胎土は灰味が強く、釉は光沢がなく微細な灰黒色の斑点が浮かぶ。388は染付C群の碗である。器肉が厚いが口縁端部は非常にシャープに切られている。外面体部に便化した波濤文帯が巡る。釉はやや青味を帯び、呉須の発色は淡い。389・390は備前窯のものである。389は1石程度の容量と思われる小型甕で、口縁はやや扁平ながら、玉縁の形状を保つ。胎土は砂粒を多く含んで粗く、暗灰色を呈す。器表は赤茶褐色である。390は搥鉢で、口縁外面に波状の段が付く。胎土は堅緻で、灰赤褐色を呈す。391は焼締陶器の壺である。常滑窯と思われるが、丹波窯の可能性もある。392は和泉型に近い器形の瓦貫こね鉢である。

SK-31・37出土の遺物 (第72図、図版78)

SK31 393~395は青磁である。393は竜泉窯系E類の碗で、内底には中央に星形を配した印花文を押す。灰白色の精良な胎土に草緑色の釉が薄く掛かる。釉は高台内面途中まで及び、一部外底に回るが、焼成後に疊付の釉を砥石で研いで露胎化している。生産地での処置かどうかは不明。394は腰折皿である。稜花や劃花文は見られないが稜花皿と同様の器形である。胎土は灰白色でやや粗く、釉は透明度が高く光沢がある淡草緑色を呈す。395は口縁をくの字状に折った盤である。体部に装飾は見られない。397は瀬戸美濃窯の褐釉天目茶碗である。屈曲させた口縁は端部でやや丸みを帯びる。黄白色の粗い胎土で、露胎部には化粧掛けされ、ヘラケズリ痕を残さない。398は産地不明の搥鉢である。一応焼締であるが焼きが甘い。土師質との中間的な胎土で微細な雲母粒を含み、明黄褐色を呈す。搥鉢に似るが外面の調整は雑である。口縁上端部から内面口縁部付近の全周に渡って煤が付着し、煮沸具も兼ねたものと思われる。399~404は土師皿である。399は外底に糸切痕を持つ。表面が摩耗するが、ヨコナアは外面体部から内底に及ぶようである。淡黄褐色の精良な胎土で、雲母粒を少量含む。400は289などと同様の小皿、401~404は通有の在産小皿である。405は土師質焙烙である。外型成型の薄い体部に、やや内傾気味で外面が波状の高い口縁部が付く。胎土は微細な砂粒を多く含んでやや粗く、灰茶褐色を呈す。

SK37 406・407は白磁E群の皿である。406は端反皿である。407は通常の型押菊皿と同様の胎土、施釉方法を持ちながら、351などと同様の丸鑿と篋による施文方法を取ったものである。408は染付の小杯である。外面体部に細い線描による折枝文2単位を描く。409は備前窯の大型壺である。灰茶褐色の胎土は砂粒を含んでやや粗い。410・411は肥前窯の磁器で、410は青磁香炉である。本来三足が付くものであるが、焼成前、もしくは焼成途中で欠落したと思われ、三足の付くべき位置が露胎である。411は染付小杯である。412~413は肥前窯の陶器で、京焼写しの灰釉碗である。412の外底には「森」、413の外底には「木弥下」の陰刻スタンプが押される。



第72図 SK-31・37遺物実測図

SK-31 : 393~405, SK-37 : 406~413

谷部A地区の近世遺構

「谷部A地区の遺構」の項で触れたが、近世の遺構の残存状況は非常に悪く、殆どの遺構は削平されている。しかし、桃坂道から丘陵部A地区に向かって高くなっている難壇状の塔頭の敷地を区画する石垣が遺存している。このことは、かつて江戸期の復興時にはこの地区まで塔頭が再建されたことを裏付けている。近世遺構は、天正の兵火時の敷地を整地あるいは改修した上に築かれ、その後、水田化された時に塔頭の敷地の一区画である石垣を利用して一枚の水田としている。根来寺山内の現水田の一区画は、江戸期の塔頭の敷地の一区画を踏襲していると言われる由縁はこれである。近世の遺構は纏まって検出されず、故に一つの敷地内での位置付けが不明確である。

近世石垣（土堀）（第73図、図版33b）

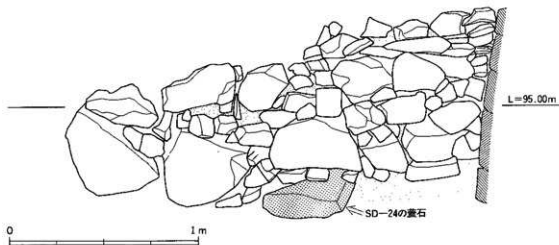
天正の兵火に係る時期の谷部A地区東限と考えられる南北の石垣（SV-08）南端に、西方向へ取り付く土堀の基礎の石垣である。崩壊が著しい。これは両面に面を持ち、その幅は約80cmを測る。東西長は2.20m、遺存高は最も遺りの良い所で約90cmを測る。基底部には約50cm大の石を横方向に据え、上方へ積むに従って徐々に石を小振りにしている。詰石も雑で少量である。

竹製導水管（SD-25）（第58図）

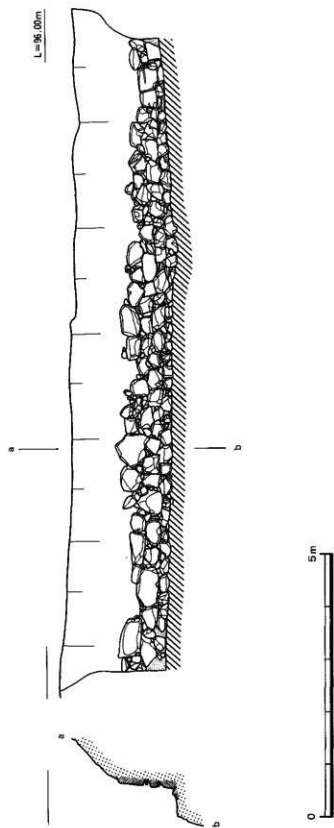
SD-23の西に約6.40m離れた所に平行に設置されていた。北ではSX-12を切っていた。掘形の幅は30～40cm、深さは約20cmを測る。この溝状の掘形内に玉砂利を敷き、その上に直径6～9cmの竹を埋置していた。この竹を2本分検出した。竹と竹の結合方法は金剛峯寺遺跡でよく検出される木製ジョイントを埋設するものではなく、単に竹と竹を差し込むというものであった。

SV-09（第74図）

上段と中段を限る東西方向の近世の石垣である。両端部分は調査区外のため不明である。検出長約12m、遺存高1～1.1mを測る。基底部は20～30cm大の石を整然と積んでいた。



第73図 近世石垣実測図(SV-08にとり付く石垣)



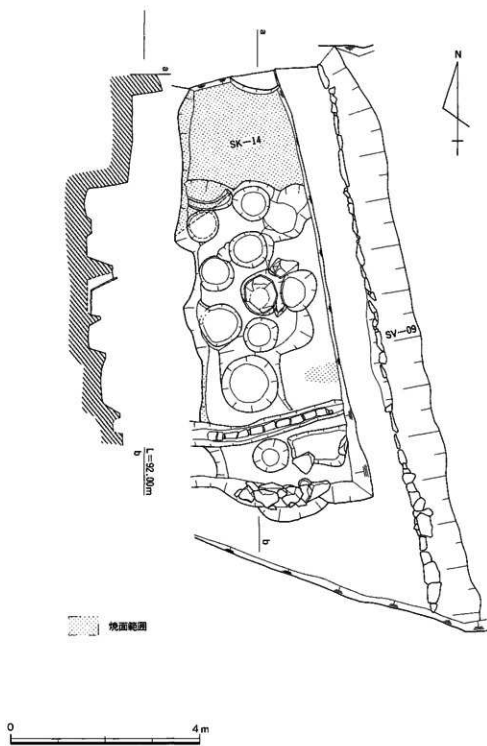
第74图 SV-09实测图

SX-14 (第75図、図版35a・b)

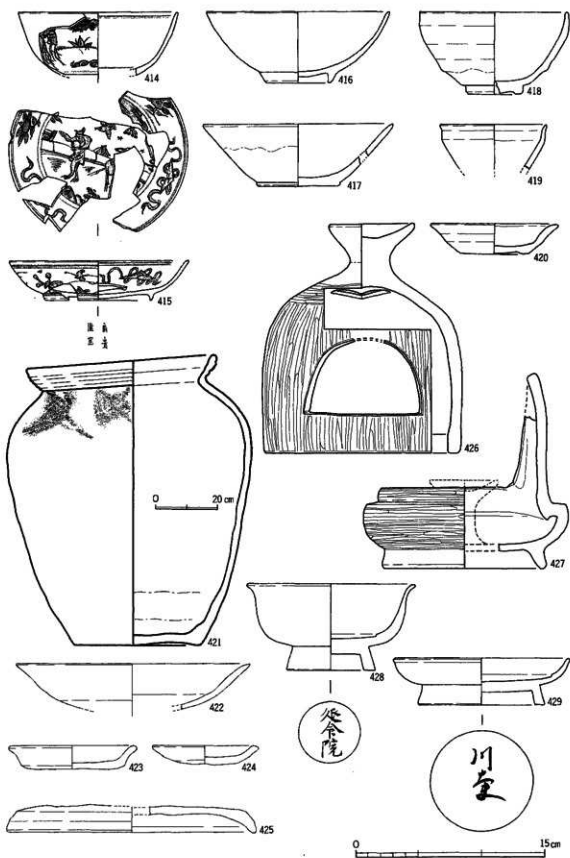
中段の東端で検出した地下式倉庫である。これは地山を掘り込むもので備前焼の大甕を埋設していた。SV-09によって東半部は壊されていた。北側の進入口と思われる箇所は調査区外のため不明確である。検出したのは部屋部の一部分である。この部屋部の規模は南北長9.40m、東西長2.80m以上を測る。また、この遺構の南はSD-27によって切られている。この地下式倉庫は先述したものとは様相を異にする。この遺構は北側に進入口が取り付けくものと思われ、北端壁面で確認された一部狭くなる箇所が進入口と部屋部の界と考えられる。その幅は約90cmを測り、大人一人が通れるほどの広さである。残存高は約65cmである。しかし、この進入口は構造的には階段状であるのか、それともスロープ状のものかは定かでない。部屋部の入口は平坦面になっていた。この箇所の内壁も床面も全て赤く焼き締まっていた。おそらく、踊場と考えられる。これは一部分造り替えが認められ、検出時は部屋部の竪埋設施設を狭めていた。また、部屋部本体の甕を埋設している場所は不整形な掘形が施され、この中に単体で10基の抜き取り穴を検出した。甕の埋設施設の穴は千鳥状に配されていた。その内の1基は甕の底部が遺存していた。この抜き取り穴の底は割合平らで、立ち上がりは甕の体部の傾斜と同様である。踊場と抜き取り穴の比高差は約85～90cm測る。これは大甕の高さとほぼ同数値であり、この上に板材が何かを渡し、覆っていたと考えられる。使用時にはその板材の幾つかを取り除いて甕の内容物を取り出したと思われる。部屋部の埋土は基本的に2層に分けられ、上層は焼土混じりの黒灰色炭層、下層(抜き取り穴)は青灰色のやや粘質の砂であった。この抜き取り穴の底からは「延命院」と黒漆で記された漆塗りの柄が出土した。この様に漆器が遺りの良い状態で出土することは珍しく、中でも院名等が記されているのは稀である。一例として昭和61年度町道桃坂線の調査でも出土している。根来寺の調査における漆器の出土状況は木質部が朽ち果て、漆の膜のみが遺存した状態が殆どである。

SX-14 出土の遺物 (第76図、図版79)

414・415は染付で、414は柄E群、415は皿E群である。互いに文様構成上のセット関係をもち、414の内面、415の外面に河童を描く。胎土はやや灰味が強く、釉は青味を帯びるが、呉須は濃く、群青色に発色する。415の外底には「富貴佳器」銘が見られる。416は蓮子碗型の瑠璃釉の碗で、根来寺では初出例である。外面体部に瑠璃釉、内面と外底に透明釉を掛けただけで、やや光沢が欠くが、瑠璃の発色は鮮やかである。417は225と同一タイプのベトナム製牡丹文白磁碗である。418～420は瀬戸美濃焼のものである。418・419は褐釉天目茶碗である。418は面取の大きい浅い輪高台をもち、口縁部の屈曲が少ない。419は小型で、口縁端部が薄くシャープな作りである。420は褐釉皿である。葵筋底風の底部をもち、口縁が外反する。内底に1cm大の目跡3か所をもち、外底に輪陶枕痕を残す。砂気が多い淡灰褐色の胎土に茶褐色と暗茶褐色が斑になった釉を施す。421は備前窯の大甕で、肩部に「三石入」の銘をもつ。422～424は土師皿である。422は重



第75図 SX-14実測図

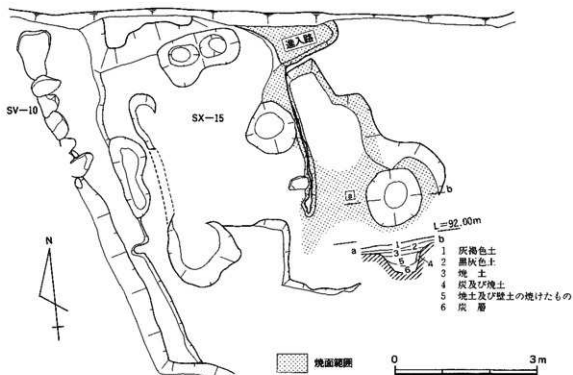


第76図 SX-14遺物実測図

白色土化した大皿、423・424は通有の在地産小皿である。425は土師質で、蔵骨器などの蓋と考えられる。胎土は砂粒を含み粗く、淡灰黄橙褐色を呈す。内外口縁部に強いヨコナデを施し、内底を不定方向にナデる。外底は未調整で、外底周縁の口縁部との境を雫にヘラケズリする。426・427は土師質の瓦燈で、蓋を回転して光量を調整する。外面は丁寧にヘラミガキされる。428・429は漆塗製品である。共に黒漆の上に朱漆を重ねたもので、口縁端部や高台外端部では朱漆が摩耗して、下地の黒漆が表面に浮出る。428は椀で外底に黒漆描きの「延命院」銘、429は皿で外底に「川大夫」の黒漆銘が見られる。

SX-15 (第77図、図版34b)

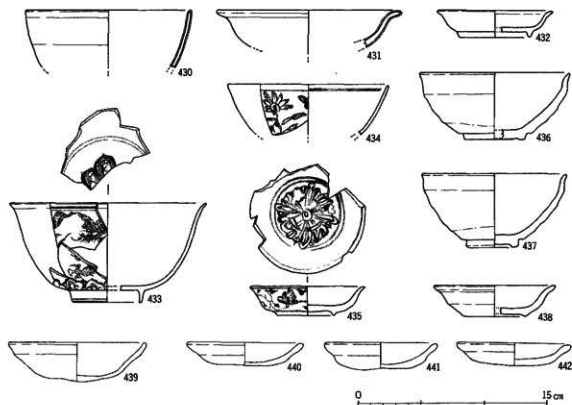
これの遺存状況は良好でなかった。整地土である灰褐色土と焼土混じりの黒灰色土を除去後検出した。床面及び内壁の一部が焼けていたことから、地下式倉庫として扱いたい。西端はSV-10によって壊され、全体の規模は不明である。地山掘り込みの進入口と考えられる部分と部屋部の床面を検出した。床面では甕を掘え付けたと考えられる4基の穴を検出した。規模は東西長5.2m以上、南北長6.4m以上を測る。進入口は東から入る様に造られていた。長さは1.5mを測り、幅は85cm以上を測る。この進入口の床面は入口から部屋部に向かうにつれ若干の傾斜を持ち、スロープ状を呈する。また、床面と内壁は全て焼けていた。埋土は床面が焼土、抜き取り穴は上層は焼土、下層は炭であった。構造的には部屋部内で地山掘り残しの仕切り状の壁を検出した。これと抜き取り穴とは相関関係にあると考えられ、遺存が悪いためはっきりしたことは言えない。



第77図 SX-15実測図

SX-15 出土の遺物 (第78図、図版79)

430～431は青磁である。430は竜泉窯系E類の碗で、口縁が内彎する。灰味の強い胎土に透明度が高く、光沢がある暗緑色の釉が掛かる。431は端反皿である。内面体部に片切彫の文様があるが、釉が厚く透明度が低いため不明瞭である。胎土は灰白色で、釉は草緑色で光沢がない。432は白磁E群の端反皿である。非常に小型であるが、胎土は精良で釉には光沢がある。疊付の釉のケズり取りも丁寧である。433～435は染付である。433は大型の端反碗である。器内が薄く、腰が張る。外面体部に竜文を描き、腰部に宝珠文帯を巡らす。内底には肩の丸い蓮弁を花卉状に配す。絵付は輪郭線を細い筆で丁寧に描き、中を濃で漬す方法による。胎土は精良で、呉須の発色はやや淡い。434はE群の碗である。外面体部にやや太めの筆で花卉花弁文が描かれる。呉須はやや淡いが鮮やかに発色する。435はB1群の端反皿である。外面体部に牡丹唐草文、内底に磨唐文を描く。小型で非常に雑な作りで、内底や疊付に硅砂が多く付着する。呉須も灰味を帯びて発色する。436～438は瀬戸美濃窯の製品である。436・437は黒釉天目茶碗である。436は口縁の屈曲が強い。明灰白色の非常に精良な胎土をもち、化粧掛けした露胎部にはヘラケズリ痕を残し、疊付外端部の面取は行なう。437は口縁端部が薄くシャープで整った器形である。胎土は灰白色を呈し、精良である。露胎部にヘラケズリ痕を残し、疊付外端部は浅く面取される。438は420と同様の褐釉皿。439～442は土師皿で、439は白土器の中皿、440～442は通常の在地産小皿。



第78図 SX-15遺物実測図

SV-10・11 (第80図)

SV-10・11は近世石垣である。検出長は4.0m、遺存は一段分である。比較的大きめの0.5~1.0m大の石を横に使用していた。SV-11は水田化の際西に約1.1m張出し、ごく新しいものと思われる。南北長11.30m、遺存高60cmを測る。

SV-10出土の遺物 (第79図)

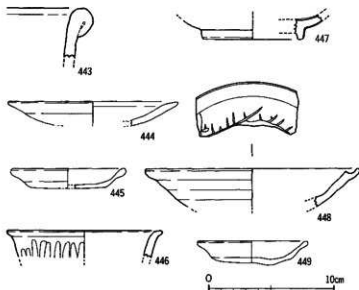
443は備前窯の甕で、口縁はほぼ完全な玉縁である。胎土は非常に精良で、灰白色を呈す。444・445は土師皿で、444は亜白色土使用の大皿、445は通有の小皿である。446は瓦質火舎で、口縁上端部及び外面体部にヘラミガキが施される。

SD-27 (第58図)

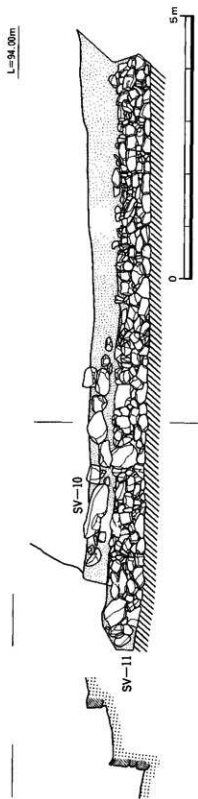
この溝は東西に延びる素掘りの溝である。形状はやや弓形を呈し、東から西に流れていたと思われる。埋土は玉砂利を詰め込み、その下に平瓦を並べ丸瓦を伏せていた。東西長は約11m、幅は30~90cmを測り、残存の深さは15~25cmを測る。

SD-27出土の遺物 (第79図)

447は青磁皿で、口縁の外反する器形と思われる。448は瀬戸美濃窯の灰釉鉋皿である。体部の開きが大きい器形で、口縁を蓋受状に凹ませ、端部を上方に摘み上げる。内外口縁部付近のみ施釉する。胎土は灰白色を呈し精良で、外面体部に粘土紐巻上痕を残す。449は通有の在地産土師小皿である。



第79図 SV-10 SD-27遺物実測図
SV-10: 443~446, SD27: 447~449



第80図 SV-10・11実測図

SK-40 (第81図)

下段南端で検出した。南は調査区外のため全容は不明である。東西長6.65m、南北長1.60m以上を測る。残存高は35cmを測る。壁の立ち上がりは、かなり斜めであった。埋土は単層で焼土混じりの灰色土であった。ここから出土した遺物は瓦片が殆どで、他に中国製染付・白磁片、国産陶磁器の細片が少量であった。近世のゴミ穴だと考えられ、一括投棄された状況が窺える。

SK-41 (第81図)

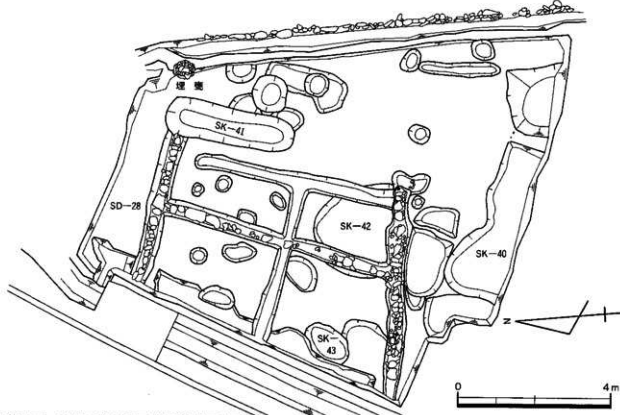
南北を軸とする長丸形の土坑である。南北長3.45m、東西長0.55mを測る。残存の深さは約45cmを測る。底は平らで壁の立ち上がりはかなり緩やかである。埋土は茶灰色土の単一層であり、焼土は皆無であった。出土遺物は少量で瓦、土師器皿、瓦質火鉢等の細片であった。

SD-28 (第81図)

下段の殆ど西半部を占める範囲に広がる暗渠排水溝である。形状は「H」形を呈する。本来は側石に蓋石が付いていたであろうが、検出時はその様相を留めていなかった。わずかに一部でそれと判る乱雑な状態の蓋石の遺存箇所を確認した。掘形の幅は40~60cmを測る。

甕ピット (第81図)

下段の北西隅で単体で検出した。備前焼の甕である。上部は削平され、体部下半のみ遺存し、あたかも意図的に割った様にこなごなの状態で出土した。掘形は直径60~80cmの楕円形を呈する。これだけの単体の埋甕とは考え難く、他の甕が調査区外にも遺存していた可能性も考えられる。



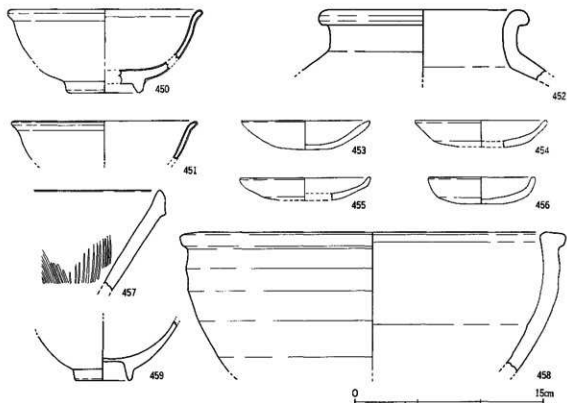
第81図 谷部A地区最西端部遺構配置図

SK-42・43 SD-28出土の遺物（第82図）

SK 42 450・451は竜泉窯系青磁D類の碗である。口縁の外反する器形で、外面体部に回転ヘラケズリ痕を残さないタイプで、D II類に細分される。450は灰白色の堅緻な胎土にやや失透した灰緑色の釉が厚く掛かる。釉は高台外面まで掛かり、畳付から外底を露胎で残すという1時期古いD類に多く見られる施釉方法を採用している。一部畳付に及んだ釉は丁寧にケズリ取る。高台内面の面取が大きい。451の胎土は暗灰色を呈し、やや粗い。光沢がなく、器面がザラついた感じの灰緑色の釉が比較的薄く掛かる。口縁部の釉には一部虫喰い状態を呈す。火中した可能性もある。452は玉縁状口縁をもつ備前窯の大型壺である。灰褐色の胎土は、砂粒をやや多く含んで粗い。器表は暗灰褐色を呈し、口縁部内面から外面肩部に掛けて胡麻状の灰を被る。453～456は土師皿である。453は亜白色土化し、体部が外方に大きく開く大皿に対応する器形の皿である。454は砂粒を多く含む黄褐色の胎土をもち、口縁端部を揃むように内側へ押ナデた皿である。外面体部は未調整である。455・456は16世紀代の根来寺に通用の在地産皿である。

SK 43 457は瓦質こね鉢で、和泉型に類似する。外面体部下半に煤付着。煮沸にも使用か。

SD 28 459は肥前窯の灰釉碗で、150などと同種のものであるが、釉は灰味が強い。高台径が小さく、内底の挟りが極端に深い。458は瀬戸美濃窯の灰釉練鉢である。低く幅の広い輪状の高台が付くもの。胎土は黄白色でやや軟質、釉は灰黄白色を呈し、全体に細かい貫入が走る。



第82図 SK-42・43 SD-28遺物実測図

SK-42：450～456、SK-43：457

略票(SD-28)：458・459

(2) 谷部B地区の概要 (第84図)

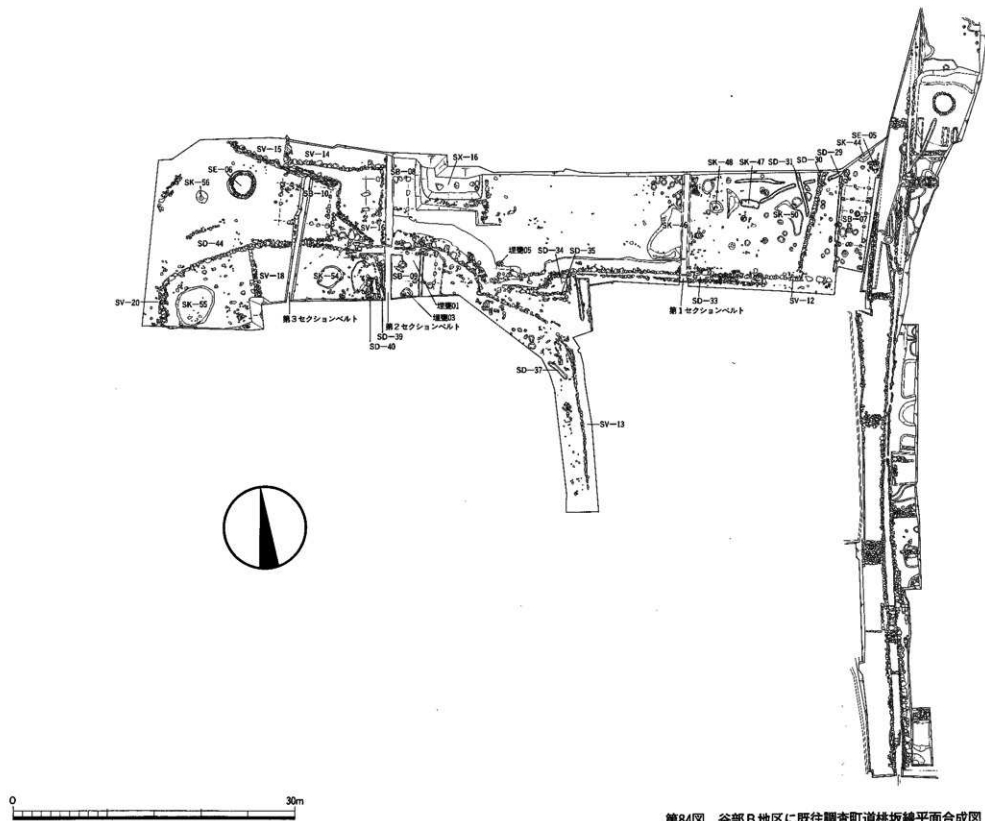
この地区の検出遺構面は全域ではないが、大きく分けて3面検出した。上面は近世(江戸期の復興時)、中面は天正の兵火に係る時期、下面は天正の兵火に係る時期以前の遺構を検出した。場所により異なる時期の遺構を同一面で検出した事も多々あった。この3時期の内、近世の遺構は谷部A地区同様殆ど削平されており、纏まりのある遺構が検出できなかった。検出し得た遺構は天正の兵火に係る時期のものと、それ以前の時期のものが大部分であった。ここで特筆すべき遺構は、大きな坊院が存在していたであろうと推測される敷地で、高い石垣と玉石敷遺構、及び地下式倉庫である。高い石垣は一端を検出しただけであるが、これは調査区南側とかなりの高低差がつき、その上、調査区が塔頭と塔頭の間に股がった。このような条件下のため、谷部B地区は非常に立体的且つ、複雑であった。調査の便宜上、この地区の北側の敷地を上段、南側の敷地を下段と仮称する。上段と下段の比高差は約6.50mであった。上記の状況から一塔頭の区画を把握することができなかった。なお、調査区が一部南へ突出した箇所もあり、遺構の説明上不明瞭な点も多々あると思うが御容赦願いたい。また、この地区は復元の古絵図で見る限り、根来寺の中でも絶大なる勢力を持つ行人集団(武装集団)の旗頭の一つである泉藏坊の推定地に当たる。この決め手になる遺物は出土しなかったものの、上述した石垣は過去十数年に渡る根来寺の発掘調査において最も高く堅固であることや、西側の谷の最も深い箇所を造成してこの石垣を築いていることなどから、泉藏坊の推定地として有力視しても良いのではないだろうか。今回の調査はこの坊推定地の南端を掠めたにすぎず、坊の主体となる建物跡はこの北側に位置していると考えられ、今後の調査に大きな期待が持たれる。検出遺構としては石垣、地下式倉庫、土坑、礎石建物跡、掘立柱建物跡、幹線路、石組溝、素掘り溝、石組井戸、溜槽、埋甕遺構、階段、庭園遺構、地鎮遺構等多種多様である。出土遺物は中国製陶磁器はもちろんのこと土師器皿、土師質土器、瓦類、瓦質土器、石造遺物、金属製品等がある。その中でも、遺跡を反映する遺物として仏具の独



第83図 根来寺炎上の図(「紀伊国名所図絵」より転載)

鈎、錫杖の上部、六器等が、また、武具の一種として鎧の袴、鉄砲玉、金製の刃の鞘部の飾り金具が出土した。

これらの出土遺物は宗教の場でありながら武装集団を擁立し、その武威を誇ったといわれる中世根来寺の二面性を如実に物語るものであるといえよう。



第84図 谷部B地区に既往調査町道桃板線平面合成図

谷部B地区上段包含層出土の遺物（第85～88図、図版80～82）

表土・床土 460は褐釉香炉である。やや内傾気味に立ち上がる体部を口縁部で内側に擁みだし、上端部を平坦にする。外面体部に凹線が数条巡る。胎土は非常に堅緻で灰白色を呈し、釉は灰茶褐色から暗茶褐色に発色する。内面口縁直下以下を露胎で残す。461～463は備前窯のものである。461は水屋甕で、完全に無頸化し、口縁部は蓋受状になる。胎土は少量の砂粒を含むが非常に堅く、暗赤褐色を呈す。462は播鉢である。口縁部は上方に大きく拡張するが、外面の波状の段は顕著ではない。463は鉢である。口縁部が内彎し、平底が付くもの。464・465は常滑窯の大甕である。N字状に折り返した幅広の口縁をもつ。466は東播系の片口である。口縁部が上下に拡張する。467・468は肥前窯の染付である。467は碗で、口縁がわずかに外反する。外面体部に松葉文を描き、内面口縁部に優化した雲文帯が巡る。呉須は灰味を帯びて発色する。内底を蛇ノ目に釉ハグする。468は仏飯器である。外面体部下位に2条の圈線が巡る。底部は露胎である。469は瀬戸美濃窯の染付杯である。暗青色に濃く発色する呉須で外面体部に花文を描く。470は肥前窯の灰釉碗である。471は堺播鉢で、内底にウールマーク状の櫛目が見られる。472は丹波窯の小型甕である。堅い灰白色の胎土で、外面体部に褐釉、内面体部から口縁上端面に灰緑色の灰釉を掛け分け、外面体部には意識的に灰釉を垂らす。473・474は瓦質土器である。共に摩耗して器表を失う。473は肩部に花菱文を押した火鉢、474はこね鉢で、457などと同様である。

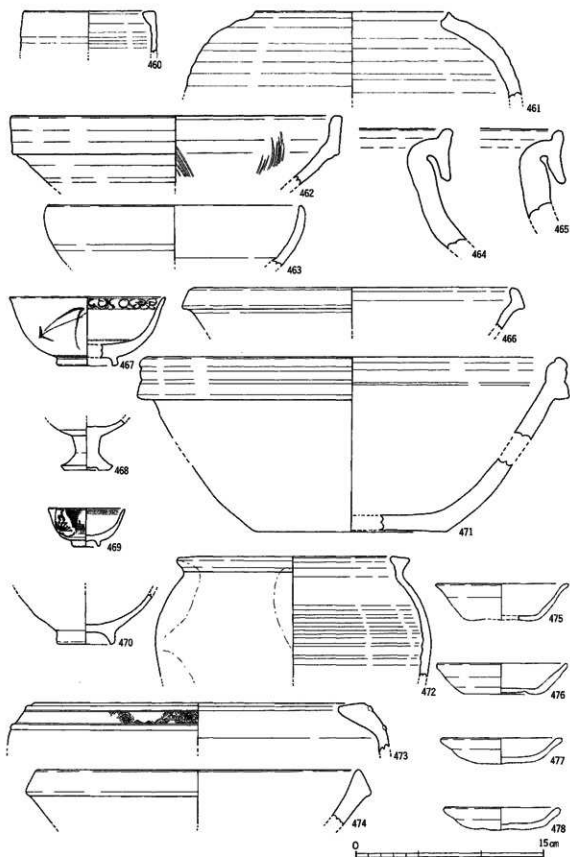
第1層 475～478は土師皿である。475・476は白土器の中皿である。475は強いヨコナデで口縁部が外反する器形である。477・478は通有の在地産小皿であるが、やや大振りである。

第2層 479～484は青磁である。479は口縁の外反する器形の鉢である。堅緻な灰白色の胎土の透明度は低いが、光沢のある深緑色の釉が厚く掛かる。480～482は碗である。480は竜泉窯系B2類である。外面体部に片切彫の粗略な蓮弁文をもつ。火中して内底の印花文は不明である。外底の釉を輪状にケズリ取る。481・482は竜泉窯系B4類である。外面体部に篋による線描蓮弁文をもつ。481は内面に3条の櫛による劃花文を描き内底に不明瞭な印花を押す。灰味の強い胎土に透明度が高く光沢のある暗緑色の釉が掛かる。482の釉は草緑色を呈し、胎土は灰味が弱い。483は腰折皿である。灰味の強い胎土で、釉は暗緑色を呈し、光沢は欠く。内底中心部に円形に露胎で残すが、施釉部分に重焼した高台の痕跡を残す。高台は外面途中まで施釉する。露胎部は暗赤褐色を呈す。484は盤である。低い断面台形の高台をもち、内底に牡丹文を印花する。印花は浅く不明瞭である。胎土は精良で灰黄色を呈し、釉はわずかに赤味を帯びた灰緑色である。総釉で、外底の釉を蛇ノ目にケズリ取る。露胎部は赤茶褐色に発色する。485・486は染付皿である。485はC群の基筒底皿である。磁質の胎土で、外面体部に蕉葉文を巡らす。486は白磁57などに対応する、高台から体部が直接立ち上がる器形である。いわゆる青磁染付で、外面体部に青磁釉を掛け、内底に飛馬文などを描く。類例は少ない。487～490は瀬戸美濃窯の製品である。487・488は

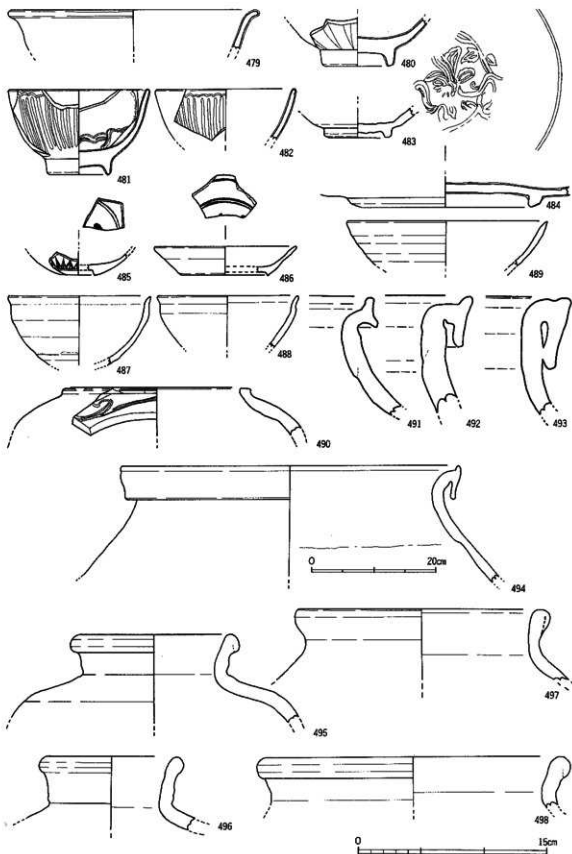
褐釉天目茶碗で、共に口縁部の屈曲が強い器形で、茶褐色と暗褐色の釉が斑に掛かる。487は黄白色のサクイ胎土をもち、露胎部には化粧掛けされる。488の胎土は淡灰褐色でやや堅い。489は灰釉碗である。口縁端部がシャープに尖り、外面体部に回転ヘラケズリの痕跡を残す。黄白色の軟質な胎土に黄灰色の釉が薄く掛かる。490は褐釉無頸壺である。外面肩部に陰刻草花文が描かれる。胎土は灰白色を呈し堅緻で、茶褐色と暗褐色の釉が斑に掛かっている。491～494は常滑窯の大甕である。493などのN字状に折り返した口縁幅の広いものは根来寺に搬入された常滑用甕の最末期のタイプである。495～502は備前窯である。495～498は玉縁状口縁をもつ甕である。499は小型甕、500～502は大甕である。器形的には大型甕、小型甕の判断が困難であるが、499は500などと非常に良く似た胎土をもつため、甕と判断した。503・504は丹波窯の甕である。503の胎土は砂粒が少なく堅緻で、504は砂粒をやや多く含んで堅いが粗い。共に口縁上面や肩部に灰緑色の自然釉が掛かる。505は東播磨片口である。466などと同様に口縁部が上下に大きく拡張する。胎土は砂粒を多く含んで粗く、暗灰色を呈す。506は瓦器であるが、74同様に土師質に近い黄灰白色の胎土をもつ。外面口縁部から内面体部、高台内外を強くヨコナデする。外面体部は未調整で、内外面とも暗文はまったく認められない。507～511は土師皿である。507～509は白土器。510は453同様の亜白色土化した小皿である。511～517は在地産の皿で、511は16世紀前半の早い時期で消滅する中皿、他は16世紀代に通有の小皿である。518・519は瓦質・土師質土器である。518は瓦質こね鉢で、和泉型に類似する341などと同様のものであるが、口縁部の拡張は弱い。内外器面の摩耗が著しい。519は土師質鍋で45などと同様のものである。520は丸瓦で、側端面や木口面の面取、玉縁の取付け角度などが314・315とほとんど同じである。521は鬼瓦で、367と似た形式であるが、器肉が全体に薄く、胎土は砂粒を多く含んで堅く粗い。

第3層 522は常滑窯大甕、523は備前窯の大甕である。523は口縁部が内傾し、肩が張らない。524～527は土師皿である。524は75と同様の器形であるが、白土器ではなく、微細な砂粒を多く含んで、粗い黄白色の胎土をもつ。525は粘土円盤の端を軽く摘みあげただけの小皿である。内底を不定方向にナデした後、内底周縁と外底周縁を粗くヨコナデし、口縁部を強く摘むようにヨコナデする。胎土は砂粒をあまり含まず精良で、黄白褐色を呈す。526・527は通有の小皿である。

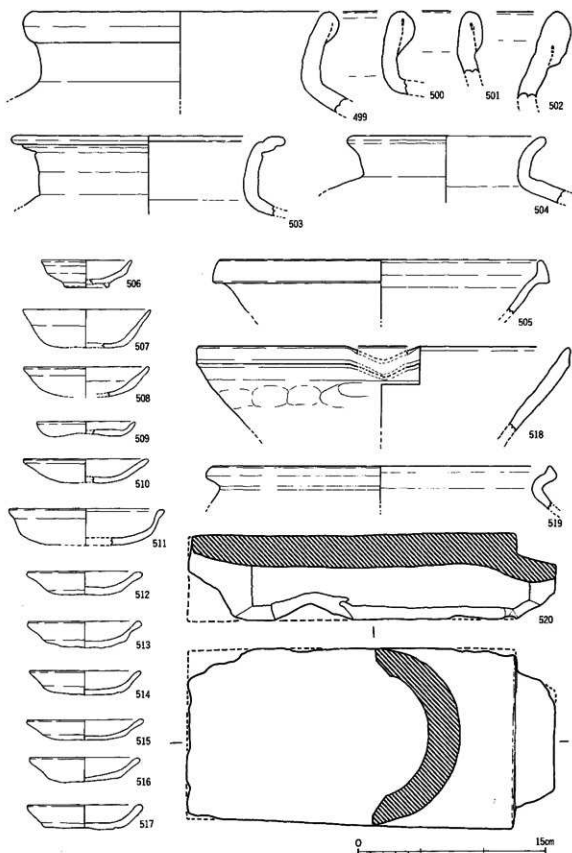
第4層 528～530は備前窯のものである。528は大型甕、529は小型甕である。528は火中して肩部の自然釉がケロイド状になる。530は摺鉢で、口縁部が上方に大きく拡張し、口縁外面下端に凹縁状の浅い段が巡る。内外口縁部付近を丁寧にヨコナデし、内外外面体部は粘土紐の巻上げ痕を残して粗くヨコナデされる。内底も回転を伴ってナデるが、外底は未調整のままである。胎土は少量の砂粒を含むが非常に堅緻で、体下部は橙褐色を呈し、上部に行くに従って徐々に内面チヨコレート色、外面灰褐色の、いわゆるサンドイッチ状の胎土に変化する。531～533は土師皿である。531は69などと同様の小皿、532・533は16世紀代に通有の在地産小皿である。



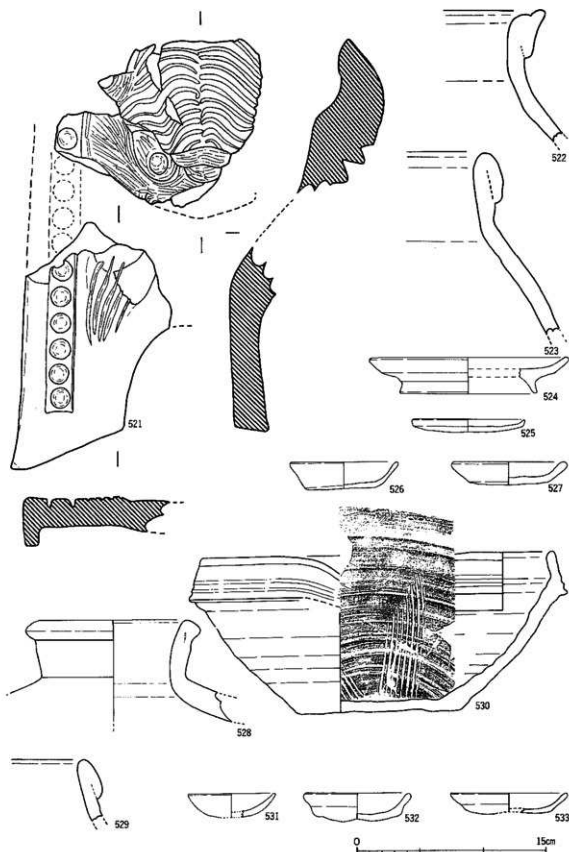
第85図 谷部B地区上段包含層遺物実測図1



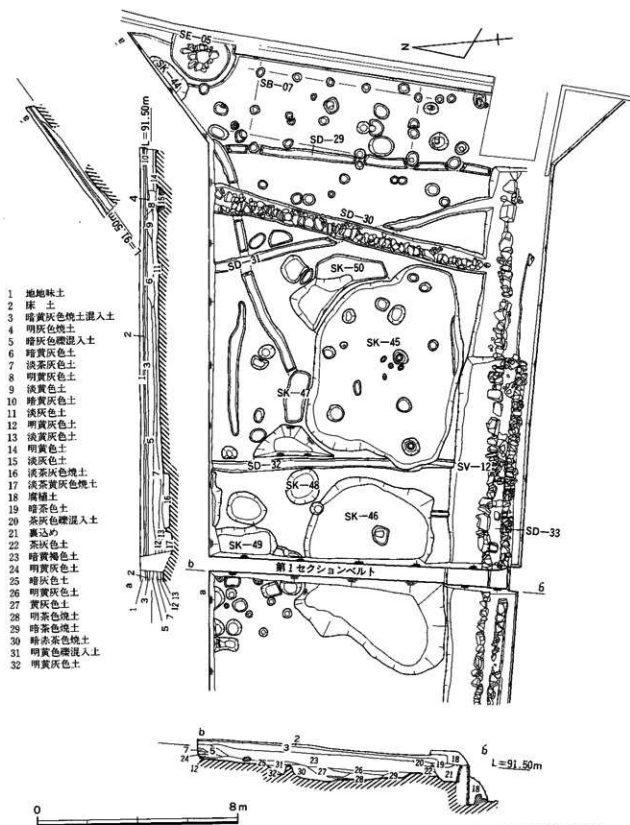
第86图 谷部B地区上段包含層遺物実測図2



第87图 谷部B地区上段包含層遺物実測図3



第88图 谷部B地区上段包含層遺物実測図4



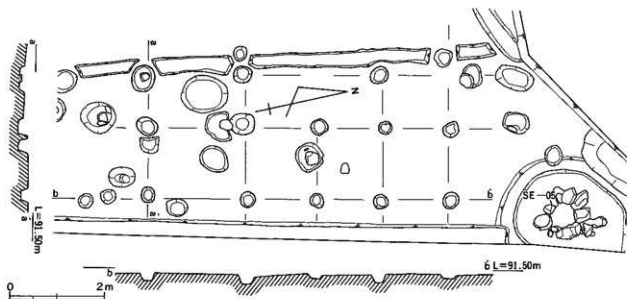
第89図 谷部B地区東端部実測図

谷部B地区東端部遺構の概略（第89図、図版38b）

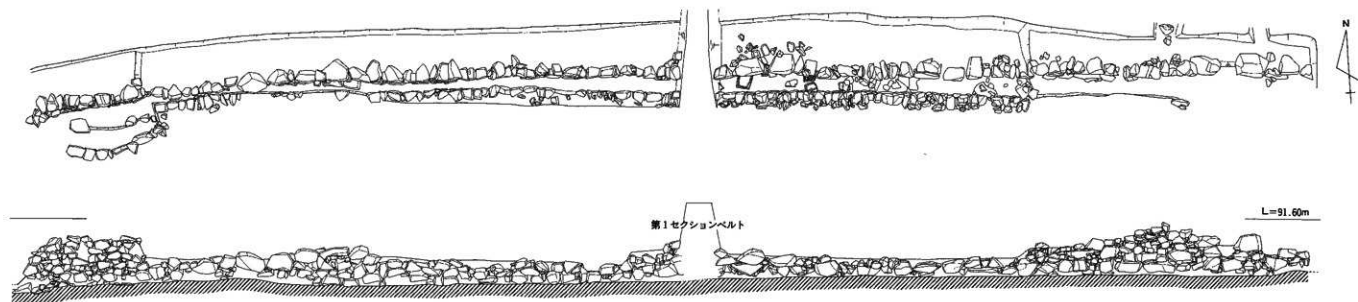
この部分は敷地の南を限る東西方向の石垣（SV-12）、それに取り付く溝（SD-33）を検出した。これに関わる東西を限るものとして、町道桃坂線の発掘調査の折、東を限る南北方向の土塀と現町道桃坂線の前身である道がこの部分の東に隣接して検出されている。遺構面は近世、天正の兵火に係る時期、天正の兵火時以前の3時期を検出した。近世遺構面は耕作土、床土除去後厚さ約20cmの包含層（暗黄灰色土）を掘削して検出した。天正の兵火に係る時期の遺構と、それより以前と考えられるものを同一面で検出した。それは近世の遺構の検出面より下に約10～15cmの包含層（淡茶灰色土ないし淡灰色土）を掘削後検出した。近世の遺構面は殆ど削平されており、桃坂道の取り付きの部分で若干検出した。調査区の北東隅で小振りの石組の井戸1基、土坑1基（SK-44）、その南で礎石列を検出したのみであった。また、SV-12の裏込め及びSD-33からは近世の遺物が出土している。他の遺構では天正の兵火に係る時期のものは暗渠排水溝（SD-30）と素掘り溝（SD-32）で、それより若干古いと考えられるSK-45・46、SD-31等がある。また、SV-12とSD-33から東端部の遺構全体を判断すると、SV-12より北側に全ておさまリ、先述した如く発掘時点でのSV-12の裏込めの上層とSD-33より近世の遺物も出土するが、後世の改修とも考えられ、当初この敷地の南限を界する石垣として近世まで踏襲されていたものと考えた方が妥当であると思われる。

SB-07（第90図、図版40a）

最も東端で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。SD-29を切っている。桁行4間（間尺は北から1.48m・1.36m・1.44m・2.12m）、梁行2間（間尺は東から1.48m・1.12m）と、共にバラツキがみられる。柱穴は直径約30～50cm、深さは15～20cmを測る。中には礎板を敷いていたものも幾つかみられる。埋土は灰色土の単一層で天正の兵火に係る時期以前のものと考えられる。



第90図 SB-07実測図



第91図 SV-12 SD-33実測図

SD-30 (第92図、図版40a・b)

SB-07の3m西で検出した南北に延びる暗渠排水溝である。北は調査区外のため全長は不明である。長さは10.90m以上を測り、掘形の幅は0.8~1.0m、深さは18~20cmを測る。流水幅は15~25cmと南へ向かうほど狭くなり、底の高さは北から南へ低く南流していたと考えられる。蓋石は40~50cm大の石を横に渡し、側石は20~40cm大の細長い石を縦使いに整然と並べていた。出土遺物は細片が殆どで備前焼、瓦質土器、土師器皿、瓦、中国製白磁・染付等である。

SK-45 (第89図)

SD-30の西に隣接して検出した不整形の土坑である。包含層(暗黄褐色土)除去後検出した。規模は東西長7.60m、南北長5.80mを測る。残存の深さは40cmであった。埋土は焼土の単一層であった。出土遺物は備前焼の甕・壺が殆どで他に瓦質火鉢、土師器皿、瓦、中国製の青磁・白磁・染付等がある。

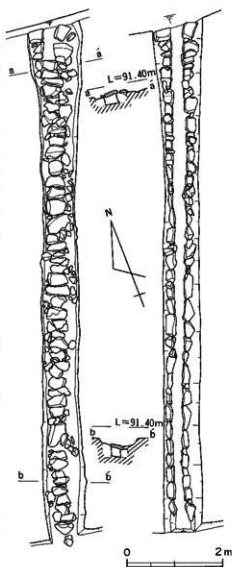
SK-46 (第89図)

SK-45の西側に隣接した不整形の土坑である。包含層(暗黄褐色土)除去後検出した。規模は東西長6.40m、南北長5.20m、残存の深さは40~50cmを測る。SK-45よりやや小振りである。埋土は大きく分けて2

層に分層でき、上層は黄灰色土、下層は箇所によって若干の色の差はあるが全般的に焼土であった。出土遺物は備前焼、土師質土器、瓦質土器、中国製青磁・白磁・染付等であった。

SK-45・46・49 SD-30出土の遺物 (第93図、図版82・83)

SK45 534・535は青磁皿である。534は外面体部に線描の幅広の蓮弁文が描かれる。535は無文で、火中して釉がケロイド状になる。総釉で外底の釉を蛇ノ目にケズリ取る。536は白磁E群の端反皿である。537は染付C群の椀で、内底に捻花文を描く。538は備前窯の甕である。小さい玉縁状口縁をもち、肩の張った器形で、肩部に梅描波状文が巡る。胎土は砂粒を含むが比較的堅緻で、内面暗褐色、外面灰褐色のサンドイッチ状を呈す。539~542は土師皿である。539は胎土が亜白色土化し、大きく外方に開いた口縁内面端部に浅い凹線を巡らせたものである。540~542は在地産の土師皿で、540は中皿、他は小皿である。540の口縁部にはタールが付着する。543・544



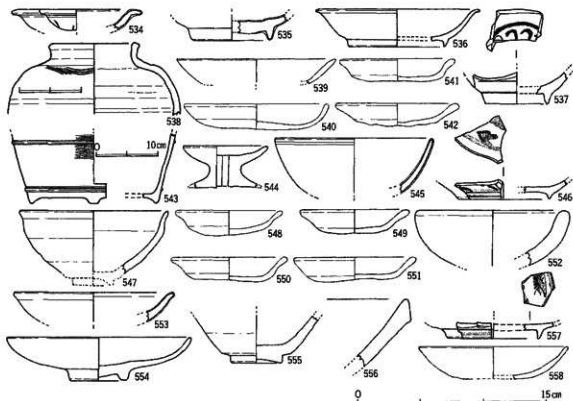
第92図 SD-30実測図

は瓦質・土師質土器である。543は瓦質火鉢で、外面体部に凸帯を巡らす。器表の摩耗が激しいが、外面体部に一部横方向のヘラミガキが見られる。胎土は比較的精良である。544は土師質瓦燈蓋の燈芯受である。426などの頂部に当たるが、この図体は中央部に穿孔されている。

SK 4 6 545は竜泉窯系青磁碗E類である。口縁が内彎し、外面口縁端に浅い凹線が1条巡る。灰白色の堅緻な胎土に、透明度の高い草緑色の釉がやや厚く掛かる。546は染付皿B 1群の端反皿である。火中して内面の文様は不明であるが、外面体部に牡丹唐草文を描く。547は瀬戸美濃窯の褐釉天目茶碗である。口縁の屈曲が強く、端部がシャープである。胎土は黄白色を呈し、やや軟質である。外面体部下位の露胎部にヘラケズリ痕を残す。548～551は16世紀代に通有の在地産土師小皿である。552は埴壇の類である。303・304などと同類であるが、比して大型である。口縁部上端から内面に赤色化シケロイド状になったガラス質の物質が付着している。

SK 4 9 553は青磁皿である。胎土は灰味が強いが、釉は光沢があり透明度が高く、淡灰緑色を呈す。554はC群の白磁皿である。高台は断面台形で径が小さい。純白に近い精良な胎土にやや青味を帯びた釉が掛かる。釉は高台外面まで掛かり、畳付から内底を露胎で残す。555は黒釉天目茶碗である。暗灰青色の堅緻な胎土をもつ。外底を雑に抉り、露胎部に回転ヘラケズリ痕を残す。556は和泉型に近い瓦質こね鉢である。胎土は淡灰褐色を呈し、砂気が多くやや粗い。

SD 3 0 557は染付皿B 2群の端反皿と思われる。558は通有の在地産土師中皿である。



第93図 SK-45・46・49 SD-30遺物実測図

SK-45: 534～544. SK-46: 545～552

SK-49: 553～556. SD-30: 557・558

SE-05 (第94図、図版38a)

小振りの石組井戸である。床土下の包含層除去後検出した。掘形の東側は調査区外のため検出できなかった。掘形の規模は東西長1.60m以上、南北長2.40mを測る。この井戸の内径は約50cmを測り、深さは75cm以上を測る。掘削は人間一人が入るには狭すぎるため、底までは掘れなかった。故に、埋土は暗灰色土一層を検出したにすぎない。これは近世の井戸である。

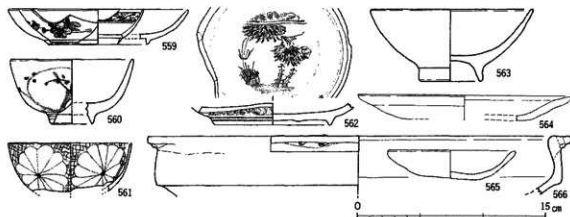
SV-12 SD-33 (第91図、図版39a)

「東端部の遺構の概略」でも記したが、SV-12は敷地の南限を界する石垣である。東西長約38mを測る。一部西側で小振りの石による積み直しが認められる。築造当初の高さは判らないが、最も遺存が良い箇所で6段、高さは約90cmを測る。裏込めの幅は約1.0mで、込石は5~15cm大の砂岩の割石と茶褐色土が混在したものであった。

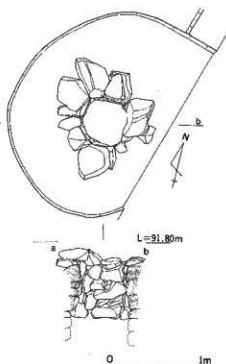
SD-33はこれの南側に取り付く石組溝である。20~40cm大の石の狭い面で側壁の内面を造っていた。深さは35~40cmを測る。平瓦が落ち込んでいた。西流し下段の坊院の敷地に流れ込んでいたと考えられる。SD-33、SV-12は共に中世には存在し、近世まで踏襲されたと考えられる。

SD-33出土の遺物 (第95図、図版83)

559は染付皿E群で、外面体部及び内底に瑞果文を描く。560~562は肥前窯の染付である。560・561は碗で、560は外面に草花文、561は内外面に菊花文を描く。562は大型の皿で、内底に松竹文が見られる。563は肥前窯の灰釉碗である。564・565は土師皿で、564は亜白色土化した中皿、565は通有の在地産小皿である。566は底部外型の焙烙で、405などと同様のものである。口縁部から対角に2か所引き出した外耳には上部から各2個の穿孔が見られるが、貫通はしない。



第95図 SD-33遺物実測図

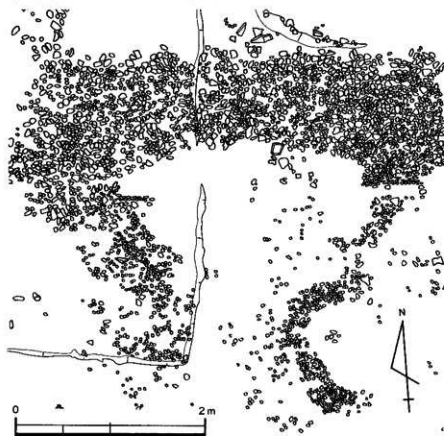


第94図 SE-05実測図

玉石敷遺構（第96図、図版41b）

上段の中央部南半部全域に敷き詰められてあったと推測される。というのは、纏まって検出し得たのはこの一部分の約18㎡であったが、この他にも小規模な範囲で点々とその痕跡を検出したためである。当初、玉石が敷かれてあったと思われる具体的な範囲は概ね、第一セクションベルトの西側からSX-16の南側の階段遺構の間と考えられる。この広さは約100㎡を測る。玉石敷の構造上から、この遺構はまさに庭園の一部と考えられる。それは玉石の色、大きさ、並べ方に工夫が察せられた。その状況は北域に大きさ5cm内外の赤色と灰色味の強い玉石をまばらに敷き詰め、南域には北域のものよりやや小さい3cm内外の黒っぽい玉石を敷き詰め、またその間を緑系統の玉石を2列に立て並べ仕切っていた。過去の根来寺坊院跡発掘調査において玉石敷遺構は数例^(註10)あるが、この様に面積も広く、凝ったものは初例である。先に「谷部の遺構」の項でも記したが、この地は泉識坊推定地の可能性も考えられることから、前述の様な玉石敷を持つ庭園も有って何ら不思議は無いものと考えられる。この坊院の主体部を成す箇所は当然、この玉石敷遺構の北側と考えられるが、後世の削平により建物の検出には至らなかった。しかし、トレンチ掘りの結果、建物の基礎である堀込み作業が行われていることを確認し、東西棟の建物か推定できる。

この敷地全域において、この玉石敷遺構の在り方を考え往時を推量してみると、大きな塔頭の南

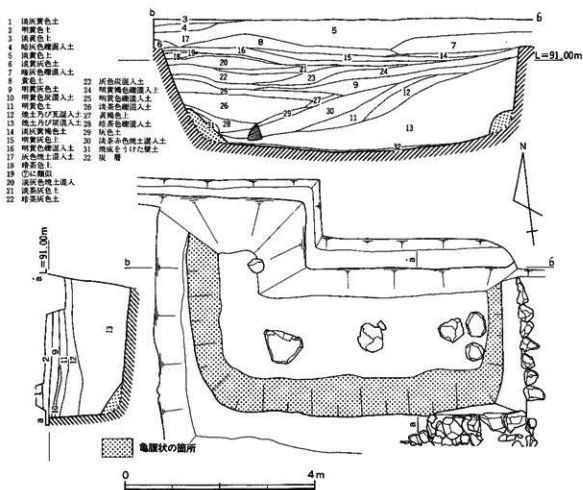


に前庭とも言ふべき壮麗なる庭園を築き、悠々自適の生活を営んでいた先人達の様子が眼前に浮かんでならない。根来寺坊院跡の発掘調査において、このような大きな敷地を持つ坊院跡を調査する機会にめぐりあふ、この敷地の実体を解明する意味においても、今後この北側の調査が大きな意義をもつ。

第96図 玉石敷遺構実測図

SX-16 (第97図、図版42a)

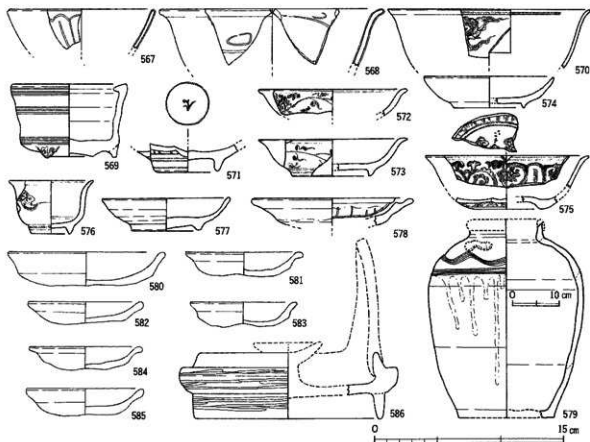
調査区の上段で検出した地下式倉庫である。北側は調査区外のため検出に至らず、全容は不明である。この地点は谷部の深い箇所当たり、敷地を西に広げるため大掛かりな整地作業を行っている。この遺構は近世の包含層除去後検出した。規模は東西長約7.50m、南北長3.70m以上を測り、残存の深さは約2.10mを測る。構造上、確実に言えることは東壁と南壁は石垣で築かれ、他の2辺は削平と検出不能のため不明である。また、石垣の内壁面には厚さ1~1.5cm程度の粘土を貼り付け、真っ赤に焼き締まっていた。部屋部の内壁の周囲には床面から上方に高さ約50cm、幅約30~120cmの亀腹状の高まりを設けていた。これは5~10cm大の砂岩の割石を盛り、その表面に粘土を丸く貼り付けたものである。これもまた、赤黒く焼き締まっていた。床面には5個の礎石が配され、この内、東の2個のついでには不明確である。礎石は東西2間(間尺1.80m)分である。東柱をうけるものと考えられる。埋土は天正の兵火時のものを近世の復興時に周囲から寄せ集め、掻き込んだものと考えられる。底については東から掻き込まれている状況を窺うことができる。また、底には厚さ2~4cmの炭層が堆積していた。出土遺物から判断して、この地下式倉庫は天正の兵火時直前まで機能していたと考えられる。この遺構の下は割石で整地され、ガラガラであった。



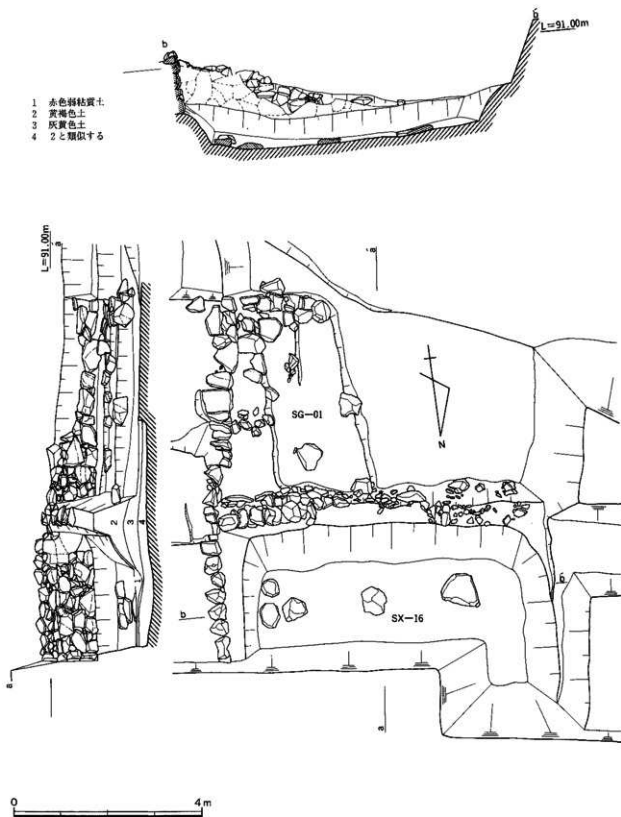
第97図 SX-16実測図

SX-16 出土の遺物 (第98図、図版83・84)

567～569は青磁である。567は竜泉窯系B3類の碗、568は端反の鉢である。569は香炉である。外反気味の体部を口縁部で内側に引き出し、上端部を平坦にする。外面体部の上端、中位、下端に3条1単位の条線文が巡る。草緑色の釉を総釉し、外底の釉を丁寧にフキ取っている。570～576は染付である。570は大型の端反碗である。433と同一図体であるが、出土地点は約200m離れ、調査年度も異なる。571は華南系の碗である。胎土はやや陶質で、釉及び具須は灰味を帯びる。内底は蛇ノ目に釉ハギされる。572・573はB1群の皿である。574はE群の皿である。575は碁笥底で、口縁端反の皿である。外面体部に密な唐草文を描き、内面体部には蓮弁文が巡る。内底の文様はアラベスク風である。具須は濃く鮮やかに発色し、釉は青味を帯びる。総釉で、畳付の釉は丁寧にケズリ取る。576は小杯である。外面体部4か所と内底に如意雲文を描く。畳付の釉はケズリ、外底は無釉である。577・578は瀬戸美濃窯の製品である。577は灰釉皿で口縁が内彎し、体部の立上りはやや長い。578は灰釉卮皿である。体部が大きく開く。579は備前窯の四耳壺である。肩部に櫛描の波状文と条線文が巡る。580～585は通有の在産土師皿で、580は中皿、他は小皿である。586は瓦甕である。427などと同様の物であるが、瓦質の点が異なる。胎土は明灰褐色を呈し精良である。外面体部から高台に掛けて、横方向のヘラミガキが施される。



第98図 SX-16遺物実測図



第99図 SX-16 SG-01実測図

泉識坊推定地（谷部B地区上段）の概要（第99図、図版41）

調査区上段の敷地（泉識坊推定地）の状況である。東端の町道桃坂線から石垣（SV-15）の西端までの敷地の東西長は約70mであった。つけ加えて、この敷地の玄関口である門跡を推定するならば、桃坂道に面した東向きの門が考えられる。何故ならば、町道桃坂線の調査時にこの桃坂線に面した西向きの門をもつ塔頭の土塀を検出している。この辺り（蓮華谷）に建ち並んでいた塔頭寺院は北から南につれて低く、道を挟んで向かい合うように連立していたと考えられる。この敷地から出土した遺物は、15世紀から天正の兵火にかかる時期のものが大半で、根来寺が隆盛を極める時期と殆ど軌を一にしている。また、このことから^{（註11）}紀州雑賀の子弟が、この地に坊院を営み始めた時期も必然的にこの頃と推測できる。

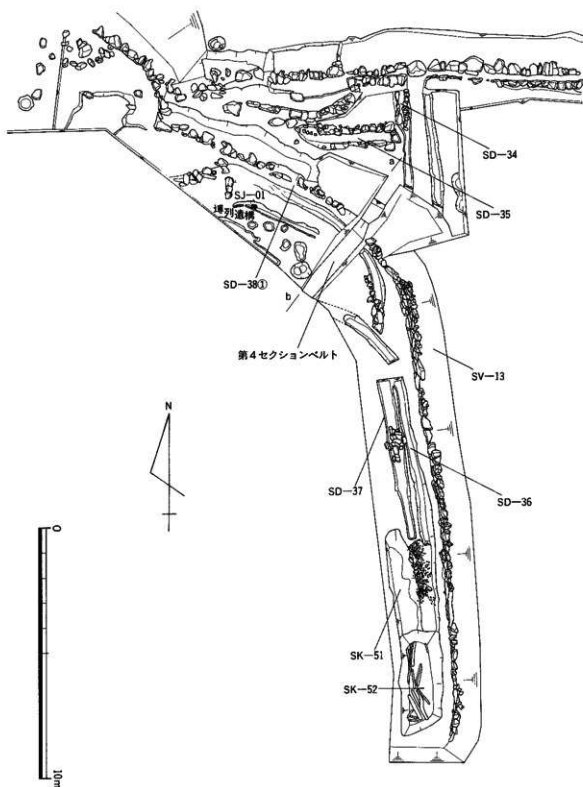
調査で検出したのは敷地の南端部だけで、前庭部と考えられる箇所である。

この調査区の第1セクションベルトから東については、検出し得た遺構は15世紀代のもので、天正期まで機能してしていたと考えられる遺構は殆ど無く、わずかに、SD-30とSV-12だけであった。従って、これの西側で検出した天正期まで機能していたと考えられるSX-16（地下式倉庫）や、玉石敷遺構に伴う時期の遺構を検出できなかった。故に、この庭園部と考えられる南端部分全体の状況としては不明と言っても過言でない。

さて、この調査地の西で検出した地下式倉庫、玉石敷遺構、階段遺構、高石垣（SV-15）との関連性であるが、これらの遺構は全て同時期に機能していたと考えられる。その根拠として、これらに共通するのは、いずれも整地土の上に築かれていることである。玉石敷遺構はその西で検出した階段（SG-01）の上でも検出されている。この階段はおそらく、後述する敷地の最西端で検出したSB-08（物見櫓の性格の礎石建物）とこの敷地の主たる建物を往復するためのものと思われる。また、階段の北側は地下式倉庫となり、これの四周する壁は石積みと考えられ、南側の壁は両側に面をもつことから土塀を築き、階段部と画していたことを窺える。

階段は幅広の緩やかなもので、南側の縁石がわずかに遺存していた。これも両側に面をもつことから土塀が築かれていたと考えられる。階段部は段を成すというよりは、坂を段状に造り出しているものである。段は2段分で幅は約3.0m、その1段分の奥行きは、上段が約1.0m、下段が約1.60mを測るものである。段の比高差は20mを測る。この上でも玉石をまばらであるが検出した。以上から、この辺りの状況は、東の庭園部と考えられるところから門をくぐり、両側が土塀で仕切られた、玉砂利敷きの階段を降りて、敷地外へ通じていたものと考えられる。例えば、敷地の南西下で検出した井戸（SE-06）や、隣接する塔頭等にも通じていたものと思われる。

この敷地の総評としては、15世紀前半は桃坂道に取り付いた狭い敷地の建物で、西側は幹線流路が北東から南西に延び、16世紀代に谷の深い箇所まで整地し、高い石垣を築くという大土木事業が行なわれ敷地を大きく西に拡張したと考えるのが妥当と思われる。



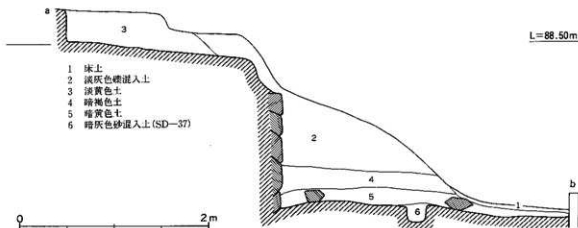
第100図 谷部B地区下段南側突出調査区遺構配置図

谷部B地区下段の敷地割の状況

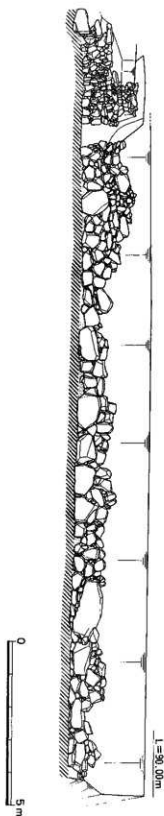
B地区下段東端の南へ突出した箇所である。この調査区の面積は 約130㎡であった。この西側の調査で敷地の上段と下段を画する石垣(SV-15)が、屈曲しながら東西方向に延び、SV-12と繋がる。また、突出部調査区の東側には、このSV-15に繋がるSV-13が南北方向に築かれている。すなわち、これらの石垣により「T」字状の大きな敷地割が認められる。

SV-13において、SV-15に繋がる所の西側に湾曲する箇所で石積みの様相が変わり、造り替えが認められる。従って、このSV-13は築造当初にはSV-12方向に直線的に延びていたものと考えられ、近世の時期には、この辺は敷地の変革を行っていると考えられる。敷地の変革の状況は下段西端の敷地においても認められた。これは、敷地の西を限る3時期分の石垣を検出した。天正の兵火に係る時期以前のもの、天正の兵火にかかる時期、江戸時代の復興時と、時代が下がるにつれ、徐々に敷地を西に拉げている状況が観られるものであった。この様な状況を根来寺の歴史的な視点から考えると、次のように解することができる。従来から言われているように根来寺の最盛期は天正の兵火時でありこの時期を中心におくと、一時期古い時期はまだ、塔頭が連立せず、建てられる場所も限られていたと考えられる。次に天正の兵火時に近づくにつれ、山内余す所無く塔頭が建ち並び、また、増築のため敷地拡大が成されたであろうと考えられる。このことは、根来寺の何処を発掘しても、殆ど天正の兵火にかかる時期の遺構を検出できることから言えることである。次に、後世の敷地拡大であるが、今までの様な行人衆という軍事的集団を必要とせず、教学に勤しむための寺院再建に全力を注いだものと考えられ、幾つもの塔頭は必要なかったのではないだろうか。この再建の際にも整地作業は必要不可欠であり、荒れ果てた箇所を隠す意味においても敷地を拉げたのではないだろうか。

現状の水田区画で判断するかぎり、この谷には近世まで踏襲する石垣区画と、新しく築造された石垣区画が混在しあって、近世の大きな坊院敷地がタイムカプセルの如く埋まっている。



第101図 第4セクションベルト北面土層図



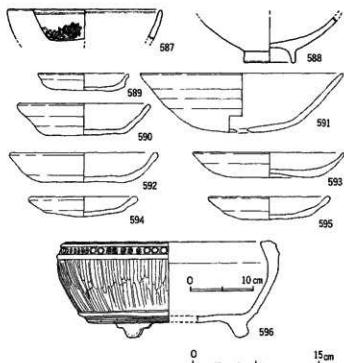
第102図 SV-13立面図

SV-13 (第102図)

SV-15から続き、緩いカーブを呈しながら南へ直線的に延びる石垣である。これは下段の南側の敷地を東西に限り、総延長は約31.0m、最も遺存の良好な箇所で高さ約1.70mを測る。これは裏込めから推し量るに、築造当初は最低でも2.10m以上の高さがあったと考えられる。基底部に大きさ1.0~2.1m大の巨石を横置きにしている。カーブの箇所では積み替えが認められ、小振りの石を乱雑に積んでいた。この石垣の裏込め上層からは近世の遺物も出土した。

SV-13 裏込め出土の遺物(第103図、図版83・84)

587 は肥前窯の染付で、コンニャク判と筆描きを併用。
588 は肥前窯の灰釉碗。589~595は土師皿で、589~591は白土器である。591は大皿で、外底に外型成型によると思われる縮縮状の皺が認められる。592~595は通有の土師皿。
596 は瓦質火鉢である。外面口縁部の2重凸帯の間に珠文と型押菊花文を組合わせた文様が巡る。胎土は微細な少量の雲母粒を含むが精良で、外面体部に縦方向、口縁上端面と体部下端の凸帯以下に横方向のヘラミガキが認められる。



第103図 SV-13裏込め遺物実測図

SD-34・35 (第100図)

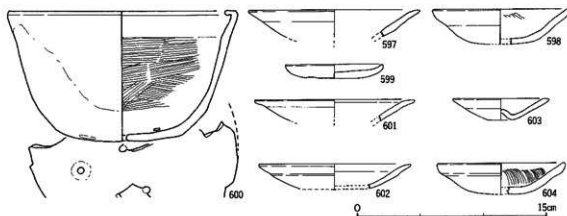
SD-34・35を検出した場所はSV-13に伴う敷地の北西隅にあたる。SV-12とSV-13に挟まれた狭小な三角地帯である。この箇所は上段の敷地から下段の敷地に流れ込む排水施設が主たる遺構であり、SD-34・35の他にも近現代と考えられる排水溝をもう一条検出した。

SD-34は石組の溝である。検出長は1.80m弱、幅は外径で約60cmを測る。最も遺存の良い箇所で石積みが2段分遣り、高さ25~30cmを測る。また、流水幅は約10~20cmを測る。この溝は底の高さから判断して北から南に流れていたと考えられるが、北のSD-33に取り付く痕跡は確認されなかった。南は当初SD-35に繋がり、逆「L」字状を呈し、SV-13の西下の敷地に流れ込んでいたものと考えられる。SD-35は検出長約3.0m、外径80cm、流水幅は30~40cmを測る石組溝である。東側で閉塞されている。積みは2段で、高さ20~30cmを測る。SV-13の裏込めによって壊されていることから、これらの溝の時期は天正の兵火時だと考えられる。

SD-34・35出土の遺物 (第104図、図版84)

SD34 597~599は土師皿である。597と598は中皿で、非常によく似た胎土である。淡黄褐色を呈し、やや砂気が多い。597は後述601・602と類似した器形であるが、内面体部に粗い刷毛による調整が見られる。598は体部が直行する器形で、外面は口縁端部を除いて未調整である。内面体部はヨコナデシ、内底を中心に粗い一定方向の刷毛調整が見られる。599は525と同様の小皿である。600は土師質鍋である。鉄鍋を模したと思われる器形で、甕として使用されたのか、底部に5か所の穿孔が見られる。孔は5mm大で、内面から穿たれる。597・598とよく似た胎土であるが、砂粒が多い。内外口縁部をヨコナデシ、外面をヘラケズリ、内面体部を横方向の粗い刷毛、内底を不定方向の刷毛で調整する。外底から外面体部の一部に2次焼成の痕跡がある。

SD35 601~604は土師皿である。601・602は亜白色土を使用し、口縁部が外に開いた器形の中皿で、601は内面口縁端に浅い段が付くものである。603は亜白色土化した、ヘソ皿である。突出部の径が小さく、内部に爪痕を残す。604は598と同様の胎土、調整をもつ小皿である。



第104図 SD-34・35遺物実測図

SD-34: 597~600, SD-35: 601~604

SD-36 (第100図)

SV-13とはほぼ平行に南北に延びる素掘りの溝である。検出長約13.50 mを測り、幅は約40cmを測る。これの北側は西に折れ曲がり、区外に延びるものと思われ、また南側はSK-52によって切られている。深さは約20~50cmを測り、断面「U」字形を呈する。伊万里焼、唐津焼の破片が出土していることなどから、SK-52と時期差はないものと考えられる。

SD-37 (第100図、図版43b)

これもまたSD-36と同様、素掘りの溝である。検出長約22.0m、幅は約30cmを測る。残存の深さは7~15cmと非常に浅く、南へ行くにつれて遺存度が悪い。この溝もまた断面は「U」字形を呈する。北側は岩盤を掘り込んでおり、この部分だけではあるが緑泥片岩の蓋石が認められた。これの南側は玉砂利で覆われ、SK-52によって切られていた。底の高さから南流していたと考えられる。これの途中でSD-36に交差し、切られていた。出土遺物は近世のものは無く、中国製の青磁・染付、瓦器、国産陶器、土師器皿の破片が数片ではあるが出土していることから、天正の兵火に係る時期と思われる。

SK-51 (第100図、図版45b)

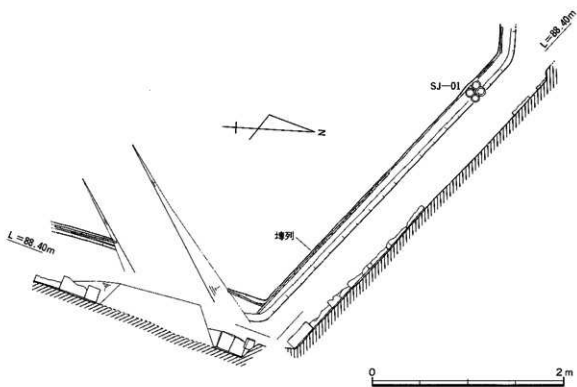
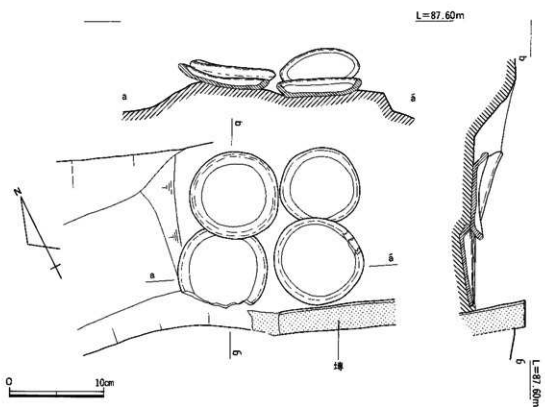
調査区の突出部分南側で検出した南北に細長い溝状の土坑である。南はSK-52によって切れ、全容は不明である。南北長約4.30m、東西長 約0.9mを測る。残存の深さは20~25cmを測る。東と西の壁の立ち上がりはほぼ垂直であり、北は緩やかに立ち上がる。

SK-52 (第100図、図版45b)

突出部分南端で検出した。南北長 約4.0m、東西長約1.50m以上、深さは約70~80cmを測る。調査区の東西幅が狭く、危険を伴うため完掘はしなかった。この中から直径15~20cm程度の丸太と、長さ約95cm、直径6~8cm杭が出土した。これらの木製品はいずれも表面が焼け爛れていた。出土遺物には中国製染付・白磁の細片、国産陶器、伊万里焼、灯明皿、軒丸瓦、軒平瓦等がある。

埴列遺構とSJ-01 (第105図、図版44a・b)

SD-37の北方南側で検出した。これの南側は調査区外のため全容は不明であった。これは地山を深さ約20cm程度掘り込み、幅約15cm、長さ約3.8mの筋掘りを一辺とする2辺分と少しを検出したにすぎず、計測できた内側は2角分でそれぞれ110°と130°であった。おそらく六角形を成していたものと考えられる。この遺構は筋掘りの中に埴を立てていた。埴の殆どは上部が欠損しており、一辺に13~14枚を立て並べていた。おそらく、経堂の様な建物の基底の一部になるのではないだろうか。また、この筋掘りの一辺の底に根来寺通有の土師器皿を4枚敷き詰めた地鎮(SJ-01)と考えられる遺構を検出した。この地鎮は一辺で検出したのみであるので、他の辺においてもこれと同様なものが検出される可能性も考えられる。この遺構の時期は地鎮土師器皿より天正の兵火に係る時期だと考えられる。



第105图 SJ-01 埽列遺構実測図

SD-36 SK-51・52 埴列遺構 SJ-01 出土の遺物(第106図、図版84)

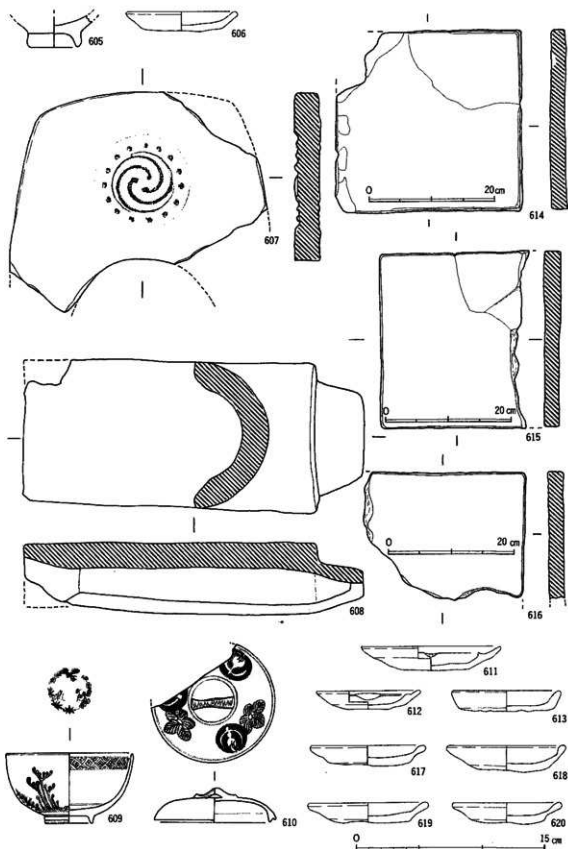
SD 36 605 は肥前窯のものと思われる灰軸柄であるが、通常の枇杷色の釉ではなく、黄白色の粗い胎土に透明度が高い灰黄色の釉が総釉されている。畳付の釉のフキ取りもやや雑である。

SK 51 606 は16世紀代の根来寺に通有の在地産土師小皿である。口縁部にタールの付着が認められる。607は鬼板の類である。鬼面を欠き、中央部に、小型であるが、軒丸瓦の瓦当と同様の珠文を伴う巴文が押されている。608は丸瓦である。520などと比してやや小型で、玉縁は比較的に長い。側端面や小口面の面取、玉縁の取付け角度などは、ほとんど同じ程度である。凸面には太いヘラミガキが見られ、内面には粘土板からの糸切の際の斜方向の弓痕を残す。

SK 52 609・610は肥前窯の染付である。609は腰が張り、口縁部の内彎する器形の碗である。体部の器肉は薄く、断面三角形の低い高台の径は小さい。外面体部に蕨と岩石2単位を対称位置に描く。内底2重圈線内に松竹梅の丸文が見られる。胎土は精良で呉須の発色も良好である。外面体部の染付は発色の濃いものと薄いものを使い分けしている。総釉で畳付の釉を丁寧にフキ取っている。610は蓋である。摘みが付され、返りを持つもので、合子などの蓋と思われる。摘みは篋による細かい刻みで装飾され、外面体部に花卉と便化した蕨と思われる3単位の文様が染付される。呉須の発色は濃い。返り部分の釉を丁寧にフキ取るが、露胎部全体に微細な砂状のものが薄く付着する。611・612は軟質陶器の灰釉灯明皿である。俗に柿釉などと称されるものである。内面体部に返りと燈芯受の抉りをもつ。精良であるが土師器に近い黄褐色の胎土をもち、灰釉と思われるテクテクと艶のある黄茶褐色の釉が薄く、内面から外面口縁部に筆塗りされる。611はやや大型の器形で、露胎の外面体部にヨコナデ、外底に円状のナデが見られる。内面の釉は回転を伴って塗られる。612は小型で、施釉方法などは611と同様であるが、底部が糸切のままである。内面口縁部3か所にタールが付着する。613は通有の在地産土師小皿である。

埴列 614～616は埴である。地面に埋め立てて建物の区画などに使用したもので、本来の磚とは異なる使い方をされたものである。ほとんど正方形に近い薄いもので、一辺29cm前後、厚さ2.5cm前後の規格をもつ。厚い粘土版から弓で削って次々に同規格のものを作ったのか、一部に弓の痕跡が残る。器面を丸瓦の表面の調整のように、幅の広い篋状のものと粗く削るように磨く。

SJ 01 617～620は通有の在地産土師小皿で、上記埴列の掘方からの出土である。4個体が田の字状に並んで正位置で出土したため、地鎮の意味合いを持つものと判断された。通常この種の土師皿を地鎮や鎮壇の具に使うことはあまり多くない。また、偶数個の例も少ない。すべて黄褐色を呈し、胎土や色調はよく揃っている。内容物などの残存痕は確認されていない。なお、この種の小皿が粘土円盤から体部を引きこしたことは既に述べたが、617～620に限れば、円盤は団子状の丸い粘土を押し延ばすのではなく、太めの粘土紐を2、3重に巻いたものを使うようで、未調整の外底には潰された粘土紐の痕跡が観察される。胎土などとの関係を観察する必要がある。



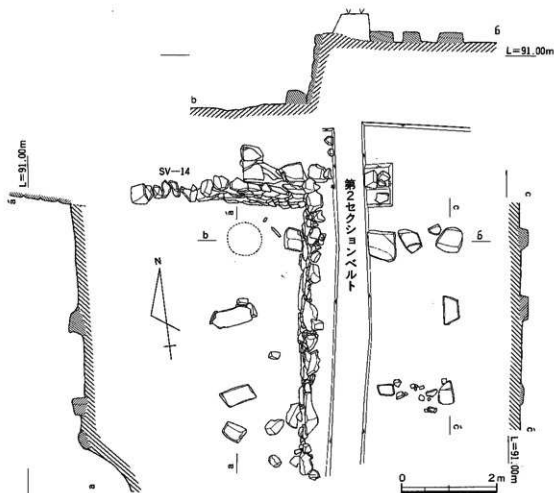
第106図 SD-36 SK-51・52 埴列遺構 SJ-01遺物実測図

SD-36 : 605, SK-51 : 606~608, SK-52 : 609~613

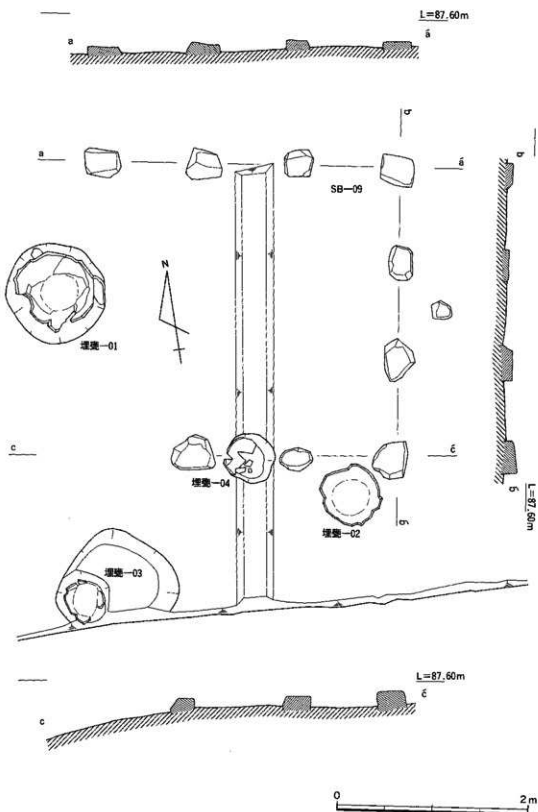
埴列 : 614~616, SJ-01 : 617~620

SB-08 (第107図、図版49b)

SX-16に隣接して上段の西端で検出した礎石建物である。これはSV-14を跨ぐ様にして建
 つと考えられる建物である。SV-14は「L」字形に折れ曲がり、上段の敷地の南西隅に限って
 いたものと思われ、最も遣りの良好な箇所で6段分、高さは約1.50m測る。また、この石垣は焼成
 をうけた痕跡が認められた。発掘当初はこの石垣の最上部まで整地土で覆われていた。この整地
 土を大きく分けると次の様に4層に分層することができ、上層から暗灰色土、礫と瓦片が混ざっ
 た層、焼土混入土、焼土であった。ここから出土した遺物には近世のものは無く、このSV-14
 は天正の兵火時のものと考えられる。SB-08はこれらの整地土除去後検出した。礎石の石は
 60~80cm大の割合大きいものである。石材は和泉砂岩であった。規模は東西3間(約4.4m)、南
 北2間(約3.35m)である。先にも記したが、このSB-08はSV-14を跨いでいることと、上段
 敷地の西端に立地することから物見櫓の様な軍事的性格を持つ建物を想定しても良いのではない
 だろうか。第115図のSB-08上包含層出土遺物はこの整地土中から出土した遺物である。



第107図 SB-08実測図



第108図 SB-09実測図

SB-09(第108図、図版46a・b)

下段中央やや西寄りで検出した礎石建物跡である。この礎石のベースは東は地山(岩盤)で、西は整地土であった。この様な状況下にあるためか、東西方向の礎石の高さは西方向に下がっていた。礎石の大きさは揃っており40cm大であった。建物は東西棟と考えられ、西側の礎石が欠損し正確な規模は不明であった。検出し得た規模は桁行3間以上(5.2m以上)、梁行3間(5.2m)であった。これらの間尺は等しく、各々1.04mであった。また、この建物と同一面で単体の埋甕の掘形を4基検出した。この内の3基はこの建物外で、1基は建物内である。埋甕と礎石建物とは時期差のあるものなのか、それともこの建物が南へ広がり、これらの埋甕を覆うものなのかは定かでない。この建物の北側の桁行の礎石は上段の南を限る石垣(SV-15)と平行であり、且つ廂も出せない程隣接していた。その間隔は約50cmを測る。東側の梁行の中央東に小振りの礎石が唯1個であるが検出されており、気になる存在である。梁行より外に約50cm張り出し、溜縁が通っていた可能性も考えられる。しかし、この礎石の同方向を精査したにも関わらず、その痕跡を確かめられなかった。埋甕-04は南の桁行方向の礎石と礎石の間で検出したが、底部のみの残存であり、このままの立ち上がりで復元すると、甕の一部が柱に当たると思われる。過去の坊院跡出土の埋甕は頭部、もしくは肩部まで埋まっている状況から、かなり削平されていると考えられる。従って、埋甕遺構を削平してこの礎石建物を建てたと考えるのが妥当である。

埋甕遺構(第108図～110図、図版46b)

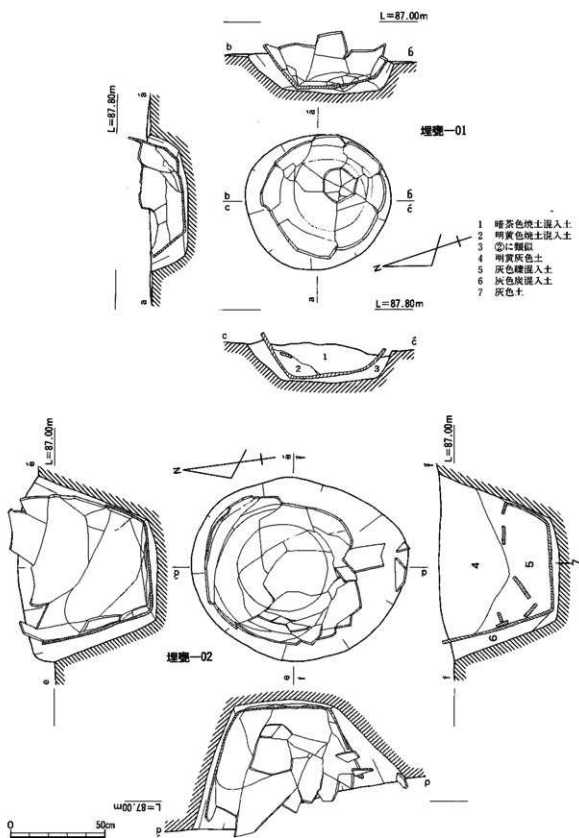
単体で4基の備前焼の埋甕を検出した遺構である。これらは床土下の包含層除去後検出した。どの甕も上部を欠損しており、底部から体部下半が遺存していた。この4基の埋甕の内、埋甕-01が他の3基に比べて60～95cm高い位置に掘え付けられていた。

埋甕-01 底から上部にかけて25cm遺存していた。検出面での掘形の平面形は円形を呈し、直径75cmを測る。残存の深さは20cmであった。掘形の埋土は明黄色焼土混入土であった。埋甕の埋土は2層に分層でき、上層は暗茶色焼土混入土、下層は明黄色焼土混入土であった。

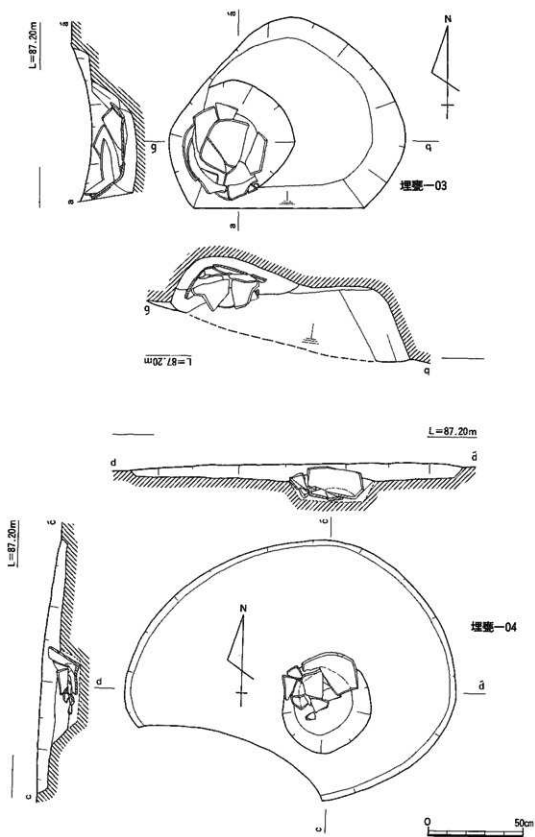
埋甕-02 甕の遺存は底から肩部までで75cmを測る。検出面での掘形の平面は楕円形を呈し、長径約1.10m、短径約1.0m弱を測る。また、壁は甕の傾きと等しく掘られていた。掘形の埋土は甕の側面に接する箇所は灰色炭混入土、底は灰色土であった。甕内の埋土は2層に分層でき上層は明黄色土、下層は灰色礫混入土であった。この掘形と甕内には焼土は認められなかった。

埋甕-03 この掘形を囲うように一回り大きな浅い土坑を検出した。掘形と一連のものであるかは判らない。甕の遺存状況は殆ど底部しか残っていなかった。甕の破片が中に倒れ込んだ様に重なっていた。

埋甕-04 埋甕-03同様浅い土坑の中に掘形を検出した。底部の半部のみの遺存であった。掘形の形状は楕円形を呈し、直径45～50cmを測る。残存の深さは約10cmであった。



第109図 埋壙-01・02出土状況実測図



第110圖 埋壙03・04出土状況実測図

第2セクションベルト東壁土層堆積状況(第112図)

S B-09の項でも記したが、このS B-09の西側は旧地形が谷状の南西に陥ち込み、整地が施されている。その状況を確認するために第2セクションベルト東側脇に沿って南北方向にトレンチを設定した。床土下の第4層～第8層には近世の遺物は含まれず、この辺りについては近世の遺構面は水田化の際に削平されたと考えられる。第4層～第6層は礎石建物遺構の検出面に相当すると考えられ、これらの整地層除去後、下面の遺構面と考えられる第9・11層を検出した。これは埋塞遺構検出面に相当すると考えられる。これより、下層暗褐色土、暗灰色粘土の堆積土は整地土ではなく、もともとの谷状地形に堆積した土と思われる。なお、この層は天正の兵火時に係る時期とは考えがたく、出土遺物から判断しても一時期古い天正の兵火時以前の堆積層と考えられる。この暗灰色粘土層からは白土器、土師質鍋、瓦質溜鉢等の遺物が出土している。

S D-38①・② (第112図、図版54a)

この溝をS D-38①・②と呼称したのは調査の便宜上、新旧2時期あり、①は新、②は旧とする。S D-38①はS V-15の南側に取り付く石組溝である。北側の側石はS V-15を壁としている。検出長は約9.0mを測り、西は溜岸遺構(S F-01)までとする。深さは約60cmを測り、流水幅は約50cmを測る。埋土の堆積状況は部分的に異なる。故に、この溝の代表的な箇所堆積状況を記す。埋土は3層に分層でき、上層は暗黄色砂質混入土、中層は炭混じりの焼土、下層は青色粘土で箇所によっては厚さ2cm程度の淡茶色の砂が堆積していた。

S D-38②はS D-38①の下で検出した。この溝はS D-38①の前身のものと考えられ、北側の石組みはS V-15とは共有せず、側石は2段以上積み、南側の側石となる石はS D-38①の下で、同様な石組み状況で検出された。流水幅は北側に石を積んでいる分だけS D-38①より狭く、約30cmを測る。深さは不明である。というのは、S V-15の石垣が中ぶくらみに吹かれており、作業上危険と判断し中断したからである。埋土は焼土層であった。これは、天正の兵火時の焼土層より一時期古い焼土と考える。出土遺物から判断してもS D-38①出土の遺物よりも若干古い。

S D-39 (第112図、図版47b)

S D-38①に流れ込む石組溝である。南側は調査区外のため全容は不明である。床土除去後すぐ検出した。検出長は4.6m以上を測る。残存の深さは10～15cmを測り、遺存していた側石の積みは1段分である。この溝は南から北にかけてかなりの高低差を呈する。

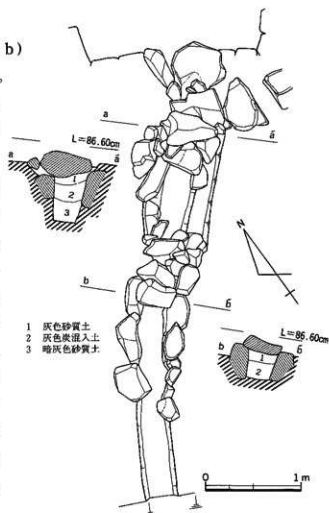
S D-40 (第112図、図版47b)

この溝もまたS D-38①に流れ込んでいたと考えられる石組溝である。S D-41によって切られている。検出状況はS D-39と同様である。この溝は底石を敷き、その上に側石を並べていた。検出長は2.80mを測る。残存の深さは10cmで、遺存の側石は一段分であった。S D-39と同方向を呈することから、S D-39の前身の溝だと考えられる。

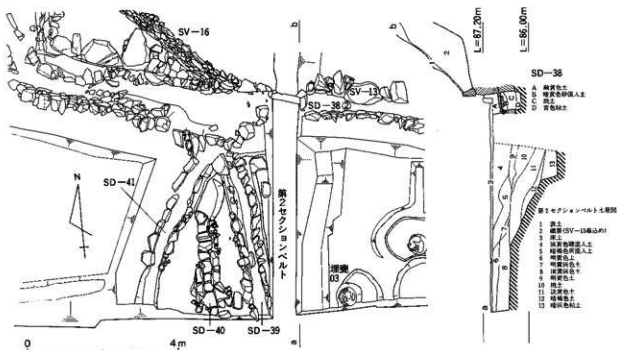
SD-41 (第111図、図版47b)

SD-39の西側で検出した石組溝である。

蓋石を有することから暗渠排水溝と考えられる。この溝もまた、SD-39・40同様に南側は調査区外のため全容は不明である。南西方向から北東方向へ延び、SD-38①に流れ込む。側石は高さ30~40cm大の石を1段立て並べ、その上に40~50cm大の割合に平らな石を蓋石としている。検出長は4.80m以上を測る。流水幅は上部で30~35cmを測り、底部で約25cmを測る。深さは30~55cmを測り、南から北へ深く掘られ、検出した範囲での底の高さは40cmの高低差を呈する。また、北側では側石の石を一段掘り込んでいた。埋土は3層に分層できる。またこの溝のベースとなる土はSD-38②の埋土と同様のもので、天正の兵火時の焼土より一時期古い焼土であった。



第111図 SD-41実測図



第112図 SD-38に集合する排水施設の図

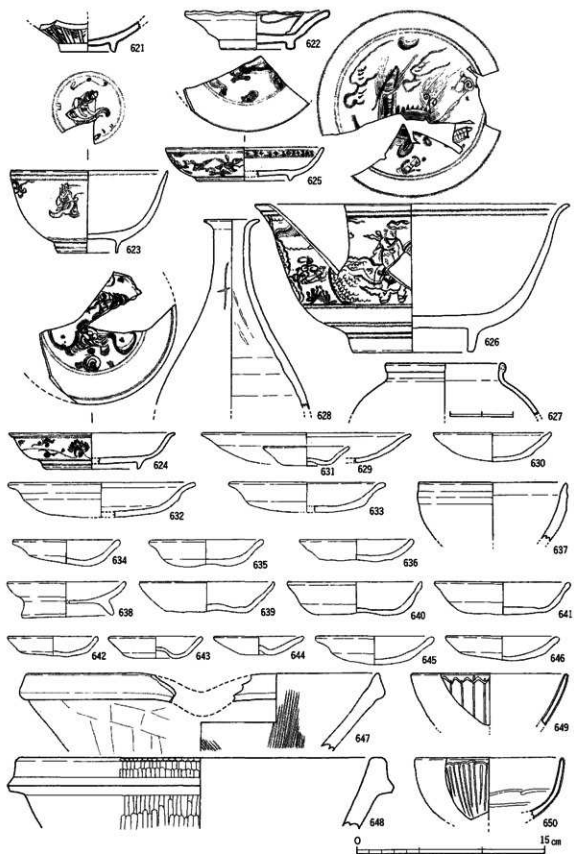
SD-38・41出土の遺物（第113図、図版84）

SD38上層 621・622は青磁である。621は椀で、竜泉窯系B0亜類とでも言うもので、B0類と似た器形と施釉方法をもつが、外面体部に細い線描の綾彩文が認められる。やや灰味の強い粗い胎土に透明度の高い淡草緑色の釉が薄く掛かる。総軸で畳付の釉を雑に削り、露胎部は茶褐色に発色する。622は稜花皿である。内面体部に雑な劃花文が認められるが、釉の透明度が低く不鮮明である。暗灰色の粗い胎土に灰緑色の釉が厚く掛かる。外底の釉を輪状に削る。623～626は染付である。623は椀C群で、外面体部に4単位と内底に天女が舞う。呉須の発色は淡いが良好で、釉は青味を帯びる。624・625は皿で、624は外面体部に牡丹唐草文、内底に玉取獅子文を描いたB1群、625は外面体部に瑞果文、内底に人物らしい模様を染付したE群である。626は端反の器形の鉢である。圈線多用し、外面体部に雲堂文、樓閣山水文、人物（仙人）文、内底に麒麟文を描く。呉須の発色は濃く鮮やかであるが、胎土は黄灰味を帯びて粗く、釉は灰味が強く、器表はやや荒れた感じで全体に粗い貫入が走る。外面全体及び内底から高台内面中位まで施釉し、畳付の釉を丁寧にケズリ取る。この鉢とセット関係をもつ、更に大型の輪花鉢の伝世も知られ、根来寺においても文様構成上のセット関係にある椀、杯などが出土している。椀はB群IX類に属するものである。627・628は備前窯の製品である。628は徳利で頸部に「十」字の寛描き窯印が見られる。外面体部は斜め方向のヘラケズリで整形し、ヘラケズリ痕を残して雑にナデる。灰褐色の精良な胎土で、器表は暗赤褐色を呈す。627は口縁が玉縁状を保つ大甕である。2石程度の容量であろうか。胎土は砂粒を多く含んで粗く、暗赤褐色を呈す。629～636は土師皿である。629・630は垂白色土化した大皿と小皿である。631は白色系ヘソ皿で、突出部が浅く、径が大きい。632は在地産の大皿と思われるものである。出土は非常に稀である。基本的な調整は633以下と同様であるが、内面底部と体部の境に浅く篋を巡らせている。やや砂気が多い胎土で黄白色を呈す。633は在地産中皿で口縁部にタールが付着する。634～636は通有の在地産小皿である。

SD38下層 637は褐釉天目茶碗である。内外面にわずかに竜毫蓋風の釉の流れが認められる。胎土は灰白色を呈しやや粗い。外面体部釉下に回転ヘラケズリ痕を残したままである。638～646は土師皿である。638は75や524などと同様の器形の中皿であるが、75のような白土器ではなく、524と同じ黄白色の胎土をもつものである。底部中心に径3mm程の穿孔が見られる。639～644は白土器である。639～641は中皿、642は小皿、643・644はヘソ皿である。644は体部の開きが大きく、器高が低い器形で、突出部も小さい。645・646は通有の在地産小皿である。647は和泉型に類似する瓦質こね鉢である。648は滑石製石饅で、外面全体に煤が付着する。外面体部に細く丁寧な縦方向のケズリ痕が見られ、口縁上端から内面体部は丁寧に磨かれている。

SD38①・② 649は竜泉窯系B4類の椀である。剣頭は連弁の単位を比較的良好に守る。

SD41 650は竜泉窯系B4類の椀。腰が張った器形で、剣頭は連弁の単位を意識しない。



第113図 SD-38①・②・41遺物実測図

SD-38①: 621~648, SD38②: 649

SD-41: 650

坊院の排水施設（第112図）

根来寺坊院跡の発掘調査は今まで面的に発掘調査した例は少なく、各塔頭を巡る排水施設の仕組みが顕著に検出された例は殆ど無い。あえて一例を挙げるなら、奥の院北側の調査例がしられる。塔頭の敷地は段状を呈し、坊院跡の排水のパターンとしては、当然の如く高所の塔頭から低所の塔頭に流入する仕組みがとられている。低所の塔頭にいくに従い水量が増すことから、取り付く溝の規模は徐々に大きくなる。また、この途中に他の塔頭の溝からも流入を受け、数条の溝が集中する。そして、最終的には谷川に流し込む方法がとられている。

SK-53

SB-09及び埋甕遺構の下で検出した。ここでは一応土坑として扱うが、北側に向けて落ち込む遺構と考えられる。SB-09西側検出面の地山(岩盤)の切れ目から西北方向で第3セクションベルトより西に広がる相当規模の大きいものと考えられる。この遺構の底はSD-38①の南側側石の下及びSV-15の下にもぐり込むものと思われるが、危険を伴うため北側の掘削は断念せざるを得なかった。当然この落ち込み遺構の規模は不明である。検出し得た規模を記すと、東西長6.0m以上、南北長1.60m以上を測る。深さは最も深い箇所で約80cmを測る。埋土の堆積状況から、南から北に掻き込まれた様子を窺うことができる。検出し得た埋土は4層に分層でき、上層から淡灰黄色土(第1層)、焼土(第2層)、黄褐色土(第3層)、灰褐色砂質土(第4層)がレンズ状に堆積していた。この内焼土から下の層は前述した如く、SD-38①の側石及びSV-15の下に入り込むことを確認した。故に、この落ち込み状の遺構は天正の兵火時以前のものと考えられる。

SK-54（第121図）

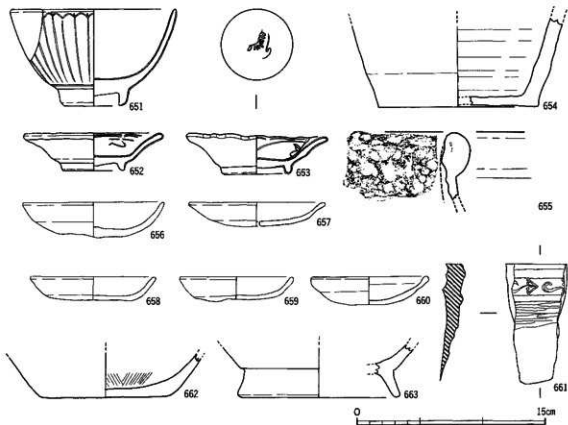
上面で検出した。貝殻がいっぱいに埋まったゴミ穴である。検出面での平面形は楕円形を呈し、長径2.80m、短径2.0mを測る。残存の深さは約30～40cmを測る。ここより出土した貝の種類はハマグリ、アサリ、カキ、サザエ等が確認され、コンテナ5個分が出土した。長期間に渡って捨てられたものか、また、大宴会の産物で短期間に投棄されたものかは定かでない。なお、この土坑からは土器類の出土は皆無であった。根来寺坊院跡の発掘調査においては、この様な貝殻ばかりが投棄された土坑は珍しく、当遺跡では初例と思われる。

SV-16（第121図）

近現在に築造された石垣と考えられ、SV-15コーナー部分の上部欠損箇所の上に築いている。SV-15のコーナー部分に対し南東から北西に斜めに延びている。発掘当時は水田の一辺の区画として利用され、基底部の1段を除いた部分が露出していた。基底部の1段分とその上部の石積みみの状況は異なり、後世の水田化の際に積み足したのと考えられる。基底部一段分は40～80cm大の石を横方向に設置し、この1段分だけが近世の石積みと考えられる。上部は近代の石積みで、平均20cm大の石を乱雑に積んでいる。規模は長さ5.20m、遺存の高さは1.20～1.40mを測る。

SK-53出土の遺物（第114図、図版85）

651～653は青磁である。651は竜泉窯系柄B4類で、蓮弁は篋描細線によるが、器形的にはB3類に近く、施釉方法もB3類に多用されるものである。B3類からB4類への過渡的段階にあるものと言える。体部がやや直線的に外方に立ち上がり、高台畳付の外からの面取が極端に大きい。外面体部に、細線によるが剣頭の単位をよく守った均等幅の蓮弁文を施し、内底には花文と思われる印花文が見られる。胎土は灰白色を呈してやや粗く、釉は透明度が高く草緑色に発色する。高台内面途中まで施釉され、外底を無釉で残す。全体に粗目の貫入が認められる。652・653は稜花皿である。非常によく似た規格であるが、653の高台径がやや大きい。内面体部の劃花文の表現や内底の印花文も異なるが、胎土や釉調は類似する。灰味が強くやや粗い胎土に灰緑色の釉が掛かる。総釉で外底の釉を輪状に雫にケズリ取る。共に劃花や印花は彫りが浅く、また釉の透明度が低いため不鮮明である。654・655は備前窯のものである。654は壺で、底部を上にした状態で焼成されたのか、外面から底部全体に自然釉が厚く掛かる。655は二石入り程度の大甕で、口縁部は玉縁状である。内面の器表が打ち欠かれたように剥離している。内外器表面が部分的にこのような状態に剥離した甕をよく見る。天正の兵火による2次焼成のために起こった現象として、兵火の凄まじさを説明する引相いによく使われる。656～660は土師皿である。656は中皿で、器形や胎土、調整が127～129などに類似する。657～660は通有の在地産小皿で、657・658の口縁には



第114図 SK-53遺物実測図

タールが付着する。なお、657は底部中心に径3mm程の穿孔が見られ、穿孔部周辺の内底径約3cmの範囲にもタールが付着している。661～663は瓦質、土師質土器である。661は瓦質の角火鉢である。外面口縁部に型押しした唐草状の文様がめぐる。胎土は非常に精良で微細な雲母粒を少量含む。662は土師質こね鉢である。内面の器表が摩耗するが摺目は非常に細く密である。胎土は砂粒を含むが比較的精良で灰赤褐色を呈す。663は427などと同様の土師質瓦登である。

SB-08上包含層出土の遺物(第115図、図版85)

664は竜泉系青磁碗B類である。高台径が小さく、あまり腰が張らない器形である。外面体部に細い線描の蓮弁を描き、内底には「顯氏」銘と篋描き劃花文が見られる。灰白色の堅緻な胎土に透明度の高い灰緑色の釉が薄く掛かる。外底の釉の処理は施であるが、輪状にケズリ取る意識のようである。「顯氏」銘の存在や施釉方法などからB類と思われる。665は白磁E群の端反皿である。胎土は砂気が多く黄灰色を呈してやや粗く、釉は光沢がなく灰味が強い。666は青白磁の唐草文梅瓶である。外面の唐草は施文具の角度の都合で大部分が片切彫状で、ごく部分的に蒔目が見られる。胎土は堅緻で精良であるが、やや灰味が強く、釉は灰緑味を帯びて発色している。全体に細かい貫入が認められる。釉は外底を露胎で残し、畳付まで施釉され、畳付の釉のケズリ取りが難いため焼台に着着した様子である。露胎部は淡黄橙色に発色する。667～669は瀬戸美濃窯の製品で、667・668は褐釉天目茶碗である。667は口縁端部がやや丸みを帯び、外面体部の露胎部分にヘラケズリ痕を残さないものである。胎土は精良で黄灰色を呈し、露胎部には化粧掛けされる。668の体部は直線的に立上り、口縁部の屈曲が強く、口縁内面に平坦な面をもつ。胎土は黄灰色を呈し、露胎部に化粧掛けされる。669は灰釉碗である。体部が直線的に開く器形で、口縁端部は丸みを帯びる。砂粒を含んでやや粗い黄白色の胎土に、透明度が高く、光沢のある黄灰色の釉が掛かる。露胎で残した体部下半に回転ヘラケズリ痕を残す。なお、破損部に漆塗した痕跡が認められる。670は備前窯の大甕である。口縁が相当扁平になり、波状の段の付く直前のものである。胎土は堅いが砂粒を多く含んで粗く、赤褐色を呈す。671～679は土師皿である。671・672は亜白色土化した大皿である。673は外型による中皿である。胎土は671・672などと似て灰黄色を呈すが、砂気が多くやや粗い。型押しにより球面に近い外面体部をもち、口縁部内面に平坦面をもつようにヨコナデされる。口縁部にタールが付着する。674～679は在地産土師皿で、674は中皿、他は通有の小皿である。すべての口縁部にタールの付着が認められる。680・681は瓦質、土師質土器である。680は瓦質火鉢であるが、著しく摩耗し、器表をすべて失う。681は45などと同様の砂粒を多量に含んだ粗い胎土の土師質鍋である。682・683は同范の巴文軒丸瓦である。巴の先端が円く、尾は半周する程度である。珠文は小さいが、周縁部は低い。684・685は唐草文軒平瓦である。周縁の高さや瓦当部の高さなどは、共によく似た程度である。周縁両端部は684が狭いが、頸部は685の方が厚い。686は鬼瓦の鬼面部で、367などと同様のタイプである。

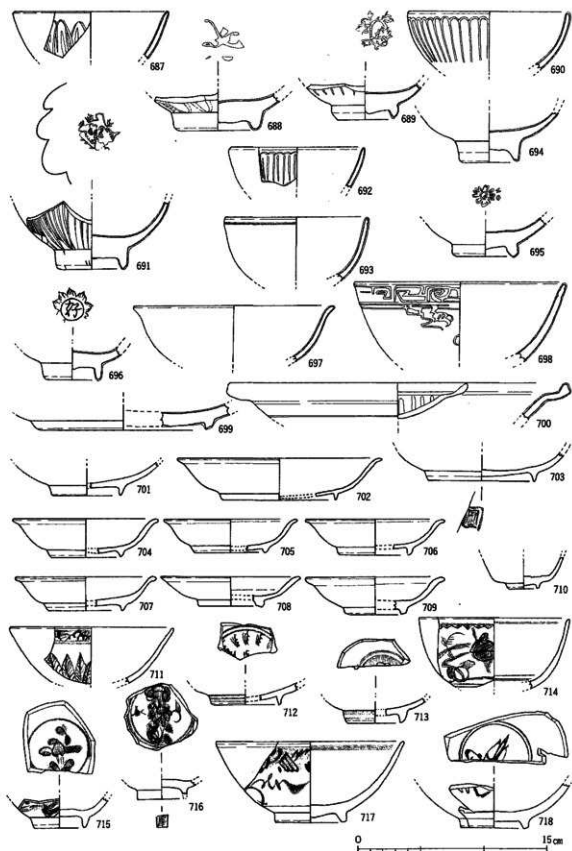


第115图 SB-08上包含层遗物实测图

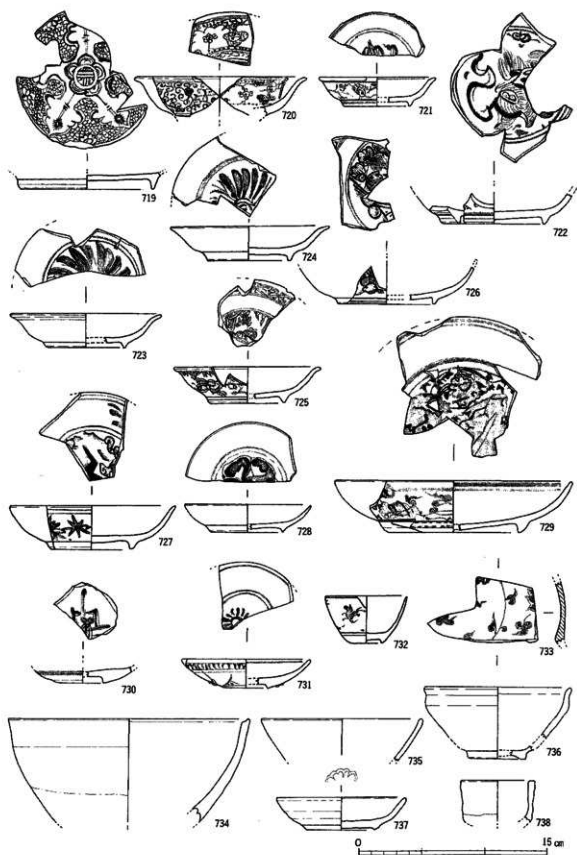
谷部B地区下段包含層出土の遺物（第116～120図、図版85～88）

687～700は青磁。687は竜泉窯系碗B 1類で、B I類に細分。688は大型の碗で、竜泉窯系B 2類に相当。外底の釉を輪状にケズる。689～692は竜泉窯系碗B 4類。689は高台内面途中まで釉が掛かり、691は外底の釉を輪状にケズる。693～696は竜泉窯系碗E類。694は総釉し、高台内面から外底の釉を雫にケズる。695・696は高台内面途中まで釉が掛かるが、696は一部釉が外底に回り、輪陶枕底を残す。697は竜泉窯系碗D類で、D II類に細分。689は竜泉窯系碗C 2類。釉が厚く、透明度が低いため不明瞭であるが、雷文は型押ししか。699・700は盤。699は外底の釉を輪状にケズる。700は太い丸鑿による蓮弁。701～710は白磁E群。701は碗。釉には光沢があり、疊付の釉のケズりも丁寧。702・703は大型の端反皿。共に丁寧な作りで、703の外底には青花銘。704～707は通常の端反皿。704は比較的丁寧な作り、705～707は胎土、釉の灰味が強く、施釉も雑。705の疊付から外底には多量の珪砂が付着。708は断面台形の削出し高台をもつ端反皿。通常のE群の皿と異なり、非常に透明度が高く、光沢のある青白色の釉が厚く掛かる。疊付の釉を削らず、珪砂が付着。高台内面に残る露胎部は赤橙色に発色。709も通常のE群皿と異なる。口縁を極端に外に折った器形で、断面台形の高台をもつ。疊付の釉を削らず、珪砂が付着。胎土はやや陶質で、釉は粘土が高く淡灰緑色を呈し、全体に貫入。施釉方法、胎土、釉調など、華南系染付と類似。710は通常の杯。711～733は染付。711～713は碗C群の蓮子碗で、711は外面に蕉葉文と波濤文、712は内底に法螺貝、713は外面体部と内底に梵字文を描く。714～716は碗E群。714は外面に牡丹文、715は内底に花卉文を描き、716は内底に菊花文、外底に著しく便化した「富貴佳器」銘が見られる。717・718は同一個体と思われる大型の碗。711～716などとは生産窯の系統が異なると思われ、華南系染付と称されるものの一種。体部が外反気味に立ち上がり、削出しの低い高台をもつ。濃筆で、外面に波濤文と唐草文、内底に蓮華文を描く。釉は淡灰緑色気味で、呉須は灰味を帯びて発色。高台外面まで施釉されるが、一部の釉は疊付に回り、少量の珪砂が付着。719～722はB 1群の端反皿。719・720は外面体部に密な渦状唐草文、内底にアラベスク風の文様をもち、180・200などと同種。721・722は外面体部に牡丹唐草文を描く。721は小型で、内底に羯磨文、大型の722の内底には玉取獅子文。723～725はB 2群の端反皿。723・724は外面無文で、内底全体に捻花風の便化した牡丹文を描く。釉、呉須は灰味が強い。725は外面体部に瓊果文、内面に四方禪と山水風の文様。染付は細線で輪郭を取り、中を濃で潰す。釉の発色は鮮やか。外底圏線内に「富貴佳器」銘が見られる。726～728は皿E群。726は外面や内底に花卉文、727は外面体部に折枝文、内底に如意雲と花鳥を描く。728は外面無文、内底の文様は捻花か。729は口縁の内彎する大皿。胎土は淡黄褐色で陶質であるが、華南系とは施釉方法が異なる。外面体部に雑な牡丹唐草文を描く。外底の施釉は刷毛に依る。疊付の釉のケズり取りは比較的丁寧。730・731は皿C群。共に磁質のタイプ。疊付の釉をケズるが、731には多量の珪砂が付着。732は杯。高台か

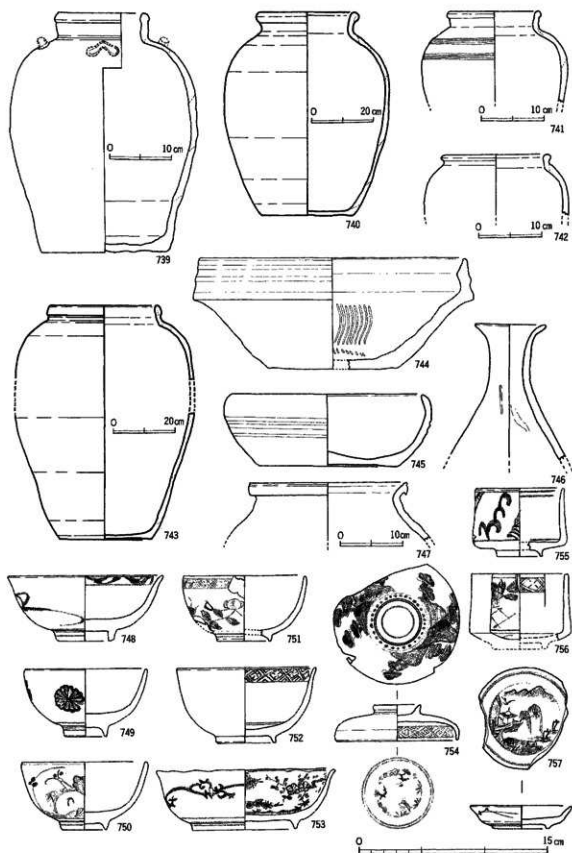
ら体部が直接立ち上がる器形。733は蓮華唐草文の袋物であるが、小片で器形は不明。734は褐釉鉢、蓋受の付いた天目茶碗風の器形で、灰褐色の精良な胎土に暗褐色の釉が薄く掛かる。外面体部下半が露地で、露胎部にはヘラケズリ痕を残す。735は李朝の灰釉碗。いわゆるソバ茶碗の類で、釉は灰緑色を呈す。736・738は瀬戸美濃窯の製品。736は褐釉天目茶碗。体部が外反気味に立上り、口縁部で大きく屈曲。737は灰釉皿。口縁が内彎し、高台は低く小さい。内底に菊花の印花文。738は灰釉の小型香炉。胎土は黄白色で、やや軟質。釉の透明度は高く黄緑色を呈す。内面口縁部から外面体部下端まで施釉。739～746は備前窯のもの。739は大型壺で、四耳を付す。740～742は中型の壺。一応玉縁状の口縁をもつが、742の頸部は非常に短い。743は2石入り大甕。口縁は扁平化が進む。744は描鉢。口縁が上方に大きく拡張し、外面に波状の段が付く。構目は8条1単位。胎土は淡赤褐色を呈し、堅緻で精良。745は鉢。平底で、内彎気味に立ち上がる体部を口縁で更に内側に倒す。内外面体部を丁寧にヨコナデし、外面体部中位に回転を伴って凹線を施し、体部下半から外底をヘラケズリする。胎土は灰白色で器表は明赤褐色を呈す。746は徳利。頸下部に窯印と思われる「|」の筥描線刻が見られる。747は常滑窯の甕。口縁は折返して短く垂下し、N字状にはならない。748～756は肥前窯の染付。748～752は碗。748は口縁がやや外反するもので、467などと同種。内底を蛇ノ目釉刺し、中心に五弁花のコンニャク判が見られる。749～752は口縁の内彎するもの。749は外面体部にコンニャク判の菊花を押す。750は142・147などと同タイプ。751は薄い器内で、外面体部に繊細なタッチの草花文を描く。752は青磁染付。蓋148と異なり、内底の五弁花は筆描による。外底に「渦福」銘が見られる。753は稜花鉢。内面体部に松竹梅、内底に筆描き五弁花、外面体部に唐草を描き、外底に「渦福」銘。754は外面に山水、内面に松竹梅を描いた蓋。755・756はソバ猪口で、755の内底には五弁花。757は関西系と称される染付小皿。内面に山水を描く。758～760は肥前窯の陶器。758は灰釉碗、759・760は鉢。759は玉縁状の口縁の刷毛唐津で、片口が付く。760は唐草の印花を巡らす三島手。761は堺描鉢。762は備前窯の描鉢。763は丹波窯の大甕。764～785は土師皿。764～768は白土器、769は127と同様のもの。770～777は亜白色土化した胎土のもの、778～780は131・132などと同様の橙褐色の精良な胎土をもつ。781～785は通有の在地産である。小皿785は底部中心に穿孔し、口縁部2か所以上をU字形に挟む。挾部分周辺にはタールが付着する。786～799は瓦質、土師質土器。786は552と同様の増場の類。787・788は瓦質火鉢。787は角火鉢で外底は粗い刷毛で不定方向に調整。789は土師質の火鉢か。口縁上端面の蕨手と外面の唐草は線刻。790は瓦質風呂と思われるが、火中して一見土師質。791は瓦質こね鉢。792～794は土師質釜。792は大和型、793・794は紀伊型。795・796は土師質瓦燈。797は566と同様の土師質焙烙。798は焼塩壺の蓋。799は土師質の七輪の類。800は367などと同様の鬼瓦である。801も鬼瓦で、下端に玉縁が付く。組合せ式か。802は鯨である。様門などに使用か。初出例。



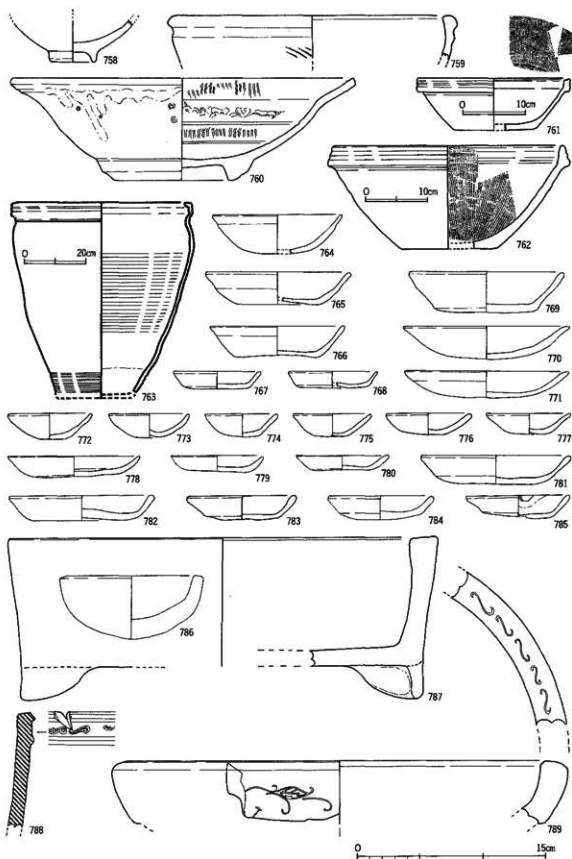
第116图 谷部B地区下段包含層遺物実測図 1



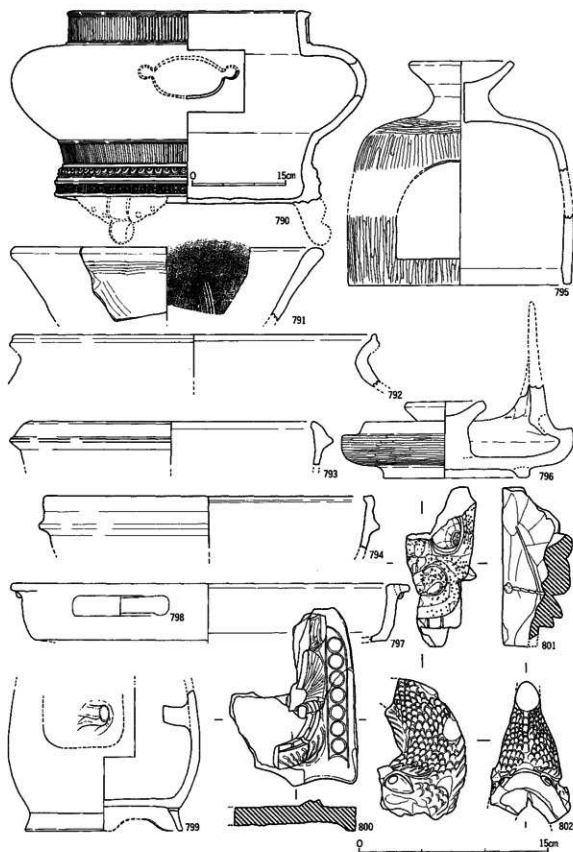
第117图 谷部B地区下段包舍层遗物实测图2



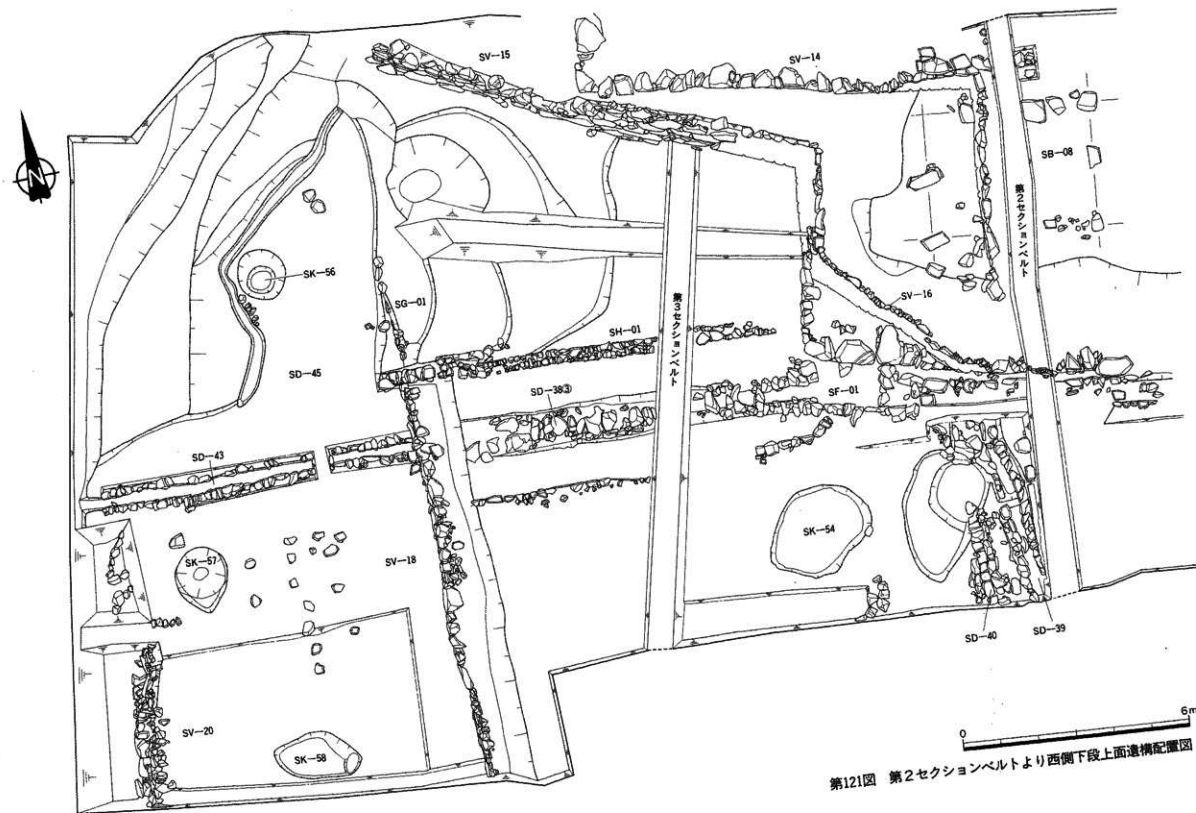
第118图 谷部B地区下段包含層遺物実測図3



第119图 谷部B地区下段包含層遺物実測図 4



第120图 谷部B地区下段包含層遺物実測図5



第121図 第2セクションベルトより西側下段上面遺構配置図

第2セクションベルトより西側下段上面遺構の概略(第121図)

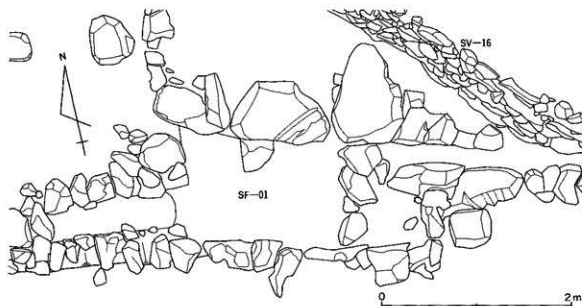
近世の塔頭の敷地を下段で東西に2区画検出した。西の塔頭の敷地の方が一段低くなっていた。これらの敷地は、北側では上段で検出したSV-14及びSV-15の覆土が南の低い方へ傾れ込んだ様な状況を呈していた。この覆土は上層から崩落土、焼土であり、この土を除去後明黄色土をベースとして近世の遺構面を検出した。また、南側の現況は東の敷地は水田、西の敷地は柑橘畑であった。なお、東の敷地については床土下の焼土混入土と焼土層除去後検出した。敷地の南側は調査区外のため検出できず、敷地の規模は不明である。これらの塔頭の敷地を画するものとして、西を限る石垣を検出した。東の塔頭については、北は土塀で画されていたと思われる。この上面で検出した遺構としては石垣、土塀、階段、石組溝、礎石建物、土坑等がある。この内、土塀(SH-01)と階段(SG-02)についてはこの項で記す。SH-01は検出長約9.0mを測り、幅は約40cmを測る。石積みの遺存は2段分であった。土塀の西端北側で下段から上段に登る階段と考えられる施設を検出した。南側の側石を検出し、階段状の掘り込みを検出したに留まった。

SD-38③(第121図)

下段東側の敷地部分の石組溝である。結果的には西側の敷地のSD-43と同一のものとなる。蓋石を有することから判断して暗渠排水溝である。掘形の幅は約1.50mを測る。石積みは4段分で深さは30~60cmを測る。断面形は「U」字形を呈し、埋土は焼土混入灰色砂質土の単一層である。

SF-01(第122図、図版47a)

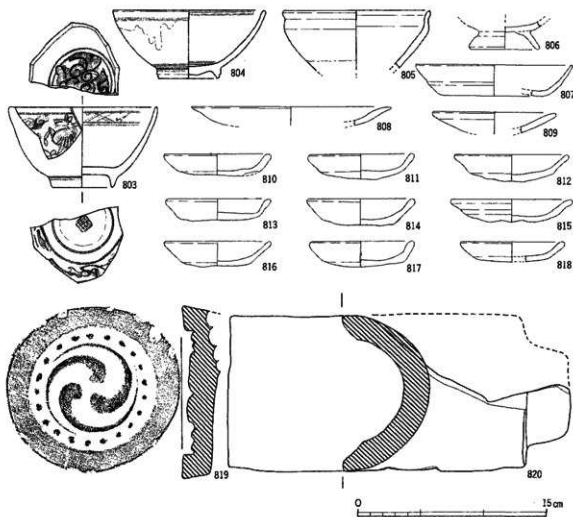
SD-38③に取り付く石組みの溜槽状の施設である。形状は長方形、深さは約1.0mを測る。この施設の水位がSD-38③の底と同じ高さになれば水が流れる様になっていたと考えられる。



第122図 SF-01実測図

SD-38③出土の遺物（第123図、図版89）

803・804は染付である。803は饅頭型の碗E群で、外面体部に飛馬文、内底に如意雲文を描き、外底に「富貴佳器」銘が見られる。内外面体部の釉は透明度が低く、呉須は不鮮明で淡く発色する。外底の銘は濃く鮮やかである。804は華南系とされるものの一種である。削り出し高台で、体部はやや内彎する。染付は内外面の数本の圈線のみで、しかも釉は白濁して染付は極めて不明瞭である。高台内面から外底を露胎で残し、疊付の釉を雑にケズる。805は瀬戸美濃窯の褐釉天目茶碗。口縁端部が丸みを帯び、露胎部にヘラケズリ痕を残さない。胎土は黄白色で、釉は淡茶褐色。露胎部に化粧掛けされる。806～818は土師皿である。806・807は白土器で、806はバチ状に開いた高い高台をもつ。808～809は亜白色土化した胎土のもの。810～818は通有の小皿である。810～813には617～620と同様の粘土紐を押潰した痕跡が認められる。819は軒丸瓦である。巴の先端は丸く肥大し、尾は半周する程度で短い。珠文は小さいが、周縁部は低い。820は丸瓦である。玉縁は短く、小口部の面取角が大きい。凸面に幅1cm程度の縦方向のヘラミガキが施される。

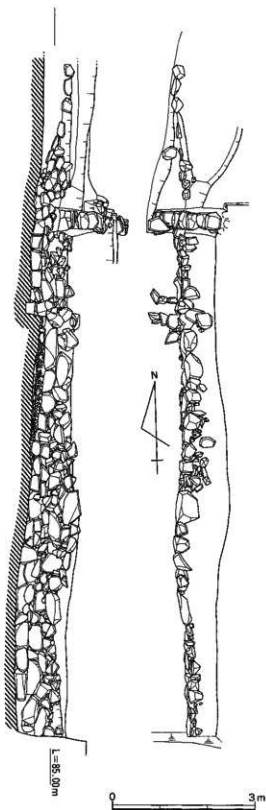


第123図 SD-38③遺物実測図

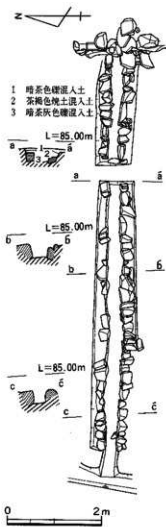
SV-19 (第124図、図版48a)

下段上面の東と西の敷地を界する南北方向の石垣である。南は調査区外のため、その敷地の南北長は不明であるが、検出長は10.80mを測る。最も遺存の良好な箇所での石積みは6段分、高さ約1.10mを測る。上段の敷地の高さで裏込めの高さから判断すると、この石垣築造当初の高さは最低でも1.8mはあったものと考えられる。

この石垣は床土下の包含層除去後検出した。この包含層は灰色土に焼土と炭が混入したもので、人為的な整地によるものと考えられる。また、裏込めは明茶色土の単一層で、込石は皆無であった。この石垣の西側の土は堅く締まっていた。その幅は1m弱で、SV-19に沿っており、おそらく、この塔頭の敷地を巡る道であると考えられる。石垣の途切れる北端で、これに対して直角の東西方向の土塀の基礎を検出した。東西長9.0mを測り、この土塀の基礎は15~20cm大の石で両側の面を成す幅約40cmの石列である。遺存している石積みは2段分であった。これはもともとSV-15のコーナー部分に接続していたものと推定できる。故にこの石垣(SV-19)と土塀(SH-01)の接合部は東側敷地の北西コーナーを成していたと思われる。この箇所でも東西方向の階段と考えられる施設を検出した。遺存していたのは南側の側石と思われる石積みと、段状に削り出した箇所に若干の踏石が貼り付いていたもののみであった。この状況からは昇降施設としての階段とは断定し難いが、同一の土で段状を成していることから、階段の可能性もあると考えておきたい。幅は約3.0m、長さ12.0mを測る緩やかな段で、おそらく敷石を敷き詰めていたような階段であろうと考えたい。



第124図 SV-19実測図



第125図 SD-43実測図

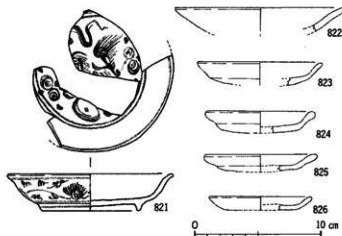
りは端面と外端部面取の2方向から丁寧に行うが、少量の珪砂が付着する。822~826は土師皿である。822は精良な淡灰黄褐色の垂白色土を使用した中皿である。体部が外方に大きく開いたもので、器高が低くなっている。823~826は16世紀代の根来寺に通有の、在地性の強い小皿である。体部の強いヨコナデにより口縁部が肥厚気味に外反する。胎土は細かい砂粒を含んでやや粗く、823~826などのように黄橙色を呈するものが多い。また、824のように微細な雲母粒を含むものもある。

SD-43 (第125図、図版50b)

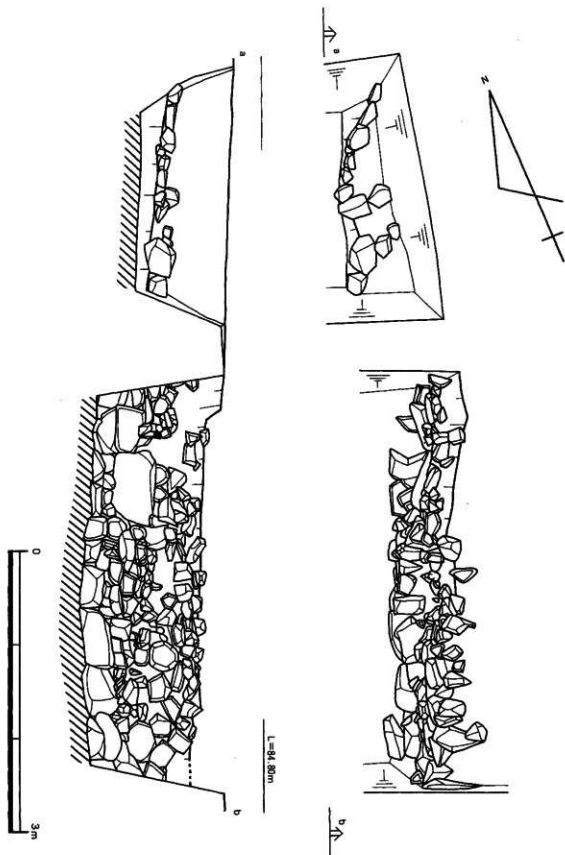
下段西側の塔頭の中央部を東西に延びる石組溝である。床土直下の暗茶色礫混入土除去後検出した。東のSD-38③からの流入をうけ、西の蓮花谷川へ流れ込んでいたものと思われる。この溝は検出時は開渠になっていたが、SD-38③と同様にももとは暗渠排水溝であったと考えられる。検出長は9.0mを測る。掘形の幅は約85cmを測る。この掘形内に20cm程度の小振りの石を規則正しく並べ、内側の面は整然と並べられていた。石積み遺存は2段分で、深さは約30cmを測る。この溝の東端と西端の底の高さは約20cmの高低差があった。断面形は「U」字の形状を呈する。埋土は3層に分層され、上層から暗茶色礫混入土、茶褐色焼土混入土、暗茶灰色礫混入土で、茶色系の土で埋まっていた。ここから出土した遺物は殆ど無く、中国製染付皿、白磁皿、土師器皿、備前焼甕片等であり、いずれも破片であった。また、近世の遺物は皆無であった。しかし、遺構としては近世の整地面で検出したものである。従い、この溝の時期は近世と考えられる。

SD-43出土の遺物 (第126図)

821は染付皿B1群である。端反の器形で、外面体部に牡丹唐草文を描き、内底には玉取獅子文が見られる。このタイプには大小あり、大型品には丁寧な作りのものが多い。釉はわずかに青味を帯び、呉須は色濃く鮮やかに発色している。畳付の釉のケズリ取



第126図 SD-43遺物実測図



第127图 SV-20实测图

SV-20 (第127図、48b)

下段の西端で検出した石垣である。敷地の西を限るものである。北側は途中で崩れ、南側は調査区外のため、その全容は不明である。検出長4.40m、残存の高さは1.20mを測る。基底部は50~60cm大の石を横並びにしているが、それより上方は細かな石を使用し、積替えが認められる。

SK-56 (第121図)

この遺構の辺りは岩盤が露出していた。これの西側は岩盤を形成して西端を限っており、この土坑も岩盤を削り貫いていた。形状は円形を呈する。直径約1.25mを測り、深さは約50cmを測る。出土遺物は備前焼甕の破片が少量であった。甕が据え付けられていた可能性が考えられる。

SK-56 出土の遺物 (第128図)

827は褐色系土師小皿である。粘土円板から体部をやや内彎気味に浅く引上げたもので、289~291などと同様のタイプである。黄白褐色の精良な胎土をもつ。内外口縁部に強いヨコナデが施され、外底周縁にもナデが及んでいるようである。口縁部の一部にタールの付着が認められる。

SK-57 (第121図)

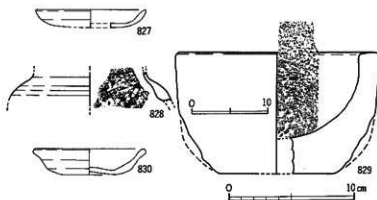
SV-20の北東に隣接して検出した。小さい楕円形の土坑であった。長径1.75m、短径1.35mを測る。深さは約30cmを測る。埋土は単一層で焼土であった。これもまた、SK-56同様甕の抜き取り穴だと考えられる。出土遺物は少量で手洗鉢、備前焼壺の破片、土師器皿片であった。

SK-57 出土の遺物 (第128図)

828は備前窯の壺である。玉縁状の口縁をもつ通常の中型壺と思われが、火中によるのか、655同様に内面の器面が打ち欠いたように剥離している。胎土は砂粒を含んでやや粗いが堅く、暗赤褐色を呈す。829は手洗鉢と思われる。比較的良質の和泉砂岩製であるが、表面の仕上げは茶白などと比べて雑で、鑿の痕跡を残したままである。火中して赤みを帯び、表面が一部剥離する。

SK-58 (第121図)

南西で検出した不整形の土坑である。長径2.25m、短径1.25m、残存の深さは約20cmを測る。埋土は暗茶色礫混入土であった。壁の立ち上がりはなだらかで緩い。出土遺物は微量で、備前焼



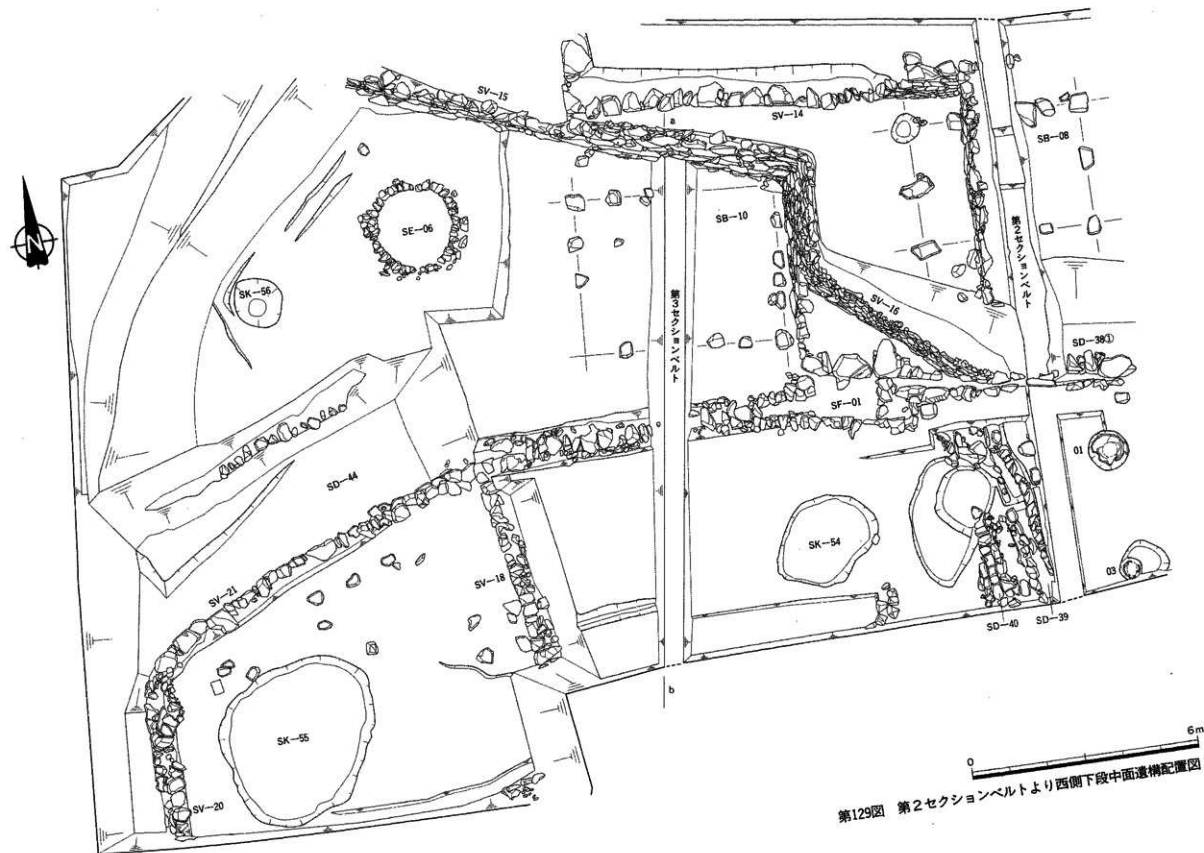
第128図 SK-56・57・58遺物実測図

SK-56 : 827, SK-57 : 828・829, SK-58 : 830

の甕片2片、土師器皿片が1片出土したのみであった。

SK-58 出土の遺物 (第128図)

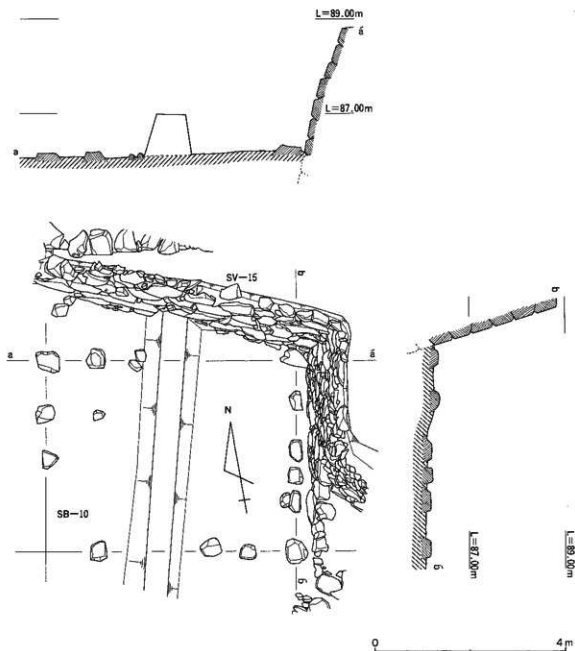
830は通有の在地産土師小皿である。胎土は比較的精良で、灰黄褐色を呈す。824同様に微細な雲母粒を含む。口縁部外面にタールが付着する。



第129図 第2セクションベルトより西側下段中面遺構配置図

第2セクションベルトより西側下段中面遺構の概略(第129図)

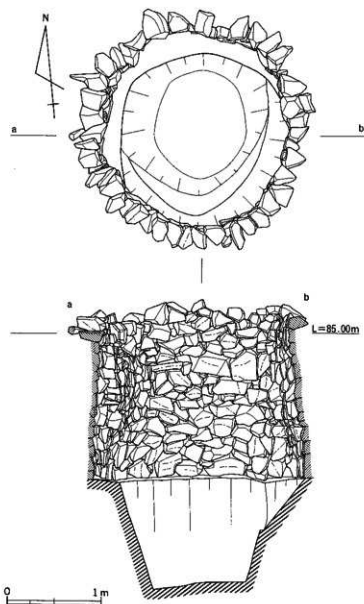
この遺構面は天正の兵火時に係る時期の面と思われる。近世の遺構面と比し、最も様相を異にしているのは、塔頭の敷地の変貌である。東の敷地は新たに検出した石垣(SV-18)で西を限っていた。従って、近世に比べ東の敷地は狭く、西の敷地が広がった事が判明した。また、北側では礎石建物や大規模な井戸が検出された。最も西端を限る石垣(SV-20)はSD-44の大溝と銅石を共有する様になるが、天正の兵火時のものではなく、これより一時期古い時期と考えられる。



第130図 SB-10実測図

SB-10 (第130図、図版49a)

SV-15のコーナー部分に沿う様な状況で検出した礎石建物である。この遺構は上面の遺構除去後、整地土である暗黄褐色土、淡黄色礫混入土を約40cm下げた地点で検出した。これは東西棟の建物と考えられ、規模は桁行5間(5.10m、間尺1.02m)を測り、梁行4間(4.08m、間尺1.02m)を測る。南側の桁方向と東側の梁方向には、東石と思われる礎石をそれぞれ1個ずつ検出した。また、北西コーナー部分に小振りの東石と考えられる礎石も検出されている。石材は全て割石の砂岩であった。東側梁行の礎石は、この時期のSV-15の基底部分とわずかに15cmと非常に隣接していた。故に、この建物はそのまま上方に高く突き出す櫓の様な建物と想定できる。



第131図 SE-06実測図

SE-06 (第131図、図版53a・b)

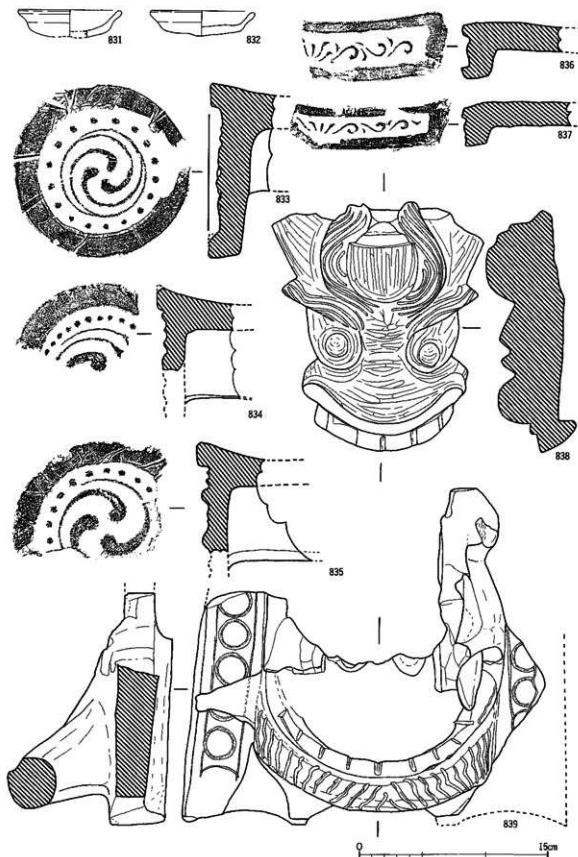
下段北西隅で検出した石積の井戸である。この井戸の西側は岩盤を整形して敷地の西限を成している。この遺構のベースとなる土は北と西は岩盤であり、南と東は整地土の淡灰色砂質土除去後検出した。

掘形の形状は楕円形を呈し、南側ではSD-44を切っていた。東西長4.5m、南北長4.5m以上を測る。埋形内の埋土は検出面で黄灰色土であった。石組みの形状は円形を呈し、裾広がり石を積んでいた。石材は全て和泉砂岩の割石を使用し、石の大きさも20~30cm大のものであった。この井戸の深さは3.0mを測り、上部から1.85mの地点までは石を積み、それから下方の1.20mは岩盤を削り抜いて湧水を溜める箇所としている。石積

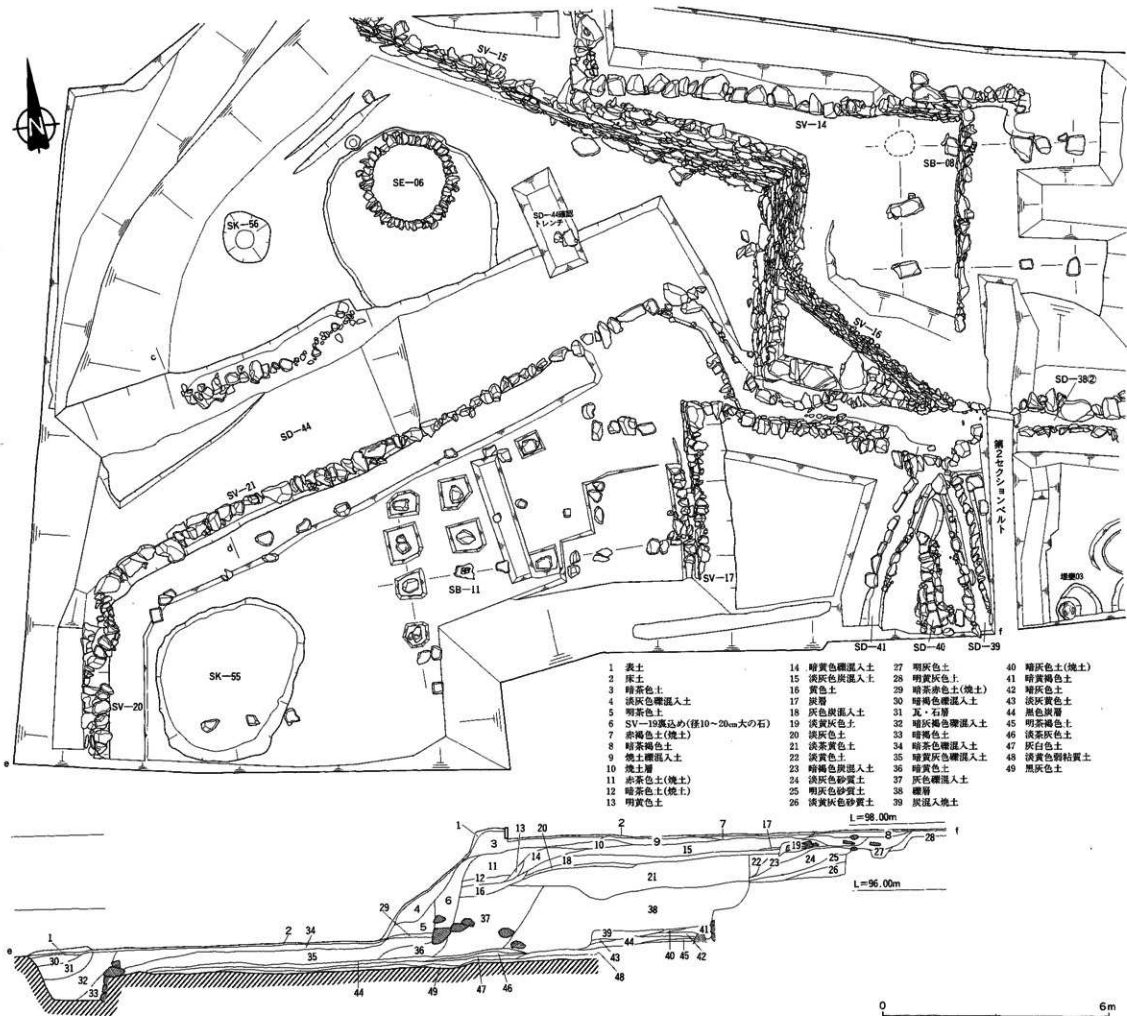
みの検出面の形状もやや南北方向に長い楕円形を呈し、規模は内径で長径約2.10m、短径約1.90mを測る。また、石積みの基底部は内径2.20mを測る。水溜部分と考えられる岩盤整形の箇所は石積みよりやや狭くなり、北側と西側では石を積むために造り出したと考えられる平坦面が確認できた。東側と南側の岩盤整形は、北側や西側の様な直線的なものではなく、屈曲している。底部の直径は約95cmを測る。この井戸の埋土は大きく2層に分けることができ、上層は焼土・礫混入土、下層は青色粘質土であった。この井戸は根来寺坊院跡の発掘調査において過去検出した井戸の中では規模の大きなもので、昭和60年度調査の桃坂道で検出したものと類似する。^(註13)この2層の厚さはそれぞれ1.50mであった。ここからの出土遺物には軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、土師器皿、備前焼甕片等の遺物がある。これらのうち、下層から出土したものは鬼瓦のみであった。

SE-06 出土の遺物 (第132図、図版89)

831・832は通有の在産土師小皿である。体部に強いヨコナデを施し、口縁部が肥厚する。内底を不定方向にナデ、外底は未調整のままである。831の胎土は砂粒をやや多く含んで暗褐色を呈し、832は比較的精良で黄褐色を呈す。833~835は軒丸瓦である。すべて左巻の三巴文である。833は珠文帯と内圏線をもつ。巴は相互の先端が離れ、頭が丸くなるが、さほど肥大していない。尾は半周強回って圏線と付く。珠文は小さいが疎らで、17個である。周縁高は低く、内外端部を浅く面取する。瓦当厚は他の二者より厚い。周縁上端面、瓦当側面を周縁に沿ってナデ、瓦当裏面及び胴との接合部を不定方向にナデる。わずかに残る胴部凸面には幅約1.5cmの縦方向のヘラミガキが見られる。胎土は砂粒を多く含んでやや粗く、灰白色を呈す。834は682・683と同范瓦である。圏線を失うが珠文は小さく、密で、31個である。巴の先端は丸く肥大している。尾はほぼ半周回る。周縁高は低く、瓦当厚は薄い。周縁内外端部をごく浅く面取する。胴部凸面には幅約1cmの縦方向のヘラミガキが見られ、凹面には粘土板糸切の際の斜め方向の弓痕が残る。胎土は砂粒が少なく精良で、淡黄灰色を呈す。835は火中して土師化する。珠文は小さいがやや疎らで、圏線はない。巴は大きく高い。先端は丸く肥大し、尾は短い。周縁高は低く、瓦当厚は834より更に薄い。胴部凹面には粘土板糸切の際の斜め方向の弓痕が残る。胎土は砂粒を多く含んで粗い。836・837は唐草文軒平瓦である。836は火中して胎土が土師化する。唐草の簡略化が進み、周縁が低く、顎部が薄い。837の唐草の簡略化は更に進む。周縁は低く、瓦当部の縦幅も小さい。顎部は下端部で平瓦部より薄くなっている。838・839は同一個体の鬼瓦である。鰭を竹管文状の珠文で飾った板に鬼面を付けたもので、367などと同一のタイプである。額を宝珠で飾り、二角が生えた頭部には鬘状の毛が表現されている。太い眉と団栗眼、小鼻が極端に発達した顔面をもつ。口を開き、大きい歯の奥には上顎から牙が覗き、反対咬合の下顎には鬚が生える。鬼面の調整はヘラミガキにより、板部の調整はナデによる。胎土は微細な砂粒を含むが比較的精良で、灰白色を呈す。右半面の器表は良好に焼されるが、左半面は煙が不十分で暗灰色を呈す。



第132图 SE-06遺物実測図



第133図 第2セクションベルトより西側下段下面遺構配置図

第2セクションベルトより西側下段下面遺構の概略(第133図)

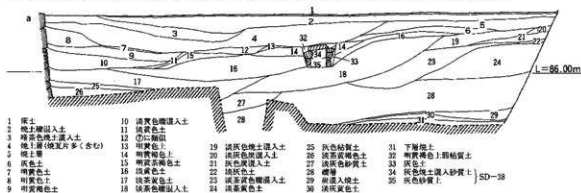
天正の兵火に係る時期より以前の遺構面と考えられる。この遺構面では東側の敷地は中面で検出した広さよりもより狭くなっていた。中面で西を限るSV-18を検出した箇所から、同方向に東へ約7.60mの箇所での下面に伴うSV-17を検出した。この結果、西側の敷地は東へ広くなり、西を限っていたSV-20は北東に屈曲する。この屈曲する石垣をSV-21とした。このSV-21は西側の敷地の北を限り、この敷地の北に沿って東西に延びる幹線的な流路の南壁と共有していた。この幹線流路はSV-15の下に入り込むことを確認した。この地区だけで判断するのは危険であるが、この様な状況から、天正の兵火に係る根来寺の最盛期にはこの様な谷間まで埋め立て、山内においても余す所なく塔頭が建ち並んでおり、新たに建てるための用地が不足していたということが窺える。この面で検出し得た遺構は石垣、礎石建物、幹線流路、土坑であった。

第3セクションベルト土層堆積状況(第134図、図版51a)

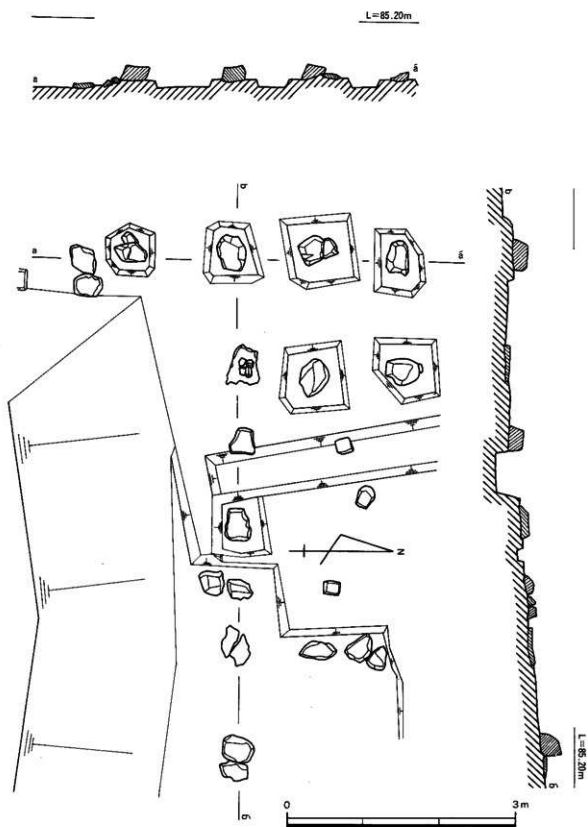
第134図で示した土層堆積状況は下段の敷地の南北方向の土層図である。近世の遺構(上面)検出面までの堆積層は第4層までで、瓦片を多量に含む焼土層であった。この焼土層は土層の色や質に違いが見られ、4層に分層できる。これらの堆積層を上段からの崩落土として処理した。また、堆積状況を見ても北側の堆積は厚く、いかにも上段から掻き落とされた様子を呈していた。上面の遺構面から中面の遺構面までは約1.50mの比高差があるが、中面の遺構面と下面の遺構面は比高差が殆ど無かった。この間の堆積状況から金製の刀の飾り金具が出土した。上面遺構検出面から下面遺構検出面までの堆積土は整地土と考えられ、下面遺構検出面から下は炭層及び黒灰色土であり、これはトレンチを入れて確認した。おそらく天正期以前の焼失時の土と判断できる。

SB-11(第135図、図版52a)

西側の敷地で検出した礎石建物跡である。この建物は礎石の配置状況から、SV-17に接し建っていたものと考えられ、また、SV-17と平行を呈する。南は調査区外のためその全容は判らなかった。規模は桁行2間以上(約6.60m)、梁行3間以上(約3.60m)を測る。この建物の間尺は全て短く東柱の礎石と考えられ、周りには酒縁が巡る御堂の様な建物が想定できる。



第134図 第3セクションベルト土層図

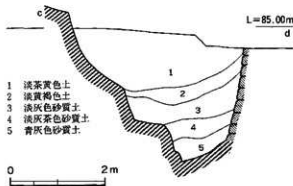


第135图 SB-11实测图

SD-44 (第136図、図版51b)

谷部B地区の最西端の位置で検出した石積みの東西に延びる大溝である。南壁は石積(SV-21)で護岸を施し、北壁は岩盤を2段に削り出していた。この岩盤削り出しの上段では当初石が積まれていた痕跡を確認した。規模は検出長約18.0m以上を測り、掘形の幅は3.5~4.2mを測り、SV-15のコーナー部に向かって延びることを確認し、危険を伴うため発掘調査を途中で断念した。流水幅は約2.75mであった。

残存の深さは約3.0mを測る。埋土はレンズ状に堆積し、第136図の様な状況であった。この溝の性格は先の項でも触れたが、各塔頭の排水路から塔頭間の排水路に流れ込み、最終的にはこの様な幹線流路に流す



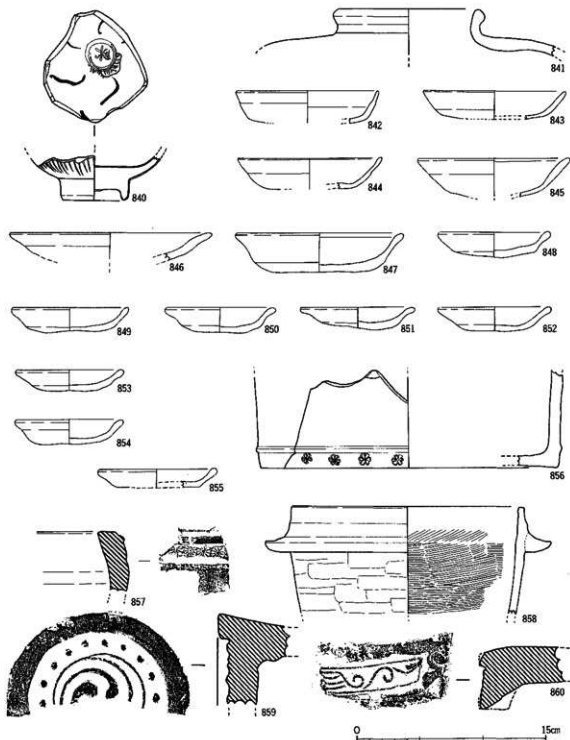
第136図 SD-44土層図

ものと考えられる。おそらく、一廻りの敷地の集水がこの溝に流し込まれており、一つの谷間にはこの様な溝が数条あったものと思われ、塔頭の廻りを考える上でも興味深い。

SD-44出土の遺物 (第137図、図版89)

840は竜泉窯系青磁碗B4類で、外面体部に細く密な線描き蓮弁文が巡り、内底には篋描き劃花文と印花文が見られる。胎土は非常に精良で淡灰白色を呈し、釉は暗緑色で透明度が高い。縁釉し、外底の釉を輪状にケズリ取る。841は備前窯の壺。玉縁状口縁をもち、頸部が短く、肩が張る。胎土は堅緻で暗灰色を呈し、外面肩部には胡麻状に灰を被る。842~855は土師皿。842~844は白土器の中皿で、842・843は通常の乳白色の精良な胎土であるが、844の胎土は砂気をやや多く含んで黄灰味を帯びる。845・846は重白色土を使用した中皿。845は器高が高く、体部は外方に直線的に開く。胎土は淡黄白色で、砂気が少なく精良である。846は器高が低い。口縁端部の押ナデは行わず、外面口縁部のヨコナデ幅が広い。胎土は砂気が多く、淡灰黄白色を呈す。847~855は通有の在地産で、847は中皿、他は小皿。橙褐色の胎土をもつ848・849には微細な少量の雲母が認められる。また、比較的精良な淡黄橙褐色の胎土の850~852および、橙褐色で砂粒を含んで粗い胎土の853には外底に粘土紐を潰した痕跡が残る。856~858は瓦質土器。856・857は火鉢。856は外面体部に篋状の凸帯が回るもので、体部下端にカタバミの印花文を巡らす。灰白色の精良な胎土で、砂粒をあまり含まない。調整等は不明瞭。857も凸帯を回すものである。外面口縁部に巡る凸帯間に菊花の印花文を密に配す。内外の調整は主にヨコナデにより、口縁上端面はヘラミガキである。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、微細な雲母粒が少量認められる。858は羽釜。小型で、河内型とされるもの。外面口縁部に浅い凹線を巡らせて段を付け、厚く丈夫な鈎を回す。内面体部全体にはば2cm程の粗目の刷毛調整を左回りに施し、口縁部から鈎部をヨコナデ

する。外面体部は粗く横方向にヘラケズリする。胎土は砂粒を多く含んで粗く、灰白色を呈す。内面の器表は燻されて灰黒色、外面は生地のままである。内外口縁部付近に煤や炭化した煮こぼれが付着する。859は巴文軒九瓦で、833と同範瓦である。860は唐草文軒平瓦。唐草は彫りが浅く、巖手状に退化するが、郭線が残る。瓦当周縁高は低く、顎厚は平瓦部以下である。



第137図 SD-44遺物実測図

SV-14・15 (第138・139図、図版55a・b)

谷部B地区の西端で検出した石垣である。この箇所の石垣の構成は、上段にSV-14、下段にSV-15を築造する二段構成になっている。

この石垣遺構は、過去十数年來の根來寺の発掘調査において最も堅固で、最も高いものである。この辺りは通称蓮華谷と呼ばれているところで、緩やかな谷が来たから南へ広がっている。

SV-15は谷の西端の最も深い箇所を埋立て、整地し、坊院の敷地を造成するためのものとして構築されている。谷の最も深い箇所から上段の石垣(SV-14)の比高差は約8mを測る。この様な状況から大土木工事が行なわれたことを窺うことができ、この地を占有していた坊院の力の偉大さを推し量ることができる。

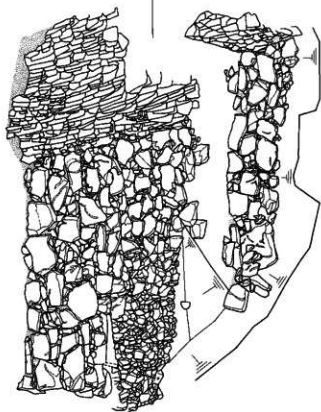
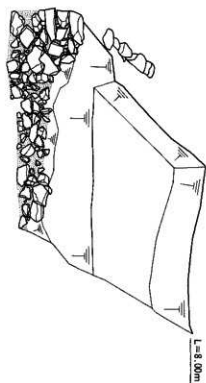
SV-14

上段の敷地の南西隅を限る石垣である。SV-15の上に築かれ、直角に折れ曲がっている。検出総延長15.40mを測る。残存の高さは0.7~1.50mを測る。遺存していた石積みは最も良好な箇所でも6段分であった。この石垣の基底部分は整地土直上に大きさ約50~80cm大の石を横置きに据えていた。使用石材は全て和泉砂岩であった。これの南面西端の上部は著しく崩壊しており、基底部分が東から西にゆくに従いだんだんと低くなっているため、もともとは、西側の石積みの方が東側に比べかなり高かったものと考えられる。西端の当初の高さは2.0m以上はあったものと思われる。裏込めの幅は50cm内外を測り、10~20cm大の栗石混じりの土を積み込むものであった。なお、この石積みの傾斜は殆ど垂直で、火災にあった痕跡が認められ赤く変色していた。

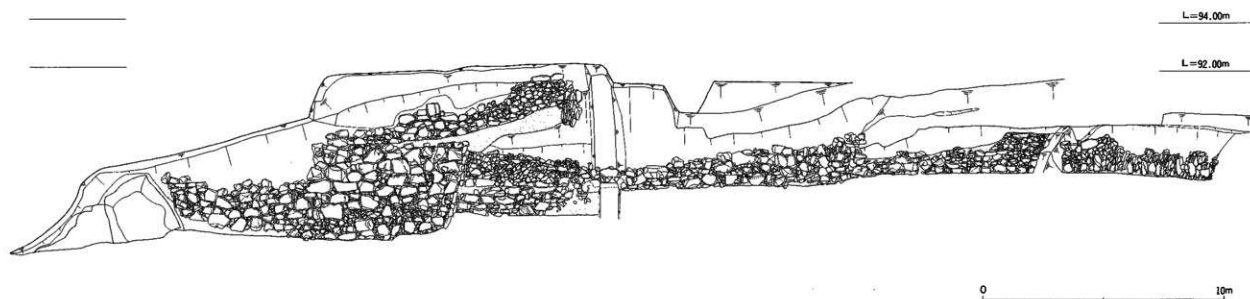
SV-15

SV-14と同様、上段敷地の南西隅を限る石垣である。使用石材は和泉砂岩の粗粒石である。この石垣の表面には幾つかの矢穴が顕著であった。この石垣の残存状況の良好な箇所は入角部で築造当初の高さを保っていると思われ、その高さは4.0mを測る。石積みの遺存は10段分であった。また、隅角部の上方は後世の水田化の際に壊され、水田の畦畔として積み直し(SV-16)されていた。この石垣の傾斜は殆ど垂直で、反りのつかない直線的なものであった。

この箇所の石垣については北垣氏にご教示いただいた。氏によると、SV-14の隅角部の一番角石をSV-15の天端石がかぶさるように配されていることから、上段のSV-14築造後、下段のSV-15の大普請が行なわれたとしている。また、時期の決め手になるものはSV-15の隅角部であるとしている。それは、天正期に形態を整えはじめる算木積みが未発達であり、観音寺山城の伝「お館」址の隅角部石垣(1536)に酷似することから天正以前の築造と考えられる。両者は永禄・天文年間あたりに相前後して構築され、寺院石垣とのかの城郭石垣との接点を考えるうえにおいても興味深いものである。方位の異なる軸線をもつ上下段の平面プランは、単なる寺院の石垣とは思わず、二段積みの防御遺構の観が強いと指摘されている。



第138图 SV-14・15西面立面图



第139图 SV-14・15南面立面图

第5節 丘陵部B地区の遺構と遺物

丘陵部B地区の概要(140図、図版57a・b 62a・b)

谷部B地区から西側に谷を隔てた所に位置する高所である。この箇所是和泉山脈から派生する南北方向の一つの尾根である。この地区の標高は最も高所の遺構検出面で約101.0mを測り、丘陵部A地区と同様に南と西に眺望のきく場所である。現況は雑木林でこの奥に柑橘園があり、そのためのパイロット道路がこの尾根の中央部に設けられていた。遺構面までは北の一番高所で、現G.L.から約7.0mの盛土であった。この土はパイロット道路建設の際に盛られたものである。調査地はこの南北の尾根に対して直行する様に、建設道路敷カット分のみを対象とした。この地区の調査は、南北方向のパイロット道路を堺に西側を昭和63年度、東側を平成元年度、と2年間に渡り実施した。両年合わせて坊院の敷地の一部を3区画検出した。この3区画の敷地は東西に段状に造り出し、あるいは整地し東から西へ低くなっていた。最も西側の敷地の殆どは調査区外であると思われる。これらの区画の北側の一部と南側は岩盤をカットし、敷地を開く様に整えている造作を確認できた。南側の岩盤整形は北東から南西にかけて2段、あるいは3段の整形を施していた。この造作は雑で、直線的なカットを施した箇所は見うけられなかった。

この地区における近世と考えられる検出遺構面及び出土遺物は殆ど無く、調査の結果、天正の兵火時以後は全くと言って良い程、人が住みついた形跡は認められなかった。江戸時代初頭には早くも徳川家康により復興許可が下されているが、盛時の様に高所での塔頭再建には当然至らなかったであろうし、坊院の過去の調査例からみても、近世の遺構は円明寺を中心とした盆地部、あるいは傾斜の緩やかな谷部に集中する傾向が認められる。この地区の発掘調査例は今回が初めてであり、ここだけの調査では上記のことは断言できないが、今回の調査で検出した遺構は殆ど天正の兵火に係る時期のものであった。

古地図の天正以前の伽藍を想定した図を見る限り、この地区は「西谷領」あるいは「蓮華谷領」と記されているのみで、坊舎は認められない。おそらく省略されているのであろう。また、江戸時代の山内の状況を描いた地図を見ても、この地区の東側には幾つかの坊舎が描かれているが、この丘陵部B地区には見出すことができない。遺構の記述の便宜上、SV-24を堺にして上段の敷地、下段の敷地と呼称する。この丘陵部B地区において特筆すべき遺構は礎石建物と石組井戸、溝、石垣である。この狭い調査範囲内で大小合わせ石組井戸を6基検出した。これは丘陵部という立地条件のための湧水量に関係するものだろうか。この中の小振りの2基については、いかにも水溜用としての機能を果たしていたと考えられる。南北方向の石垣も数条検出した。この石垣と同一方向に礎石建物を4棟検出した。

以上がこの地区の大略である。この調査区以外で他に岩盤整形を施した坊院跡が推定できる。

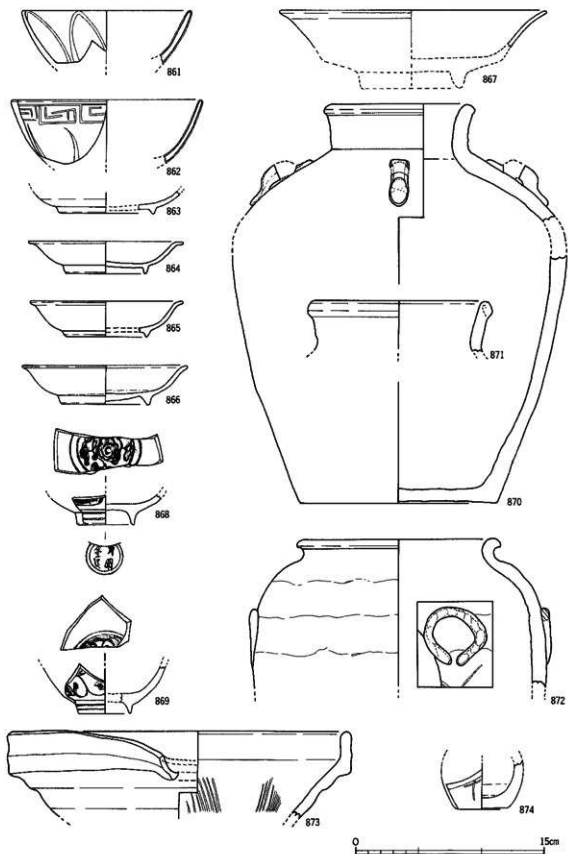
丘陵部B地区上段包含層及び遺構の概略

この地区の層序は腐植土下は約4～5mの盛土で覆われていた。重機によってこの盛土除去後、厚さ約10～15cmの包含層(青色粘質土)で一面覆われていた。包含層はこの一層だけであった。この包含層を手掘りにより除去し、遺構面を検出した。結果から先に記すと、この遺構面は整地土であった。遺構検出終了後、最終的にこの上段の中央部に「十字」トレンチを設定した結果、大きく分けて3層に整地土を分層することができ、遺構検出面から地山まで約90cmを測る。それは上層から黄灰色土、黄褐色土であり、下層の明黄褐色土からは凹基無茎式の石鉢が^(註14)一点出土している。それ以外はの遺物は皆無であった。

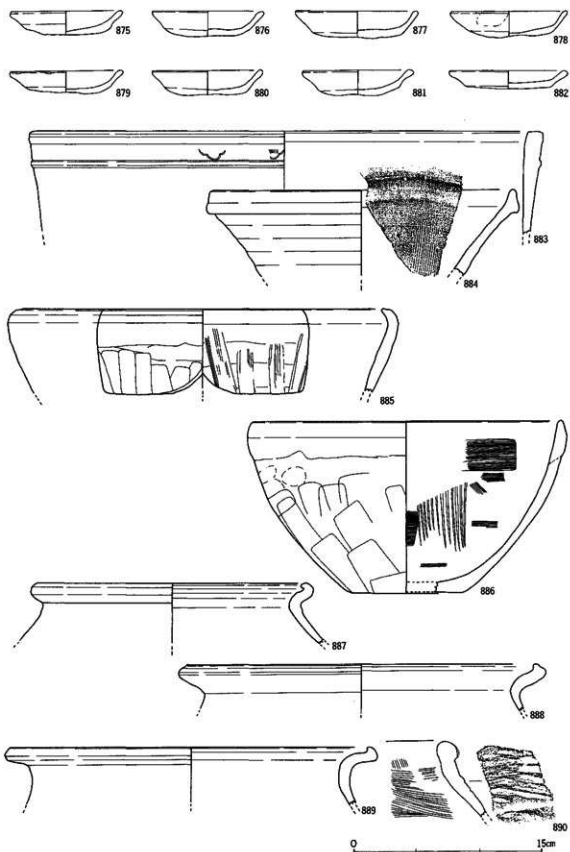
検出し得た遺構としては石垣、土坑、石組井戸、礎石建物、埋桶遺構、地下式倉庫であった。礎石建物は礎石が欠損している箇所もあったが、割合に整然と配されたものであった。

丘陵部B地区上段包含層出土の遺物(第141・142図、図版89・90)

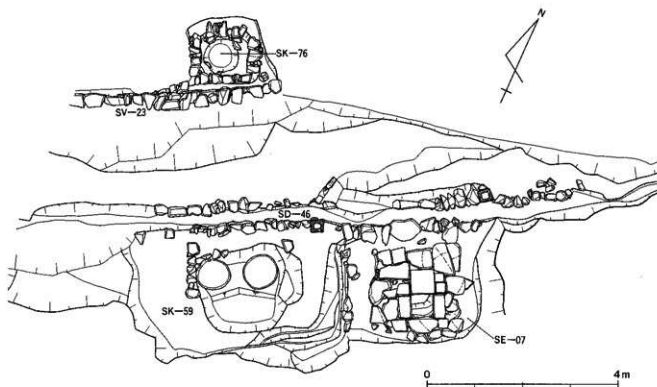
861・862は青磁。861は竜泉窯系焼B2類で、外面体部には片切彫の幅広の粗略な蓮弁文が見られる。胎土は灰白色を呈し、堅緻で精良。暗緑色で光沢のある釉が厚く掛かる。862は竜泉窯系焼C2類。外面口縁部に篋描の雷文帯が巡り、体部には細い線描きの幅広の蓮弁文が見られる。堅緻な灰白色の胎土で、透明度が高く、光沢のある草緑色の釉が掛かる。863～867は白磁。863～865は通常のE群の端反皿。863は精良な胎土と光沢のある釉をもち、丁寧な作りのもの、864・865は雑な作りである。866もE群の削出し高台の端反皿であるが、類例をあまり見ない。内外面体部のみに施釉され、内底と外面高台際以下を露胎が残す。胎土はやや黄味を帯び、光沢のある灰黄色の釉が厚く掛かる。867はE群の大型腰折皿。非常にシャープな作りで、胎土も精良である。釉はやや青味を帯び、光沢がある。削出しの断面三角の高台が付く。868・869は染付E群の饅頭心型椀。共に外面体部に唐草文を描く。868は内底に牡丹唐草、外底に「大明年造」銘が見られる。870～874は備前窯の製品。870～871は大型の壺。870は四耳壺で、縦耳をもつ珍しいものである。872は水屋甕。短頸化する。873は擂鉢。口縁外面に波状の段をもつ。櫛目は8条1単位。胎土は精良で、チョコレート色を呈す。874は小壺。外底に糸切痕を残す。875～882は通有の土師小皿。875～880の口縁部にはタールが付着。883～890は瓦質、土師質土器。883は瓦質火鉢で、箍口の凸帯に挟まれた外面口縁部の印花は不明瞭。884～886はこね鉢。884は土師質と思われるが、火中により陶質化する。櫛目は浅く細い。885は土師質で、口縁を内側に摘み出した器形。内面体部歯横方向の刷毛で調整し、内外口縁部をヨコナデする。外面体部には縦方向にヘラケズりする。胎土は砂粒を多く含み、黄橙褐色を呈す。886は瓦質で、体部が内彎し、口縁部を丸く収めたものである。887～889は土師質釜。器形は大和型に似るが胎土は異なる。砂粒をあまり含まず、明黄橙色を呈す。887は火中して陶質化する。890は瓦質甕。玉縁状の口縁をもち、外面には平行タタキが見られる。胎土は少量の砂粒を含んでやや粗く、暗茶褐色を呈す。



第141图 丘陵部B地区上段包含層遺物実測図 1



第142図 丘陵部B地区上段包含層遺物実測図2



第143図 SE-07周辺の遺構平面図

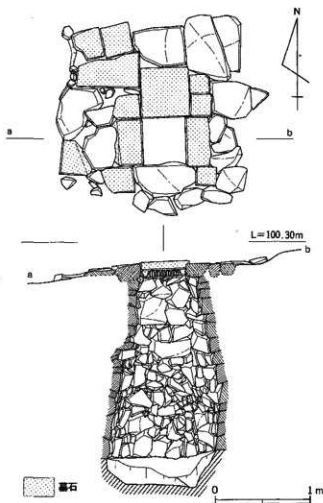
SK-59 (第143図、図版59a)

調査区南端で検出した。南側の塔頭の敷地を区画する岩盤整形の工程に平らな面を削り出し、この土坑とSE-07を造っている。また、この平らな面の北側縁辺部にはこれらの遺構と平行に細い石組溝を直線的に配していた。この遺構は一応土坑としたが、埋桶の痕跡が認められた。掘形の形状は長方形を呈し、2段に掘られている。南北長約4.50m、東西長2.60mを測る。残存の深さは約50cmを測る。東側の掘形はSE-07の掘形と隣接し、その間は10cm未満であった。また南側の掘形の辺もSE-07の南側掘形と直線上にあったことと、SK-59内に埋桶の痕跡を検出したことから、SK-59はSE-07に関する二次的な遺構と考えられる。また、この土坑と井戸(SE-07)がセット関係を成すもので、これらに伴う覆屋も一つのものであった可能性も考えられる。内側の掘形の西辺上に縁石の一部が遺存していた。おそらく内側の掘形を画するもので、南と北を画していたか、もしくは周りを画していたものと考えられる。内側の掘形は不整形を呈し、東西長1.80m、南北長1.80mを測る。残存の深さは約25~30cmを測る。この掘形内には埋桶の痕跡が2基並立した形で確認された。それらはいずれも炭化し、埋桶の掘形内に貼り付いた状態で検出した。直径はいずれも約70cm前後を測るものであった。ここからの出土遺物は皆無であったが、天正の兵火に係る時期と考えたい。

SE-07 (第143・144図、図版59a・b)

この辺りの遺構検出面は軟質の岩盤であった。岩盤整形を施した平坦面で、SK-59の東側に隣接して検出した。円形の石組井戸である。この井戸の周りには、墓石と平らな割石が敷かれ、上部の口を四角にしていた。また、これは井桁を除けばほぼ完全に遺っていた。掘形の形状は長方形を呈する。その規模は東西長2.80m、南北長2.40mを測る。井戸本体の断面の形状は袋状を呈し、上部での内径は約60cm、下部での内径は約1.10mを測る。深さは2.40mを測る。石積みの使用石材は全て和泉砂岩の割石を用いていた。この井戸の底までは全て石積みでは無く、深さ2.40mの内、上部から2.10mの地点までで、その下方は岩盤割り貫きのままであった。この約30cm分は水溜部分と考えられる。また石積みの状況は石材の大きさが上部、中部、下部ではっきりした差違が認められた。これは上部から1m地点までを30~40cm大のものを使い、その下方1.60m地点までは10~25cmの小振りの石で、それより下方を上部と同様の大きさの石を使用していた。雑な積み方であったが、この様な石の積み方は力学的な意味合いがあるのであろうか。また、水溜部分の断面の形状は逆台形を呈し、底の直径は80cmを測る。

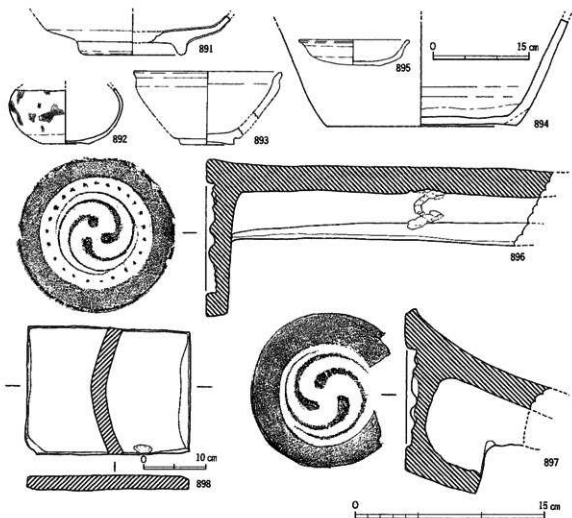
上部の敷石の範囲は約2m×2mであった。宝篋印塔の台座や五輪塔の地輪と思われる墓石を12個転用していた。これらの墓石を逆転させ裏の平らな部分を表面に使い、敷き並べていた。井戸の口はこれらの墓石を組み合わせ、井戸本体の石積みの部分をカバーし、見映え良くしようという意図がありありと窺うことができる。この石敷はやや西下がりである。また、井戸の掘形全面には石敷が施されず、東側と西側には隙間が認められ、上屋の様な何かが建てられていた可能性がある。調査時においてその痕跡は検出されなかった。墓石を逆転し、井戸や溝などに使用する例は根来寺坊院跡では多々ある。これとは様相が若干異なるが、後述するSE-08の周辺にも墓石が逆転使用されている。



第144図 SE-07実測図

SE-07出土の遺物（第145図、図版90）

891は白磁E群の皿で、867などと同一の腰折皿のタイプである。高台は削出して、断面三角形を呈す。胎土は砂気を含んでやや粗いが、透明度が高く光沢のある、青味を帯びた釉が掛かる。全体に細かい貫入が走る。外底を無釉に残して高台外面まで施釉し、疊付を三方から丁寧に削る。892は褐釉茶入である。非常に精緻な作りで、体部の器肉は極めて薄い。胎土は非常に精良で、淡青灰色を呈す。釉は暗褐色のものと明茶褐色のもの二重掛けで、明茶褐色の表面に暗茶褐色の釉が斑に浮き出る。外面体部下半以下を露胎で残す。露胎部には細い単位の回転ヘラケズリ痕が認められる。底部の切離も篋に依るものと思われる。893は瀬戸美濃窯の灰釉天目茶碗である。器肉が厚く体部が直線的で、口縁内面に面ができていて、火中する。894は備前窯の甕である。一石程度の容量と思われる。895は通有の土師小皿である。口縁部に少量のタールの付着の痕跡が認められる。896は三巴文軒丸瓦である。小型で、瓦当径が小さい。瓦当周縁は低く、巴の先端は丸く肥大するが、圈線が残り、珠文は小さい。巴の尾は圈線に付く。丸瓦部凸面には幅約1cm程の



第145図 SE-07遺物実測図

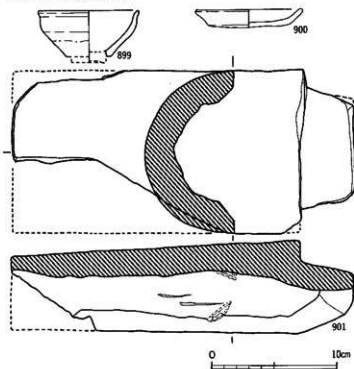
縦方向のヘラミガキ痕が残り、凹面には粘土板切離しの際の弓痕や、布袋に通した吊紐の痕跡が観察される。897は三巴文鳥衾である。圏線と珠文を持たない。尾は相互に連続せず外縁にほとんど付く。898は平瓦である。凸面の一部に粘土板切離しの際のコビキ痕が平行に残る。

SD-46 (第147図、図版59a)

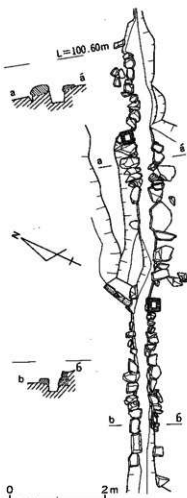
SK-59、SE-07を検出した岩盤整形の平坦部の縁辺部で検出した石組溝である。これは東西に延びるものである。西側は調査区外で、その全景は不明である。検出長は約26.0m以上を測り、流水幅は約30cmを測る。残存の深さは40cmを測り、石組みの遺存は1～3段であった。溝の殆どの側石は欠損しており、中央部のみが良く遺っていた。また2個の墓石を側石として転用していた。この溝は北から南に流れていた。側石の一部で簡単な丸瓦を組み合わせた流し口を検出した。これは3枚を接続し、2枚は伏せ1枚は受けていた。北側の低い所へ流すものと思われる。

SD-46出土の遺物 (第146図)

899は瀬戸美濃窯の褐釉天目茶碗である。小型品で、外面口縁屈曲部に綾がはいる。黄褐釉で、露胎部の化粧掛けは行われず、体部のヘラケズリ痕を残さない。胎土は黄白色を呈し、軟質である。900は通有の土師小皿である。901は丸瓦である。法量的にも、また、側端面や小口面の面取、玉縁の取付け角度なども608と類似する。凸面のヘラミガキは幅約5cmで、非常に細い。凹面には糸切の際の斜めの弓痕が残る。

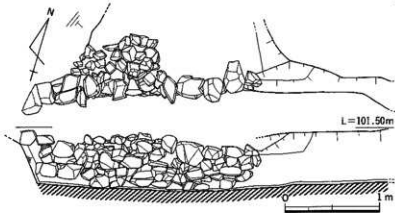


第146図 SD-46遺物実測図



第147図 SD-46実測図

SV-22 (第148図、図版58a)



第148図 SV-22実測図

調査区北東で検出した南北方向を画する石垣である。これは東西方向の岩盤整形ラインには直行する。北側は調査区外に延び、その全容は不明である。検出長は 約6.0mを測り、この内石積みの遺存は北側の2.60m だけであった。遺存の高さは約55cmを測り、石積みは4段を検

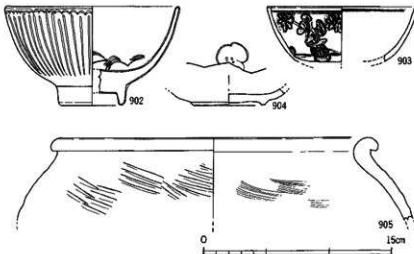
出し、崩壊寸前であった。裏込めの幅は約50cmを測り、込石は石積みと同石材の10~15cm大の和泉砂岩を用いていた。

SX-17 (第140図)

SV-22より以西の調査区北東隅で検出した地下式倉庫と考えられるものである。これの北側は殆ど調査区外のため、一部を検出したにすぎない。それ故、形状も規模も不明であった。東西長約 3.5mを測る。残存の深さは約15~25cmを測る。内壁及び床面の一部に焼けた痕跡を確認した。また、南壁の内側に沿って甕の抜き取り穴と考えられるものを2基検出した。

SX-17 出土の遺物 (第149図、図版90)

902は竜泉窯系青磁碗B4類。比較的丁寧な作りで、底部が厚く、高台は細く高い。外面体部に篋描き細蓮弁文、内面には櫛描劃花文が見られる。釉は透明度が高く、草緑色を呈す。総釉で、外底の釉を輪状にケズる。903は染付碗E群。外面体部に雑なタッチで花瓶に生けた花を描く。呉須は良好に発色するが、釉は一部で虫喰状態を呈す。904は瀬戸美濃窯の灰釉皿。内底にカタ

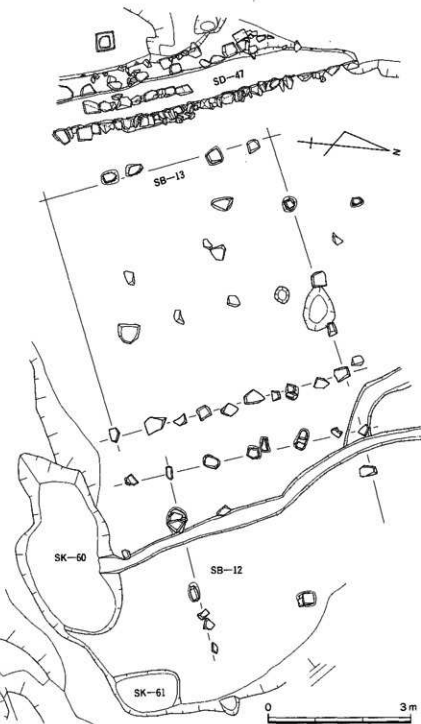


第149図 SX-17遺物実測図

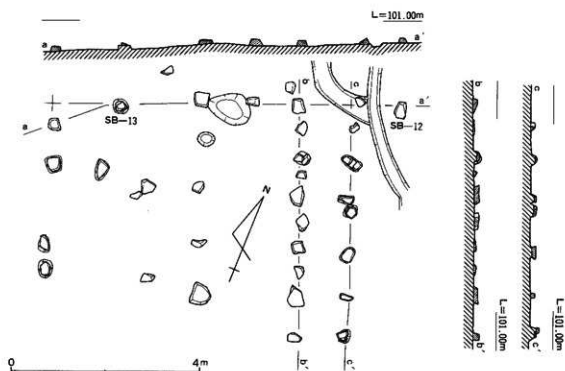
バミの印花文が見られる。胎土は灰白色を呈し、釉は灰味を帯びる。火中して釉がケロイド状になる。905は瓦質甕。口縁部を外に押し潰して玉縁状にする。外面体部に平行タタキが見られる。胎土は粗く、淡灰褐色を呈す。

SB-12・13 (第150・151図、図版60a・61a)

これらの礎石建物跡を2棟並立して上段の中央部で検出した。淡緑色の包含層除去後検出した。「丘腰部B地区の概要」の項でも触れたが、これらの建物は上段の主となるものと考えられる。ベースとなるものは厚さ約0.9~1.0 mの整地土であった。おそらく、この整地土は周辺の岩盤整形を施した後の残土を利用したものと考えられる。最下層より凹基無基式の石礎が一点出土した。SB-12は東西棟の建物と考えられ、規模は桁行2間(約2.60m、間尺は西から約1.0~1.40m)以上を測り、梁行は5間(約4.96m、間尺は北から約1.32m、1.0m、0.92m、0.92m、0.8m)を測る。この建物の桁行の規模は不明であるがSV-22はこの敷地の東側を画するものであり、SV-22より以西に収まるものと考えられる。SB-13も東西棟の建物で、SB-12と桁行方向を同一にするものである。この建物は総柱と考えられる。桁行は北西隅を欠損しているが、4間(約5.20m、間尺は東から0.96m、1.08m、1.72m、1.44m)を測るものと考えられる。また、梁行は5間(約5.0m、間尺は北から1.16m、1.0m、0.92m、1.08m、0.84m)を測る。梁行方向には東柱のやや小振りの礎石が認められる。



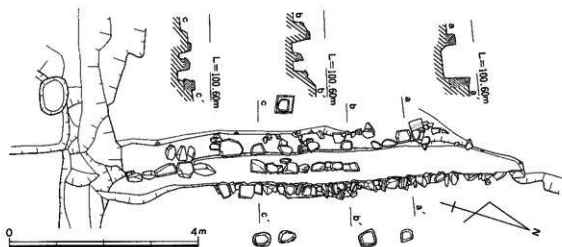
第150図 SB-13周辺の遺構平面図



第151図 SB-13実測図

SD-47 (第151図、図版61a)

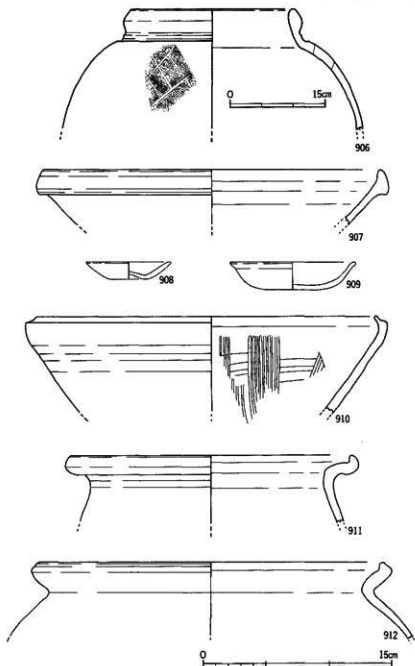
この溝は石組溝である。上段の敷地の西を区画するものと思われ、方向をSB-13と平行にし、南北に延びる。また、この溝の西側側石には造り替えが認められ、方向は同じであるが流水幅を広げていた。広い方を新、狭い方を旧として記す。新の検出長は約12.50mを測り、流水幅は60~70cmを測る。深さは35~50cmを測り、南方向に浅くなっていた。底の深さも若干ではあるが、南へ低くなり南流していたものとする。断面は「U」字型を呈する。旧の石組みは中央部と南端で遺存していた。流水幅は15~20cmを測り、深さは東側の側石を共有するから新と同じである。



第152図 SD-47実測図

SD-47 出土の遺物（第153図、図版90）

906 は甕前窯の甕。口縁がやや内傾し、胴部は丸く肩が張らない。口縁部は波状の段をもつには至らないが、扁平化が相当進む。内面を刷毛で、外面をナデで粗く調整し、口縁内外面にヨコナデを施す。外面肩部には篋描き斜格子の窯印が見られる。胎土は大粒の砂粒を含んで粗く、暗灰褐色を呈す。器表は内面が暗赤褐色、外面が灰赤褐色で、外面肩部には胡麻状の灰を被る。907 は東播磨須恵片口。口縁部が上下に拡張し、外面上下端に浅い凹線が巡る。内外体部は粘土紐の巻上げ痕を残して雑にヨコナデ、内外口縁部を丁寧にヨコナデする。胎土は砂粒を含んで粗く、暗灰色を呈す。908・909 は土師皿である。908は垂白色土を使用したヘソ皿。火中して胎土は一部ピンク色に変色する。909 は通有の小皿。910～912は土師質土器。910 はこね鉢で、885と同様のタイプ。内彎気味に立ち上がる体部を口縁部で内側に摘みだし、上端面に太い凹線が巡る。内面体部を横方向の粗い刷毛で調整し、内外口縁部をヨコナデする。外面体部は未調整。備目は浅く、8状1単位。胎土は微細な砂粒を含むが精良で、灰黄褐色を呈す。911・912は釜で、微細な砂粒を多く含むが、比較的精良な明黄褐色の887～889などと同様の胎土である。



第153図 SD-47遺物実測図

SD-48 (第140図、図版60b)

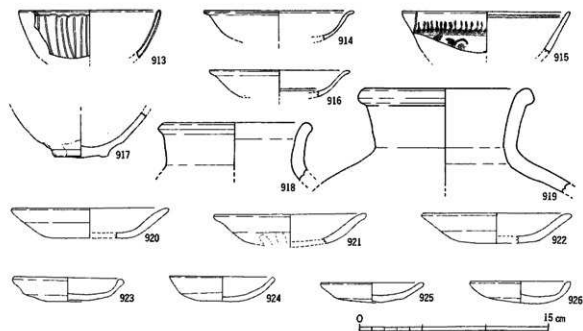
上段の北側で検出した岩盤掘り込みの溝である。この辺りは敷地の縁辺部で岩盤が露出していた。この溝は敷地の北側を画するもので、屈曲しながら東西方向へ延び、下段の敷地のSD-50へ流れ込んでいた。これはもともと南側の壁上のみに側石が施されていたものと考えられ、東側の屈曲部に遺存していた。上段と下段の比高差は約3.10mを測り、この溝からSD-50へ流れ込む部分は、約50cm幅に岩盤を掘り込み、滝の様に流し込むものであった。その距離は平面で約2.50mであった。検出長は約17.50mを測り、東側は調査区外であった。流水幅は約40～50cmであり、残存の深さは35cm内外であった。もちろん、西へ流れていたと考える。

SD-49 (第140図、図版61a)

天正の兵火時より古い素掘りの溝で、検出長8.50m、幅30～40cm、残存の深さは10cmを測る。

SD-48出土の遺物 (第154図、図版90)

913は竜泉窯系青磁碗B4類で、BVI'類に細分される。914は白磁E群の端反皿。胎土の鉄が霜降状に器表に浮く。915・916は染付。915は碗C群で、外面口縁部に極端に便化した波濤文帯が巡る。916は皿B2群。外面は無文で、内面に圈線のみ認められる。917は瀬戸美濃窯の褐釉天目茶碗。浅い挟りの輪高台で、疊付外端部は面取されず、露胎の体部下半にはヘラケズリ痕を残す。胎土は黄灰色で堅緻である。露胎部には化粧掛けされる。釉の一部が疊付に流れ、陶枕に粘着する。918・919は備前窯の壺。918の玉縁は形骸化、919は玉縁の形状を保つ。919は肩に厚く灰を被る。920～926は土師皿。920～922は亜白色土使用し、外型により成型した中皿。923～926は通有の在地産土師小皿である。923・924の口縁部から内面にタールの付着が認められる。



第154図 SD-48遺物実測図

SK-60 (第140図、図版61a)

SB-12の南で検出した不整形の土坑である。SD-49と同一面で検出した。これに切られているのか、それとも水溜的な施設なのか判らない。規模は長径 約4.0m、短径 約2.0mを測り東西に長い。残存の深さは約30cmを測る。壁の立ち上がりは全面的に緩やかであった。

SK-61 (第140図)

SK-60の東 約1.2mの地点で検出した小さな土坑である。南東方向の壁はSK-60と共有する。形状は南北に長い長九形であった。長径約1.30m、短径約0.95mを測る。残存の深さは10~15cmと非常に浅く、かなり削平されているものと思われる。埋土は灰褐色土の単一層であった。

SK-63 (第140図、図版60a)

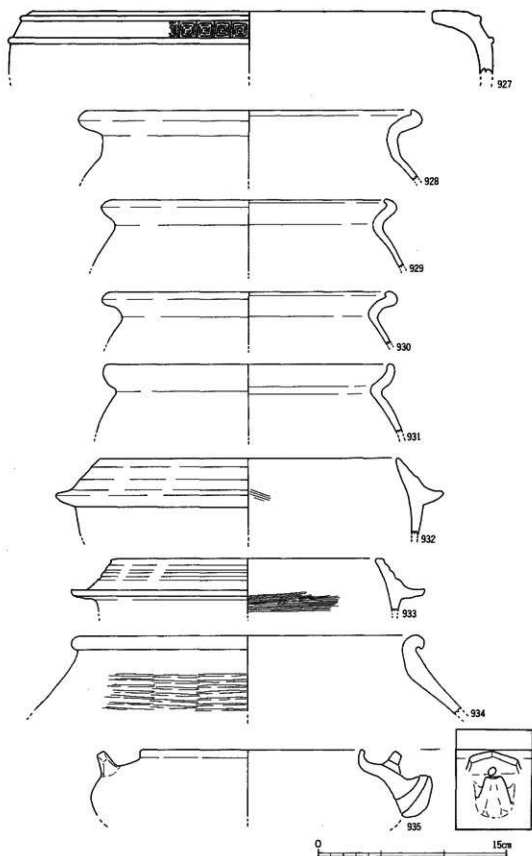
SD-47の南端の一段低い箇所から検出した。形状は隅丸の長方形を呈し、南北に長い土坑である。埋土は灰褐色弱粘質土で、焼土は全く確認できなかった。南北長 約3.0m、東西長約1.80mを測る。残存の深さは40~80cmを測り、東側が良く遺っていた。

SK-64 (第140図、図版60a)

これの東はSK-63に、西は上段と下段を画するSV-24の裏込めに切れ、その全容は不明である。形状は東西に長い不整形を呈する。規模は東西長約3.80m、南北長約2.50m、残存の深さは約20~40cmを測り、底は凹凸が著しい。埋土はSK-63と同様に灰褐色粘質土で、底の方では若干の炭片が認められた。遺物は土師器皿、瓦器の細片が数片、瓦質甕、羽釜、火鉢、注口形土器、土師質鍋等が出土しており、瓦質土器を概る限りかなり二次的な焼成をうけている。

SK-64出土の遺物 (第155図、図版90)

927~935は現状では土師質土器であるが、927・932~934は瓦質土器が火中により土師質化した可能性が高い。927は火鉢。内彎する体部を口縁部で内側に折り曲げ、上端面を水平にする。外面口縁部直下に凸帯に挟まれた型押雷文が巡る。胎土は微細な砂粒を含み、黄灰色を呈す。928~931は釜。928は45や91などと同様の暗赤褐色の胎土をもつ。929・930は同一個体か。胎土は928とは異なり、91に近いが、より砂気が多い。胎土は明茶褐色であるが、器表は暗灰褐色。931は口縁部を「く」の字に外に折る。内外面口縁部を丁寧にヨコナデし、内面口縁直下にヘラケズリ痕を残す。胎土は929・930に似た質で灰茶褐色。932・933は外面口縁部に凹線による段をもつ羽釜。932は口縁端部や鈎の端部を丸く収めたものである。933は口縁上端部と鈎端部に浅い凹線を巡らせたもの。内面体部を細かい横方向の刷毛で調整し、内面口縁部から鈎端面を丁寧にヨコナデする。胎土は精良で、黄白褐色を呈す。土師質の可能性も残す。934も土師質の可能性がある甕。口縁部を短く外方に折り曲げ、外面体部に平行タタキが見られる。胎土は黄白褐色を呈し、精良である。935は土瓶。非常に珍しい器形で、初出例である。短い注口をもち、把手に釣下げるための吊手が付く。精良な胎土で、赤味を帯びた黄白色を呈す。摩耗して調整等は不明。



第155图 SK-64遺物実測図

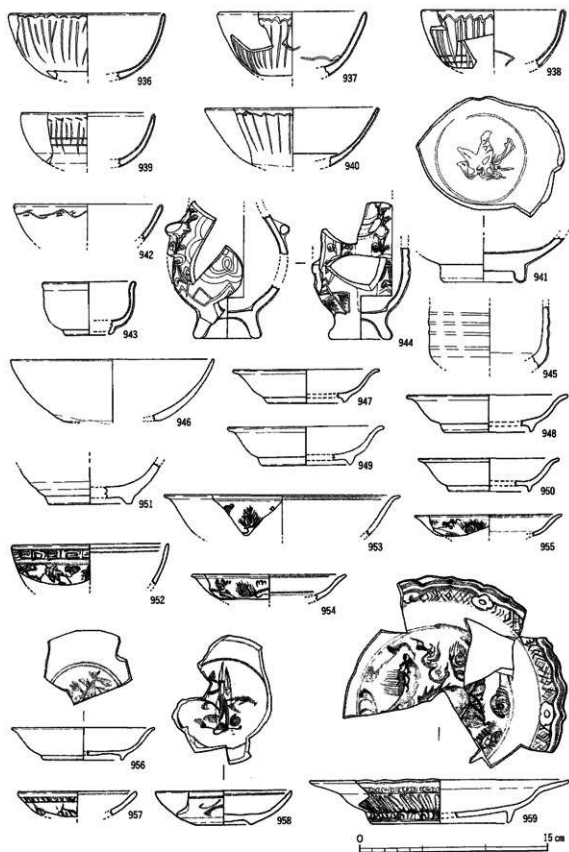
丘陵部B地区下段包含層及び遺構の概略

この箇所も上段と同様に5～8mの盛土で覆われ、重機により除去した。北側は岩盤が露出し、平坦にカットされていた。中央部から南側にかけては灰褐色土及び青灰色土の包含層で覆われ、西側は焼土で覆われていた。これらを除去後遺構検出面に達した。この箇所の焼土層は盆地部や谷部で検出した焼土層とは違い純粋なものであった。つまり、人為的な移動の無いものである。検出面は一面で、遺構としては天正の兵火時とそれ以前の二時期であった。東西に若干段差の付く敷地を2区画検出した。南北は上段と同様に岩盤を整形して画していると考えられる。これは南北方向を石垣で画する。これに伴う検出遺構は石組溝、石組井戸、礎石建物、土坑等であった。

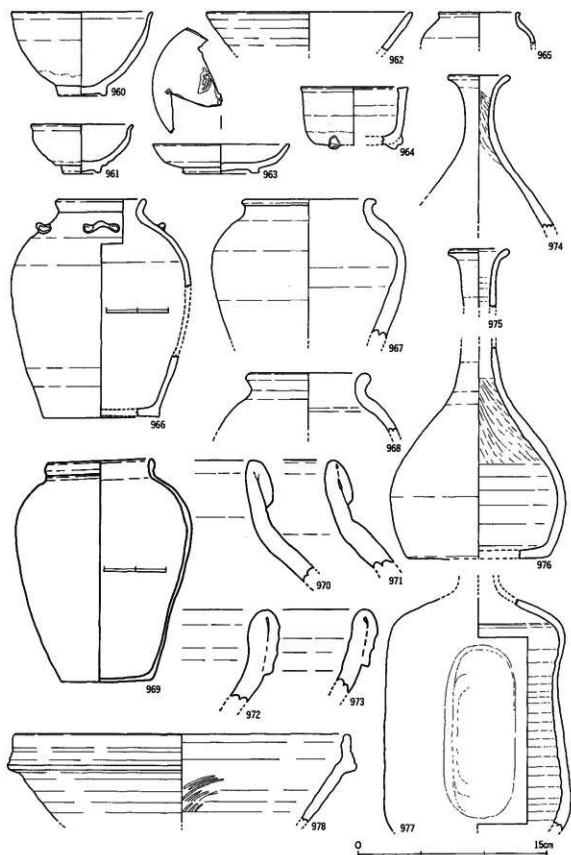
丘陵部B地区下段包含層出土の遺物（第156～158図、図版91・92）

936～945は青磁。936～940は竜泉窯系B4類の線描蓮弁文碗。すべて蓮弁は剣頭の単位を守らない。936・937は火中する。937・938は内面に篋描き劃花文が見られる。939は器高が低く、小型化したBIVに細分。938は灰白色の堅緻な胎土に、透明度が高く光沢のある灰緑色の釉が厚く掛かる。939の胎土は灰味を帯びてやや粗い。釉は透明度が高く、黄緑色を呈す。全体に粗い貫入。940はあまり見かけないものである。体部が外方に大きく開き、外面体部下端以下を露胎で残す。体部の器肉は薄く、シャープな作りである。胎土は灰白色を呈し堅緻。釉は透明度が高く灰味を帯び、いわゆるグレイ・グレイズに近い。941は竜泉窯系E類。内底に鳳凰の印花文が見られる。疊付の面取など非常に丁寧な作りである。胎土は灰白色を呈し非常に堅緻で、釉は透明度が高く光沢があり、草緑色を呈す。総釉で、外底の釉を輪状にケズリ取り、輪陶枕痕を残す。全体に粗い貫入が走り、内底には茶筌にでもよるのか、無数の擦痕が見られる。942は竜泉窯系C2類。外面口縁部に便化した波状の雷文帯をもち、CIII類に細分される。胎土の灰味が強く、釉は940に近いが、透明度は低い。934は小杯である。胎土は堅いがやや粗く、灰味が強い。火中して細かい気泡が表面に浮く。944は福寿字不遊環双耳壺。高台が高く、体部は扁平で、型押の表裏を接合。一面に「福」字、他面に「寿」字を型押し、周囲を蓮華文で飾る。肩部に不遊環の付く双耳をもつ。胎土は灰白色を呈し堅緻で、釉は透明度が高く光沢があり、気泡を含んで濃緑色を呈す。内面を含めて総釉し、疊付の釉を雑にケズる。945は香炉。外面体部に幅広の凹縁が巡る。胎土の灰味が強く、釉は透明度が低く灰緑色を呈す。内面体部下半を露胎で残し、外面の釉には粗い貫入が走り、貫入部は暗褐色に発色する。946～951は白磁。946はC群に属する碗。器高が低く、体部の開きが大きい。断面台形の高台が付くと思われる。体部下端にカンナ痕を残し、高台際を水平に切る。胎土は堅緻であるが灰味を帯び、釉は失透して淡灰白色を呈す。外面体部下半から高台際以下が露胎。947～950はE群の端反皿。947は比較的丁寧な作りで、胎土、釉も精良。948・949は釉に若干の黒斑が浮かび、疊付に少量の硅砂が付着。949は火中。950は全体に霜降状の黒斑が見られ、疊付の釉のケズリ取りも非常に雑である。951は袋物。黄灰味を帯びてや

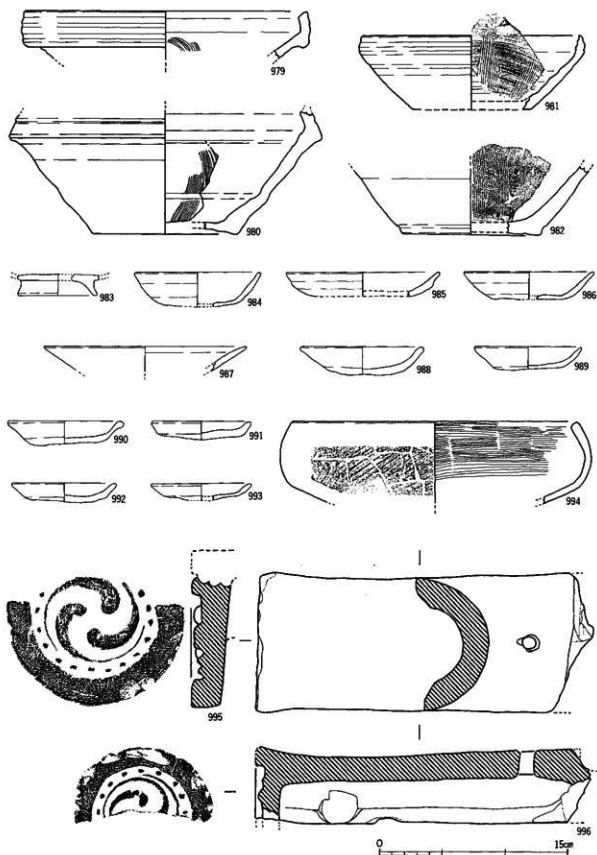
や粗い胎土に、光沢のある淡灰黄緑色の釉が、内面まで厚く掛かる。釉の透明度が高いため、外面体部の回転ヘラズリ痕が透けて見える。縁雑で、疊付の釉は三方から丁寧にケズリ取る。952～959は染付。952は碗E群で、外面体部に牡丹唐草文口縁部に雷文帯が描かれる。呉須は灰味を帯びて発色。953～955はB1群の端反皿。外面体部に牡丹唐草文を描く。953は非常に大型である。釉はやや青味を帯び、呉須の発色は良好。954～955の呉須は灰味が強い。また、954は呉須が流れて文様が不鮮明。955は火中。956はB2群の端反皿。内外面体部は無文で、内底に雑なタッチの牡丹文が見られる。外底の一部に釉の掛け残しが認められる。火中する。957・958は皿C群。共に磁質である。やや雑な作りで、957は外面体部に便化した蕉葉文と波濤文、958は内底に人形の「寿」字を描く。958は碁筈底の高台の挟りは雑で、体部下端から外底を露胎で残すが、疊付から体部下端の一部に釉着物が付着。959は稜花の腰折皿で、外面体部には丸盤による蓮弁文。火中して特に内面に釉着物の付着が著しく、文様が不明瞭である。内底には麒麟、もしくは飛馬が描かれ、外面口縁部に渦文帯が巡る。960は瀬戸美濃様の製品。960・961は天目茶碗。960は黒釉天目で、口縁端部が薄くシャープな作りである。浅い挟りの輪高台で、高台幅が狭く、外端部を面取。露胎の体部下半にはヘラズリ痕が見られ、化粧掛けされる。疊付3か所に目跡が残る。火中する。961は小型の褐釉天目。口縁端部を丸く収め、輪高台の外端面を軽く面取。淡黄橙色の粗い胎土で、露胎部に化粧掛。962は灰釉碗。口縁端部が丸く、鈍重。963は同縁釉と思われる皿。口縁が内彎し、内底には花文と思われる印花。964は灰釉香炉。三足が付き、腰部が丸みを帯びて立上り、口縁上端部を平坦に作り出す。胎土は比較的堅緻で灰黄色を呈し、灰緑色の釉が内面口縁部から外面体部上半に薄く掛かる。965は灰釉小壺。胎土は淡灰黄白色を呈し、光沢のある灰黄色の釉が薄く掛かる。966～981は備前窯の製品。966～968は壺で、966は大型の四耳壺、967・968は小型壺。すべて、肩が張らない器形で、口縁部は玉縁の形状を成さない。969～973は2石ないし3石入りの大甕。974～977は徳利。977は外面体部に泥漿を塗ったもので、近世の遺物の混入か。978～981は搗鉢。978・979は縦方向の櫛目と交差する斜め方向の櫛目を入れる。980はチョコレート色の非常に木目の細かい堅緻な胎土をもつ。櫛目は細く、16条1単位。981は平底鉢であるが、内面に10条1単位の細い櫛目による搗目が入れられる。982は瀬戸美濃窯の搗鉢と思われる。胎土は灰黄色で粗く、外面の釉は暗紫色を呈す。櫛目は非常に細い。983～993は土師皿。983～986は白土器で、983は高台をもつもの、他は通常の中皿。987は亜白色土使用の中皿。988～993は通有の小皿で、990・991の口縁部にはタールが付着。994は土師質鍋。体部が内傾する器形で、内面体部は横方向のハケで調整し、外面体部中位には斜めの平行タタキ。胎土は砂粒を含んでやや粗く、暗茶褐色を呈す。外面体部には煤が付着。995・996は巴文軒丸瓦。共に圈線を失い、巴の頭部は丸く肥大し、尾は短い。珠文は小さいがやや疎らである。996は小型で、胴部後端には屋根の野地板に固定するための径約1.2cmの釘穴が穿たれる。



第156图 丘陵区B地区下段包含层遗物实测图 1



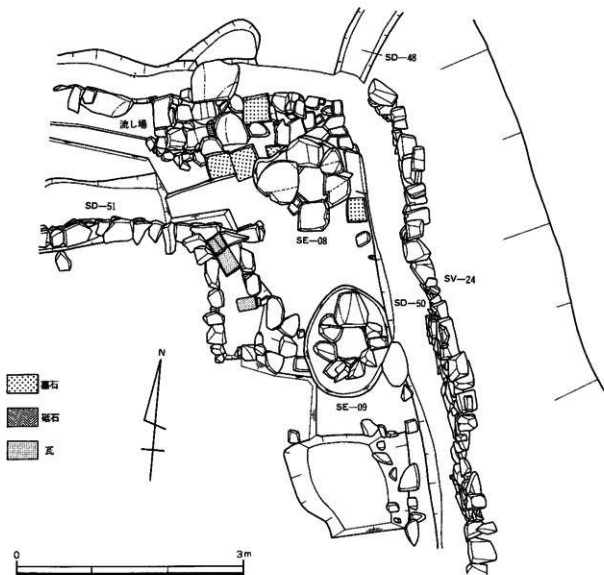
第157图 丘陵部B地区下段包含層遺物実測図2



第158图 丘陵部B地区下段包含層遺物実測図3

SE-08・09及び流し場周辺の状況（第159図、図版64a・b）

下段北東隅で検出した生活の匂いのする遺構群である。井戸と溝と敷石がセットになると考えられ、非常に面白いものである。上段の敷地から下段の敷地に掛けて流る様に流れ込むSD-48はその下段のSD-50に落ちる。そして、SD-50は下段敷地の北側と東側に巡るという立体的な排水の施設を検出した。これに伴いSD-50のコーナー部ではこの溝の西側に接して北と南に並存する2基の小振りの石組井戸を検出した。この内、北側の井戸（SE-08）とSD-50の間には数個の割石と5個の五輪塔の台座を逆転し、石畳の様に敷き詰めた流し場と考えられる施設を検出した。この中程には砂岩の砥石が1基据え付けられていた。流し場の規模は東西長2.50m、南北長約1.0mを測り、表面の高さは殆ど水平であった。また、この流し場の西寄り、SD-50上に掛けた石を検出した。SD-51の東端にも平瓦を2枚組んだ簡単な流水口を検出した。



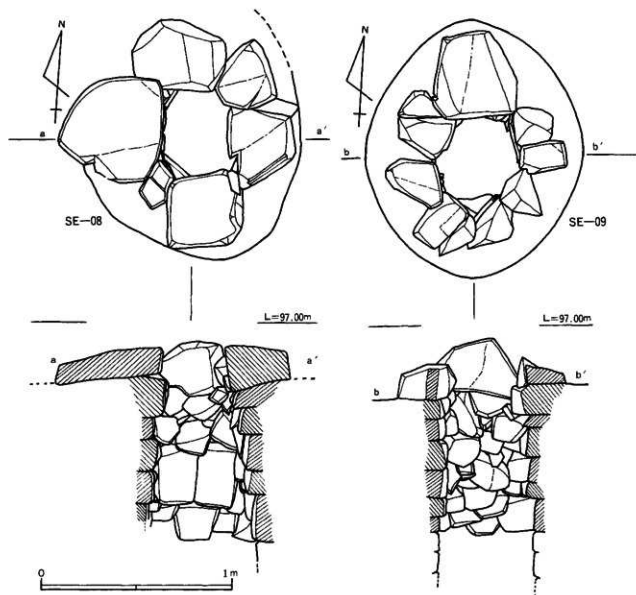
第159図 SE-08・09 流し場周辺の遺構平面図

SE-08 (第160図、図版64a・b)

前ページで記した小振りの石組井戸である。掘形は南側を検出したのみで、北側は流し場遺構の石があるため検出できなかった。掘形の形状は楕円形と考えられ、その直径は約1.20mを測る。深さは1.0m以上を測り、狭く完掘はしなかった。内径は上方で33cmを測り、1.0m下方で約55cmを測るもので裾広がりになるのか、袋状になるのか判らない。この井戸の天場には30~55cm大の大きめの石を5個配し、その下には流し場の敷石が食い込む様に敷かれていた。

SE-09 (第160図、図版64a・b)

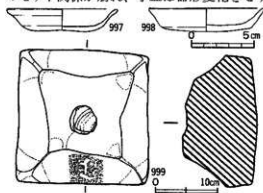
SE-08の約1.20m南で検出した。この井戸もまた、石組でSE-08と同様の規模であった。掘形は楕円形を呈し、長径1.35m、短径1.15mを測る。深さは約90cm以上を測る。



第160図 SE-08・09実測図

SE-08・09出土の遺物(第161図)

SE08 997・998は16世紀代の根来寺に通有の在地産土師小皿である。16世紀初頭頃に中皿とのセット関係が崩れ、小皿は器形変化をせずに16世紀代を通ず。体部の強いヨコナデにより、口縁部が肥厚し、やや外反。胎土に種々あり、997は砂粒をあまり含まない暗灰色の胎土をもち、998は若干の砂粒を含む明橙褐色の胎土である。997の口縁部には少量のタールが付着。



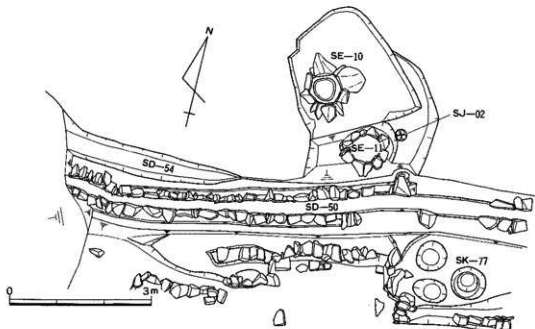
第161図 SE-08・09遺物実測図

SE-08: 997・998, SE-09: 999

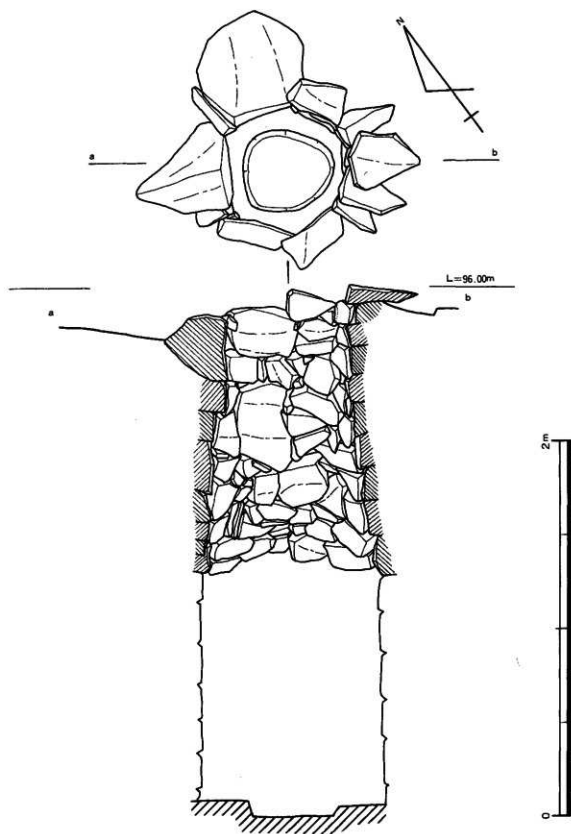
SE09 999は組合式五輪塔の火輪である。和泉砂岩製で、笠部に「ラ」音の梵字が彫られている。頂部には空、風輪を嵌め込むための径約4cm、深さ1cm弱の浅い円孔が穿たれている。

SE-10・11周辺の状況(第162図、図版65b)

下段の北側の状況である。調査区のSD-50以北は岩盤が露出していた。この箇所は岩盤を削り込み平坦にしていた。岩盤面は調査区内では平坦部のみを検出したが、おそらく、この北側には、敷地を画する東西方向の立ち上がりがあると考えられる。この敷地の西側は掻き取られ、消失しているためその規模及び全容は不明である。東西に延びるSD-50を堺にして、一つの敷地内での意味合いの違いが見受けられる。北側では、岩盤整形の平坦面で造り替えと考えられる新・旧の石組井戸を2基検出した。これに反し、南側は居住区と考えられ、東西棟の礎石建物を南北に並立して2棟検出した。また、西側では礎の抜き取り穴を有する土坑も検出した。



第162図 SE-10・11周辺の遺構平面図



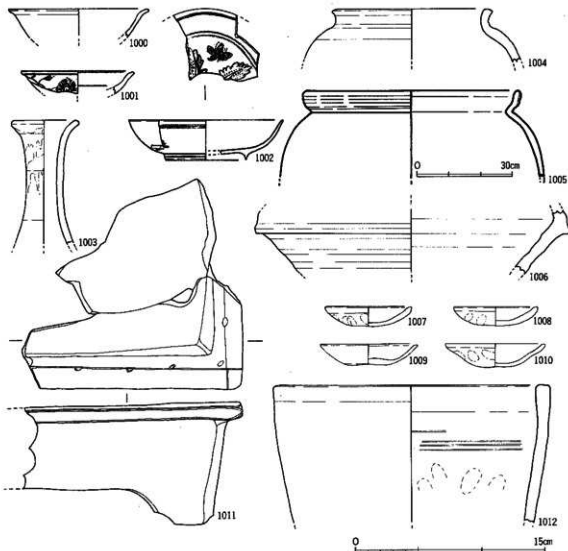
第163图 SE-10实测图

SE-10 (第163図、図版65b)

これは石組井戸で、岩盤を割り貫いて造られていた。掘形の形状はおおよそ方形を呈し、SE-11の掘形を切っている。規模は一辺2.40～2.60mを測る。使用石材は和泉砂岩の割石であった。本体の上部での内径は約65cm、底での内径は約95cmを測るやや裾広がりの井戸である。また、底では、岩盤を直径45cmの円で約10cm掘り凹めていた。埋土は上方は黄灰色土、下方は焼土であった。石積み状況が不安定なため、途中で実測作業を断念し規模のみを確認した。

SE-10出土の遺物 (第164図)

1000は白磁E群の皿。器表に霜降状の黒斑が浮かぶ。1001・1002は染付。1001は皿B1群で、外面体部に牡丹唐草文を描く。1002は皿E群で、内底に花卉文と虹を描く。1003は瀬戸美濃窯の鶴首の瓶。黒釉と褐釉が二重掛けされる。胎土は灰黄色を呈し、比較的堅緻。1004～1006は備前窯の製品。1004は壺。胎土は黒灰色を呈し、非常に堅緻。1005は3石入りの大甕。口縁部外面に

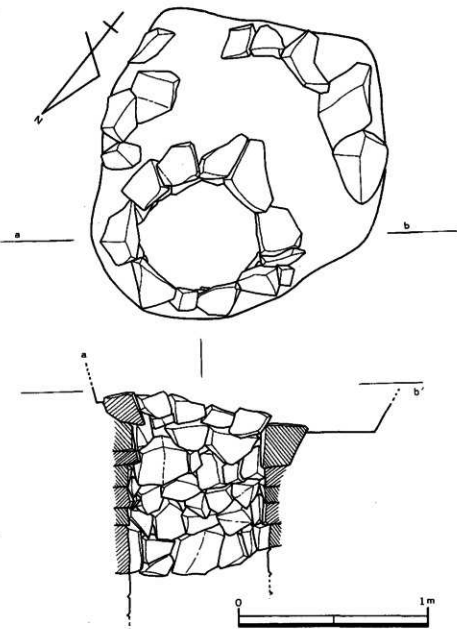


第164図 SE-10遺物実測図

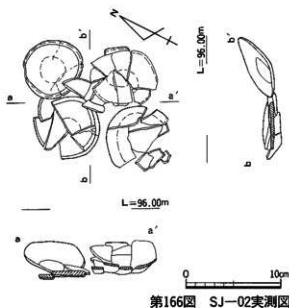
波状の段が付く。1006は櫛鉢で、口縁部が拡張するが、外面に段は付かない。胎土は黒褐色を呈し堅緻。1007～1010は土師皿。すべて亜白色土を使用した小皿で、1010はややヘソ皿風。砂粒をほとんど含まない黄灰色の精良な胎土で、内面のナデは「の」の字状に上方に抜く。1011は土師質角火鉢。口縁部を外に折り、平坦な端面を作る。各平坦面には毛描の細い、直角に交差するラインを入れ、ラインに沿って3～4cm間隔で角錐状工具により、約45度の角度で外に向かって刺突する。刺突は口縁下端面にはば達す。用途不明。胎土は砂粒が多くやや粗い。微細な雲母を少量含み、黄橙褐色を呈す。1012は瓦質の火鉢、もしくは火舎。砂粒をあまり含まず、灰黄色を呈す。

SE-11(第165図)

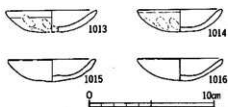
SE-10の掘形の下で検出した石組の井戸である。明らかにSE-10やSD-50より一時期古いもので、SE-10の前身と考えられる。これもまた岩盤を切り貫いて造っていた。掘形は不整形を呈し、長径1.60m、短径1.50mを測る。井戸本体は掘形の南端に造られ、上部の石積みが欠損している。検出面での内径は約65cmを測り、形状は円形を呈していた。深さは1.0mまでは確認したが、この井戸もまた危険を伴うため調査を断念した。埋土は灰黄色土であった。ここからの出土遺物は土師器皿の細片が一片だけであった。また、この井戸の脇で地鎮と思われる遺構を検出した。



第165図 SE-11実測図



第166図 SJ-02実測図



第167図 SJ-02遺物実測図

SJ-02 (第166図)

この地鎮遺構はSE-11に伴うものと考えられる。SE-11の掘形内で検出し、掘形検出面から約45cm下であった。その状況は土師器の小皿を4枚正位に配するもので、合わせて方形の形状を成していた。土師器の皿を使用する地鎮は根来寺坊院跡では頻繁に見られるもので、重ねるものと配するものがある。珍しい地鎮遺構の例には現大門の南で検出したものがある。それは土師器皿を井桁状に配し、一枚の皿に対し、一枚の宋銭を置いたものであった。^(註16)

SJ-02出土の遺物 (第167図)

1013~1016は垂白色土使用の土師小皿で、1007~1009などと同様のタイプ。外面は指頭痕を残したままで、口縁上端部のみ押ナデ。押ナデは口縁部を内外から摘むようにナデ、内面口縁上端部にわずかに平坦な面ができる。

SD-50 (第168図、図版64a・b)

他の遺構との関連性について先述した溝である。また、下段敷地の要となる排水路であると考えられる。この溝は下段の敷地の東から北に掛けて逆「L」字状に検出した石組溝である。南端ではわずかに西方向に屈曲することを確認したが、西端では敷地が掻き取られ、全容の確認には至らなかった。南北方向の溝は東側側石とSV-24とが共有しており、包含層の灰褐色土を掘り込んでいた。一方、北側の東西方向は岩盤を掘り込んでいた。埋土は赤色の焼土の単一層であった。この焼土はまさに天正の兵火時そのままと考えられ、二次的な移動の無いものと思われる。溝の総検出長は約33.10mを測る。掘形の幅は70~85cmを測り、流水幅は約20~30cmを測る。残存の深さは約30~40cmを測り、石積み遺存は1~2段分であった。流れの方向は敷地の北東隅でSD-48の流れを受け、南と西に分岐していたと考えられる。

SD-51 (第168図、図版64a)

SD-50の内側で検出した一時期古い敷地を画する石組溝と考えられる。北東のコーナー部では流し場遺構に切られている。その南側の土坑群を取り囲んでいる。側石は南側のみ遺存し、北側は南に比べやや低く岩盤でもとは石が積まれていたと考えられる。検出長は約8.50m、残存の深さは30~45cmを測る。西流していたものと考えられる。一部で平瓦や丸瓦を使った導水施

設と思われるものを検出した。

SD-52・53 (第140図、図版64a)

SD-50の西に隣接して検出した南北方向の溝である。SD-52は天正の兵火時より一時期古いと考えられ、北でSE-09に切られていた。側石の遺存は東側のみで西側はなかった。検出長約6.10m、幅は0.8~1.20mを測る。残存の深さは18~23cmを測る。SD-53は北西で検出した。この溝もSD-50に切られ、SD-52と同一の可能性もある。

SD-54 (第140図、図版64a)

調査区南端で検出した岩盤掘り込みの溝である。SD-50に切られている。検出長は約3.80mを測る。

SD-50~54出土の遺物 (第169図、図版92・93)

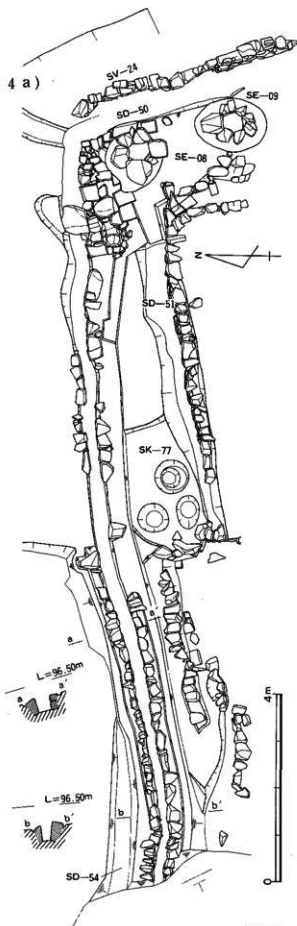
SD50 1017~1020は通有の土師小皿。

SD51 1021は白磁E群の端反皿。1022は染付皿C群で、外面に密な渦状唐草を描く。1023は土師質釜で、930などと同様のもの。

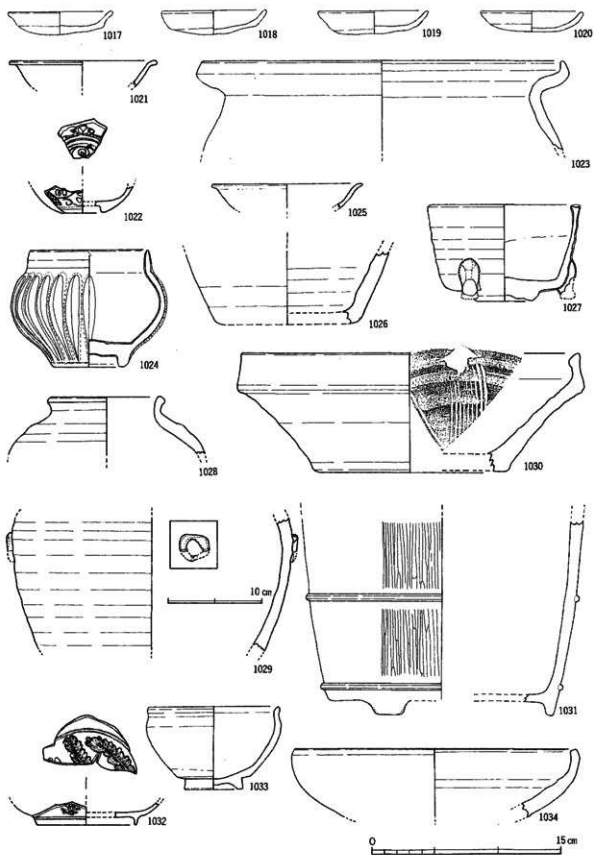
SD52 1024は青磁の小型酒会壺。外面の蓮弁は型押。光沢のある濃緑色の釉が掛かる。1025は白磁E群の皿。1026は備前窯壺。

SD53 1027は青磁香炉。外面体部に浅い凹線。内面体部下半以下は露胎。釉は草緑色。1028~1030は備前窯のもので、1028は壺、1029は水甕、1030は搥鉢。1031は土師質火鉢。微細な雲母粒を含む精良な黄橙色の胎土で、外面体部に丁寧な縦方向のヘラミガキ。

SD54 1032は染付皿E群で、1002と同タイプ。1033は瀬戸美濃窯褐釉天目茶碗。1034は備前窯鉢。胎土はチョコレート色で堅緻。



第168図 SD-50・51実測図



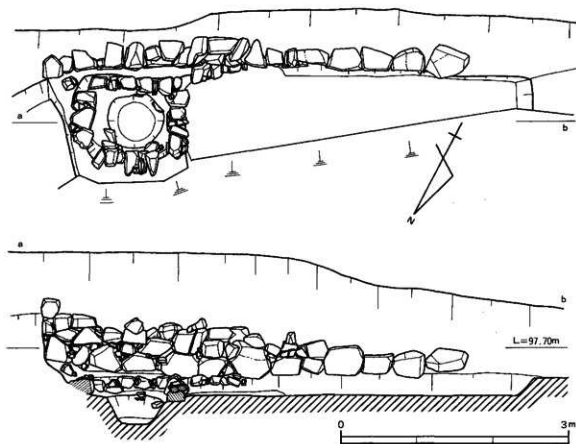
第169図 SD-50・51・52・53・54遺物実測図

SD-50 : 1017~1020, SD-51 : 1021~1023, SD-52 : 1024~1026
SD-53 : 1027~1031, SD-54 : 1032~1034

SV-23及びSK-76（第170図、図版58b）

SV-23は調査区南側で、岩盤整形を施した北側下方で検出した。これの南東にあたるSE-07やSD-46を画する石垣とも考えられる。石積みの状況は石の幅分だけを平坦にカットし、その上に基底部の石を配していた。検出長は約5.90mを測る。最も遺存の良い箇所で高さ約90cmを測り、石積みの遺存は1～4段分であった。石積みの築造当初の高さを裏込めの高さから推量すると1.60m以上はあったものと思われる。また、裏込めの掘形は奥行き50～80cmを測り、岩盤を石積みの基底部まで斜めにカットしたものであった。この埋土は石積みと同石材の10～20cm大のグリ石と岩盤の破片が他の土と混在した状況で入っていた。この石垣はももとは上段と下段を画するSV-24と繋がっていたと考えられ、やや南に開きぎみになるが南北方向を画していたものと考えられる。

SK-76はSV-23の東側でこれに接し検出した石囲いの土坑である。岩盤を削り、その上に15～25cm大の小振りの石を内側に面を持たせ、方形に配している。その内径は約1.0mを測る。検出した石積みは1段分であった。この中に直径約80cmのスリ鉢状の甕の抜き取りと考えられる穴を一つ検出した。残存の深さは38cmを測る。埋土は焼土混じりの灰褐色土であった。



第170図 SV-23 SK-76実測図

丘陵部B地区下段検出の土坑群

下段の敷地の東側は、後述する西側の様な礎石建物は検出されず、数基の土坑群が検出された。これらは全て包含層(灰褐色土)除去後検出した。先述したSD-51は一時期古いこの敷地の周囲を巡る溝であったと考えられる。この土坑群を包括する様に巡ると想定できる。つまり、天正の兵火に係る時期より一時期前、この敷地の東側にはこの様な掘り込みを有する建物があったのではないだろうか。これに伴う上屋は不明である。次に検出した各々の土坑について記す。

SK-68 (第140図、図版64b)

この土坑はかなり削平されていた。このため西側は欠損し、全容は不明であった。南北長2.0m、東西長1.40m以上を測る。残存の深さは4~10cmと非常に浅いものであった。

SK-69 (第140図、図版64b)

形状は楕円形のスリ鉢状を呈する。長径1.30m、短径1.10mを測る小さな土坑である。残存の深さは約55~60cmを測る。この土坑は規模や形状から、大甕が据え付けられていた可能性が考えられる。出土遺物は中国製白磁の細片一片、土師器皿、備前焼片二片のごく小量であった。

SK-70 (第140図、図版64b)

長方形の土坑である。土坑内西端の北と南にそれぞれわずかな石組みが遺存していた。規模は東西長約2.0m、南北長1.75m、残存の深さは約60cmを測る。埋土は灰色土の単一層であった。

SK-71 (第140図、図版65a)

形状は南北に長い不整形を呈する。規模は南北長約1.65m、東西長約1.20mを測る。残存の深さは5~10cmを測り、かなり削平されていた。この底には石を配していたが、意味不明のものであった。また、北東隅には楕円形の一段深い箇所があり、長径55cm、残存の深さは35cmを測った。

SK-72 (第140図、図版65a)

この土坑群の西端で検出した。小さな円形の土坑であった。直径は約85cm、残存の深さは約25cmを測った。下段敷地の東と西を画するSV-25により切られていた。埋土は灰褐色土であった。

SK-74 (第140図、図版65a)

SK-71の南に隣接して検出した楕円形の小さな土坑である。長径は60cm、残存の深さは約20cmを測る。壁の立ち上がりは比較的垂直であった。ここからの出土遺物は皆無であった。

SK-75 (第140図、図版64b)

土坑群の南端で検出した。これは南北に長い長方形の土坑であった。上述した土坑とは違い、これだけが埋土は焼土であった。この焼土はSD-50と同様の赤色のものであった。この土坑だけ時期が異なるのであろうか。規模は南北長約3.35m、東西長約1.50mを測る。南西部はかなりの削平を受け、残存の深さは3~35cmを測る。また、土坑内南西隅に深い落ち込みがあり、深さはSK-75の検出面から約55cmを測る。甕の据付け穴であろうか。

SK-69・70・72・73・75・76出土の遺物(第171図、図版93)

SK 69 1035は竜泉窯系青磁碗E類。口縁が内彎し、内底に「顧氏」銘をスタンプしたものである。胎土は灰白色を呈し、木目細かく堅緻であるが、釉は艶がなく透明度が低い。施釉も雑で、高台外面の一部に虫喰い状態が見られる。総釉で、外底の釉を輪状にケズる。露胎部との界は暗褐色に発色。1036は白磁E群の端反皿。胎土、釉共にやや灰味を帯び、釉の光沢も少ない。内面口縁部に釉の虫喰い状態。1037は行基寺の丸瓦。凸面には0.8~1.5cm幅の細目の縦方向のヘラミガキ。ヘラミガキは細まった尻部を除いて、葺いた際の露出部にのみ施される。凹面には粘土板からの切離しの際の糸切の斜方向の弓痕が残り、一部に糸切痕を切る布目痕が観察できる。

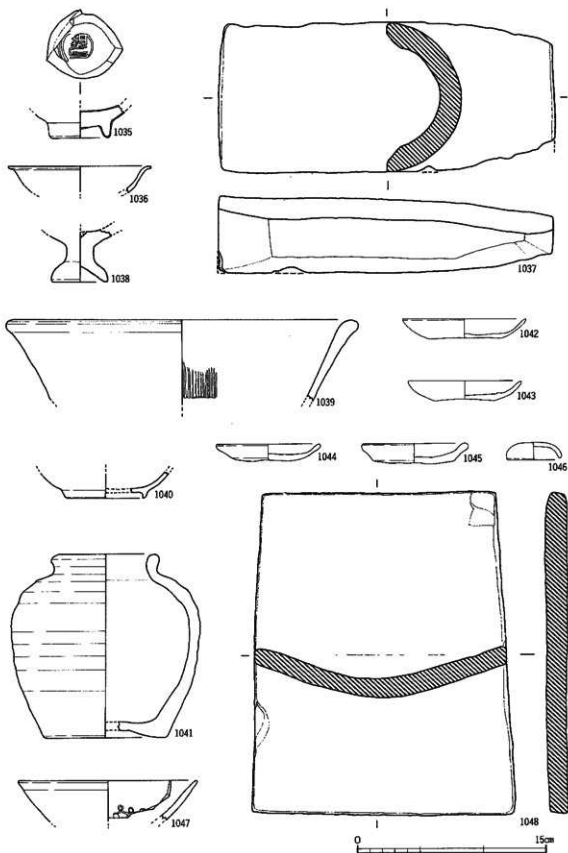
SK 70 1038は肥前窯の白磁仏飯器。142・468などとは台脚部の形状が若干異なり、外底の袈りも深い。胎土は堅緻でやや灰味を帯び、釉も淡灰白色に発色する。台脚途中まで施釉。

SK 72 1039は瓦質こね鉢。口縁部が外反気味に肥厚し、口縁端部を丸く収める。791とよく似た器形であるが、外面口縁部の櫛目状の圈線は見られない。外面は体部未調整と思われるが、器表が剥離して調整等是不明。内面体部から口縁部は丁寧にヨコナデされ、体部に細くシャープな櫛目。胎土は砂粒をあまり含まず精良で、黄灰色を呈し、器表は暗灰黒色に燻されている。

SK 73 1040は白磁E群の端反皿である。やや雑な作りで、胎土は灰味を帯び、釉は光沢がなく、表面には灰黒色の斑点が無数に浮かんでいる。また、外面高台際などの一部に釉の虫喰い状態が見られる。畳付の釉のケズりも雑で、高台内面には少量の珪砂が付着する。1042~1045は土師皿である。1042・1043は従来よりあまり見かけないタイプである。底部が平らな、器高の低い器形で、器肉が薄い。体部の立上りは短く、心持ち内彎する。器表が著しく摩耗して、調整等あまり明瞭ではないが、底部糸切の可能性もある。また、1043の外底には乾燥時の簀子痕らしきものが認められる。内面口縁部から底部外縁にかけては丁寧なヨコナデが見られる。胎土は黄灰白色を呈して砂毛が多く、若干の砂粒が認められ、やや粗い。1044・1045は16世紀代の根来寺に通有の在地産小皿である。火中したのか、表面が赤褐色に変色しているが、本来は比較的精良な橙褐色の胎土をもつものと思われる。共に口縁部内外面のやや広い範囲にタールが付着した痕跡が見られる。1046は焼塩壺の蓋と思われる。根来寺においては208なども含めて、従来よりこの種の蓋と思われるものが少量出土するが、少なくとも中世段階においては身の出土は1点も認められていない。他の用途を考えるべきであろうか。胎土は微細な砂粒を含むが精良で、黄灰色を呈す。丁寧にナデで調整される。1041は備前窯の壺である。口縁部は端部でやや肥厚するが、玉縁の形状を失っている。内外口縁部はヨコナデし、外面体部には粘土紐巻上げ痕を残して荒くナデる。外底は未調整のままである。胎土は暗灰白色で堅く、器表は暗茶褐色を呈す。

SK 75 1047はベトナム製白磁碗。225と同様に内面体部に型押の牡丹の浮文が見られる。

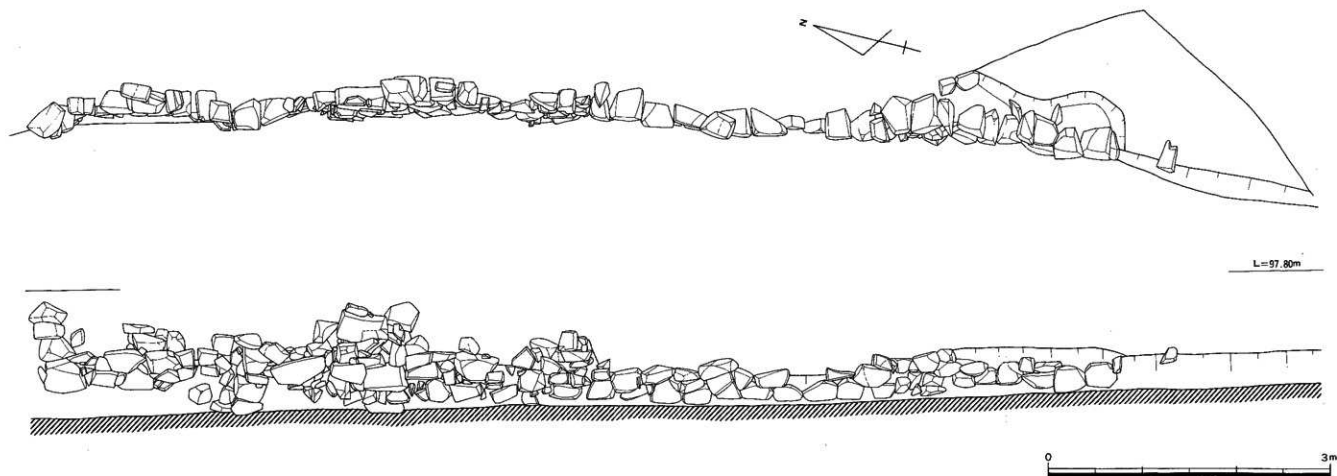
SK 76 1048は平瓦で、非常に小型で、かつ薄い。器表の摩耗が著しく調整等是不明である。



第171図 SK-69・70・72・73・75・76遺物実測図

SK-69 : 1035~1037, SK-70 : 1038, SK-72 : 1039

SK-73 : 1040~1046, SK-75 : 1047, SK-76 : 1048



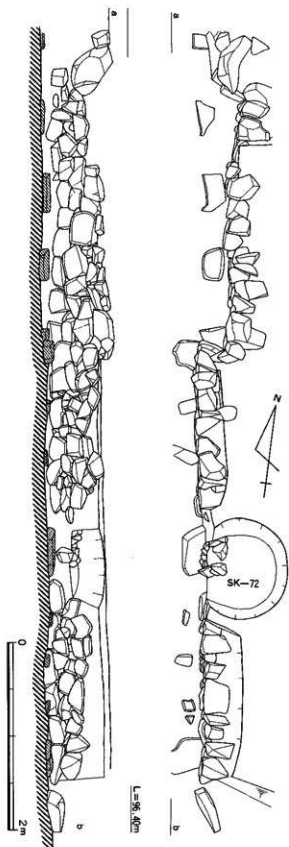
第172図 SV-24実測図

SV-24 (第172図、図版64b)

上段と下段の敷地を画する石垣である。方向は南北で、西側に面を持つ。また、南側ではSV-23に繋がっていたと考えられる。これの西側直下には下段敷地の周りを巡る溝(SD-50)があった。北側端は岩盤整形を施した箇所突き当たり、南端では石積み欠損していた。この石垣の規模は検出長約11.60mを測る。最も遺存の良い箇所では高さ0.95mを測り、石積みの遺存は4段分、30~50cm大の石を殆ど垂直に積んであった。積石は雑であった。裏込めの幅は約80cm程度、込石は皆無で、灰黄色土であった。裏込めの高さから判断すると、この石垣の築造当初の高さは1.60m以上はあったものと考えられる。

SV-25 (第173図、図版65a)

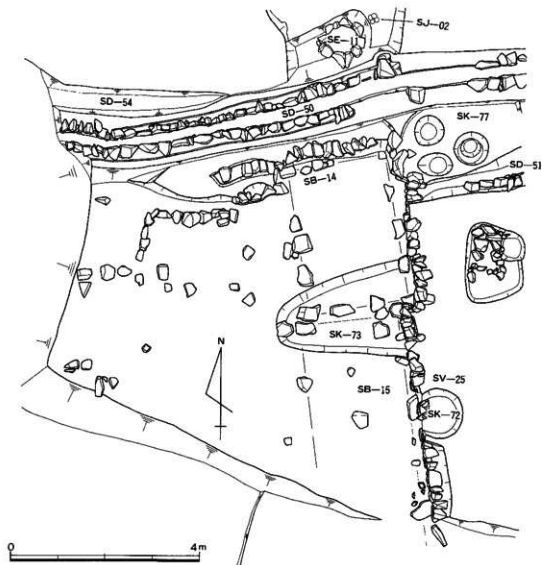
包含層(灰褐色土)除去後検出し、整地土上に築かれていた。これの持つ意味合いとしては、下段の敷地を細分し、東と西に画するものと考えられる。このSV-25を築造することにより、土坑群を検出した東側より約50~60cm低く段差をつけていた。元来の比高差は判らない。方向は当然南北に延び、面を西側に持つ。南は擾乱により壊されていた。検出長は約8.50mを測り、遺存高は最も良好な箇所70cmを測る。石積みは4段分を確認した。途中で若干「L」字状に曲がるが、これは西側の礎石建物を意識して曲げているものと思われ、また、礎石がこの石垣の基底部の下に配されていたことから、建物を造り、それからこの石垣が築かれたことが窺える。裏込めの幅は15~20cmを測り、込石は無かった。



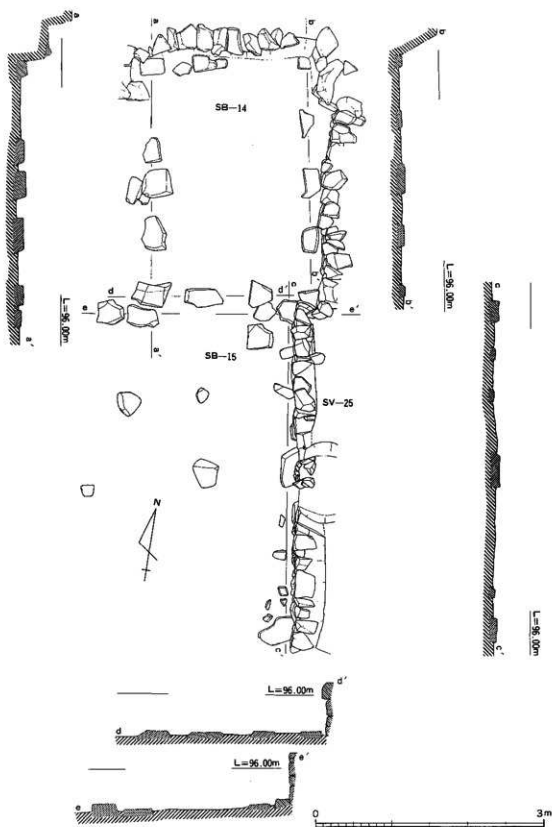
第173図 SV-25実測図

SB-14・15 (第174・175図、図版65a)

これら2棟の礎石建物跡を検出した敷地の西は大きく削り取られ、南側もかなり削平を受けていたため、礎石建物の西と南については不明である。いずれもSV-25に接し建っていたと考えられる。SB-14は北と東の礎石がSV-25に接する。礎石の遺存状況は良好であった。南北棟の建物と考えられる。規模は桁行4間(約3.12m、間尺は等間隔の0.78m)、梁行は3間(約2.08m、間尺は等間隔の約0.69m)を測る。この建物は安定した面を持つ石を礎石としている。石材は全て和泉砂岩であった。SB-15もSB-14と同様に東西棟の建物である。東側桁行方向の礎石は全てSV-25の下に敷かれていた。また、梁行方向の礎石もSB-14と接していた。規模は桁行4間以上(4.32m以上、間尺は等間隔の1.08m)、梁行は1間以上(2.08m以上)であると考えられる。この西側ではこの建物の礎石となっていたと考えられる石が散らばっていた。



第174図 SB-14・15周辺の遺構平面図



第175図 SB-14・15実測図

SE-12周辺の遺構検出状況（第176図、図版66a・b）

調査区下段の南西隅の状況である。ここでは南北方向の3列の石垣と石組井戸1基と小さな土坑3基を検出した。これの北側は攪乱を受け、南側は調査区外であった。そのため石垣の方向の確認には至らなかった。従って、敷地の範囲も不明であった。この箇所はSB-14・15を検出した地点より約1.50m下方にあり、別の一段低い敷地とも考えられる。石垣は東から西に掛けて3列(SV-26・27・28)検出した。この内SV-26とSV-28は天正の兵火時まで存在していたもので、SV-27は近世のものと考えられる。SV-28の基底部検出時に多量の土器が出土した。

SV-26（第176図、図版66a）

南北方向に延び、西側に面を持つ石垣である。これは基底部一段のみ遺存していた。下段西側の区画に関係する可能性も考えられる。この石垣は整地土と考えられる岩盤を砕いた土の上に築かれていた。検出長約3.0m、遺存高(1段分)20cmを測る。裏込め部は削平のため不明であった。

SV-27（第176図、図版66a）

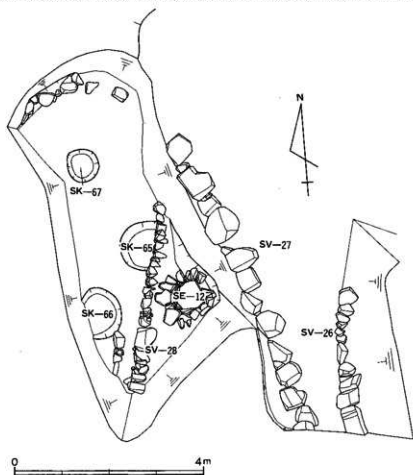
SV-26・28とは方向の違う石垣である。面を西に持ち、北西から南東に築かれている。これもSV-26と同様基底部一段分の石列だけが遺存し、かなり傾いて崩壊寸前であった。この石垣は近世の整地面であると考えられる石混じりのガラガラの整地土上で検出した。検出長は約6.80

mを測る。

SV-28

(第176図、図版66a)

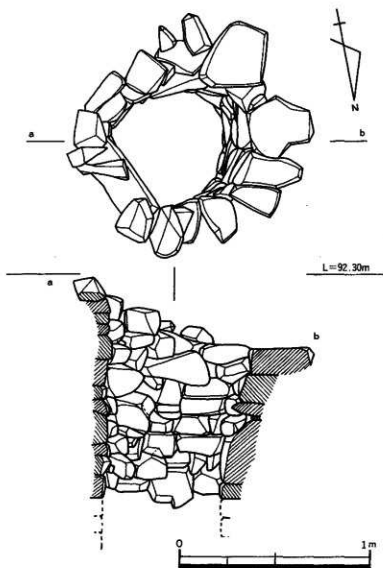
南北方向に延び、面を西に持つ石垣である。SV-27の下に入り込むと思われる。西側は焼土層で埋められ、ここから出土した土器は「SV-28西掘り下げ遺物」として記載した。石は小振りの薄い割石で、整然と積みまれている。検出長約4.15m、遺存高約60cmを測る。石積みは5段分であった。



第176図 SE-12周辺の遺構平面図

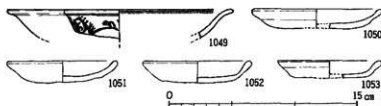
SE-12 (第177図、図版66b)

SV-28の裏込めに隣接して検出した石組井戸である。この井戸に使用されている石は安定した面取りが施された和泉砂岩の割石であった。埋土はSV-28検出時の西側焼土と同じものであった。近世の復興時に整地土として掻き込まれたと考えられる。発掘途中約1.5m掘り下げた地点で、井戸の内径大の大きな石が落ち込んでおり、作業を断念した。石積みの状況は、東側は小振りの石を用いているのに対し、西側は割合大きな石で積まれていた。全体的に面と面とが整然と合わされ、詰め石はあまり観られなかった。また、石積みの遺存は東に比べ、西側はかなり壊されていた。検出面での井戸全体の形状は楕円形を呈する。上部で内径80cmを測り、1.5m下方では約60cmを測る。これは、西側の石積みかなり内側に斜めに積まれているためである。なお、この井戸はSV-28と同時期と考えられる。



第177図 SE-12実測図

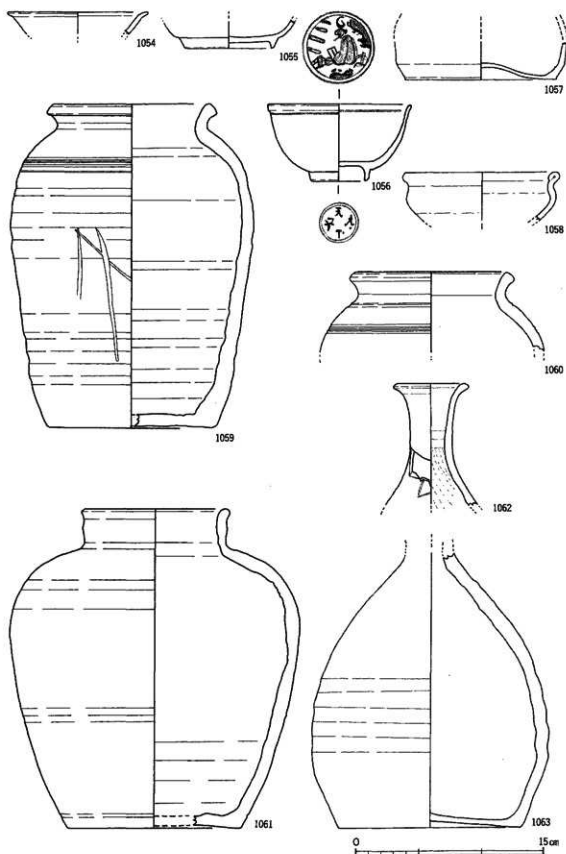
SE-12出土の遺物(第178図)
1049は染付皿B1群である。大型の端反皿で、外面体部に牡丹唐草文が描かれる。器径は953に匹敵するが、器高はやや低い。精良な胎土で、丁寧な作りである。釉はわずかに青味を帯び、呉須は明るく鮮やかに発色している。1050～1053は通有の在地産土師小皿。1051の内面体部にはタールが付着した痕跡が見られる。



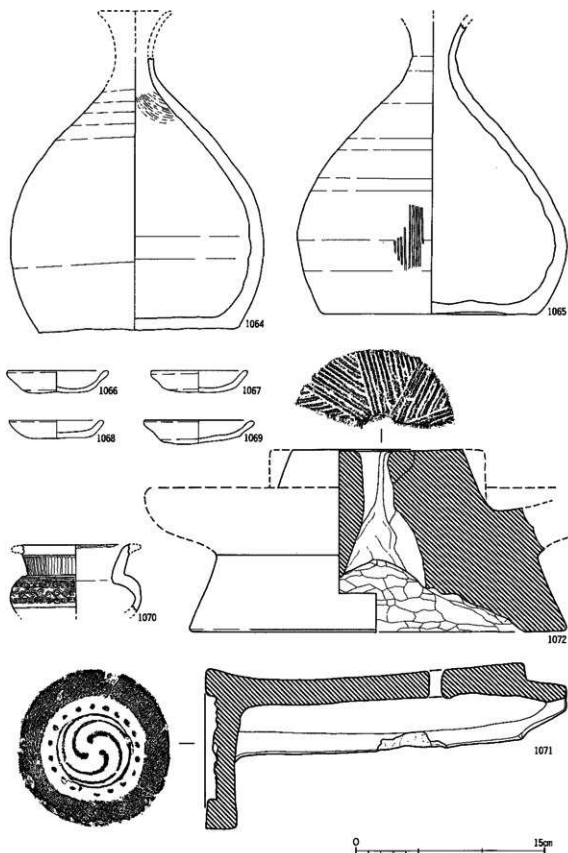
第178図 SE-12遺物実測図

SV-28 西掘り下げ焼土出土の遺物 (第179・180図、図版93)

1054・1055は白磁E群の端反皿。1054の胎土は灰味が強く、釉は光沢があるが、灰黄色に発色。1055は疊付の釉のケズリが丁寧で、胎土も精良。外面全体に粗い貫入。1056は染付柄E群。内底に人物樓閣文を描き、外底に「天下太平」の銘。胎土はわずかに灰味を帯び、釉は淡灰青色を呈して、光沢がない。呉須は比較的良好に明るく鮮やかに発色。外底の釉のケズリは丁寧。1057は李朝の褐釉瓶。船徳利型で、器肉が非常に薄く底部が上底状。非常に堅緻で、外面灰褐色、内面赤褐色の二層の胎土をもち、内面体部にはタタキ痕。釉は灰緑色を呈す灰釉風のもので、底部も含めて外面全体に施釉される。遺存範囲では底部に目跡は確認できない。1058は産地不明の褐釉鉢。口縁を内側に折り返して玉縁にする。胎土は赤褐色を呈し、内面口縁部から外面体部下位まで黄灰色の灰釉を施釉。肥前窯の陶器の混入でなければ李朝の可能性はある。1059～1065は備前窯の製品。1059～1060は中型の壺。1059は口縁部が外反し、肩が張らない寸胴な器形。肩部に数条の拂描圓線が巡り、胴部中位に寛描きの窯印。内外口縁部から外面肩部に掛けて丁寧にヨコナデされるが、体部には粘土紐巻上げ痕が残る。胎土は精良であるがやや軟質で、明灰褐色を呈し、底部の一部は火中して土師質化。1060も1059とほとんど同様の器形で、肩部には数条の拂描圓線が巡る。胎土は砂粒を含んで堅緻、灰褐色を呈す。1061は玉縁状の口縁をもち、肩が張った器形。比較的丁寧な作りで、外面体部に粘土紐巻上げ痕を残さない。器表は暗赤茶褐色を呈し、肩部に疎らに小さい胡麻状の灰を被る。1062～1065は徳利。1062は鶴首で、胴部があまり膨らまない器形。微細な砂粒を含む暗灰褐色の堅い胎土で、器表は小豆色に近い暗赤褐色を呈す。内面口縁部付近から外面頸部に丁寧にヨコナデを施す。内面頸部には回転を伴う絞痕が斜方向の皺になって残る。1063～1065は胴部の膨らんだ船徳利。1064・1065は特に重心が低い器形。すべて器表が暗赤褐色を呈す堅緻な胎土で、外面体部に粘土紐巻上げ痕を残す。1065は体部下位に窯印と思われる縦方向の拂描文が見られ、体部上半全面に胡麻状の灰を被る。1066～1069は通有の在地産土師小皿。1068は火中したのか、内面が1044・1045などのように赤銅色に変色。1069は灰黄橙褐色の精良な胎土をもち、617～620などのように外底に粘土紐を潰した痕跡を残す。1068・1069は口縁部にタールが付着。1070は瓦質燭台。丸い胴部にやや外反する頸部が付き、口縁を外に水平に折る。微細な砂粒を含むが、比較的清涼な灰白色の胎土をもつ。器表の煙しは十分とはいえず、内面口縁部から外面体部中位まで暗灰色を呈すが、他は灰白色のまま。外面体部には2条の印花雷文帯に挟まれた蕨手の印花文が巡る。内面口縁部から口縁上端面には横方向の、外面頸部には縦方向の、丁寧にヘラミガキ。1071は巴文軒九瓦。巴の先端は丸いが、さほど肥大しない。尾は約4分の3回転回って團縁に付く。珠文は20個で、小さいが疎らである。胴部後端に径約1.2cmの釘孔が穿たれる。胴部凸面には雑な縦方向のヘラミガキが施され、凹面には糸切痕が残る。1072は茶臼。非常に目の細かい灰褐色の砂岩製。摺目は細く密で、外面は非常に丁寧に磨かれている。



第179図 SV-28西掘り下げ焼土遺物実測図 1



第180図 SV-28西掘り下げ焼土遺物実測図2

丘陵部包含層出土の金属製品（第181図、図版94）

1073は銅製の斧で、末は若干欠損する。遺存長13.3cm、幅1.1cm、厚さ0.2mmを測る。1074は銅製品の脚部であると思われ、「く」の字に屈曲する。1075～1077は刀子条の鉄製品である。断面形は二等辺三角形を呈し、腐蝕が著しい。1078は鉄釘で先端が欠損している。1079は狭楯の様な鉄製品である。全長は18cmを測る。刃先は若干欠損している。柄の差し込み部は楕円形を呈し、内側にはわずかに木質が貼り付いた状態で遺存していた。1080は「L」字状にの鉄製品である。腐蝕が著しく、断面は円形を呈する。

丘陵部遺構出土の金属製品（第181・182図、図版94）

1081～1083は鉄釘である。これらは全て腐蝕が著しく、元の形状を留めず、先端が欠損している。1084は鉄製容器の口縁部と考えられる。釜、鍋の類ではないだろうか。1085・1086は槍先状のものと考えられる。断面は先の方は幅広で、中程では円形を呈する。中心には3～5mmの心が通っている。1087・1088は鉄釘である。頭部はあまり鉤にはなっていない。いずれも先端部が欠損している。1089は用途不明鉄製品である。断面は円形を呈し、螺旋状に何かを巻き付けた痕跡が観られる。1090は五徳の脚部の付根と考えられるもので腐蝕が著しい。1091は鉄製の狭楯である。1079よりも一回り大きなもので、全長28.0cm、刃先幅7.2cmを測る。錆のため赤褐色である。柄を差し込むための一辺2.2cmの方形の孔が穿たれ、その中には木質が遺存していた。1092は1085・1086と同様の槍先と考えられる。1093は鉄釘と思われるが、腐蝕が著しくその形状を留めていない。

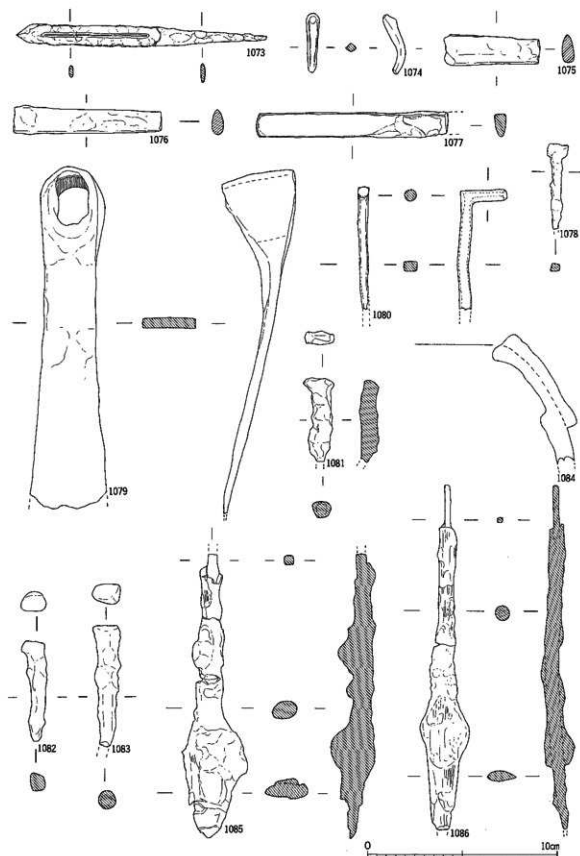
谷部包含層出土の金属製品（第183図、図版94）

1094は銅製の鉈竿である。根来寺坊院跡の発掘調査においては初例である。表面は緑青により淡い水色を呈する。握り部分は左右対称の綿密な図案が型作りされており、中程は断面四角形を呈し、先端は尖っている。握り部から先はシャープさに欠ける。全長13.4cm、中心の厚さは1.1cmを測る。1095も根来寺では初例のものである。錫杖の上部と考えられ、銅製である。鏝を掛ける部分は殆ど欠損している。差し込み部は楕円形を呈し、長径1.4cm、短径1.2cmを測る。1096は六器である。全体の3分の1欠損している。腰から銅にかけてやや斜めに立ち上がり、口縁部は肥厚しながら、外反する。高台は直立する。口径は7.7cm、器高は4.0cmを測る。過去の調査においても出土している。1097は賢瓶である。頸部から口縁部にかけて欠損している。腐蝕が著しい。出土時は埋土の鉄分が器面全体に付着していた。また、これよりやや小振りであるが良く似たタイプのものは昭和58年度の調査において、地鎮遺構から出土している。1098も仏具と思われる銅製容器である。口縁部は受口状を呈し、蓋が付くものであろうか。口径10.0cmを測る。1100はやや湾曲する銅板の一部である。厚さ2mmを測る。表面には型作りの渦巻紋が観られる。仏具の部品と考えられる。1101は1076・1077と同様の刀子状の鉄製品である。折れて欠損している。厚

さ4～6mmを測る。1103は鍍の銅製鞍である。長さ2.9cmを測り、中央部に直径4mmの2孔を穿つ。これと同様のものの出土は過去数例ある。1104はキセルの吸い口である。断面は楕円形を呈する。1105は金銅製毛抜である。全長8.5cmを測る。遺存は良好であった。同様のものが昭和52年度調査の第II地区から出土している。1106は金銅製の火箸である。断面は方形を呈し、一辺5mmを測る。中程から先端にかけて欠損している。1107は天狗眼鏡である。フレームがかなり歪んでいる。これに伴うレンズも1個出土しており、周縁のき方が非常に稚拙である。1108～1111は鉄釘である。1108は断面正方形を呈し、1109は断面長方形を呈する。また、1110は長方形の扁平なもので、遺存状態は良好であった。1111は大きなもので、全長13.6cmを測り、断面形は一辺5mmの正方形である。大きく「く」の字状に曲がり、全体に赤錆が付着する。1112は五徳の一部で、脚部の付根である。錆が著しい。

谷部遺構出土の金属製品（第184図、図版94）

1113は鉄釘である。断面は一辺8mmの正方形で、頭部は長方形を呈する。1114は鉄製のリング状のもので、両端はふくらんでいる。1115は賢瓶の口縁部と思われる銅製品である。口径は5.0cmを測る。脚部の可能性も考えられる。1116は銅製の水滴である。根来寺坊院跡の調査では初例である。胴部径は2.8cm、口径は1.1cmを測る。厚さは1.5～2.0mmを測る。胴部中央には幅2mm程度の鈎が通る。また、表面には金メッキが部分的に観られる。1117は銅製の賢瓶の蓋である。大きさは直径3.2cm、厚さ2mmを測る。端部で内側に折り曲げている。1118は柄状の銅製品で、用途不明である。断面は楕円形を呈する。1119は銅製容器の口縁部で、口縁端部は内折している。復元口径17.6cmを測る。1120は銅製品である。形状は鍔先状を呈する。用途不明品である。中央に4～5mmの楕円形の孔を穿つ。1121は銅製の紙で、先端部は欠損する。頭部の断面は楕円形を呈し、直径は1.1cmを測る。1122は銅製の用途不明品である。何かの一部で、上下は不明である。断面形は方形を呈し、四隅に突起が付く。1123は五徳の脚部と考えられ、断面形は三角形を呈する。高さ約10cm、幅2.0～2.8cmを呈する。先端部は直角に内側に折り曲げている。なお、岩出町立歴史民俗資料館建設に伴う坊院跡発掘調査時に、五徳と鉄釜のセットが井戸から出土している。^(註17) 1123は鉄製の角釘で、全体にさびている。先は欠損している。1125は銅製斧である。末部が若干欠損している。全長17.2cm、幅は6～1.2cmを測る。厚さは2～3mmを測る。これと酷似するものが昭和56年度調査の西部地区(町屋)から出土している。1126は鉄製の釘状のものである。先端部は欠損しており、頭部に2mm程度の円形孔を穿っている。腐蝕が著しい。1127は鈎状鉄製品の破片である。先端部には幅1.2cm、厚さ8mmの尻が付く。1128・1129は鉄製角釘である。1128は腐蝕が著しいため断面は円形であり、1129の断面は長方形を呈する。1130は鉄製の用途不明品である。形は舌状を呈し、表面上方にはこれに垂直に直径5mm程度の円孔を穿った突起を付す。厚さは1～3mmである。

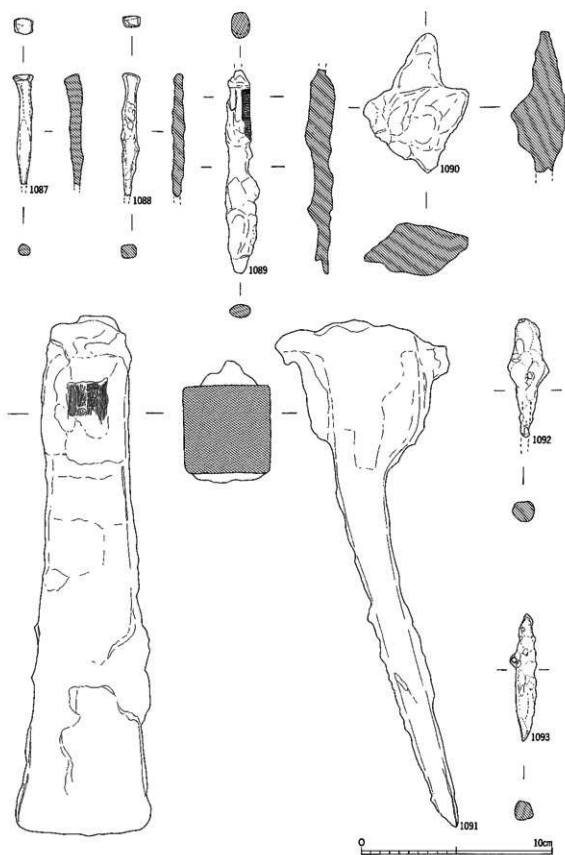


第181図 丘陵部包含層・遺構出土の金属製品

丘陵部包含層：1074・1078・1079・1082・1083

SX-11：1084-1086, SV-25：1073・1075-1077

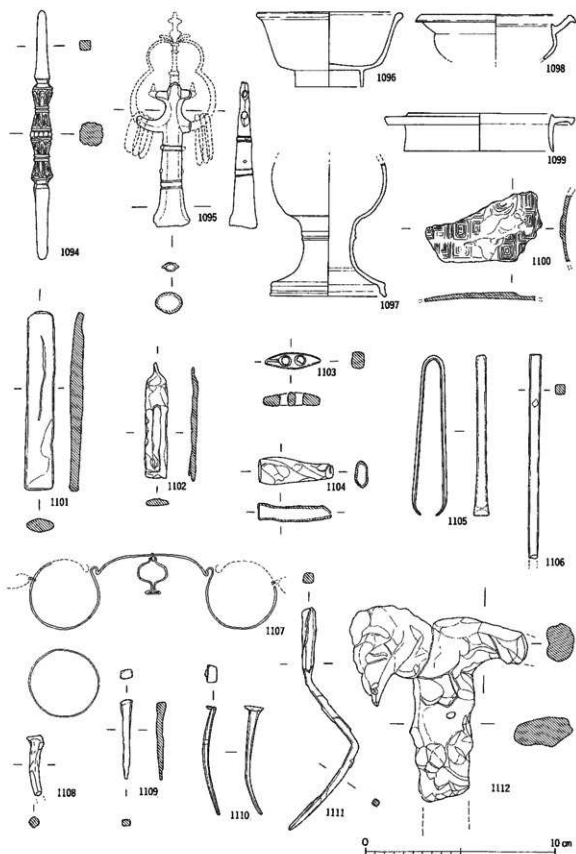
SV-28：1080, SD-22：1081



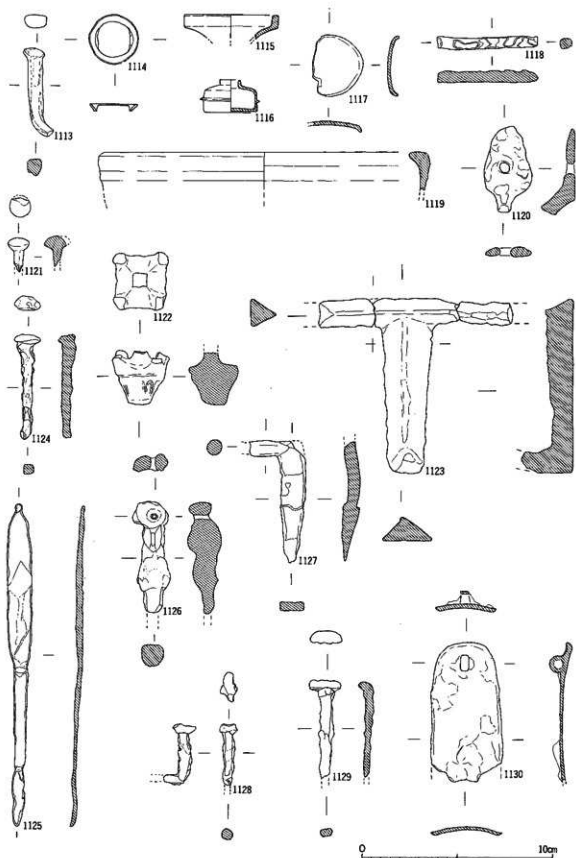
第182図 丘陵部遺構出土の金属製品

SX-07 : 1087・1088・1091・1092

SX-11 : 1089・1090・1093



第183図 谷部包含層出土の金属製品



第184図 谷部遺構出土の金属製品

SK-31 : 1113, SX-13 : 1121・1123・1124・1126・1127

SD-05 : 1114・1116, SX-15 : 1122, SD-36 : 1117・1118

SX-16 : 1125・1128・1129, SD-37 : 1119

包含層 : 1115・1130, SD-38 : 1120



1131

盆地部B地区
包含層



1132

丘陵部A地区
包含層



1133

丘陵部A地区
包含層



1134

丘陵部A地区
SX-08



1135

丘陵部A地区
SX-08



1136

丘陵部A地区
SV-05



1137

丘陵部B地区
SK-66



1138

谷部A地区
包含層



1139

谷部A地区
包含層



1140

谷部A地区
包含層



1141

谷部A地区
SX-13



1142

谷部A地区
SX-13



1143

谷部B地区
包含層



1144

谷部B地区
包含層



1145

谷部B地区
包含層



1146

谷部B地区
包含層



1147

谷部B地区
包含層



1148

谷部B地区
包含層



1149

谷部B地区
包含層



1150

谷部B地区
包含層



1151

谷部B地区
SX-16



1152

谷部B地区
SX-04



1153

谷部B地区
SK-22



1154

谷部B地区
埋解-02



第185図 調査区全域出土の銭貨拓影

盆地部A地区遺構出土の石製品（第186図、図版95）

1155は携帯用の硯である。上部に直径約1cmの孔を穿つ。頭部両側面に刻を入れる。石材は結晶片岩である。1156は泥岩製の破片である。1157も泥岩製である。裏面は平坦で側面は直立する。1158は長方形を呈する。表面は殆ど剥離している。底面は抉りを入れ、高台を作り出している。石材は粘板岩である。長さ14.6cm、幅7.9cm、高さ2.3cmを測る。1159は長方形を呈する。海部は欠損している。側面は直立し、裏面は抉りを入れ、高台を作り出している。1160は凝灰岩の砥石である。色調は乳白色である。片面は剥離している。砥面は表面だけ観られる。1161の表面は剥離している。形状は長方形を呈する。裏面は平坦で側面は直立する。石材は粘板岩である。長さ13.2cm、幅5.8cmを測る。

盆地部B・C地区遺構出土の石製品（第187・188図、図版95）

1162は硯を砥石として転用したものと考えられる。砥面は表裏の2面である。両面共に擦痕が認められる。石材は凝灰岩である。1163も1162と同様に硯を砥石として使用している。欠損している。石材は粘板岩である。1164は硯の破片である。海から陸にかけて剥離し、裏面も剥離している。珪質泥岩製である。1165は凝灰岩系シルト岩の砥石である。砥面は両側面と表面の3面である。1166は安山岩の砥石である。側面の3面を使用している。断面の形状から使用頻度の激しさが窺える。1167は1165と同様の石材で砥面は表裏の2面である。1168は硯か砥石なのか判らない。両面とも磨滅している。砂岩である。1169は両端部が欠損している砥石破片である。砥面は3面である。石材は安山岩である。1170は砂岩製砥石である。四側面が使用されている。石材は砂岩である。1171は泥岩の硯である。裏は平坦で側面は直立する。海は欠損しているが、陸の擦り減り方から、かなり使用されたものと思われる。1172は安山岩製砥石の破片である。砥面は表裏に観られる。片面には細い丸ノミの様なものを研いだ痕跡が認められる。1173は硯の角の部分である。泥岩系のシルト岩である。1175の砥石は殆ど完形である。石材は泥岩系シルト岩で、灰白色を呈する。砥面は表面だけに観られた。裏面は若干欠損するが、一部に横方向の丸ノミ痕が数条認められる。側面は直立する。長さ18.0cm、幅3.2cm、高さ1.6cmを測る。1174は硯の破片である。厚さ6mmである。裏面の両端に高台が付いていたものと思われるが欠損している。表裏に斑点状の墨痕がある。石材は泥岩である。

丘陵部包含層出土の石製品（第189図、図版95）

1176は泥岩の硯である。裏に高台が付くが、欠損している。表と裏に斑点状と筋状の墨痕が遺る。長さは9.6cmを測る。1178の石材は凝灰岩系シルト岩である。幅2.0cmの細長い砥石である。先と裏は欠損する。1179もシルト岩の砥石である。両側が欠損する。砥面は表面だけである。幅3.0cmを測る。1180もシルト岩の砥石である。片方が欠損している。砥面は表、裏の2面である。幅3.2cm、厚さ3～5mmを測る。1181は断面台形の砥石である。砥面表、裏の2面である。片方

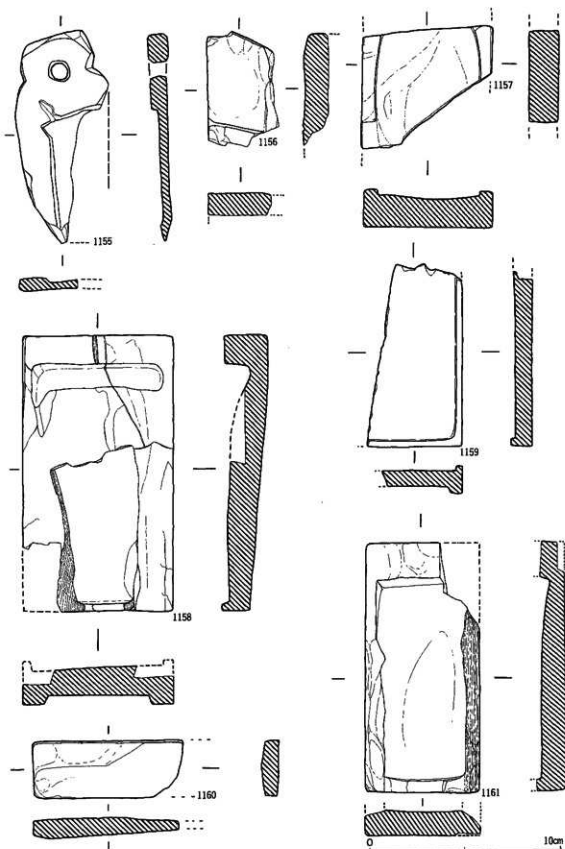
が欠損し、長さは不明である。幅は3.1~3.7cmを測り、厚さは1.2cmを測る。凝灰岩系シルト岩である。1182は灰白色の砥石で、石材は安山岩である。これは両端を何かに擦り付け、丸みを付けている。砥面は表裏と側面の4面と観られ、中でも表と思われる面がより凹みを帯びる。1183の石材は粘板岩である。硯なのか砥石なのか判らない。三角形の欠こうが認められる。1184は砂岩の砥石である。元はもっと大きかったものと思われ、1182と同様に両端を擦り丸みを付けている。裏面は凸凹に欠損し、表面には細い刃先の様な擦痕が数条観られる。1185は結晶片岩の砥石である。砥面は表面だけで山型になっている。

丘陵部遺構出土の石製品（第190・191図、図版95）

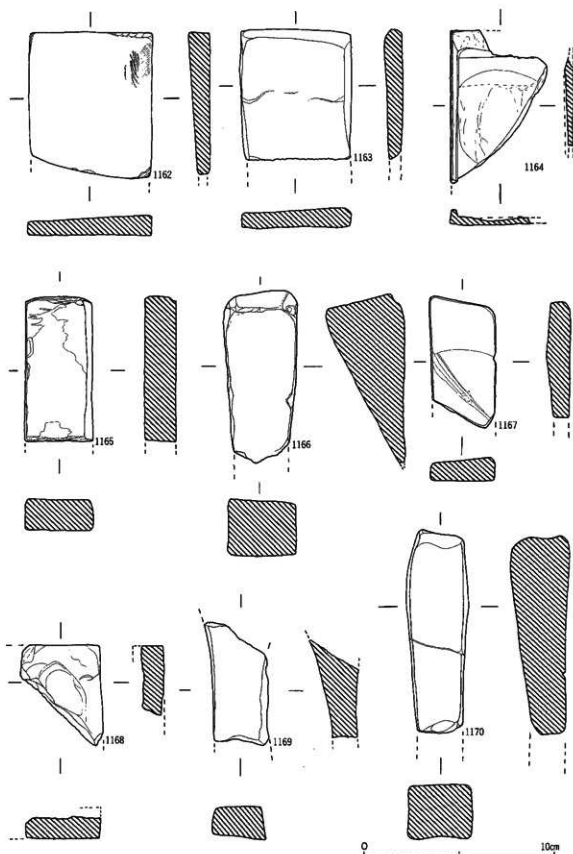
1186は安山岩の砥石である。方端は欠損している。砥面は表、裏の2面で、片面は良く使われ凹んでいる。幅4.4~4.9cm、厚さ6~9mmを測る。1187は1186と同様の石材の砥石である。両端が欠損し、砥面は4面である。1188は硯の破片で、薄く剥離している。石材は粘板岩である。1189も硯の破片である。裏は平坦で、側面は直立する。1190は断面六角形の砥石である。片端が欠損する。砥面は側面全てである。1191は小さな長方体の砥石である。若干欠損する。石材はシルト岩で、砥面は表裏の2面である。1192は粘板岩の硯である。形は不定形である。片方の側面と裏面が若干剥離する。海は小さく浅く、陸は全体的に少し凹む。また、陸部の端にわずかに曇痕が遺る。1193はシルト岩の砥石である。形は平行四辺形で、砥面は表面だけである。1194は砥石の破片である。石材はシルト岩で、色調は濃桃色を呈する。1195は安山岩の砥石である。砥面は表裏2面で、方端が欠損している。1196も安山岩の砥石で、これもまた片端が欠損し、砥面は表裏2面である。1197は砥石の破片である。両端が欠損する。砥面は表裏2面である。石材は安山岩である。

谷部包含層出土の石製品（第192・193図、図版95）

1198は小型硯である。裏は平坦で側面は直立する。海と陸の界はなだらかな曲線となる。石材は泥岩である。1199の硯は粘板岩である。表面と先端部が剥離する。海と陸は小判形を呈し、界はなだらかな曲線となる。1200は粘板岩の硯で、陸から海にかけて欠損する。裏は平坦で、側面は直立する。1201は硯で、裏に挟りを入れ高台を作り出している。石材は粘板岩である。1202は泥質片岩の硯破片である。裏面は剥離している。1203も粘板岩の硯破片である。1204の石材も粘板岩で、硯の先端部である。幅8.0cm、厚さ1.6cmを測る。1205も粘板岩の硯で先端部である。幅6.1cm、厚さ0.9cmを測る。1206の裏面は平坦で、側面は直立する。表は殆ど剥離し、海と陸が全く判らない。長さ11.9cmを測る。1207は砥石である。砥面は表面だけである。材質はシルト岩である。1208は片端が欠損している砥石片である。砥面は表面のみの1面で、石材は泥岩である。1209は砂岩の砥石で、これも片端が欠損する。砥面は表、裏の2面で片面が良く使用されている。1210も砥石の破片で、砥面は表、裏の2面である。石材はシルト岩である。1211・1212共に非常

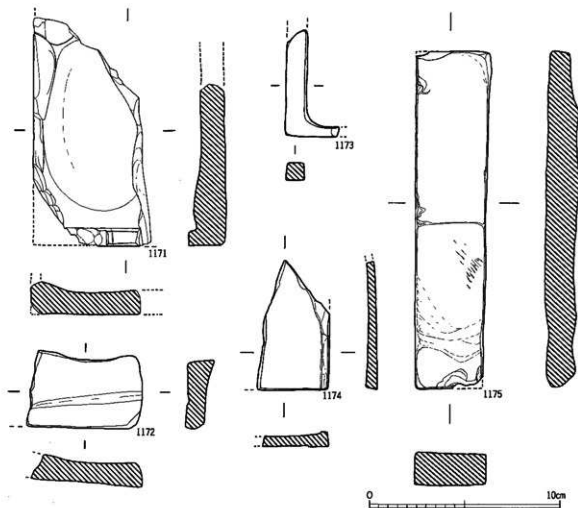


第186図 盆地部A地区遺構出土の石製品
 SK-13 : 1155, SE-02 : 1156, SX-01 : 1157
 SX-02 : 1158・1159, SV-01 : 1160・1161



第187図 盆地部B地区遺構出土の石製品

埋蔵—02 : 1162・1163, SK—16 : 1164・1165, SK—23 : 1166
SK—21 : 1167, SX—04 : 1168・1169, SX—05 : 1170



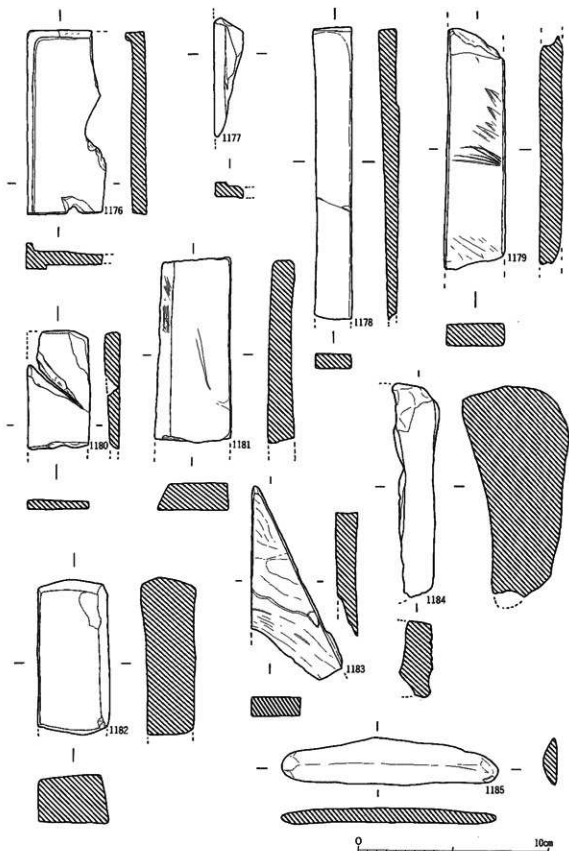
第188図 盆地部B・C地区遺構出土の石製品

SX-15: 1171, Pit: 1172・1175, 盆地部A地区包含層: 1173・1174

に細い砥石の破片である。双方とも砥面は表面のみで、石材はシルト岩である。1213もシルト岩の砥石である。両端が欠損し、非常に薄いものである。砥面は表面の1面のみでやや凹む。裏に擦痕が認められるが、加工痕であろうか。1214は泥岩の砥石である。片端は欠損する。砥面は表面のみである。1215は安山岩の砥石である。片端が欠損する。砥面は表裏と側面の4面である。表と裏に擦痕が観られる。1216・1217は同様の土器を転用した砥石である。1216は常滑焼片、1217は備前焼片で、双方ともに丸ノミのようなものを研いだのであろうか。1218は砲弾型の石製品である。石材は緑泥片岩である。

谷部A・B地区遺構出土の石製品 (第194図)

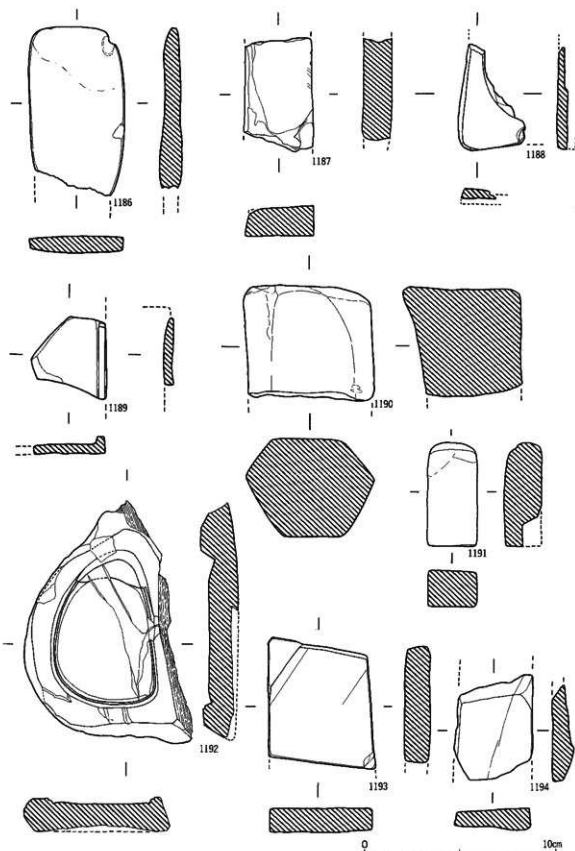
1219は泥岩の砥石で、片端が欠損する。砥面は表面のみで、擦痕が観られる。1220も1219同様泥岩で、表裏2面が砥面である。1221は硯の残片である。石材は泥岩である。裏面両側に高台が付くものである。1222は凝灰岩の砥石である。両端が欠損する。砥面は表、裏2面である。1223は砥石の破片で、石材はシルト岩である。表裏2面が砥面である。1224は砥石で、表面のみが砥面である。石材は泥岩系シルト岩である。1225は硯の破片で、裏面は平坦、側面は直立する。製



第189図 丘陵部包含層出土の石製品

丘陵部A地区包含層：1176・1183

丘陵部B地区包含層：1177～1182・1184・1185

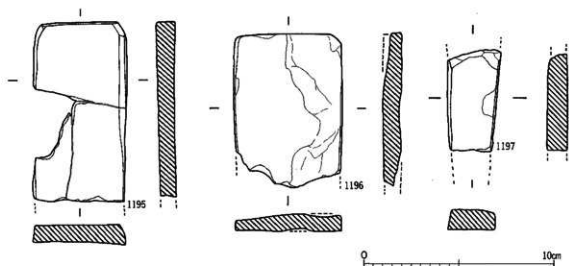


第190図 丘陵部遺構出土の石製品 1

SX-08 : 1186・1187, SX-71 : 1188

SR-04撮影 : 1189・1190, SK-76 : 1191

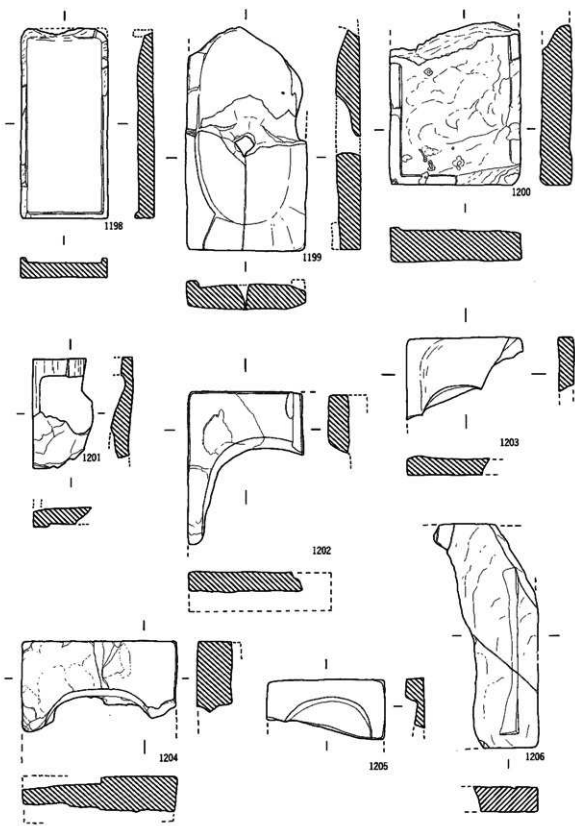
SD-47 : 1192, SD-50 : 1193・1194



第191図 丘陵部遺構出土の石製品2

SX-07: 1195・1196, SX-09: 1197

材は泥岩である。1226は泥岩の硯破片である。表と裏が剥離している。二次焼成を受けた可能性がある。1227は硯の破片である。裏面は剥離している。石材は珪質泥岩である。1228は安山岩の砥石である。片端は欠損し、砥面は表、裏2面である。両面に擦痕が観られる。1229は砂岩の砥石である。片端と片側が欠損する。砥面は2面である。

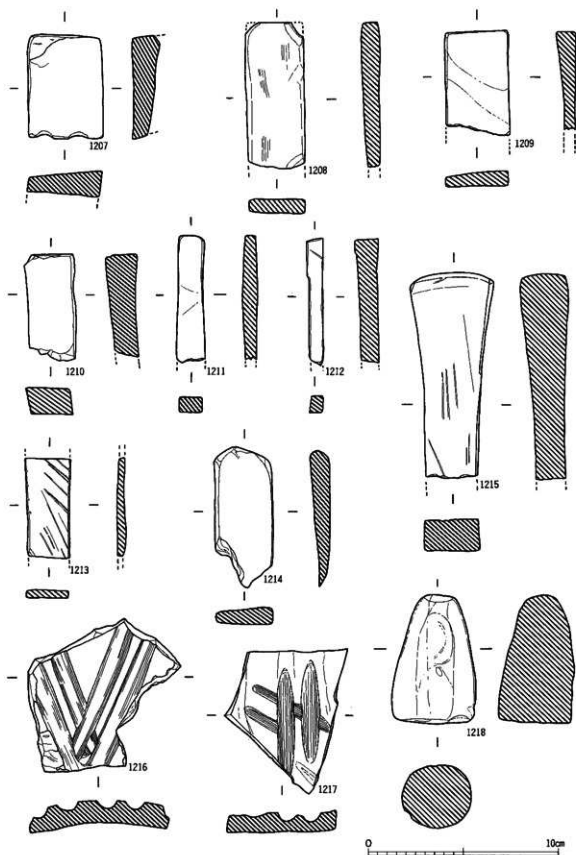


第192图 谷部包含層出土石製品 1

谷部A地区包含層：1204・1205・1206

谷部B地区包含層：1198・1199・1200

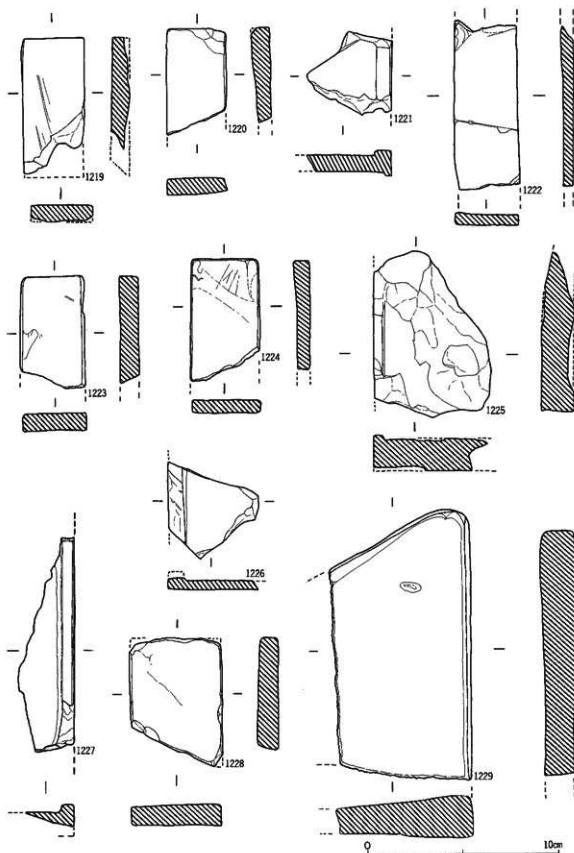
1201・1202・1203



第193図 谷部包含層出土の製品2

谷部A地区包含層：1207

谷部B地区包含層：1208～1218



第194図 谷部A・B地区遺構出土の石製品

SK-45 : 1219・1220, SK-54 : 1221.

SK-46 : 1222, SD-31 : 1223, SD-38 : 1224

SX-13 : 1225, SX-14 : 1226, SV-12 : 1227・1228

SV-18 : 1229

谷部A地区出土の石造遺物（第195図、図版96）

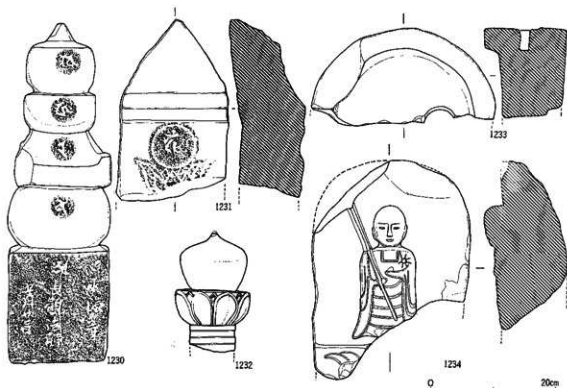
1230は一石五輪塔である。地下式倉庫(SX-12)の階段下として転用されたもので、火を受けていた。刻み文字は判読しがたい。1231は板碑の上部である。山形の頂部と2条線が遺存する。1232は宝篋印塔の相輪部である。宝珠、請花、九輪が遺存する。1233は茶臼の上臼破片である。石材は和泉砂岩である。復元直径は約30cmを測り、高さは13.3cmである。上部は約1.2cm挟り込んでいる。側面には柄を差すための長方形(1.8×3.7)、深さ2.6cmの孔を穿つ。1234は地藏立像である。左の掌に宝珠、右手に錫杖を持っている。

谷部B地区出土の石造遺物（第196図、図版96）

1235は和泉砂岩の一石五輪塔である。地輪が欠損している。1236は板碑で下部が欠損する。これも石材は和泉砂岩である。額部がはっきりと突出し、山形と身部を隔てている。裏面の加工は粗い。1237も板碑の上部で、裏面は凹み表面にやや迫出ぎみに作られている。1238は茶臼である。粗いノミ痕が裾部周辺を斜に廻っている。擦目は13条を1単位として8単位で構成されていたものと思われる。1239は和泉砂岩の板碑である。山形の上部が欠損する。1240の板碑は全長42.5cm、幅15.0cmを測る。これもまた額部がはっきりと突出し、山形と身部を区別している。凡字の「バ」が刻まれている。1241は地藏座像である。合掌姿である。

丘陵部B地区出土の石造遺物（第196図、図版96）

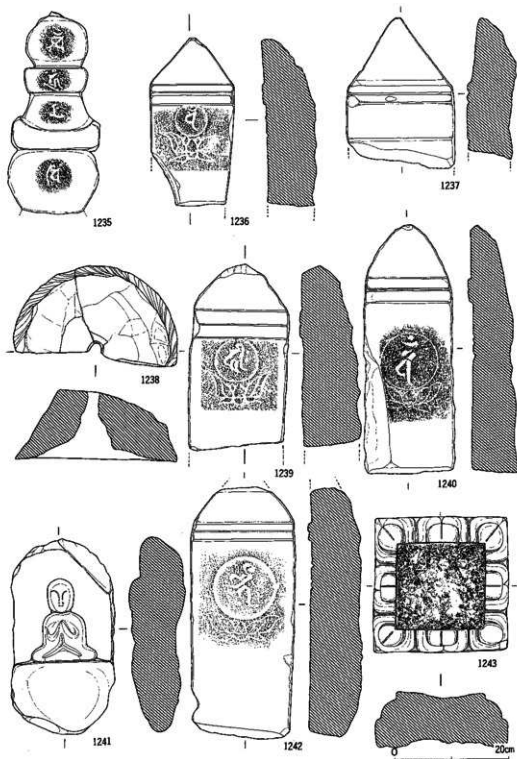
1242の板碑は山形の先が欠損する。「バイ」(薬師)が刻まれる。1243は宝篋印塔の台座である。



第195図 谷部A地区出土の石造遺物

SX-12: 1230

谷部A地区包含層: 1231-1234



第196図 谷部B地区出土の石造遺物

谷部B地区包含層：1235～1238

SD-01：1239, SD-44：1240

SE-06：1241, 丘陵部B地区包含層：1242・1243

第V章 まとめ

〈地形的な坊院の拡がり〉

今回の発掘調査にかかった広域営農団地農道のルートは、根来寺坊院跡という遺跡の観点から見て、地形的に大きく3種類に分けることができる。この地形的に坊院跡に分けるのは、従来からなされていることで、いつの時期にどの地域まで坊院が面として拡がっていたかという意味合いをもつものである。第IV章で節として盆地部、谷部、丘陵部に分けて遺構を記述した。本調査における総評を簡単であるが、地形的な観点から以下に記す。

盆地部は根来寺開山の地、円明寺の南東から北東に当たる箇所を調査した。現況は全て水田であった。この内、特にB地区はまったくの中心部と言っても過言ではない地点である。しかしながら、後世の削平のため天正の兵火時以前の遺構は微量で、わずかにA地区、B地区において、13世紀代と考えられる土坑を検出したのみであった。また、これの南に隣接した箇所でも、昭和60年度の調査において、12世紀末の時期を与えられる瓦器が出土した井戸を検出している。根来寺の調査では、一括資料として最も古いものである。

よく根来寺山内には二つの空白時期があると言われる。つまり、覚鑓上人入滅から頼瑠が高野山より寺跡を移した時期までの約150年間と、天正の兵火時直後から近世に至って復興されるまでの約100年間である。上述した資料は前者の空白時期を埋めるもので、山内はまったくの無住ではなく法灯が絶えなかったことを窺い知る資料である。盆地部に限っては細々ながらその存続が認められる。円明寺周辺では12世紀末の資料が最も古く、覚鑓が高野山より下山し、ここに止住した12世紀中頃の一括資料は皆無である。これは面的な遺構の拡がりは当然考えがたく、また、わずか4年間の短期間であるため、その地を探り当てることは非常に困難である。もし、検出し得たならば、根来寺の核というべき位置付けができる。

谷部の調査地は山内の西側を北から南に裾拡がりに伸びる。この谷は通称蓮花谷と呼ばれる山内の谷としては一番大きく、現状は階段状の水田となる緩斜面であった。調査の便宜上、この地区を南北に伸びる町道桃坂線を堺に東をA地区、西をB地区とした。この桃坂線は古絵図にも記載され、秀吉軍が攻め込んで来たと言われている道で、農道整備事業の際に調査されており、往古から道であったことが確かめられている。^(註19) 調査は道路幅という制約上、東西に塔頭の間を縫う様な状況で、一塔頭の大きさの確認には至らなかった。

今回検出し得た遺構、遺物から推量すると、この辺に塔頭が建ち始めたのは15世紀頃と考えられ、大伝法堂も完成し、着々と発展の一途を歩み始めた時期に合致するものと思われる。しかし、

今までの調査資料から同じ谷筋でありながら、ここより南下した地点では、中心部に近いこともあって、13世紀から14世紀にかけて塔頭が建ち始めたものと考えられる。この谷には近世の遺構も検出され、江戸時代の復興時に塔頭が再建されており、他の谷と性格との差異が感じられる。

谷部の検出遺構の中で最も注目されるのは、調査区西端の深い所を大規模な整地を施し、高さ4 mの石垣による敷地を築いていた。この石垣は、根来寺坊院跡の調査において最も高く、堅固なものである。その時期は他遺構との重複関係から、真に根来寺の絶頂期である天正の兵火に係る時期のものであった。また、この地は根来寺僧兵の一将である泉識坊の推定地とされており、遺構から判断して、通常の塔頭寺院とは考えがたく、城塞としての機能を合わせ持っていたものと思われる。

また、谷部A地区においても数基の地下式倉庫を検出したが、この高い石垣の敷地内で、他とは様相を異にする地下式倉庫(SX-16)を検出した。他のものは全て地山掘り込みであるのに対し、これは四周する壁が石垣で構築され、この石垣に粘土を塗り込み赤く焼き締めるものである。底部周辺には亀腹状のものが回り、これも赤く焼き締まっていた。この様に石垣で周囲を構築する裏には、この地が整地土であるため、壁が不安定になるのを防ぐためと考えられる。

丘陵部は蓮花谷を挟む、A・B両地区の発掘調査を行なった。東側(A地区)の丘陵部からは江戸時代の遺物は殆ど出土しなかった。しかし、検出した石垣は江戸時代に造り替えられたと考えられるものであった。石垣以外の近世遺構が遺存しないのは、後世に削平されたことも十分考えられるものである。他の検出した遺構は全て天正の兵火に係る時期のもので、地下式倉庫5基、石組の暗渠排水溝1条、石組井戸2基を検出した。また、この地域の西側で、近世築造の石垣により、敷地が狭められており、復興時にはかなりの敷地の改変がなされたものと思われる。検出した遺構は地下式倉庫の集合体で、他地域の遺構と対比して、特別な意味合いを持つ地域と考えられる。なお、この倉庫群は天正の兵火に係る時期まで機能していたものとの結論に達した。

西側の丘陵部では、岩盤を整形した坊院の敷地を検出した。これは西から東にかけて3段の段を造り出し、それぞれの段は一塔頭の区画と考えられるものであった。この地域からの出土遺物は近世のものが微量で、近世の築造と考えられる石垣も検出しているが、時期的にははっきりしたことは言えない。他の遺構及び遺物は、殆ど天正の兵火に係る時期(16世紀中頃から天正期)、あるいはその一時期以前(15世紀から16世紀中頃)のものであった。この地域だけで判断するのは危険であるが、近世の復興時にはこの様な中心からかけ離れた所まで再建されなかったのかも知れない。

常識的に考えて、この様な急峻な所まで塔頭を建てる必要性に迫られるということは、他に塔頭を建てる余地の無いものと考えられ、根来寺の盛時(15世紀から16世紀)と軌を一にしている。
(註20)
敷地の拡張方法も昭和55年度の調査地と同様に岩盤を削り出し、低い箇所をそれを整地するとい

った方法をとっている。根来寺坊院跡における山間部の定形化した敷地造成手段と考えられる。以上が、本調査における根来寺山内を地形的な側面から見た塔頭の拡がりである。

{今後の調査における諸問題}

根来寺坊院跡としての遺跡の面積から言えば、発掘調査はまだまだ緒についたばかりで、未知なる真実がこの地に眠っていることは疑いようがない。

近年、中世城館や中世都市の発掘が盛んで、朝倉氏館跡、安土城跡、大阪城、草戸千軒町遺跡、堺環濠都市などとの比較検討により、根来寺の詳細な位置付けが確立しつつある。

昭和51年の坊院跡発掘調査着手から数えて18年が経過し、その間に、広範囲の面積を調査し、膨大な量の遺物が出土している。しかし、今までの調査は、いわゆる山内と呼ばれている寺域内の発掘調査が殆どである。真の根来寺の姿を復元しようとするならば、この西に展開する町屋と呼ばれる外的な繋がりとの解明が要求される場所である。この町屋の調査は過去に3例ほどあるが、いずれも調査面積が狭小であったにも関わらず、十分な成果を得ることができた。これらの調査で、山内と比較して、明らかな様相の違いが幾つか認められた。過去の調査成果を基に、山内と山外の対比を以下に列記する。

- ☆ 山内の建物の大部分は塔頭寺院と考えられ、その規模は間口が30cm程度であるのに対し、町屋では、間口8m程度の小規模の建物であった。
- ☆ 山内においては皆無である天正の兵火時(1585)直後の遺構が町屋では確認されている。このことは、山内だけが復興が許されず、町屋には人が住んでいたことが窺えるものである。
- ☆ 山外では根来塗の椀・皿類と共に、漆塗に用いられた刷毛や、^(註22) 櫛の羽口が出土していることから、漆器工房や鍛冶工房あるいはその他の工房も含めた町屋の展開が考えられる。また、他の出土遺物も女物と思われる漆塗の下駄や櫛、子供用の下駄等があり、一般庶民の生活の臭いが感じられる。

以上の様に、当然、隣接する町屋との間に何らかの因果関係が存在し、それを究明することが、今後の重要課題の一つである。

次に根来寺の有する軍事力の解明等が急がれる。これに関しては、今までに文献上から研究されているが、調査成果としては、先にも何度か述べている前山で検出されている構造物及び、土塁等だけの検出である。文献を裏付ける意味においても、山外に点在する出城あるいは、町屋に展開すると考えられる工房跡の発掘調査に期待される。この工房跡であるが、根来寺は日本の中でも鉄砲の入手が最も早かったと云われているが、かつて、鉄砲の部品さえも発掘調査で出土した例はない。文献上は、町屋(坂本)に住んでいた鍛冶芝辻清右衛門に作らせたところ以上、このことにおいても、町屋の調査の必要性が叫ばれる。

本調査では、地下式倉庫と考えられる遺構を多数検出した。この種の遺構はこれまでの調査に

において幾つか検出されているが、その平面形は規格性のないものである。また、大きく分けて、中に甕が埋置されているものと、そうでないものがある。

今回のように一つの敷地内(丘陵部A地区)において、纏まって4ないし5基の地下式倉庫が検出された例は初めてである。なお、これらは内に甕を埋置しないタイプのもので、据え付けてあった可能性も考えられる。

このような遺構の在り方は、これまで調査されてきた一般的な坊院の在り方とは、様相を大きく異にするものであり、倉庫群とでも言うべき貯蔵施設が、独立して営まれていた可能性が考えられる。これは、根来寺の経済基盤を考える上で興味深いもので、甕の内容物が一体何であったのかが問題視されている。内容物の説には、紺屋の染料、火薬あるいは酒作り用、油や味噌の貯蔵用等と色々な意見が取り沙汰されてきたが、この中でも最も有力視されているのは灯明用油の貯蔵用である。その当時としては、備前焼大甕も高価なものであったであろうし、まして、そのものを活用するとなれば、より高価なものでなければ、備前焼の大甕を使用する意味がなくなると考えられる。また、発掘調査から出土される大甕の亀裂箇所には布をあてがいが、その上から漆を塗って補修しているものも幾つか見うけられる。このことから大甕の内容物が液体であると想定される。

このことは、根来寺を単なる宗教施設の集合体としてのみ考えるのではなく、広く山内全体の生活の在り方や、有機的な繋がりを考える上での新たな資料と共に、問題を提起したものと言える。

また、その造りについても、これまでその壁面が焼成を受けて赤く焼き締まっているのは、天正の兵火によって焼かれたものであると考えられてきたが、今回の検出例から、防湿、あるいは壁面を堅固なものにすることを目的として、当初から意図的に焼かれていたものである可能性が指摘できる。というのは、この赤く焼き締まった壁面が意図的に焼かれたことを裏付ける要因となるものには、第一として、地下式倉庫を四周する壁面が均等に焼けていることである。仮に、火災で焼けたものであれば、壁面に焼けムラが生じることが考えられる。第二に、谷部A地区で検出したSX-13においても言えることで、それは北壁から突出する石段の昇降施設を断割した結果、石が貼り付く内壁が赤く焼き締まっていた。なお、この階段に使用されていた石には火を受けた痕跡は認められなかった。つまり、石段築造以前にすでに焼かれていたと考えられる。このことは、今後この種の遺構を考える上で貴重な資料であるとともに、今後の調査に結論を委ねたい。

最後に、発掘調査において問題視されている点が多い中、先人たちの遺した文化遺産をどのようにに保存し、なおかつ活用していくかが、今を生きる我々に残された大きな課題である。

註

- 註1 根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 1978～1980年 和歌山県教育委員会
- 註2 昭和55年度 根来寺坊院跡 和歌山県教育委員会・社団法人和歌山県文化財研究会
- 註3 昭和55年度に行なわれた前山被線上の発掘調査において構跡と考えられる遺構、土塁、塹堀が検出されている。
- 註4 昭和56年度 根来寺西部地区遺跡発掘調査概報 和歌山県教育委員会
- 註5 昭和62年度 根来寺坊院跡 第2次B地区の遺構(P.14) 和歌山県教育委員会
- 註6 註5に同じ b 中世の遺構(P.8)
- 註7 註2に同じ 現奥の院の北側谷筋の調査において雑壇状の坊院の区画を検出している。
- 註8 根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅱ 第VI地区の調査 1979年 和歌山県教育委員会
- 註9 根来寺坊院跡 根来地区普通農道整備事業に伴う根来寺坊院跡発掘調査 1989年 (財)和歌山県文化財センター
- 註10 根来寺坊院跡発掘調査概報 1978年 和歌山県教育委員会・社団法人和歌山県文化財研究会 第VI地区の調査において庭園で玉砂利敷遺構が検出されているが、今回検出の方が規模が大きく、色や大きさを整えている。
- 註11 15世紀頃から和泉・紀州の土豪層の子弟が根来寺に子院を建立し始め、この頃から根来寺の勢力が拡大してゆく。
- 註12 註2に同じ
- 註13 註9に同じ SE-03を坊院の共同井戸と考える。
- 註14 根来寺坊院跡の発掘調査で出土する遺物は中世・近世のもので、稀にサヌカイト片や古墳時代の須恵器が出土する。
- 註15 根来寺坊院跡の調査において必ずと言って良い程、清の御石や石積み、踏石等に転用されている。
- 註16 根来寺坊院跡 町道北大池線改良工事に伴う発掘調査概報 昭和63年度
- 註17 根来寺坊院跡 岩出町立歴史民俗資料館建設に伴う発掘調査 1988年 和歌山県文化財センター
- 註18 昭和60年度 根来寺坊院跡 SE-02出土の遺物 和歌山県教育委員会
- 註19 註9に同じ
- 註20 註2に同じ 急峻な谷間のため両側の岩盤を削り、坊院の敷地を築いている。
- 註21 註4に同じ
- 註22 昭和60年度に根来郵便局建替に伴う発掘調査を実施した際、多量の輪の羽口が出土した。
- 註23 その一つとして「那賀郡誌」に「西坂本一町西に根来古城あり——」と記されている。
- 註24 註9に同じ 「根来寺の油倉」 菅原 正明

版 圖